東北学院大学
研究ブランディング事業
報告書

文部科学省「私立大学研究ブランディング事業」
平成28年度（2016年度）採択

東北における
神学・人文学の
研究拠点の整備事業

事業期間
2016年度～2020年度

2021年３月

文部科学省「私立大学研究ブランディング事業」
平成28年度（2016年度）採択

東北における神学・人文学の研究拠点の整備事業

東北学院大学
研究ブランディング事業
報告書

事業期間
2016年度～2020年度

2021年3月

ごあいさつ

東北学院大学学長　大西晴樹

東北学院大学は、平成 28（2016）年度の文部科学省「私立大学研究ブランディング事業」に「東北における神学・人文学の研究拠点の整備事業」を申請し採択されました。このたび発刊する「東北学院大学研究ブランディング事業報告書」は、本事業の 5 年間にわたる取り組みをまとめたものです。

「私立大学研究ブランディング事業」とは、全学的な看板となる研究を推進し大学のめざす将来展望に向けてその独自色や魅力を発信する取り組みです。私立大学全体としての多様性を発揮させることによってグローバル社会における我が国の持続的発展に寄与することを狙いとしており、学長のリーダーシップの下で推進される全学的な事業として支援されるプロジェクトです。本学は令和 2（2020）年度も事業活動を継続し、令和 3（2021）年 3 月末をもって 5 年間の活動を完了させるに至りました。

「私立大学研究ブランディング事業」は、各大学の特徴がそれぞれの事業内容に反映されているように、本学の「東北における神学・人文学の研究拠点の整備事業」も東北学院の伝統や成り立ちと深く関わっています。すなわち、本学は明治 19（1886）年に創設された仙台神学校を源とし、130 有余年にわたってキリスト教を基盤とする人間教育を推進してきました。昭和 24（1949）年に新制大学を設置したことで現在は高等教育機関の役割を担い、今日では 6 つの学部を擁する東日本最大の私立大学となっています。とりわけキリスト教学、英文学を代表とする神学・人文学の伝統を持ち、幾多の研究業績を生み出してきました。本事業においては、このような教育研究の土壌にもとづいて初めて行いうるテーマを、地域性を活かしまた世界の研究者とも連携して実施することを計画しました。

5 年間のうちに数々の研究事業を展開してまいりましたが、その一方で新型コロナウイルスの流行拡大などの災害等に見舞われることもありました。その間、東北学院大学の職員を始め、地域および国外の団体、学外の研究者の方々から多くのご支援とご協力をいただき、本事業を実施することができました。この場をお借りし、そのご支援とご協力に心より感謝の意を表します。本事業の取り組みは連携する学内の参画組織に継承され、その活動は今後も継続されることになっております。今後の取り組みについて、引き続きご支援、ご協力を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

令和３年３月

―― 目次 ――

ごあいさつ　東北学院大学学長　大西晴樹 …… 1

Ⅰ　東北学院大学研究ブランディング事業の概要 …… 5

Ⅱ　事業の活動と成果の報告 …… 15

1　共通事業部門 …… 17

⑴　礼拝堂ステンドグラス修復事業 …… 21

⑵　ヒートン・バトラー＆バイン工房の現地調査 …… 24

⑶　ダルムシュタットでの現地調査 …… 27

⑷　ハンガリー、ジャポニスムシンポジウム参加 …… 30

⑸　水曜礼拝の実施 …… 32

⑹　水曜通信発行 …… 36

⑺　アメリカでの資料調査 …… 38

⑻　日光での現地調査 …… 41

⑼　占領下の東北学院に係る米国資料調査 …… 43

⑽　ランカスター神学校、ニューヨーク、ボストンでの資料調査 …… 45

⑾　学生ワークショップ
＜東北における宗教的観光資源の可能性―世界から見た東北観光＞ …… 48

⑿　イギリス現地調査 …… 52

⒀　ランカスター神学校における宮城学院女子大学との合同調査 …… 54

⒁　ランカスター神学校との交流事業 …… 56

2　神学研究推進部門、開催詳細報告 …… 59

3　人文学研究推進部門 …… 72

⑴　冷戦下の国際秩序の再編と帝国の解体 …… 80

⑵　1950・60年代におけるベヴァリッジ・プラン再編をめぐる党間抗争 …… 84

⑶　フランス第四共和制の崩壊と西側同盟 …… 87

⑷　イギリスの移民政策に対する新コモンウェルス諸国の反応と影響 …… 90

⑸　20世紀初頭の中欧構想と民族観の研究 …… 94

⑹　ヴァイマルからナチズムへの「中欧」の継承と変容 …… 100

⑺　ヨーロッパのイスラーム教徒移民を通してみた宗教間相互作用の研究 …… 104

⑻　ラジオ番組「学院大ジンブンRadio」制作放送事業 …… 106

⑼　ヨーロッパ近現代史若手研究会 …… 110

４　地域研究推進部門 …… 119
⑴　創立40周年記念フィルムのデジタル化事業 …… 123
⑵　ランカスター神学校所蔵フィルムのデジタル化事業 …… 125
⑶　ラーハウザー記念東北学院礼拝堂建築調査事業 …… 127

Ⅲ　シンポジウム、講演会等の開催記録 …… 131
2016年度
「東北学院のステンドグラス―19世紀の中世復興と物質文化―」
（2017年3月8日） …… 133
2017年度
「ステンドグラス修復作業公開」（2017年8月3日） …… 138
「現代と福音―改革教会の実践から考える―」（2017年9月15日） …… 142
「我は福音を恥とせず―新約聖書における〈福音〉理解―」（2017年10月7日） 148
「ジョン・ラファージと日光―アメリカのステンドグラス復興と
ジャポニズムのパイオニア―」（2018年2月24日） …… 154
「ステンドグラス再設置作業公開」（2018年2月27日） …… 159
「ステンドグラス修復完了記念礼拝」（2018年3月2日） …… 165
2018年度
「ポーランドのユネスコ世界遺産：ルター派教会堂ヤヴォルと
シフィドニツァの平和教会堂」（2018年5月26日） …… 171
「今日のキリスト教信仰―アメリカ合衆国の「宗教市場」のなかで―」
（2018年7月19日） …… 177
「ランカスター神学校調査報告」（2018年9月26日） …… 184
「苦難と救済―パウロにおける苦しみの意義―」（2018年10月13日） …… 186
「聖トマス～イエズス会～ヒンドゥー原理主義―南インド
におけるキリスト教ミッションの歩みと現在―」（2018年11月10日） …… 192
「ジョン・ラファージの中世主義―ジャポニスムとステンドグラス復興―」
（2019年2月23日） …… 198
2019年度
「重要文化財『デフォレスト館』の価値について」（2019年9月28日） …… 203
「第2回ランカスター神学校調査報告」（2019年10月3日） …… 209
「ボストン・ブラーミンのキリスト教と仏教　教義と寛容」（2019年12月21日） 211
「第二次大戦後のコモンウェルスの再編と変容」（2020年1月25日） …… 216

Ⅳ　外部評価委員会の評価 …… 223

I

東北学院大学研究ブランディング事業の概要

文部科学省に申請した「平成 28 年度私立大学研究ブランディング事業計画書」にもとづいて、ここでは 2020 年度まで予定されていた事業計画を掲載している。

１．事業の概要

①事業名　東北における神学・人文学の研究拠点の整備事業

②申請タイプ　タイプ A

③期間　5 年

④事業概要

震災という未曾有の物質文化の破壊を経験した東北において、東北学院大学内にあるキリスト教中世的文化財をきっかけに、時代と地域による人間中心の人文学（人間学）だけでなく、中世にさかのぼる神中心の神学に基礎を置く綜合的な神学と人文学の研究拠点を確立する。受肉を根拠に物質文化を肯定する神学を土台として、キリスト教によって地域を人的知的に支える大学、という東北学院大学が現在目指している大学像を促進する。

２．事業の内容

①事業目的

東北学院大学の文化財を神学・人文学の見地から研究することによって、物質文化の基礎が神学にあることを確認し、「東北における神学・人文学の研究拠点」を整備構築することが、本事業の目的である。

東北学院の「デフォレスト館」が国の重要文化財に、「ラーハウザー記念礼拝堂」等が登録有形文化財に近年相次いで指定され、学術調査を始めることになった。とりわけラーハウザー記念礼拝堂に設置された「キリストの昇天」を描くステンドグラスがわが国に現存する唯一のヴィクトリア朝の重要工房の作であることが判明した。それは近代イギリスにおける中世キリスト教の復興の表れであり、近代の基礎にある中世と神学の重要性、神学と人間学の関係、またヨーロッパにおける普遍的帝国理念と地域主義の関係を再考する良いきっかけとなる。ラーハウザー記念礼拝堂自体も中世復興のゴシック・リヴァイヴァルのチューダー様式であるし、さらに建築資材も地元の大工がラーハウザー嬢の基金をもとに秋保の石材を使って施工しており東北仙台の地域性のなかで建立されているのであり、キリスト教が東北の地域性のなかに異物としてもたらされたことを如実に示している。本学の文化財の研究は、人文学の基礎に神学があることを再確認するきっかけとなるのであり、これらの文化財の学術研究を行うとともに、その文化的価値と意味を発信することは、仙台の文化的発展に貢献する上で重要である。礼拝堂と礼拝が市民に公開され、市民はそこでキリスト教中世に接することによって、近代とその根拠についての考察を促されるであろう。

以上、本研究は本学の文化財の調査研究をきっかけに、人文学の基礎として神学を位置づけ、物質文化を再考するとともに、東北の地域性を、ポスト・モダン的価値をもつ文化資源と考える。すなわち神学と人文学の綜合的観点から物質文化を支える拠点を本学に整備し、キリスト教が成立したヨーロッパ中世の復興である礼拝堂とステンドグラスを公開すること

で中世キリスト教において成立した物質文化の根拠を確認する。それはまた東北仙台の地域性を文化資源として開発することに寄与するであろう。

②事業の背景（大学の現状・外部環境・社会情勢等）

本学が深く関わる東北の社会的課題に関連する。震災後の東北では、例えば人口減少や高齢化深刻化し、東北の明るい未来図は描きがたく思われている。しかしイザベラ・バードの観察、そしてクリストファー・ノス（『東北は日本のスコットランド』1918 年）また柳田国男（『遠野物語』１９１０年）が指摘する東北のプレ・モダン的地域性は原初の感受性を残し、キリスト教の観点からはポスト・モダン的文化遺産として観光資源となる。そのような中で、本学はすでに 2015 年に改革の中長期計画として策定した「TG Grand Vision 150」で提唱したように、地域と連携し社会の課題やニーズに対応できる人材の育成を長期目標に据えている。こうした人材は実践的な知識やスキルと並んで、他者との協調と寛容や、知的創造性を身につけねばならないが、その涵養は神学に裏づけられた人文主義の精神によって可能となる。

③事業のテーマの設定とその適切さおよび独自性

東北学院大学（以下本学）は大学改革を進めている。創立以来 130 年間キリスト教精神にもとづく人格教育を進め地域の発展に貢献してきた本学は、「TG Grand Vision 150」によってビジョン、新ブランド像、教育・研究・社会貢献の在り方などを定めている。現在は計画の実行段階に移行しているが、改めて、特に建学以来の神学が、ヨーロッパ中世にまで考察を拡げてみると、人文学のみならず、あらゆる科学の出発点であることがわかるのであり、そのことを具体的にカリキュラムの中で示して形にすることで、ブランディング事業の要とする。

本研究は、本学の西洋中世に由来する文化財（ラーハウザー館およびそのステンドグラス）をきっかけに、現実と物質文化を基礎付ける神学の意味を再確認し、神学を中心に改めて人文学を位置づけ、それによって東北の時代地域性を位置づけようとするものであり、将来的に東北仙台の既存文化についての新しい価値を見出す。

④期待される成果

具体的には以下のことが明らかになるであろう。

第一に神学の観点からは、現代における中世的なものについて中世から現代までを俯瞰した学際研究となる。すなわち、礼拝堂ステンドグラスが製作されたヴィクトリア朝期イギリスでは、美術の面では中世美術（ステンドグラス復興、ラファエル前派）と無名性が復興し（アーツ・アンド・クラフツ運動）、また神学の観点ではカトリックが復興し（オクスフォード運動）、中世教父研究が始まったのであり、中世美術の無名性はわが国近代の民芸運動にも及ぶ意味があった。すなわち近代を支える中世キリスト教の重要性が再確認されることになる。それは礼拝堂と礼拝の市民への公開によって市民に示されるが、その前に学外のステンドグラス職人による修復作業については修復期間中公開し、市民が自由に見学できるようにする。

第二に、人間学（人文学）の観点からは、本学を媒介的な研究対象として本学のキリスト教と東北仙台の地域性のなかでの本学のキリスト教の役割を検討する。デフォレスト館や史料センター所蔵の文書などの本学に関する史料をも利用し、仙台宣教以来の欧米側から見た東北観（Christopher Noss, Tohoku: the Scotland of Japan, 1918）と東北におけるキリスト教受容（押川方義、田中正造、新井奥邃、酒井勝軍）を検討し、異物としてのキリスト教が東北の地域性において単性論的ユニテリアン的傾向で受容されたことが明らかにする。他方、普遍的な帝国と地域が各時代の反発と融合の中でいかなる秩序を生み出してきたのかを明らかにし、東北の地域性を世界史的な視野の中で把握できるようにするための参照軸とする。その結果、人類全体に共通する東北の感受性が明らかになる。

研究成果は、事業成果公表計画（３「事業の実施体制」で後述）の進捗状況の検証と、成果内容の学術的な検証を通じて測定される。すなわち、公表計画の進捗状況は、学内の関係部局で構成される「ブランディング事業評価委員会」によって毎年検証を受ける。また、研究の学術的価値や公表の地域的効果は、専門研究者と仙台市の関係部局代表者によって構成される「外部評価委員会」によって毎年評価される。

⑤地域の発展等への寄与

本研究は、東北域内や日本国内に限られた既存の内向きの見地ではなく、キリスト教が基礎付けた物質文化という見地から 2011 年に未曾有の破壊を経験した東北仙台の文化を捉え直そうとする点に独自性をもつ。本事業で取り上げる本学の文化財調査はそのきっかけであり、それが近代においてキリスト教中世に由来する物質文化（デフォレスト館、ラーハウザー館および内部のステンドグラス）がいかなる価値を持つのかを明らかにすることを通じて、最終的には東北仙台の文化資源として、物質文化を広く考察するために発信することとなる。東北の地域性として考えられるプレ・モダン的感受性もキリスト教的観点からはポスト・モダン的文化資源となるのであり、東北における神学に基礎付けられた文化的価値発見は、キリスト教主義の人格教育を掲げるとともに総合大学として十分な研究人材を擁する本学のみが遂行可能な事業である。本学が神学および人文学研究を基盤とする文化資源の研究開発の拠点を構築することは、東北の物質文化の根拠の確認と新たな文化資源の開発に貢献することになる。とりわけ、将来的に東北仙台が地域の文化や物産を内外にアピールする際に、重要な役割を果たすであろう。

⑥自己点検・評価及び外部評価の実施体制

＜自己点検・評価体制＞

東北学院大学点検・評価に関する規程に基づき設置の点検・評価委員会に小委員会等を設置し、研究プロジェクトに係る自己点検・評価を実施する。なお、事前の評価指標の設定、事後評価による効果の検証、次の研究プロジェクトへ反映等の点検・評価結果の活用については、ＰＤＣＡサイクルを適用し、研究プロジェクトの事業推進に効果的に反映させ、効率的な事業推進を図る。

＜外部評価体制＞

本プロジェクト内に、研究テーマに関連する５名の学外の学術専門家および有識者によって構成される外部評価委員会を設置し、研究や広報の実施状況を精査し、各年次の目標の達成度を評価するとともに、問題点や改善案を指摘する。

⑦社会への広報の方法等

本事業は、その第一歩として本学の文化財と歴史をモデルとするものであるので、文化財の調査修復を市民に公開する。研究成果は、市民向けとして国際シンポジウムの開催（毎年）やメディア放送（毎週）、学術界向けとしては書籍の出版や研究資料データベースの構築によって随時公表する。

⑧事業を大学のブランディングにつなげていく展望

本学は「TG Grand Vision 150」を策定し、メインビジョンとして「ゆたかに学び 地域へ 世界へ」を掲げ、「新しい TG ブランド」として地域連携と地域貢献、社会ニーズへの対応を明示した。本学は東北地域を人的知的に支える大学を目指しているので、本事業の研究ブランドは本学の中長期的なブランディング計画を神学と人文学の領域から強力に促進するものとなる。

３．事業の実施体制

申請事業の選考に当たっては、学内公募を実施し、学長、副学長等を構成員とする選考委員会の議を経て、学部長会議において、確認・承認を得ている。

【プロジェクト実施体制】

本学に設置のキリスト教文化研究所、ヨーロッパ文化総合研究所および東北学院大学資料センターが、それぞれの専門分野を生かし、ブランディング事業推進のために次の委員会を設置する。

①事業実施運営委員会

各事業推進部会の長によって構成され、事業組織全体の決定機関である。事業の全体計画の立案、実施結果の検証、計画の見直し、再実施に係る事業推進を統括する。また、「自己点検・評価委員会」および「外部評価委員会」の評価結果や指摘内容を十分に考慮して、各年度の事業計画を決定する。

②研究推進評価委員会

以下に示す各研究推進部門の長と主事によって構成される、参画組織全体の執行機関。事業実施運営委員会の決定にもとづいて、研究計画のスケジュールを調整するとともに、広報や宣伝、ステンドグラス調査・公開、シンポジウム開催、印刷物作成などを中心として、そ

の執行に当たる。

③研究推進部門の設置

・神学研究推進部門（キリスト教の物質文化）：キリスト教文化研究所を中心に構成される。
・人文学研究推進部門（地域主義と帝国理念）：ヨーロッパ文化総合研究所を中心に構成される。
・地域研究推進部門（東北における地域性とキリスト教）：東北学院大学資料センターを中心に構成される。

各推進部門長は事業実施運営委員会の全体計画に基づき、各事業の推進に責任を持つ。

４．年次計画

2016 年度

＜目標＞

①キリスト教文化研究所、ヨーロッパ文化総合研究所、東北学院資料センターは情報環境や機材等の研究環境を整える。
②ステンドグラス制作やヴィクトリア朝文化について、現地で学術調査を行う。
③今後の研究成果を広報・普及するための環境を整える。

＜実施計画＞

①情報機器（PC、スキャナ、コピー機など）や研究資材を調達し、情報公開のためのデータベースのシステムを構築する。完成し次第、収集資料のデータ化を開始する。
②ヒートン・バトラー&ベイン工房を調査において学術調査を行い、その研究成果を、第一回シンポジウムを開催して公表する。外部から専門家（高橋裕子、学習院大学教授；平山健雄氏、光ステンド工房）を招き、専門的な知見を取り入れる。
③本事業のホームページを立ち上げ、上述のデータベースとの情報連携を確立して、今後研究成果や収集資料を随時公表できるようにする。

2017 年度

＜目標＞

①礼拝堂ステンドグラスの調査・修復を行う。
②ヴィクトリア朝文化の調査研究を継続する。
③校祖ホーイ、シュネーダー、押川方義を軸に、本学と仙台関係史の研究に着手する。

＜実施計画＞

①平山健雄氏の協力の下、ステンドグラスの調査修復を行う。作業状況は一般市民に公開する。

②ヴィクトリア＆アルバート博物館、ステンドグラス博物館で調査を行い、その成果を第二回シンポジウムで公表する。

③本学の歴史を整理するとともに、翌年以降のデフォレスト館研究の準備を整える。

また、①～③の蓄積された研究成果を発信するために、仙台コミュニティ・ラジオと連携する。

2018 年度

＜目標＞

①事業前半の総括として、礼拝堂ステンドグラスおよびヴィクトリア朝文化研究の結果をまとめる。

②ヨーロッパ近現代における中世復興運動と、それに関連する西洋史研究を行う。

③デフォレスト館と宣教師活動を軸に、本学と欧米の関係史の研究を進める。

＜実施計画＞

①ステンドグラスの調査修復の経過とその歴史的背景をなすヴィクトリア朝文化研究の成果を書籍にまとめ出版する。これに先立ち、外部の研究者（高野禎子、清泉女子大学教授；Dr Jasmine Allen、The Stained Glass Museum in Ely Cathedral、curator；Sarah Brow、英国国教会ヨーク・ステンドグラス保全協会会長）を招いて、第三回シンポジウムを開催するとともに、市民にステンドグラスを公開する。

②イギリスやドイツなどの中世美術復興を中心に資料調査と分析を進める。

③本学と仙台の関係史については、①の書籍に中間的な成果としてまとめて公表する。

2019 年度

＜目標＞

①ヨーロッパ近現代における中世復興運動と、それに関連する西洋史研究を継続する。

②デフォレスト館の建築に関して、ホーイ、シュネーダーとアメリカ人建築家モーガンを中心に、本学と欧米の関係史を研究する。

③ヨーロッパの普遍的帝国理念と地域主義の関係についての中間的な研究成果を報告する。

＜実施計画＞

①中世復興運動を中心に資料調査と分析を進める。

②本学と仙台の関係史、本学とアメリカの関係史の中間的な研究成果を中心として、第四回シンポジウムを開催する。

③帝国と地域をテーマとする市民向けのシンポジウムを開催する。

2020 年度

＜目標＞

①東北における文化資源開発のための拠点を整備する。
②中世復興運動に関する研究活動をまとめる。
③５年間の研究を総括し、その成果を公表する。
④神学を基礎とした人文学教育を促進する。
⑤礼拝堂での礼拝を市民に公開する。

＜実施計画＞
①仙台市に本学建築物等の文化的価値を報告し、東北の文化資源開発のための連携方法を協議する。
②外部からの研究者（谷隆一郎、九州大学名誉教授；Jim Cheshire、リンカーン大学講師）を招いて、近現代ヨーロッパの中世復興運動についてのシンポジウムを開催する。
③５年間のシンポジウムの内容、文化財の市民公開状況、他の研究成果を取りまとめて市民向けに編集し、書籍を出版する。また、デジタル化した資料の一般公開を完了する。
④全学必修のキリスト教学に加えて、さらにキリスト教物質主義の授業を付け加えるなど、従来のキリスト教学の枠を離れた授業を設ける。
⑤ラーハウザー礼拝堂での礼拝は大学礼拝で学生に限っているが、それに一般市民も参加できるようにする。

Ⅱ

事業の活動と成果の報告

１．共通事業部門

⑴　共通事業部門の事業概要

①　事業の目標・課題

共通分野の事業は、ラーハウザー記念東北学院礼拝堂のステンドグラスの修復による技法的研究を含む総合的研究であり、近代におけるイギリスのゴシック復興におけるヒートン・バトラー＆バイン工房（以下、HBB 工房）の位置を定め、人間主義の近代における超越的中世の意味を探り、押川方義とともに建学の中心人物であった宣教師ホーイとシュネーダーのキリスト教を、その出身学校であるアメリカのランカスター神学校の神学とともに明らかにすることである。

②事業の方法

具体的な事業としては、時間と震災によって損傷し、たわみ始めていたステンドグラスの修復と、修復によって明らかになった HBB 工房のステンドグラスの様式研究で、様式研究はイギリスにおける HBB 工房の実作品調査、及び近年イギリスでもようやく始まった 19 世紀ステンドグラスの研究を踏まえての HBB 工房の位置付けである。アメリカにおける超越主義のキリスト教と密接な関係を持つアメリカの中世主義に関しては、アメリカにおけるステンドグラス復興とジャポニズムの最も重要な画家で、アメリカにおいても評価が充分でないジョン・ラファージ（John La Farge 1835-1910）に研究を定めた。また本学のキリスト教の出自であるランカスター神学校との交流、そして建学の精神の市民への可視化として月一度の公開礼拝である「水曜礼拝」を実施し、それと同時に礼拝の予告と報告のための『水曜通信』を月一度出版することとした。その通信は月ごとのブランディング事業の報告も兼ねている。

③事業の参加者と実施計画

＜参加者＞

鐸木道剛、日野哲

＜実施計画＞

＊本学のステンドグラスの修復と調査

＊イギリスの HBB 工房のステンドグラスとイギリスの中世主義・ジャポニスム研究

＊ジョン・ラファージのステンドグラスとアメリカの超越主義の研究

＊ランカスター神学校でのアメリカのキリスト教伝道についての調査、マーサーズバーグ神学研究

＊水曜礼拝の実施

＊水曜通信の発行

⑵　共通事業部門の事業の実施状況

＜礼拝、広報＞

2017/4-2019/2 水曜礼拝　鐸木道剛 30 回実施

2017/4-2019/2 水曜通信　鐸木道剛　30 号発行

＜研究プロジェクト＞

2017/2/22-27 イギリスにおけるヒートン・バトラー＆バイン工房の作品現地調査
　鐸木道剛、吉田新、平山健雄

2017/2/28-3/2 ダルムシュタット調査　吉田新

2017/2/28-3/3 ハンガリー、ジャポニスム学会参加　鐸木道剛

2017/12/3-8 アメリカ調査（ランカスター神学校での日本伝道資料、ラファージのステンドグラス作品）　鐸木道剛

2018/2/19-22 日光での現地調査（ラファージの足跡を辿る）　鐸木道剛

2018/7/24-8/5 占領下の東北学院に係る米国資料調査　松谷基和

2018/8/2-16 アメリカ調査（ランカスター神学校での日本伝道資料、ラファージのステンドグラス作品）　鐸木道剛、日野哲

2019/8/21-8/28 宮城学院との合同調査　野村信、日野哲

2018 10/6-10/7 学生ワークショップ　吉田新

2019/3/7-14 イギリスにおけるヒートン・バトラー＆バイン工房の作品現地調査　鐸木道剛

2020 ランカスター神学校との交流（招聘、シンポジウム、研修生受け入れ）　鐸木道剛

＜講演会、シンポジウム＞

2016/11/5 講演会「ラーハウザー記念礼拝堂の＜昇天＞ステンドグラス：イギリスにおける中世美術復興」　講師：鐸木道剛、平山健雄　参加者数 140 名

2017/3/18　シンポジウム「東北学院のステンドグラス：19 世紀の中世復興と物質文化」
　講師：鐸木道剛、谷隆一郎、高野禎子、Jim Cheshire　参加者数 84 名

2017/8/3 修復作業公開　講師：平山健雄、鐸木道剛　参加者数 160 名

2018/2/24　シンポジウム「ラファージと日光：アメリカのステンドグラス復興とジャポニスムのパイオニア」
　講師：鐸木道剛、有木宏二、五味良子、Phylis Froyd, Katie Kresser　参加者数 63 名

2018/2/27 再設置　講師：平山健雄、鐸木道剛　参加者数 130 名

2018/3/2 修復完了記念礼拝　記念講演「修復を終えて：甦るひかり」
　講師：平山健雄　司式：野村信　演奏：今井奈緒子、中川郁太郎　参加者数 140 名

2018/5/26 講演「ポーランドのユネスコ世界遺産：ルター派教会堂―ヤヴォルとシフィドニツァ」
　講師：Waldemar Affelt　参加者数 61 名

2018/6/2-7/14 講演「ポーランドにおけるユネスコ世界遺産の文化財保護の現状」（7 回シリーズ）　講師：Waldemar Affelt　参加者延べ 116 人

2018/7/19　講演「今日のキリスト教信仰：アメリカ合衆国の＜宗教市場＞のなかで（Christian Faith Today in the 'Religious Market Place' of the United States）」
　講師：Carol Lytch、通訳・コメント Jeffrey Mensendiek　参加者数 180 名

2018/9/26 ランカスター神学校調査報告　講師：鐸木道剛、日野哲　参加者数 22 名

2019/2/23 シンポジウム「ジョン・ラファージの中世主義：ジャポニスムとステンドグラス復興」
講師：鐸木道剛、岡部昌幸、井上瞳、Beatrice La Farge, Henry Adams　参加者数 47 名
2018/12/21 シンポジウム「ボストン・ブラーミンのキリスト教と仏教：教義と寛容」
講師：鐸木道剛、David Eckel, Roger Warner, Carol Bundy　参加者数 54 名

＜学会発表＞
Michitaka SUZUKI, Medievistika u Evropi i u Japanu-Markov i Janagi i Ruskin, 日本学・中世主義フォーラム（Japanolosko-medievisticki forum）主催「中世とは何か一東と西の対話（Sta je sredni vek: Dialog Istoka i Zapada）」セミナー（2017 年８月 14 日、於：ベオグラード大学哲学部、 ベオグラード文化センター）

＜研究成果＞
＊鐸木道剛「ラーハウーザー記念東北学院礼拝堂の＜昇天＞ステンドグラス：東北学院の象徴としての意味の拡がり」『東北学院大学キリスト教文化研究所紀要』第 35 号（2017 年 6 月）59-78 頁
＊平山健雄「ラーハウザー記念東北学院礼拝堂ステンドグラス調査報告」『キリスト教文化研究所紀要』第 35 号（2017 年 6 月）51-57 頁
＊鐸木道剛「＜昇天＞ステンドグラスの検証とステンドグラス修復公開：ヒートン・バトラー＆バイン工房 1932 年の見本帳から」『東北学院時報』第 741 号（2017 年 8 月・9 月合併号）
＊鐸木道剛「東北学院のステンドグラス−異物としての東北学院礼拝堂」『東北学院大学教職員修養会　キリスト者教員研修会　報告書』第 18 号（東北学院大学、2017 年 8 月 31 日、35-44 頁）
＊鐸木道剛「東北における神学・人文学の研究拠点の整備事業：近代人文学の出発点としての中世神学」『大学時報』No. 376（2017 年９月、82-87 頁）
＊鐸木道剛「キリストの昇天を描くステンドグラスの再設置：見える神の表象を永続させる」『東北学院時報』第 744 号（2018 年 2 月・3 月合併号）
＊鐸木道剛「ジョン・ラファージ：天と地をつなぐ」『キリスト教文化研究所紀要』第 36 号、2018 年 6 月、41-56 頁
＊鐸木道剛「＜福音＞の帰結としての＜芸術＞」『福音とは何か：聖書の福音から福音主義へ』教文館、2018 年 9 月 10 日、427-452 頁
＊平山健雄『ラーハウザー記念東北学院礼拝堂ステンドグラス修復報告書』48 頁、2018 年 （?）付 DVD/Blu-ray（染川晴雄制作）

⑶　共通事業部門の事業の成果と展望

＜成果＞
ステンドグラスの修復は、2017年夏から2018年春にかけて行われ、その間、修復作業の市民への公開を２度、また完成記念礼拝と講演会を行った。ステンドグラス研究は、ラファージ研究に受け継がれ、年度に一回、計4回実施した。それはアメリカのキリスト教の研究ともなり、

2020年度に19世紀のランカスター神学校を中心とするマーサースバーグ神学論争についてのシンポジウムを開催する計画につながっている。

イギリスにおけるHBB工房の作品の現地調査は2016年と2018年度の２度実施され、15の作品の調査が終わった。アメリカのボストンには、ラファージのステンドグラスと並んで、HBB工房のステンドグラスが設置されており、HBB工房のゴシック的線描の保守性がラファージの劇的絵画的効果と比較して際立っていることも判明した。現地調査において収集したHBB工房作のステンドグラス「昇天」図像についての現段階での報告以上の様式論については、現地での研究も緒に付いたばかりであり、HBB工房の膨大な作品についての最終的判断は更なる調査を待つ。

ラファージ研究については 3 回のシンポジウムを行った。いずれもボストンのラファージ、ヘンリー・アダムス（Henry Adams 1838-1918）、ビゲロー（William Sturgis Bigelow 1850-1926）、ローエル（Percival Lowell 1855-1916）の一族の人々の協力も得て、明治初期の日本と密接なつながりのあったボストンの超越主義キリスト教と仏教との関係にも展開することができている。それはいずれ日本におけるキリスト教の土着と超越のあり方に関わってくる。

水曜礼拝は3月と8月をのぞいて、年間10回、計30回実施し、2017年度はのべ595人、2018年度488人、2019年度627人、毎回平均50名の一般市民の参加を得て、ブランディング事業終了後も、大学のみならず幼稚園と中学校高等学校をも含む学院の事業として、2020年に学院に新たに宗教センター新設して、継続することになった。

『水曜通信』も30号まで発行し、これも宗教センターの事業となる。建学の精神の確認であるブランディング事業の当初の目的は確かに実現され、本学のキリスト教の出自であるランカスター神学校との交流とともに本学では宗教センターによってブランディング事業終了後も確実に受け継がれることになっている。

＜今後の事業成果の活用・展開＞

ブランディング事業共通部門の成果は、以下に列挙するように、学院全体に及ぶ新設の「宗教センター」による事業として確実に受け継がれることとなった。

＊HBB工房のステンドグラス研究、および中世主義研究としてのラファージ研究の継続

＊ランカスター神学校との交流

＊ランカスター神学校をめぐってのマーサーズバーグ神学論争の研究

＊水曜公開礼拝、『水曜通信』の継続

＊全学院に及ぶ教職員聖歌隊活動

⑴　礼拝堂ステンドグラス修復事業

事業代表者：鐸木道剛

事業分担者：平山健雄（光ステンド工房）

１　事業内容

概要：

東北学院のラーハウザー記念東北学院礼拝堂の中心である祭壇奥の＜昇天＞ステンドグラスが、イギリスのヒートン・バトラー＆バイン工房（以下、HBB 工房）の作であること判明した。改革派の教会になぜ中世カトリック的ステンドグラスがあるのか。まずは 1932 年の設置依頼、85 年を経過して、たわみ始め、また震災によって損傷していたステンドグラスを、技法的研究を含む総合的研究のために修復する。

活動目的：

近代におけるイギリスのゴシック復興における HBB 工房の位置を定め、人間主義の近代における超越的中世の意味を探り、押川方義とともに建学の中心人物であった宣教師ホーイとシュネーダーのキリスト教を、その出身学校であるアメリカのランカスター神学校の神学とともに明らかにする。

実施計画：

修復は横浜の光ステンド工房（代表：平山健雄）に依頼して実施する。 平山氏は 1949 年生まれ、1976 年からフランス国立高等工芸美術学校ステンドグラス科で学び、ステンドグラス制作における技能と実績に対して 2000 年に横浜市より「横浜マイスター」の称号を授与されている。

ステンドグラス修復の実施期間の間に、そのプロセスを市民に公開し、また最後に報告書を作成する。

14 の作業工程に従って実施する。

①足場設置、現況調査(2017/7/30-31) ②パネル取り外し(7/31-8/12) ③写真撮影
④トレース、破損確認（8/21-9/25） ⑤パネル分解（10/2-11/4） ⑥ガラス洗浄(10/23-11/25)
⑦絵付け直し ⑧組み立て直し ⑨ハンダ付け ⑩パテ詰め（11/27-2018/2/3）
⑪補強棒、針金 ⑫磨き、仕上げ（1/29-2/24）⑬再取り付け ⑭シーリング、タッチアップ（2/26-3/10）

２　事業の実施状況

＊ステンドグラス修復　2017 年 8 月 1 日～2018 年 3 月 2 日　上記作業工程に従って実施した。

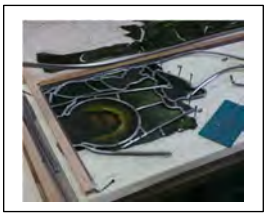
②パネル取り外し

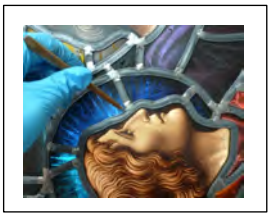
④トレース

⑤パネル分解

⑥ガラス洗浄（前）

⑥ガラス洗浄（後）


⑧組み立て直し


⑫磨き、仕上げ

作業の開始と完了時は市民に公開し、また完了記念礼拝を実施した（それぞれについては第 3 章に報告あり）。

＊2017 年 8 月 3 日（木）14:00-16:00：修復作業公開

＊2018 年 2 月 27 日（火）14:00（開場 12:00）-16:00：再設置公開

＊2018 年 3 月 2 日（金）13:00-16:00：修復完了記念礼拝

３　成果と展望

成果：

全部で20枚のパネルは、すべてのガラス片2411ピースが洗浄され新しい鉛桟によって組み立て直された。なお今後の変形を最小限にとどめるために外周の鉛桟に、中心に真鍮が仕込まれた補強鉛桟を使用、また補強棒に結び付ける真鍮製針金を、よく締まるように銅針金に変更した。パネルを鉄枠に固定する素材をパテから茶色系のシリコンに変え、将来の修復時に取り外し易くなるように施工した。今後80年～100年後には2回目の修復が行われることになるだろう。ステンドグラスのガラス片103箇所に割れが見られた。うち大きく割れている3箇所は東日本大震災の際の破損と思われ、それらは歴史的記憶として、透明2mmのガラスを裏接着して割れが見えるように残した。

なおステンドグラスは横浜の光ステンド工房で修復されており、取り外しと再設置の間には、ステンドグラスはなく、祭壇奥は空白であった。ステングラスが見えなくなったのは、戦時中、ベニヤ板で覆われた時以来、初めてのことである。今回、その間、ステンドグラスのあった場所にはカーテンが掛けられ、ステンドグラスの修復前後は、あたかもエジプト的自然（修復前）、不可視の旧約（修復作業中）、可視の新約（修復以降）を示すかのようであった。

修復前

修復中

修復後

修復作業については、平山健雄氏により詳細な報告書が作成されている。

＊平山健雄『ラーハウザー記念東北学院礼拝堂ステンドグラス修復報告書』（平山健雄作成）48 頁付 DVD/Blu-ray（染川晴雄制作）

またその都度、学内には広報されている。

＊鐸木道剛「異物としての東北学院」（教職員修養会での講演、2016 年 9 月 1 日）

＊鐸木道剛「東北における神学・人文学の研究拠点の整備事業：近代人文学の出発点としての中世神学」
『大学時報』No. 376（2017 年 9 月）82~87 頁
＊鐸木道剛「＜昇天＞ステンドグラスの検証とステンドグラス修復公開：ヒートン・バトラー＆バイン工房 1932 年の見本帳から」『東北学院時報』第 741 号（2017 年 8 月・9 月合併号）
＊鐸木道剛「キリストの昇天を描くステンドグラスの再設置：見える神の表象を永続させる」『東北学院時報』第 744 号（2018 年 2 月・3 月合併号）
＊鐸木道剛「ステンドグラスの修復：その before と after」第 19 回東北学院ホームカミングデー「きれいになったステンドグラスを見よう」記念講話（2018 年 10 月 13 日、於：東北学院大学ラーハウザー記念東北学院礼拝堂）

東北学院大学ホームページでの報告は、毎月の『水曜通信』にも掲載した「ステンドグラス修復報告」5 回（2017 年 11 月 4 日、11 月 4 日、12 月 26 日、2018 年 1 月 26 日、1 月 29 日）以外に、次がある。
＊私立大学研究ブランディング事業シンポジウム「東北学院のステンドグラス」のご案内【3/18 開催】（2017 年 2 月 27 日）
＊「イギリスにおける 19 世紀ステンドグラスの学術調査を実施」（2017 年 3 月 14 日）
＊「私立大学研究ブランディング事業シンポジウム＜東北学院大学のステンドグラス＞を開催」（2017 年 3 月 27 日）
＊「ステンドグラス修復作業を公開します」（2017 年 7 月 12 日）
＊「85 年前の美しい姿に甦るステンドグラスの修復作業が一般公開」（2017 年 8 月 9 日）
＊「ヒートン・バトラー＆バイン工房の 1932 年の見本帳から『昇天』ステンドグラス」（2017 年 10 月 13 日）
＊「東北学院大学研究ブランディング事業＜東北における神学・人文学の拠点整備事業＞《特別水曜礼拝》ステンドグラス修復完成記念礼拝（3/2 開催）」（2018 年 2 月 3 日）
＊「ステンドグラスの帰還『キリスト昇天』設置作業終了　3 月 2 日は記念礼拝」（2018 年 3 月 1 日）
＊「ラーハウザー記念東北学院礼拝堂の夜のステンドグラスをご覧ください」（2018 年 11 月 6 日）

このステンドグラスをめぐっては、ブランディング事業での中心となって以来、市民への公開についても『河北新報』で報道され、イギリスのヴィクトリア朝以来の著名なステンドグラス工房の作品が間近で見られ、その物質性に触れることができるとあって、多くの市民に注目された。
『河北新報』2016 年 11 月 2 日（水曜日）みやぎ版、「東北学院大ステンドグラス　英の有名工房製　国内唯一」
『河北新報』2016 年 11 月 7 日（月曜日）みやぎ版、「東北学院大・ステンドグラス＜空間構成が見事＞仙台・講演会　専門家、価値を解説」
『河北新報』2017 年 4 月 12 日（水曜日）みやぎ版、「ステンドグラス公開　東北学院大学　きょうから　水曜礼拝も定例化」

⑵　ヒートン・バトラー＆バイン工房の現地調査

研究代表者：鐸木道剛

研究分担者：吉田新、平山健雄（光ステンド工房、横浜）

１　研究内容

概要：

本学土樋に 1932 年に献堂されたラーハウザー記念東北学院礼拝堂のステンドグラスが、イギリスのヒートン・バトラー＆バイン工房（Heaton Butler ＆ Bayne 以下 HBB 工房と略記）の作品であることが判明したことを受けての最初の作品現地調査。近代のステンドグラスの現在の状態を観察する。

活動目的：

19 世紀イギリスのステンドグラスは、プロテスタントにおける中世回帰のゴシック・リヴァイヴァルの一環であり、カトリック回帰であるとともに日本趣味（ジャポニスム）でもあった。日本の多神教的感受性とは異質な本学のプロテスタンティズムによる教育という建学理念の、内村鑑三や新渡戸稲造のいう本居宣長以来の我が国の一神教の感受性との相克あるいは一致について考察する。そのためにヴィクトリア朝のゴシック・リヴァイヴァルの代表的工房と言われる HBB 工房作のステンドグラスを精査する。

実施計画：

Lincoln大聖堂、Peterborough大聖堂、Ely大聖堂のステンドグラス調査、
Botolph（Cambridge）、London、St James（Clerkenwell Finsbury 地区）
London、St Mary Magdalene（Munster Square）
Harris Manchester カレッジ図書館(Oxford)を訪ねて写真撮影調査する
また Lincoln 大学の Jim Cheshire 准教授および Ely ステンドグラス博物館の Jasmin Allen 学芸員と情報交換を行う。

２　研究の実施状況

平成29年2月22日から2月27日にかけて、本学教員の鐸木道剛教授（キリスト教文化研究所所長）、吉田新講師（同研究所主事）、本学職員の内海睦夫広報部長、そしてステンドグラスの制作、修復を手掛ける平山健雄氏（光ステンド工房主宰）の四名は、イギリスにおいて本学のステンドグラスに関する学術調査を行った。

2月24日Lincoln大聖堂のステンドグラス調査、修復工房訪問、Lincoln大学のJim Cheshire准教授と情報交換

2月24日Peterborough大聖堂のステンドグラス（1864年、1875年）調査

2 月 25 日 Ely 大聖堂のステンドグラス調査、ステンドグラス博物館の作品調査

ステンドグラス博物館の Jasmin Allen 学芸員と情報交換

2 月 25 日 Cambridge、Botolph のステンドグラス調査

2 月 26 日 London、James（Clerkenwell Finsbury 地区）のステンドグラス（1863 年）調査

2 月 26 日 London、St Mary Magdalene（Munster Square）のステンドグラス調査

2 月 27 日 Oxford、Harris Manchester カレッジ図書館のステンドグラス（1898 年）調査

Jim Cheshire さんと。2 月 24 日リンカーン大聖堂にて

マンチェスターカレッジ図書館の HBB 工房作ステンドグラス 2 月 27 日

３　成果と展望

成果：

イギリスにおける現地調査では、本学のステンドグラスを制作したヒートン・バトラー&バイン工房（以下、HBB工房）の位置づけを確認し、19世紀ステンドグラスの状況を知るため、リンカーン大聖堂、ピーターバラ大聖堂、イーリー大聖堂、ロンドンの複数の教会などの教会

建築のみならず、オックスフォード大学、ケンブリッジ大学の各カレッジに備えられたステンドグラスを含む広範囲に及ぶ調査を実施した。とりわけ、オックスフォード大学ハリス・マンチェスター・カレッジの図書館が所有するステンドグラスは、本学のステンドグラスと同じ工房による同時代の作品で、中世趣味でありながら個人の功を称賛する近代個人主義の産物であることが重要である。また現在の19世紀ステンドグラスの研究の中心的役割を果たしているリンカーン大学のJim Cheshire准教授、イーリー博物館のJasmine Allen学芸員から現在の研究状況について情報提供を受けた。リンカーン大聖堂ではCheshire氏の案内のもと、ステンドグラスの修復現場を見学することができたのは大きな収穫である。またロンドンではポーランドのグダンスク工科大学のヴァルデマール・アッフェルト（Waldemar Affelt）講師よりポーランドおけるステンドグラス復興（クラクフにおけるヴィスピアンスキのステンドグラスの復元）についての情報提供を受けた。今回の学術調査で本学のステンドグラスに関する重要な情報を多く収集することでき、今後の研究への足掛かりを得ることができた。

Elyのステンドグラス博物館にて
Jasmin Allen学芸員と　2月25日

Peterborough大聖堂のHBB工房製作のステンドグラス　2月24日
「最後の晩餐」（部分）、「ゲッセマネのキリスト」（部分）

⑶　ダルムシュタットでの現地調査

研究代表者：　鐸木道剛

研究分担者：　吉田新

１　研究内容

概要：

本学土樋キャンパスに 1932 年に献堂されたラーハウザー記念東北学院礼拝堂のステンドグラスが、イギリスのヒートン・バトラー&バイン工房（Heaton Butler ＆ Bayne 以下 HBB 工房と略記）の作品であることが判明したことを受けての最初の関連作品現地調査。近代ステンドグラスに大きな影響を与え、HBB 工房も模写しているドイツの画家ハインリッヒ・ホフマン（Heinrich Hofmann 1824-1911）について、その生誕の地ダルムシュタットを訪ね、ドイツにおけるステンドグラス復興の中心地でもあり、新様式であるユーゲントシュティルの中心地であったダルムシュタットでの状況を調査する。

活動目的：

19 世紀イギリスのステンドグラスは、プロテスタントにおける中世回帰のゴシック・リヴァイヴァルの一環であり、カトリック回帰であるとともに日本趣味（ジャポニスム）でもあった。日本の多神教的感受性とは異質な本学のプロテスタンティズムによる教育という建学理念の、内村鑑三や新渡戸稲造のいう本居宣長以来の我が国の一神教の感受性との相克あるいは一致について考察する。

実施計画：

2 月 28 日着 3 月 2 日発で、ドイツにおける近代ステンドグラス復興の中心地であるダルムシュタットのヘッセン州立博物館を訪問し、作品の展示の実態、保存状況、研究状況を調査する。

２　研究の実施状況

イギリスでのステンドグラス調査後、吉田のみ帰国前に単身ドイツに渡った。2 月 28 日の午後遅くイギリスからドイツに到着し、3 月 2 日の午後には日本へ出国したため、実質的な調査は 3 月 1 日の 1 日のみであった。調査場所はダルムシュタットにあるヘッセン州州立博物館（Hessisches Landesmuseum Darmstadt）、及び、ユーゲントシュティールの作品を有する「マチルダの丘」にある博物館である。

３　成果と展望

成果：

3 月 1、2 日、ドイツのダルムシュタット（ヘッセン州州立博物館他）において、HBB 工房のステンドグラスの図柄の元として利用されたハインリヒ・ホフマンの画業、及び中世ステンドグラスについての研究状況を調査した。ダルムシュタットはハインリヒ・ホフマン

（Heinrich Hofmann 1824-1911）の生誕地であり、同博物館は複数のホフマンの作品を所有していることが Barbara Bott による 2003 年刊行のヘッセン州立博物館収蔵品カタログに記載もされているが、現在ではダルムシュタットのホフマンは注目されず、没後に画集も出版されず、現在も入手可能な画集は全くない。ホフマンの作品の図柄は、メディアを超えてステンドグラスに模写され（『子供たちを祝福するイエス』）、

（写真左）ハインリヒ・ホフマン「子供たちを祝福するイエス」。『我を思え（Gedenke Mein）』（1885 年）より。

（写真右）HBB 工房作ステンドグラス。掛川ステンドグラス美術館蔵。

さらにはホフマン作品で最も有名な『ゲッセマネのキリスト』（1890 年制作。カリフォルニアの John Zeile が購入、1932 年に慈善家ジョン・ロックフェラーが購入後リバーサイド教会に寄贈）は、帝政末期のロシア・イコンに、そして明治初期の日本で長老派の洗礼を受けた下岡蓮杖（1823-1914）によって早くも 1899 年に日本画で模写されるなど、19 世紀宗教画に大きな影響を与えた。ホフマンが出版した３つの版画集『我を思え（Gedenke mein）』（München, 1885）、『我に来れ（Kommet zu mir）』（Breslau, 1887）、『平和あれ（Friede sei mit euch）』（München, 1898）も、（辛うじて現代美術の著名な批評家マイケル・フリードによって再発見されつつあるが）同じく現代美術からは忘れられている 19 世紀ベルリンの大画家アドルフ・メンツェル（Adolf Menzel 1815-1905）と並ぶデッサン力を示し、宗派を超えて模写されるほど人工に膾炙したが、1861 年以降、ホフマンがカトリックの宗教画復興であるナ

ザレ派との交友関係から活動の場をカトリックのドレスデンに移したこともあって、ダルムシュタットが誇るところの、ジャポニズムの東洋趣味の影響下で成立し、現代美術につながってゆくユーゲントシュティルとは相容れず、アカデミックで伝統的なデッサン力で卓越したホフマンの作品は現代においても注目はされていない。

また同博物館は 13 世紀のステンドグラスをはじめとするドイツ有数のステンドグラスコレクションで有名であり、それも合わせて HBB 工房の作品との関連を調査した。HBB 工房はスイスにおいて、ステンドグラスだけでなくモザイクや室内装飾などの作品を、ジュネーブやローザンヌまたノイエンブルグ（Neuenburg）やヴァート（Waadt）州で制作していることをジュネーブ大学のダリオ・ガンボーニ教授から教示を受けたこともあり、従来、イギリスとアメリカ以外のヨーロッパでの HBB 工房のステンドグラス作品は、1932 年のリストからグラース（フランス）、ビアリッツ（フランス）、コペンハーゲン（デンマーク）、レニングラード（ロシア）の 4 点とされてきたが、今度、改めての調査の必要性にも気付かされた。またダルムシュタットを首都とするヘッセン公国では、ナッサウ公のアドルフ（Adolf von Nassau 1817-1905）がロシアの公女エリザベータ（Елизавета Михайловна Романова 1826-45）と婚姻して迎えたのち、早世したエリザベータのためにウィースバーデンのネロベルグ（Neroberg）に墓所としてロシア正教会の聖エリザベート教会（1847-55）を建て、またヘッセン公女のアレクサンドラが最後のロシア皇帝ニコライ 2 世の妃となったようにロシアとのつながりも強かった。そういう中で中世の芸術であるステンドグラス作品が、日本趣味でもあるユーゲントシュティル様式で復活したことに今後、注目すべきである。

Wiesbaden のロシア教会（1855 年献堂）

山下りん（1857-1939）模写、
ホフマン『ゲッセマネのキリスト』鹿沼ハリストス正教会

ヴィスバーデンのロシア教会のイコンを描いたのはドレスデンの画家ティモレオン・カルル・フォン・ネフ（Timoleon Carl von Neff 1804-77）。ドレスデンで学んだ画家でペテルブルグの美術アカデミーの教授であった。ホフマンがドレスデンで描いた絵は、ロシアではイコンとして模写されている。

⑷　ハンガリー、ジャポニスム シンポジウム参加

研究代表者：鐸木道剛

１　研究内容

概要：

本学のラーハウザー記念東北学院礼拝堂のステンドグラスは 19 紀の中世復興の産物であり、同じく中世復興の現れの一つであるジャポニスムは我々に直接関わる。ジャポニスムについての国際シンポジウムに参加して、現在の研究状況を確認する。

活動目的：

19 世紀イギリスのステンドグラスは、プロテスタントにおける中世回帰のゴシック・リヴァイヴァルの一環であり、カトリック回帰であるとともに日本趣味（ジャポニスム）でもあった。日本の多神教的感受性とは異質な本学のプロテスタンティズムによる教育という建学理念の、内村鑑三や新渡戸稲造のいう本居宣長以来の我が国の一神教の感受性との相克あるいは一致について考察する。

実施計画：

3 月 2 日～3 日、ブダペストのフェレンツ・ホップ東洋美術館主催の学会「世界的視野と地域的観点からのジャポニスム（Japonism in global and local context）」に参加する。

２　研究の実施状況

3 月 2 日～3 日、ブダペストの Verkert Bazar で開催されたフェレンツ・ホップ東洋美術館主催の学会「世界的視野と地域的観点からのジャポニスム（Japonism in global and local context）」に参加した。岡山大学時代の教え子でハンガリーに留学し、ジャポニスムの画家ベルタラン・セーケイについてハンガリー語で論文を書いている神戸新聞社の田中真治君にも会い、また田中君の指導教員で今回のシンポジウムの主催者であるカタリン・ゲレル（Katalin Geller）教授に会い、またフランスにおけるジャポニスムの権威で日本人研究者とも親しいジュヌヴィエーヴ・ラカンブル（Genevieve Lacambre）先生とも再会した。各研究発表では、ポーランドの発表者が言及しなかったペテルブルグでのキターエフ収集の日本美術の展覧会の存在を指摘し、また美術に時間を導入したマルセル・デュシャンは西洋美術史においては画期的で革命的とみなされているが、レディメイドのオブジェも形であり「もの」として扱う点で、ユダヤ思想に由来し、キリスト教的世俗化の正統で西洋美術の王道をいく芸術家であって、形や「もの」であることを否定するジャポニスムとは無関係であることなどを指摘した。

（写真左）　中央：ラカンブル先生

（写真右）　「ドナウ河のほとりのゲイシャたち」展

＜論文＞

鐸木道剛「ジョン・ラファージ：天と地をつなぐ」『キリスト教文化研究所紀要』第 36 号、2018 年 6 月、41-56 頁

３　成果と展望

成果：

イギリスでの調査の後、ブダペストのフェレンツ・ホップ東洋美術館主催のシンポジウム（Japonisme in Global and Local Context）に参加し、中世復興としてのジャポニスム、そして 19 世紀中世復興の意味について、各国の研究者と議論した。中世復興について西欧（アーツ・アンド・クラフツ）とロシア（ウラジミル・マトヴェイ）、そして日本（柳宗悦）では意図するところに大きな違いがあるような予測が得られた。美的なエキゾティシズムでのジャポニスムではない、美術否定を含んだ前近代的物質観を含んだジャポニスムを念頭におかねば議論は皮相なものにとどまることを痛感した。

その点、一見美的でない日本の文物に注目したギリシアのアテネのヘレニズム大学のツマス（Johannis Tsoumas）氏との議論が生産的であった。日本美術を最初に収集したイギリスのオールコック（Rutherford Alcock）のコレクション、またアメリカのジャポニスムの嚆矢であるデトロイトのチャールズ・ラング・フリーア（Charles Lang Freer 1854-1919）のコレクションあるいはボストンのモース（Edward Sylvester Morse 38-1925）のコレクションが示すように必ずしも美的なものではないことに、ジャポニスム研究は注目すべきである。

またアメリカにおけるジャポニスム研究で我が国でも著名なフロイド（Phylis Floyd）准教授に初対面できた。学院でのシンポジウムにお招きできることになった。

⑸　水曜礼拝の実施

事業代表者：鐸木道剛

１　事業内容
概要： 　水曜礼拝は、2016 年秋に採択された文科省の私立大学研究ブランディング事業の一環として、建学の精神とそのプレゼンスを地域で高めるために、2017 年 4 月から月に一度、第３水曜日の夜 6 時半から市民に開かれた礼拝として実施する。 **活動目的**： 　本学土樋キャンパスの 1932 年献堂のラーハウザー記念東北学院礼拝堂にはイギリスの HBB 工房のステンドグラスがある。19 世紀イギリスのステンドグラスは、プロテスタントにおける中世回帰のゴシック・リヴァイヴァルの一環であり、カトリック回帰であるとともに日本趣味（ジャポニスム）でもあった。そのステンドグラスを出発点に、日本の多神教的感受性とは異質な本学のプロテスタンティズムによる教育という建学理念の、内村鑑三や新渡戸稲造のいう本居宣長以来の我が国の一神教の感受性との相克あるいは一致について考察する。長老派のランカスター神学校から伝えられた、近代を支える福音のメッセージを「地域へ、世界へ」伝えることは、TG Grand Vision 150 が目指すところでもある。 **実施計画**： 　毎月の第３水曜日の 19 時から、ラーハウザー記念東北学院礼拝堂にて。礼拝 30 分、講話あるいは音楽による賛美 30 分で、20 時には終了。
２　事業の実施状況
2017 年度から 2019 年度にかけて開催された水曜礼拝は以下の通りである。 ＜2017 年度＞ 第 1 回 : 4 月 12 日、説教 : 鐸木道剛、奏楽 : 小野なおみ、礼拝後 : ステンドグラス研究報告（鐸木道剛）、参加者 66 名 第 2 回 : 5 月 10 日、説教 : 野村信、奏楽 : 小野なおみ、礼拝後 : グリークラブ OB 合唱団による合唱、参加者 69 名 第 3 回 : 6 月 14 日、説教 : 原田浩司、奏楽 : 小野なおみ、礼拝後 : 東北学院大学宗教部聖歌隊（指揮 : 中川郁太郎）の合唱、参加者 78 名 第 4 回 : 7 月 12 日、説教 : 阿久戸義愛、奏楽 : 小野なおみ、礼拝後 : オルガン演奏（小野なおみ）、参加者 118 名 第 5 回 : 9 月 20 日、説教 : 佐藤司郎、奏楽 : 小野なおみ、礼拝後 : 講話（鐸木道剛）、参加者 43 名 第 6 回 : 10 月 18 日、説教 : 吉田新、奏楽 : 小野なおみ、礼拝後 : グリークラブ OB 合唱団による合唱、参加者 47 名 第 7 回 : 11 月 15 日、説教 : 松本宣郎、奏楽 : 小野なおみ、礼拝後 : 中川郁太郎による独唱、参

加者 43 名
第８回：12 月 20 日、説教：佐々木哲夫、奏楽：小野なおみ、礼拝後：東北学院大学宗教部聖歌隊（指揮：中川郁太郎）の合唱、参加者 60 名
第９回：1 月 17 日、説教：鐸木道剛、奏楽：小野なおみ、礼拝後：モリゴー・フォーによる四重唱、参加者 39 名
第 10 回：2 月 21 日、説教：佐藤司郎、奏楽：小野なおみ、礼拝後：オルガン演奏（小野なおみ）、参加者 32 名
＜2018 年度＞
第 11 回：4 月 18 日、説教：松本宣郎、奏楽：小野なおみ、礼拝後：講話（鐸木道剛）、参加者 41 名
第 12 回：5 月 16 日、説教：川島堅二、奏楽：小野なおみ、礼拝後：独唱（中川郁太郎）、参加者 40 名
第 13 回：６月 20 日、説教：鐸木道剛、奏楽：小野なおみ、礼拝後：東北学院大学宗教部聖歌隊の合唱、参加者 32 名
第 14 回：7 月 18 日、説教：キャロル・リッチ（Carol Lytch ランカスター神学校校長）、奏楽：小野なおみ、礼拝後：東北学院大学宗教部聖歌隊、グリークラブ合同による合唱、参加者 73 名
第 15 回：9 月 19 日、説教・佐々木哲夫、奏楽：小野なおみ、礼拝後：グリークラブ OB 合唱団による合唱、参加者 28 名
第 16 回：10 月 17 日、説教：原田浩司、奏楽：小野なおみ、礼拝後：東北学院大学学生サークル室内合奏団 2 Candles による演奏、参加者 48 名
第 17 回：11 月 21 日、説教：阿久戸義愛、奏楽：小野なおみ、礼拝後：オルガン演奏（小野なおみ）、参加者 82 名

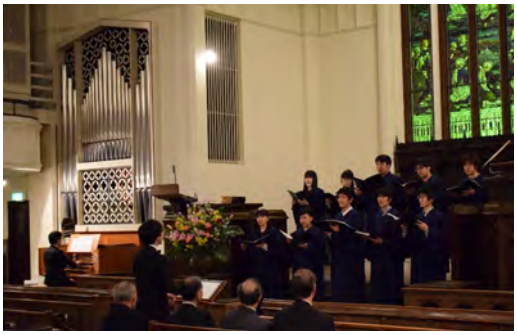
2018 年 7 月 18 日　リッチ校長

第 18 回：12 月 19 日、説教：長島慎二、奏楽：小野なおみ、礼拝後： グリークラブ・キャロラーズ・東北学院大学宗教部聖歌隊による合唱、参加者 45 名
第 19 回：1 月 16 日、説教：出村みや子、奏楽：小野なおみ、礼拝後：松岡多恵（東京藝術大学大学院博士課程）、森翔悟（東京藝術大学修士課程修了）による独唱・重唱、参加者 35 名
第 20 回：2 月 20 日、説教：松本宣郎、奏楽：小野なおみ、礼拝後：金持亜美（東京藝術大学教育研究助手）・谷地畝晶子（岩手大学非常勤講師）・中川郁太郎のカンタータによる賛美、参加者 64 名
＜2019 年度＞
第 21 回：4 月 17 日、説教：野村信、奏楽：小野なおみ、礼拝後：グリークラブ OB 合唱団による合唱、参加者 54 名
第 22 回：5 月 15 日、説教：ランダル・ザッカマン（Randall C. Zachman ランカスター神学校講師・ノートルダム大学名誉教授）、奏楽：小野なおみ、礼拝後：東北学院大学宗教部聖歌隊・グ

リークラブ・キャロラーズ合同による合唱、参加者 56 名

第 23 回：6 月 19 日、説教：出村彰（本学名誉教授・学校法人宮城学院名誉理事）、奏楽：小野なおみ、礼拝後：モリゴー・フォー（グリークラブ OB・聖歌隊 OB）による男声四重唱、朗読：松田千津子、参加者 53 名

2019 年 5 月 15 日　ザッカマン教授



同日　学生聖歌隊・グリークラブ・キャロラーズ

第 24 回：7 月 17 日、説教：鐸木道剛、奏楽：大泉真理、礼拝後：讃美歌解説とオルガンによる演奏（大泉真理）、朗読：松田千津子、参加者 50 名

第 25 回：9 月 18 日、説教：大西晴樹、奏楽：今井奈緒子、礼拝後：菅英三子（東京藝術大学教授）による独唱、オルガン：今井奈緒子、参加者 120 名

第 26 回：10 月 16 日、説教：フリードリッヒ・ヴィルヘルム・グラーフ（Friedrich Wilhelm Graf ミュンヘン大学名誉教授）、奏楽：小野なおみ、礼拝後：東北学院大学学生サークル室内合奏団 2 Candles による演奏、参加者 56 名

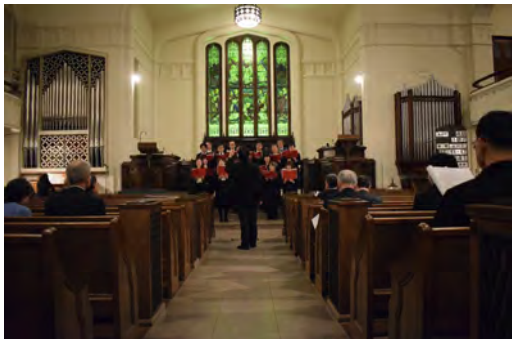
第 27 回：11 月 20 日、説教：田島卓、奏楽：小野なおみ、礼拝後：鈴木雅光作曲作品演奏、オルガン演奏（小野なおみ）、参加者 64 名

第 28 回：12 月 18 日、説教：川島堅二、奏楽：小野なおみ、礼拝後：東北学院大学宗教部聖歌隊 4 年生によるメサイア合唱、参加者 64 名

第 29 回：1 月 15 日、説教：原田浩司、奏楽：小野なおみ、礼拝後：グリークラブ OB 合唱団による合唱、参加者 49 名

第 30 回：2 月 19 日、説教：松本宣郎、奏楽：小野なおみ、礼拝後：東北学院教職員聖歌隊による合唱、参加者 61 名

2019 年 10 月 16 日　グラーフ教授



2020 年 2 月 19 日　教職員聖歌隊

最終回の 30 回に、松本院長（当時）の提案で 2019 年 5 月に結成し、月一度第 4 水曜日に練習している教職員聖歌隊の合唱が加わることができたことは特筆すべきである。

＜2020 年度＞

宗教センターが継承し、コロナ伝染病によって 9 月から月一回 YouTube で配信を始めている。

３　成果と展望

成果：

礼拝は、大学礼拝と同じく説教中心の 30 分で、20 分の大学礼拝とは違って、聖書朗読前後の讃美歌は 2 曲歌い、オルガンによる前奏と後奏も長めの時間をとっている。説教者も学長院長先生をはじめ、学内の教員有志だけでなく、退職された出村彰名誉教授や、招聘したランカスター神学校の聖職者（リッチ校長）や教授（ノートルダム大学ザッカマン名誉教授）、また日本滞在中のドイツの神学者（ミュンヘン大学グラーフ名誉教授）にもお願いできた。礼拝の後は、約 30 分の音楽による賛美で、礼拝担当オルガニストのリサイタル、音楽教員による独唱、宗教部聖歌隊、グリークラブの OB、教職員聖歌隊の合唱により、また外部から男声重唱団や女声声楽家（東京芸術大学 管英三子教授）をお招きしたこともある。

2019 年 9 月 18 日水曜礼拝ポスター

水曜礼拝は 3 月と 8 月をのぞいて、年間 10 回、計 30 回実施し、2017 年度はのべ 595 人、2018 年度 488 人、2019 年度 627 人、3 年間にわたって毎回平均 50 名から 60 名の一般市民の参加を得て、プロテスタントの「聖書のみ（sola scriptura）」を踏まえた上で、シュネーダー院長によって建設されたラーハウザー記念東北学院礼拝堂における、ゴシック・リヴァイヴァルの建築とステンドグラスの美術、そしてオルガン演奏の音楽による賛美によって、中世キリスト教以来の「地上の天国」としての礼拝空間を市民が経験できる場所として市民に知られることに成功した。この水曜礼拝は、2020 年度からは、新設の宗教センターの「水曜公開礼拝」として継続されることとなった。今後も地域に広がる大学の市民との接点として重要な役割を果たすであろう。

⑹　水曜通信発行

事業代表者：鐸木道剛

１　事業内容

概要：

東北学院大学ブランディング事業通信として、水曜礼拝の予告と報告を中心の記事を作成し、学院全体だけでなく市民に配布し、TG Grand Vision 150 の方針「地域へ、世界へ」に従って、東北学院大学の活動を広く知らしめる。

活動目的：

本学土樋キャンパスの 1932 年献堂のラーハウザー記念東北学院礼拝堂にはイギリスの HBB 工房のステンドグラスがある。19 世紀イギリスのステンドグラスは、プロテスタントにおける中世回帰のゴシック・リヴァイヴァルの一環であり、カトリック回帰であるとともに日本趣味（ジャポニスム）でもあった。そのステンドグラスを出発点に、日本の多神教的感受性とは異質な本学のプロテスタンティズムによる教育という建学理念の、内村鑑三や新渡戸稲造のいう本居宣長以来の我が国の一神教の感受性との相克あるいは一致について考察する。

東北学院教育の基本方針として、礼拝は「正規の学校行事」であり「不変のこととして実施して」いる。その礼拝を中心とするブランディング事業の活動を学外にも向けて発信する。それは TG Grand Vision 150 に記されているように、長老派のランカスター神学校から伝えられた、近代を支える福音のメッセージを「地域へ、世界へ」伝えることでもある。

実施計画：

水曜礼拝の次回の予告と前回の報告、それにブランディング事業の活動報告として、2017 年 4 月から毎月 1 回発行する。3 月と 8 月は水曜礼拝も実施しないので、水曜通信も発行しない。それゆえ 1 年で 10 回の発行となる。毎月の第 3 水曜日の水曜礼拝の予告であるから、第 2 週の週末には発行する。教会へ配布し、市民への広報に努める。

２　事業の実施状況

2017 年度 10 回、2018 年度 10 回、2019 年度 10 回の計 30 回発行した。毎回の水曜礼拝の予告と報告のほか、ブランディング事業によるシンポジウムや講演会の予告や報告、また様々な記事を掲載した。中でも第 16 号からの「ランカスター神学校での発見」（日野哲執筆）、第 24 回からの「建築との対話：礼拝堂建築調査の現場から」（崎山俊雄執筆）を連載した。

水曜通信は毎回 1000 部印刷し、学院の全教職員にはコピーを作成して配布し、学外には、東北学院大学サテライト・ステーション（校友会）、広瀬河畔教会、東一番丁教会、仙台北教会、日本バプテスト仙台基督教会、宮城学院大学、日本基督教団東北教区センターエマオ、喫茶店ベニー、喫茶店スパークに水曜礼拝のポスターとともに配布した。

３　成果と展望

成果：

小さなブロシュールであるとはいえ水曜通信は、遅延せず 30 号まで発行し、しかも月一回の発行は学院内でも例がなく学院内でも注目されてきた。規則正しく発行され、しかも東北学院教育の基本方針において「不変のこと」とされた「正規の学校行事としての礼拝」の市民への公開、そして建学の精神のための様々なブランディング事業としての企画をめぐる記事は好評であった。

配布したのは、東北学院の全教職員だけでなく、東北学院大学サテライトステーション（校友会）など学外にもおよび、広く一般市民の眼に触れ、水曜礼拝の予告と報告だけでなく、ブランディング事業によるシンポジウムや講演会、また水曜礼拝で用いられた音楽や美術についての記事によって、礼拝学院の建学の精神である改革派キリスト教の学院におけるキャンパス・ミニストリーを広く一般市民に伝える成果があった。

水曜通信 30
2020年 2月
東北学院大学研究ブランディング事業通信
「東北における神学・人文学の研究拠点の整備事業」

第30回水曜礼拝（公開大学礼拝）
2020年2月19日（水）18:30-19:00

説教：松本 宣郎（本院院長・理事長）
奏楽：小野 なおみ（本学礼拝オルガニスト）
＜礼拝次第＞
前　奏：J.G.ヴァルター「われらに救い来たれり」
讃美歌：48番「しずけさゆうべの」
聖　書：ヨハネによる福音書　15章11-17節
讃美歌：187番「主よ、いのちの」
説　教：「私があなた方を愛したように」
頌　栄：541番「ちちみこみたまの」
後　奏：J.S.バッハ「われらに救い来たれり」BWV638
後奏の後、東北学院教職員聖歌隊による合唱での賛美を行ないます。

次回第31回水曜礼拝は４月15日です。

2020 年度は、新設された宗教センターが担当することとなり、『水曜通信』も新しいシリーズとして改めて第一号から再開した。ブランディング事業として行ってきた水曜礼拝も、9 月以降、水曜公開礼拝と名称を変更して再開され、月一回 youtube での配信となっている。

ブランディング時代からの「ランカスター神学校での発見」（日野哲執筆）、「建築との対話：礼拝堂建築調査の現場から」（崎山俊雄執筆）の連載も継続し、「ランカスター神学校での思い出」（藤野雄大執筆）も４回継続し、さらに「美術による賛美」（鐸木道剛執筆）も３回を数えている。

水曜通信６
2021年 2月
東北学院宗教センター編

LIFE　LIGHT　LOVE

主を畏れることは知恵の初め
（箴言1：7）

押川先生と一緒に仙台にキリスト教教育を根付かせた新島襄は、同志社創設の目的を語って、それは単にキリスト教の信者を増やすのではなく、「なおその上」、すなわちキリスト教によらねば現実生活は成り立たない、だからキリスト教主義で青年の精神と品行を陶冶することとしていました（『教育宗教論集』岩波文庫、31頁）。慶應義塾を創設した福澤諭吉も同じです。教育の根本にキリスト教があるとして、アメリカの宣教師たちを三田のキャンパスに住まわせていました。

東北学院の教育を支えているのも礼拝です。現実を超えた超越を知る、そしてその超越が人となったことによって、「永遠の相のもとで（sub specie aeternitatis）」通ざゆく現実を生きることができます。「若き日に創造主を覚え」（コヘレトの言葉12:1）、そして「いのち、ひかり、あい」として世の中で働きましょう。

YouTubeによる水曜公開礼拝も２月で2020年度は最後です。また４月から再開します。近いうちに礼拝堂でも皆さんと一緒に神さまを賛美できますように。

研究ブランディング事業担当　鐸木 道剛

次回：第40回水曜公開礼拝（公開オンライン礼拝）２月24日配信予定

⑺　アメリカでの資料調査

研究代表者：鐸木道剛

１　研究内容

概要：

＊ランカスター神学校との交流再会、東北学院と日本への伝道についての史資料の現状調査

＊HBB 工房のステンドグラス作品の位置づけのために、比較材料としての同時代のアメリカのジャポニズムの影響を受けたジョン・ラファージの新しいステンドグラスの調査

活動目的：

19 世紀イギリスのステンドグラスは、プロテスタントにおける中世回帰のゴシック・リヴァイヴァルの一環であり、カトリック回帰であるとともに日本趣味（ジャポニスム）でもあった。日本の多神教的感受性とは異質な本学のプロテスタンティズムによる教育という建学理念の、内村鑑三や新渡戸稲造のいう本居宣長以来の我が国の一神教の感受性との相克あるいは一致について考察する。

実施計画：

＊ランカスター神学校訪問

＊ボストンの HBB 工房作のステンドグラス調査

＊ニューヨークとボストンのジョン・ラファージ（John La Farge　1835-1910）作のステンドグラス調査

２　研究の実施状況

＊2017 年 12 月 3 日-5 日：ランカスター神学校を訪問し、福音派改革派歴史協会（The Evangelical and Reformed Historical Society: ERHS）と神学校図書館の資料を調査の状況を調査した。

ランカスター神学校スタッフと
2017 年 12 月 4 日
左から
Randall C. Zachman 名誉教授
Carol E. Lytch 校長
Anne T. Thayer 教授
鐸木道剛
Lee C. Barrett 教授
Carolyne E. Call 師

＊12 月 6 日： ニューヨークにて。ラファージの壁画調査（昇天教会）、ラファージのステンドグラス調査（Judson 記念教会）

＊12 月 7 日-8 日：ボストンにて。三位一体教会の HBB 工房作ステンドグラスおよびラファージ作ステンドグラスの調査、ラファージの作品調査（ボストン美術館、ボストン大学 McMullen 美術館）

ニューヨーク、昇天教会、ラファージ作『昇天』壁画

＜論文＞

鐸木道剛「ジョン・ラファージ：天と地をつなぐ」『キリスト教文化研究所紀要』第 36 号、2018 年 6 月、41-56 頁

HBB 工房作ステンドグラス

ラファージ作ステンドグラス

ともにボストン最大の教会トリニティ教会（1872-77 年建設）のステンドグラス

３　成果と展望

成果：

アメリカ合衆国におけるドイツ改革派の拠点であるランカスター神学校で、日本伝道の資料の調査を行った。すでにホーイ師とシュネーダー師の手紙は本学史資料センターにコピーが所蔵されているので、主に写真資料を探索した。日本伝道の資料は、段ボール箱の 51 箱から 60 箱で、そのうち写真資料は 56 箱から 60 箱までに入っており、実質４箱にぎっしり保管されていた。古い写真は厚紙に貼ってあるので、それほどの枚数ではなく、スキャンも含めて記録するに一週間あれば可能かと思われた。

その後、ニューヨークとボストンでラファージの壁画とステンドグラスを調査・写真撮影した。ニューヨークではラファージの子孫のオリヴィエ氏、ボストンではラファージの作品を収集してきた画商のヴァレイカ氏の協力が得られ、ニューヨークではふたつの教会、ボストンではひとつの教会とボストン・カレッジにある作品をみることができた。ラファージの中世復興はゴシック復興というよりは、むしろロマネスク復興であり、そのステンドグラスはガラスを素材として扱ったもので、ガラス自体を光と永遠に結び付ける全く新しい作品であることがわかった。そこに 1886 年に日光に滞在して圧倒的な印象をもったラファージの日本趣味（ジャポニスム）が如何に介在しているのか、2 月 24 日開催予定のラファージ・シンポジウムに向けて問題点が明らかになってきた。

⑻　日光での現地調査

研究代表者：鐸木道剛

１　研究内容

概要：

本学の HBB 工房のステンドグラスを理解するための補助線としての、アメリカのジャポニスムの画家でアメリカにおけるステンドグラス復興のパイオニアであったジョン・ラファージは 1888 年に日本に来ている。ラファージが代表するボストンのキリスト教であるユニテリアンの精神性にとって日光の与えた影響を後付ける。

活動目的：

19 世紀イギリスのステンドグラスは、プロテスタントにおける中世回帰のゴシック・リヴァイヴァルの一環であり、カトリック回帰であるとともに日本趣味（ジャポニスム）でもあった。日本の多神教的感受性とは異質な本学のプロテスタンティズムによる教育という建学理念の、内村鑑三や新渡戸稲造のいう本居宣長以来の我が国の一神教の感受性との相克あるいは一致について考察する。

実施計画：

2 月 24 日開催のシンポジウム「ジョン・ラファージと日光」のために招聘したアメリカ人研究者フィリス・フロイド氏（Phylis Froyd ミシガン州立大学准教授）とケイティ・クレッサー氏（Katie Kresser シアトル・パシフィック大学准教授）とともに日光において、1886 年のラファージの足跡を追って調査を行なう。

２　研究の実施状況

活動報告：

2 月 19 日：フロイド氏、クレッサー両氏と打ち合わせ

2 月 20 日：日光に移動。日光例幣使街道、金谷ホテル調査

2 月 21 日：大谷川、憾満ヶ淵、日光東照宮

2 月 22 日：禅智院訪問

日光例幣使街道杉並木にて　2018 年 2 月 20 日
（左）Kresser 准教授、（右）Floyd 准教授

３　成果と展望

成果：

2 月 19 日に東京で合流し、打ち合わせを行なったのち、20 日に東京を出発。宇都宮よりは契約車で、日光街道を通って日光の金谷ホテルに投宿。ラファージのニューヨークの昇天壁画（1888 年）の背景となったと考えられる大谷川（だいやがわ）からの恒例山・女峰山・外山の眺めとラファージのスケッチとの比較を行なった。

日光　稲荷川橋より恒例山・女峰山・外山を望む

John La Farge, An artist's Letters from Japan, New York, 1897, p. 161

翌 21 日は憾満ヶ淵にて、ラファージの「親地蔵」水彩画スケッチの場所を確認。その後、東照宮にてファラージの記録の意味を確認。一般に公開されたのは 1965 年以来である家康の墓所をラファージはスケッチ（あるいはヘンリー・アダムスによる写真撮影をもとにスケッチ）しており、特にいまなお公開しない門外不出の家康の座像をラファージがスケッチ（あるいは写真撮影）していることについて 1886 年頃の欧米との対外関係の反映をみることができることを確認した。翌 22 日はラファージが滞在した禅智院を訪問し、フェノロサとビゲローが滞在した本堂が現存していることを発見。またラファージの描いた禅智院の滝のある庭と、庭から描いた風景画を確認した。帰りは日光例幣使街道を鹿沼までたどり、江戸幕府時代の家康信仰について考察する素材を得た。

椅子に座るビゲローと縁側に腰掛けるフェノロサ　この建物が現存していることが判明した。 村形明子『アーネスト･フェノロサ文書集成』京都大学学術出版会、2000 年、319 頁

禅智院旧本堂、2018 年 2 月 22 日

＜論文＞

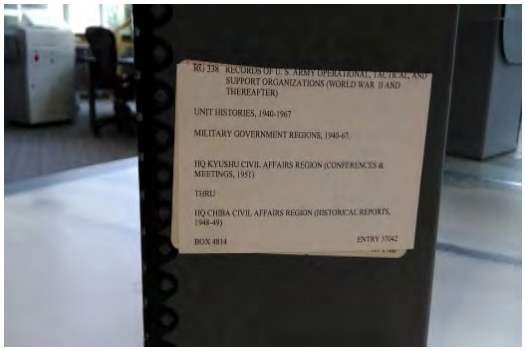
鐸木道剛「ジョン・ラファージ：天と地をつなぐ」『キリスト教文化研究所紀要』第 36 号、2018 年 6 月、41-56 頁

⑼　占領下の東北学院に係る米国資料調査

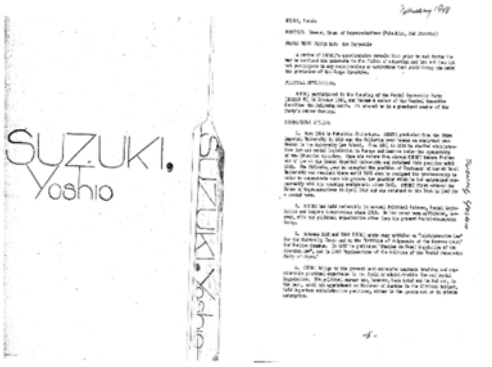
研究代表者：鐸木道剛

研究分担者：松谷基和

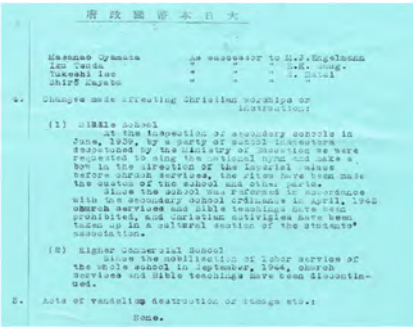
１　研究内容
概要： 本学の草創期に在学し、その後、戦前の日本の法曹界で活躍し、戦後には国会議員として平和憲法に深くかかわった鈴木義男に関する資料を中心に、米国文書館所在の資料収集を行う。 **活動目的**： 平和憲法の中核をなす戦争放棄を定めた第九条の制定については、近年の文書公開により、本学出身の鈴木義男が深く関わっていたことが確認され、内外の学界の注目を集めるようになってきている。鈴木は本学在学時から終生、米国人宣教師をはじめと幅広い交流を持ち、それゆえに戦後も GHQ の要人と深い関係を築いたと推察され、それを裏付けるため米国文書館にて資料調査を行う。 **実施計画**： ⑴米国国立公文書館における資料収集： 同図書館に所在する GHQ/SCAP（連合国軍最高司令官）関連資料群のうち、特に宗教行政を担当した CIE（民間情報教育局）や東北地域の占領行政を担当した東北民生部（Civil Affairs Tohoku Region）の資料群を閲覧し、コピー・スキャン収集する。 ⑵地方大学・文書館における資料収集： および、インディアナ州ビンセンヌ学図書館、ミズーリ州セントラルミズーリ大学ならびにトルーマンライブラリーにて、GHQ 占領や憲法制定にかかわる文書群を閲覧し、関連資料をコピー・スキャン収集するとともに、現地研究者からの聞き取りや今後の調査の進め方について情報収集を行う。
２　研究の実施状況
活動報告： 7 月 25 日～27 日：米国国立公文書館において GHQ の民間情報局、東北民生部資料の閲覧・スキャン（右は資料群に含まれていた GHQ による鈴木義男の背景調査資料） 7 月 30－31 日：ビンセンヌ大学図書館での資料調査、ならびに現地研究者からの聞き取り。 8 月 1 日－3 日：セントラルミズーリ大学図書館、ならびにトルーマン文書館での資料調査、ならびに現地研究者からの聞き取り。



国立公文書館の GHQ 資料群のファイルボックス



同資料群から発掘した GHQ 作成の鈴木義男調査ファイル



同資料群の東北学院職員異動記録

トルーマン文書館

３　成果と展望

成果報告：

米国国立公文書館の GHQ 関連文書の中からは、鈴木義男の個人調査ファイルが見つかるなど、やはり鈴木が GHQ から注目されていたことが確認され、GHQ 占領期の本学が、こうした人脈から何らかの支援や影響を受けていた可能性が高まり、鈴木義男個人のみならず戦後の本学史を検討するうえで GHQ 資料の重要性が確認された。また、ビンセンヌ大学やセントラルミズーリ大学の研究からも今後の資料調査やトルーマン文書館の資料について有益な事前情報を得ることができ、これらの情報や助言のおかげで、トルーマン文書館の Bunce Papers や Hellegers Papers を中心に閲覧し、これらの資料群の中にも戦後の宗教行政や憲法制定にかかわる貴重な一次資料が含まれていることが確認でき、今後の資料解読やさらなる調査によって、鈴木義男が戦前から戦後において GHQ と連携しつつ、本学の復興に当たった経緯をさらに明確に描き出せるのではないかという見通しがたった。これらの調査結果は、2018 年 9 月 29 日に本学で開催された公開シンポジウム『戦後平和主義と鈴木義男』において、「米軍資料にみる仙台占領」というタイトルで報告し、その内容は本学の大学資料センターの紀要に「GHQ の仙台占領と鈴木義男──米国国立公文書館での調査報告」（2020 年 3 月号）として論文発表した。

⑽ランカスター神学校、ニューヨーク、ボストンでの資料調査

研究代表者：鐸木道剛

研究分担者：日野哲

１　研究内容

概要：

本学の教育の基礎にある福音主義キリスト教、とりわけ押川方義の長老派およびホーイとシュネーダーのドイツ改革派のキリスト教の伝道活動の実態を知る。ピューリタンによって建国されたアメリカのキリスト教について、本学に設置されたイギリス製ステンドグラスを出発点に特に美術の観点から知見する。

活動目的：

19 世紀イギリスのステンドグラスは、プロテスタントにおける中世回帰のゴシック・リヴァイヴァルの一環であり、カトリック回帰であるとともに日本趣味（ジャポニスム）でもあった。日本の多神教的感受性とは異質な本学のプロテスタンティズムによる教育という建学理念の、内村鑑三や新渡戸稲造のいう本居宣長以来の我が国の一神教の感受性との相克あるいは一致について考察する。

実施計画：

＊ランカスター神学校における東北学院大学関係資料の収集：神学校図書館 2 階の福音改革派歴史協会（The Evangelical and Reformed Historical Society：ERHS と略称）所蔵の主に写真資料を収集スキャンする。

＊ニューポートの教会（カトリック、ユニテリアン、会衆派）にあるジョン・ラファージ（John La Farge 1835-1910）作ステンドグラス装飾の実見と写真撮影

＊ボストンにおけるジョン・ラファージ関係資料収集

２　研究の実施状況

活動報告：

8 月 2 日～9 日：ランカスター神学校図書館内の福音改革派歴史協会（ERHS）資料室の史資料調査

8 月 5 日：Trinity United Church of Christ (East Petersburg) 参祷

8 月 5 日：First Presbyterian Church in Lancaster（1851 年献堂、1913 年改築）の Tiffany 工房作ステンドグラス調査

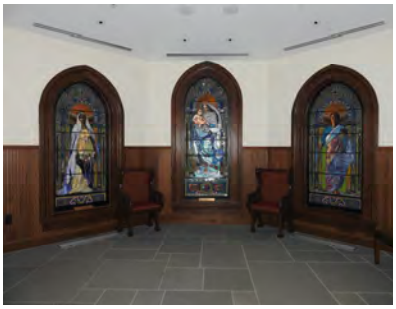
8 月 10 日～11 日：タッカーナック島でのビゲロー関係資料調査

2018 年 8 月 9 日 ERHS にて

8 月 12 日～13 日：New Port の教会（カトリック、ユニテリアン、会衆派）のステンドグラス作品調査

8 月 14 日～16 日：ボストンでのラファージ関係資

2018 年 8 月 10 日タッカーナック島にて



ラファージ作 New Port カトリック教会ステンドグラス

2018 年 9 月 26 日、ホーイ記念館 1 階コラトリエ・リエゾンにて鐸木、日野による「ランカスター神学校調査報告会」を実施した。

＜報告＞

鐸木道剛「宗派を超える芸術：ジョン・ラファージのステンドグラス」『ボストン・ブラーミンのキリスト教と仏教：教義と寛容』での報告（2019 年 12 月 21 日　　於：土樋キャンパスホーイ記念館ホール）

日野哲「ランカスター神学校での資料調査報告」『史資料センター年報』第 5 号（2020 年 3 月）

３　成果と展望

成果報告：

ランカスター神学校図書館の２階にある福音改革派歴史協会（ERHS）には、本院の創立者ホーイやシュネーダーをはじめ、ドイツ改革派教会から派遣されて東北伝道に貢献した多くの宣教師の報告書や手紙類が整理・保存されている。

これらの資料の多くは、シュネーダー伝とホーイ伝を執筆準備中のウイリアム・メンセンディーク教授と創立百周年当時、百年史の編集主任・執筆者であった出村彰教授がコピーして持ち帰り、現在東北学院史資料センターに保存されているが、2017 年 12 月に ERHS を事前調査したので、今回は保存されている写真等の資料をスキャンすることを主な目的として、2018 年８月２日から一週間、資料センターの日野哲調査研究員と資料調査と収集を行った。

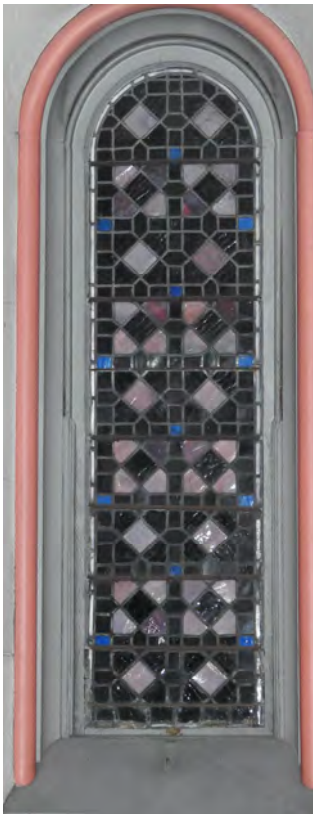
予想をはるかに上回る数の写真の中には、創立当初に在学した学生の個別写真や、ホーイが仙台着任時に住んだと思われる日本家屋、創立 50 周年を機に行われたシュネーダーと出村悌三郎との院長職の引き継ぎの様子（院長交代の 1 時間前との裏書がある）、東北各地の教会や宣教師が活き活きと活動している様子など、貴重な写真が多数残されており、既知のもの、未知のものを識別して、記録しスキャンするとともに、最後の二日間で 17 箱に収蔵されている 409 項目の全てをエクセルの項目に書き込み、後の調査の基礎とすることができた。

ランカスターの長老派教会のティファニー工房のステンドグラス、そしてニューポートのカトリック・ユニテリアン・会衆派のファラージ工房のステンドグラスの調査によって、ラファージの仕事は教派を超えていること、そして特に会衆派教会のステンドグラスと壁面装飾から、不可視なものへの志向がうかがえることが判明した。それはボストンで支配的なユニテリアンのキリスト教とのつながりで、いずれ彼の日本理解とも関連する特徴であるので。今後の調査においても、本来神の可視性を根拠とするキリスト教美術における不可視性つまり父なる神への志向としてアメリカ的な特徴との見通しが可能になる。

タッカーナック島のビゲローの別宅では、ラファージの姻戚で、ボストン美術館の日本美術収集を形作ったビゲローの写真アルバムおよび蔵書を調査し、仏教に傾倒し、三井寺で得度したビゲローのアメリカでの場に立ち会った。また、ファラージ一家からビゲロー家、美術史家ラングドン・ウォーナーや哲学者ヘンリー・アダムズの子孫たちと知り合うことができ、今後のアメリカ研究の人脈を得た。

＜右写真＞

New Port の会衆派（Congregational）教会は、1855-57 年の建築。ラファージはイスラム美術に倣って 20 枚の幾何学的模様のステンドグラスを 1880 年に制作した。暗いステンドグラスはステンドグラス本来の役割ではない。共同製作者のティファニー（Louis Comfort Tiffany 1848-1933） のランプは造形的に美しい。



Louis Comfort Tiffany 制作 のランプ

⑾学生ワークショップ＜東北における宗教的観光資源の可能性―世界から見た東北観光＞

事業代表者：吉田新

１　事業内容
概要： 　学生ワークショップ「東北における宗教的観光資源の可能性 ― 世界から見た東北観光 ―」の開催 **活動目的**： 　本研究ブランディング事業は、その申請時において三つの目的を掲げていた。その二つ目には次のようにある。「本学はすでに 2015 年に改革の中長期計画として策定した『TG Grand Vision 150』で提唱したように、地域と連携し社会の課題やニーズに対応できる人材の育成を長期目標に据えている。こうした人材は実践的な知識やスキルと並んで、他者との協調と寛容や、知的創造性を身につけねばならないが、その涵養は神学に裏づけられた人文主義の精神によって可能となる」。この目的を踏まえ、2018 年（平成 30 年）に本学学生を対象としたワークショップを企画し、先の目的の達成をすることを目指す。 **実施計画**： 　本ワークショップを通して、社会の課題やニーズに対応し、とりわけ人口減、過疎化、産業の空洞化などの問題に直面する東北において、その魅力を再発見し、それを発信する人材を育成することを目標とする。以上の目標を達するため、座学を中心としたワークショップと秋田県での実地研修を計画する。 2018 年（平成 30 年）6 月：本学でのワークショップ 発題者：吉田新（本学文学部准教授） 　　手島慧氏（株式会社 JTB　仙台支店） 　　Jessica Hallams 氏（株式会社仙台放送 Go！Go！！Tohoku！！！ 　　畠山智行氏（株式会社 ARISE） 同年 10 月：秋田県湯沢市、羽後町における実地調査
２　事業の実施状況
活動報告： 　まず、2018 年（平成 30 年）6 月 9 日（土）キックオフ・ワークショップが開催した。参加者は本学教養学部地域構想学科、情報学科、文学部英文科、総合人文学科から 8 名であった。まずワークショップでは、本学教員の吉田新氏の趣旨説明の後、手島慧氏（株式会社 JTB　仙台支店）によって、東北の現状とその可能性に関する発表があった。人口減など東北が抱える深

刻な問題を共有すると共に、ピンチをチャンスに変えようとする手島氏からの説明があった。休憩をはさみ、Jessica Hallams 氏（株式会社仙台放送 Go！Go！！Tohoku！！！）による外国人から見た東北の魅力に関するプレゼンがあった。東北に住んでいる参加者も知らなかった、または気づかなかった東北の魅力を外国の方々の目を通して再発見する機会となった。最後に畠山智行氏（株式会社 ARISE）から、秋田県の湯沢市院内で行っている人材育成事業について紹介された。厳しい人口減の現実の前で、どのようなことができるかについて討議した。参加した学生からは「東北で働きたいと思えるような雇用、魅力ある事業活動の創出、国内外からの観光客増加に向けた新たな観光資源の発掘が必要である」という意見、また、「東北に住む人間が東北のことを深く知ること。東北の強み弱みについてしっかりと知り、分析してはじめて観光客を呼び込むことができる。もっと東北について知り、議論することが必要」という意見があった。

同年 10 月 6 日、7 日、先に開催したワークショップでの学びを踏まえ、秋田県湯沢市、羽後町で実地調査を行った。6 日朝に土樋キャンパスを出発した後、湯沢市院内の銀山異人館において、施設の方から館内と銀山の歴史に関する説明を受けた（写真①）。その後、院内銀山史跡を見学（写真②）。院内銀山は、発見から閉山まで約 350 年続いた国内有数の銀山だが、現在はその面影はほとんど残されていない。その後、尋常小学校を見学し同市内の誓願寺に向かい、おそらく隠れキリシタンに遡るとされるマリア観音に関する説明を住職の方から受け、この地域とキリスト教の隠れた結びつきを確認した（写真③）。羽後町へ移動してからは、株式会社トラベルデザインの須崎裕氏に事業の説明を受け、羽後町を利用した田舎留学、今後のストラテジーについて説明を受けた。夕刻には、小町堂にて小野小町についての説明も受けた。

写真①

写真②

写真③

翌 7 日は木村酒造を見学し、施設の方から同社の商品「福小町」の説明を含めて酒造りのルーツと酒蔵の構造について説明を受けた（写真④）。帰途、小安峡を見学した。小安峡は「ゆざわジオパーク」のジオサイトに登録されており、こうした自然遺産が観光遺産となり得る可能性を確認できた。

参加した学生からは、以下のような意見があった。「今回赴いた院内、湯沢市の地は私が普段生活している地域と全く違う世界であった。自分の活動拠点である仙台や東京などと異なり、あれほどまでの田舎の環境や生活に触れる機会は初めてであった。消滅が目前に迫っている地域について学び、考えることがいかに難しいことかを実際にその現場で活躍する方々から聞く貴重な機会になった。」「院内の持つ強みとは田舎ならではの魅力に加え、その歴史にあることは事前のワークショップで学んだが、実際にその場所に足を運ぶことでより強い衝撃や学び

を得ることができた。この地域が持つ魅力は確実に存在しているが、一方でその発信の難しさは否めなかった。院内地区はコンテンツの面ではむしろ優れており、東北各地に院内のような過疎化が進んでいる一方で魅力にも欠ける地域が多くある現状はまさに問題である。」「百年前までは数万人規模の大きな街があった院内が、銀山の閉山を機にわずか百年の間で衰退し、かつての銀山跡地周辺が森林に覆われつくしている光景に衝撃を受けた。」「現在日本各地で地方の衰退が叫ばれているが、今回訪れた院内の地は、人口減少によって破滅へと突き進む日本の将来と我々に対して大きな示唆を与えるものがあったのではないだろうか。」「歴史、文化、食は地域を動かす力を秘めていると推測でき、その魅力を生かすも殺すも、これからの若者がそれに関わらなくてはならないことが明白だ。それに加えて、地域の人々の協力が必要不可欠であることは間違いないと言える。東北地方には、院内のような地域がまだまだ眠っているものと推察でき、今後のワークショップでも今回のフィールドワークをベースに東北の地域のブランディングに貢献していきたい。」

写真④

総括：

今回のワークショップは、とりわけ東北各地に存在する宗教的遺産の可能性に着目し、その歴史的背景と今日的意義について調査、研究を進め、観光資源としての活用を模索した。衰退の危機が叫ばれている東北には、まだまだ知られていない貴重な観光資源が存在していることを改めて学んだ。、このワークショップに参加した学生はこれを通して多くを学んだことが上に記した学生の声からも分かるであろう。今後とも東北における宗教的観光資源の可能性について、座学と共にフィールドワークを交えた学びの場が必要であると考える。

３　成果と展望

成果：

今回のワークショップは、とりわけ東北各地に存在する宗教的遺産の可能性に着目し、その歴史的背景と今日的意義について調査、研究を進め、観光資源としての活用を模索した。衰退の危機が叫ばれている東北には、まだまだ知られていない貴重な観光資源が存在していることを改めて学んだ。、このワークショップに参加した学生はこれを通して多くを学んだことが上に記した学生の声からも分かるであろう。今後とも東北における宗教的観光資源の可能性について、座学と共にフィールドワークを交えた学びの場が必要であると考える。

⑿　イギリス現地調査

研究代表者：鐸木道剛

１　研究内容

概要：

本学土樋 1932 年に献堂されたラーハウザー記念東北学院礼拝堂に設置されたイギリスの HBB 工房作ステンドグラス作品の現地調査。近代のステンドグラスの現在の状態を観察するとともに、作品の比較研究によって HBB 工房を美術史的に位置付ける。

活動目的：

19 世紀イギリスのステンドグラスは、プロテスタントにおける中世回帰のゴシック・リヴァイヴァルの一環であり、カトリック回帰であるとともに日本趣味（ジャポニスム）でもあった。日本の多神教的感受性とは異質な本学のプロテスタンティズムによる教育という建学理念の、内村鑑三や新渡戸稲造のいう本居宣長以来の我が国の一神教の感受性との相克あるいは一致について考察する。そのためにヴィクトリア朝のゴシック・リヴァイヴァルの代表的工房と言われる HBB 工房作のステンドグラスを調査する。

実施計画：

2017 年 3 月の調査に引き続いて、イギリスにある HBB 工房作ステンドグラス作品の現地調査。ロンドンからリバプールに至る範囲内の作品を調査。今回はロンドンのラファージ作のステンドグラスを含める。

２　研究の実施状況

活動報告：

3 月 7 日、12 日

＊Leichester Cathedral

HBB 工房作６面（昇天[右図]、復活後、奇跡の漁り、我に触れるな、復活の奇跡、タラントの譬）（1886 年頃）

3 月 8 日

＊Whatton in the Vale　St John of Beverley 教会

HBB 工房作９面（昇天ほか）（1890/91 年）

＊Wing　Ss Peter & Paul 教会

HBB 工房作復活他６面（1890 年）

3 月 9 日

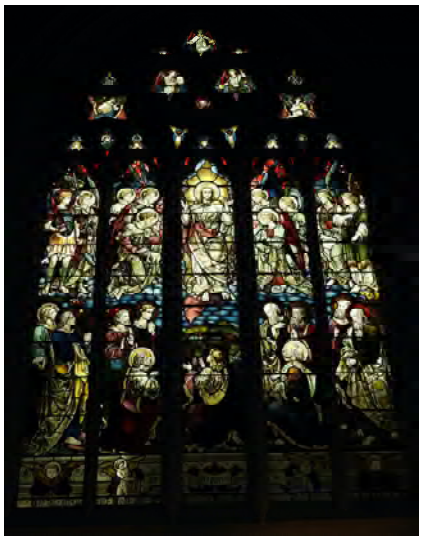
＊Port Sunlight　Christ Church

HBB 工房作ステンドグラス昇天他６面　（1910 年頃）

3 月 10 日～11 日

＊Chester Cathedral　HBB 工房作２面（1884 年、1887 年）

3 月 11 日



Leichester 大聖堂『昇天』

＊Dilwyn　The church of St Mary　６面（1866 年頃）

3 月 5 日

＊London Westminster Abbey　１面

3 月 5 日

＊London Southwark Cathedral の Harvard Chapel

La Farge 作ステンドグラス「洗礼」

3 月 14 日

＊St.Stephen’s Church バーン・ジョーンズのステンドグラス１面

＊London St Luke Kentish Town　内部のステンドグラスは未調査

Whatton in the Vale　St John of Beverley 教会『昇天』

Port Sunlight Christ Church『昇天』

３　成果と展望

成果：

３月５日から 14 日まで、ヒートン・バトラー&バイン（HBB）工房のステンドグラス作品を求めて 6 つの教会を訪ねた。レスター大聖堂とその近郊のワットンとウィングの教会、チェスター大聖堂とポート・サンライトとディルウィンの教会。ロンドンのウェストミンスター大聖堂の HBB 工房の作品撮影は不許可。レスター大聖堂には『昇天』ほか６つの窓が HBB 工房の制作になり、HBB 工房への信頼がうかがえる。HBB 工房のステンドグラスの研究はイギリスでも行なわれていず、まずは記録に残る膨大な数の全作品（イギリスに 1300 点、アメリカに 240 点、その他、日本を含む外国に 15 点）から現存し調査可能な教会を把握せねばならない。レスター大聖堂の『昇天』ステンドグラスは、背景の処理がまだ装飾的で、そこが我が学院の『昇天』ステンドグラスに見られる自然描写とは異なる。見通しでは、HBB 工房のステンドグラスは名実ともにイギリス 19 世紀のステンドグラスの典型で、様式の無名性が際立つ。また英国にある唯一のジョン・ラファージ制作のステンドグラスであるロンドンのサザーク大聖堂にあるハーバード記念のステンドグラスを撮影調査した。

⑬　ランカスター神学校における宮城学院女子大学との合同調査

研究代表者：野村　信、松谷基和、栗原　健（宮城学院女子大学准教授）、日野　哲

１　研究内容

概要：

ピューリタンによって建国されたアメリカのキリスト教について、本学に設置されたイギリス製ステンドグラスを出発点に特に美術の観点から知見するとともに、本学の教育の基礎にある福音主義キリスト教、とりわけ本学および宮城学院女子大学の共通の創設者である押川方義の長老派およびホーイとシュネーダーのドイツ改革派のキリスト教の伝道活動の実態を知る。

活動目的：

本学土樋キャンパスの 1932 年献堂のラーハウザー記念東北学院礼拝堂にはイギリスの HBB 工房のステンドグラスがある。19 世紀イギリスのステンドグラスは、プロテスタントにおける中世回帰のゴシック・リヴァイヴァルの一環であり、カトリック回帰であるとともに日本趣味（ジャポニスム）でもあった。そのステンドグラスを出発点に、日本の多神教的感受性とは異質な本学のプロテスタンティズムによる教育という建学理念の、内村鑑三や新渡戸稲造のいう本居宣長以来の我が国の一神教の感受性との相克あるいは一致について考察する。長老派のランカスター神学校から、多神教と一神教を区別しない日本への伝道の実際を知ることはその一環である。

実施計画：

前年に引き続き、ランカスター神学校図書館２階の福音改革派歴史協会（The Evangelical and Reformed Historical Society）所蔵の日本伝道関係資料、特に東北学院と宮城学院の歴史に関わる資料を調査収集する。

２　研究の実施状況

活動報告：

東北学院と宮城学院から４人の調査員がそれぞれの研究テーマに従って調査を行い、関係資料を収集した。

ERHS 新資料保存庫にて。Alison Mallin 司書と日野調査員

スライド “View of Sendai”

３　成果と展望

成果：

野村調査員は、本学の宗教部長として、東北学院のスクール・モットーである「三Ｌ精神」について調査を行い、その由来が草創期の宣教師たちが口にしていた標語にあり、それがドイツ改革派教会の月刊誌 “THE MISSIONARY GUARDIAN”の表紙に、”LIFE, LIGHT AND LOVE FOR THE WORLD”として明記されていることを確認した。さらに、新たに締結したランカスター神学校との協定に基づき、東北学院の発展に多大なる貢献をした明治期のランカスター神学校卒業生、金子謹三を記念する「金子記念基金」を再設置する可能性についても神学校の校長と協議した。

松谷調査員は、ドイツ改革派教会が日本以外の国や地域へも宣教師を派遣し、伝道活動を行っていたことから、これらの資料を活用することにより、海外宣教活動全体の中で日本伝道や東北学院がどのように位置づけられていたのかを再評価し、東北学院史研究もグローバルな視点から見直す必要があることを確認した。

栗原研究員は、宮城学院の初代校長プルボーが使用した教科書の一つであるワイザー著『児童のためのキリスト伝』が、最初期の宣教師モールの夫人アンアによって書き改められたのちに邦訳されたことを突き止め、邦訳を行った人物が宮城学院の関係者である可能性があることを確認し、プルボーとその周辺の教師たちの教育理念を知る上で貴重な史料が保存されていることを確認した。

日野調査員は、前回の補充調査に加え、新たな資料としてアルバム、スライド、フィルムなどの映像資料の調査を行った。アルバムには 100 年以上前に来日した宣教師たちが撮影した写真が収められており、1000 枚以上はあると思われるスライドの中には、「ランタン・スライド」と言われるカラーに着色したものもあり、厳選して現地でデジタル化を行った。また、16 ミリフィルムも保存されており、東北学院や日本伝道関係のフィルムも数本見つかった。写真やスライドは現地でもスキャンやデジタル化が可能であったが、フィルム類については現地の業者に依頼するか日本に借用するか、いずれかの方法でデジタル化したいと願っている。

⑭　ランカスター神学校との交流事業

事業代表者：鐸木道剛

事業分担者：日野哲

1　事業内容
概要： 　マーサーズバーグとは改革派神学校の学部組織であるマーシャル大学の所在地で、のちにフランクリン大学と合同してランカスターに移り、ともに移った神学校がランカスター神学校となる。 　アメリカの超越主義的傾向に抗して、教義の重要性を主張したのが 1843 年にマーサーズバーグのドイツ改革派神学校に赴任したフィリップ・シャフ（Schaff 1819-93）で、同僚にジョン・ウィリアムソン・ネヴィン（Nevin 1803-86）がいた。シャフは、ベルリンで学び、ヨハン・アウグスト・ウィルヘルム・ネアンダー（Neander 1789-1850）の影響を強く受けた神学者で、アメリカにおける教父研究のパイオニアでもあり、英訳による最初の教父著作集である A Select Library of Nicene and Post-Nicene Fathers of the Christian Church の全 24 冊（1886-1900 年刊行）を編集したことで知られる中世主義者である。あまりにカトリック的であると批判されたが、同じくランカスター神学校を出自とするわがシュネーダー院長が、1932 年に大学ゴシック様式の本館とラーハウザー記念東北学院礼拝堂を建設する中世主義とも繋がっているのであり、プロテスタントの歴史的繋がりを豊かにしたのは確かである。このシャフは 1862 年から 67 年までアンドーヴァー神学校でも教鞭を取っており、新島襄の受洗がアンドーヴァー神学校の付属教会で 1866 年のことであったことを想起する。カトリック的な主張である教義の重要性と、イエス・キリストとの原初の愛の体験を繰り返す礼拝について考える。教義史についての浩瀚な研究書を発刊したハルナック、そしてトレルチ、いずれも教義が前提とする愛の体験を重要視する。「信仰と、希望と、愛、その中で最も大いなるものは、愛である」（『コリントの信徒への手紙　一』13 章）とのパウロの言葉が常に出発点である。日本にキリスト教は、近代と同時に教義として入ってきた。 **活動目的**： 　本学土樋キャンパスの 1932 年献堂のラーハウザー記念東北学院礼拝堂にはイギリスの HBB 工房のステンドグラスがある。19 世紀イギリスのステンドグラスは、プロテスタントにおける中世回帰のゴシック・リヴァイヴァルの一環であり、カトリック回帰であるとともに日本趣味（ジャポニスム）でもあった。そのステンドグラスを出発点に、日本の多神教的感受性とは異質な本学のプロテスタンティズムによる教育という建学理念の、内村鑑三や新渡戸稲造のいう本居宣長以来の我が国の一神教の感受性との相克あるいは一致について考察する。アメリカのピューリタニズム長老派のランカスター神学校と交流は、今なお多神教と一神教を区別しない日本の精神性との比較によって、互いに有益な成果が期待できる。

実施計画：

ランカスター神学校との交流として、2020 年度はシンポジウム「愛と教義：マーサーズバーグ神学の今日的意味」を企画する。学院の建学の精神の確認とともに、日本におけるキリスト教受容の問題についても意味深い考察が可能になる。

また 2021 年 5 月に計画しているランカスター神学校の学生 10 数名の日本研修を受け入れの準備を行う。

またランカスターの福音改革派歴史協会（ERHS）が所蔵している日本伝道関係の 16 ミリフィルムを借用して、デジタル化を行う。現在判明しているのは以下の 7 本である。

1. An Educational Jubilee in Japan: North Japan College 50th 1936
2. Field Day at North Japan College
3. Christian Efforts in Rural Japan
4. Evangelistic Field Trip in Japan
5. Hope and Vision Translated: Life Story of the Schroers
6. A Visit to Yamagata Kindergarten
7. Going to Church in Japan

一本目のフィルムは、タイトルからして明らかに 1936 年に行われた東北学院の創立 50 周年記念のものと思われる。創立 50 周年は当時の院長シュネーダーの退任の時であり、「過去五十年を顧みて」と題して行った最後の説教（ＮＨＫを通じて全国へ中継放送された）が収録されている可能性もある。本院に残されている創立 40 周年記念のフィルム（1926 年撮影）と共に極めて貴重な資料となる。他の 6 本のフィルムも東北伝道や宣教師の働きを知るうえで重要な資料と思われ、デジタル化を実行する。

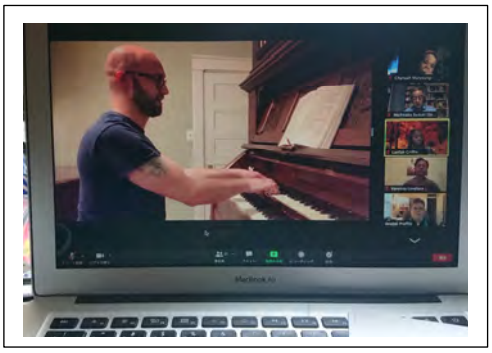
また創立 40 周年記念のフィルムについても、2018 年度と 2019 年度に行った 4 Kデジタル化により映像がより鮮明になったことで、新たに人物が特定できるようになった。2020 年度はこれら未編集のフィルムを再編集し、映画化を行う。

２　事業の実施状況

活動報告：

＊2020 年度予定の Anne Thayer 教授を招聘してのマーサーズバーグ神学についてのシンポジウムは中止

＊9 月からランカスター神学校の Zoom による礼拝に参加（日野哲、藤野雄大とともに）



ランカスター神学校の zoom 礼拝

＊2022 年度に実施予定のランカスター神学校からの研修生受け入れ準備（日本基督教団派遣の Union Japanese Church of Westchester の上田容功牧師と zoom ミーティングで相談）

＊16 ミリフィルムのデジタル化は、７本のフィルムすべての劣化が進み、補修と補強を施す作業が続けられているが、いずれも再現が可能であり、3 月末に納品される予定である。

＊創立 40 周年記念フィルムの編集は、新たな解説を加え、ナレーション、テロップ、ＢＧＭなどを加えて映画化する作業を行っており、３月末に納品の予定である。

３　成果と展望

成果：

７本の 16 ミリフィルムは、およそ 80～100 年以前、少なくとも戦前に撮影されたものであり、本学関係の貴重な映像（創立 50 周年記念と運動会）のほか、当時の東北農村の様子や東北伝道に貢献した宣教師の働きが記録されているため、仙台市のみならず、東北各地の昔を観ることができる貴重な資料である。

創立 40 周年記念フィルムには、東北学院の三校祖（三人の創立者）がそろって参列しており、同時に行われた専門部校舎（国の登録有形文化財）の落成式に訪れた市民の服装や、校舎屋上からの仙台市街パノラマなどから、約 100 年前の町並みや市民の生活の様子を観ることができ、仙台市にとっても貴重な資料になり得る。

リッチ師夫妻を囲んで　2017 年 7 月 19 日

なおブランディング事業の一環として、2017 年 7 月にランカスター神学校からリッチ校長先生をお招きして、講演をお願いすると共に、大学間協定を締結した。日本近代のキリスト教に大きな影響を及ぼしたアメリカのキリスト教を知るためにも、また福音主義の教義を考えるためにも、ランカスター神学校との交流には大きな意味がある。今回の協定締結は地元ランカスターでも注目され、8 月 4 日付のランカスター新聞（Lancaster News Paper）の毎週土曜日のコラム「信仰と価値」欄に記事が掲載された。

ACADEMIC EXCHANGE

Lancaster Theological Seminary President Carol E. Lytch and Norio Matsumoto, president of Tohoku Gakuin University, signed an international agreement for academic exchange and educational cooperation at the university in Sendai, Japan, last month. The agreement opens the way to exploring how the two institutions might work together in the future including potential faculty and student exchanges, joint conferences and research, among other projects. The ties between the seminary and the Christian university in Sendai date to 1886, when the Rev. William E. Hoy, a graduate of Lancaster Seminary, co-founded Sendai Theological Seminary with Ochikawa Masayoshi, a Samurai who converted to Protestantism. Masayoshi served as the first president of the new seminary. In 1890, the seminary became Tohoku Gakuin University. Another Lancaster Seminary graduate, David Bowman Schnader, served as TGU's president from 1901 until 1937. Other Lancaster Seminary graduates served during the 20th century as missionaries in Japan. A stained-glass window in the Lancaster Seminary chapel honors the relationship by depicting Mount Fuji and a traditional Japanese torii gate. TGU is a Christian university with about 5,000 students.

２．神学研究推進部門

⑴　神学研究推進部門の事業概要

①事業の背景、目的、手法

2017 年度（平成 29 年）以降、本格的に始動した神学推進部門では、本事業の目的の第三点「大学教育の改革においては、神学が中世以来のあらゆる科学分野の出発点をなしているという日本の近代教育では看過されてきたことを踏まえて、神学にもとづいた科学的手法による世界理解を大学教育において一層深めることを目指す」を実現するため、研究計画を立案した。東北学院大学の建学の精神は、「宗教改革の『福音主義キリスト教』の信仰に基づく『個人の尊厳の重視と人格の完成』の教育」にある。福音主義キリスト教は宗教改革期の用語であるが、「福音主義」とは何か、「福音」とは何かを聖書から学び、キリスト教の中でこの問いがどのように展開されたかを本事業を通して明らかにする。本学第二代院長であるシュネーダーは、1936（昭和 11）年に迎えた創立 50 周年記念の際、「我は福音を恥とせず」と題する説教を行っている。建学の精神を学ぶ上でも、福音理解は最重要課題であると考える。福音を語り、伝え、学ぶことは、神学を基とする大学教育の基盤を築くことに他ならないだろう。奇しくも 2017 年は宗教改革 500 周年を記念する年であり、宗教改革に関する催事を企画することにより、福音主義キリスト教の本質を考察する機会とする。本部門では文学部総合人文学科、及びキリスト教文化研究所と連携し、催事を定期的に開催していく。なおシンポジウム、講演会等の内容を本事業の成果物として出版する。

②研究分担者

部門長：吉田新

研究分担者：川島堅二、北博、木村純二、佐藤司郎（2017 年度まで）、鐸木道剛、出村みや子、野村信、原田浩司、阿久戸義愛、藤原佐和子（2018 年度まで）

⑵　神学研究推進部門の事業の実施状況

以下の講演会、シンポジウムを開催した。

平成 29 年（2017 年）度

・【キリスト教文化研究所　学術講演会】

「宗教改革再考　―キリスト教人間学の視点から―」

日時：2017 年（平成 29 年）7 月 29 日（土）13:30～15:30

会場：土樋キャンパス　ホーイ記念館ホール

聖学院大学名誉教授　金子晴勇

宗教改革は 500 年前にルターの「九五箇条の提題」によって起こったが、同時にエラスムスの『校訂新約聖書』やカルヴァンの『キリスト教要綱』も重要な役割を演じてきた。同時代に

生きた三人の改革者たちは共通の問題意識を持ち、共通の人間観にもとづいてその思想と行動を創造し、絶大な影響をわたしたちに残した。こういう思想の生きた力はどこから起こってくるのか。日本におけるルター研究の第一人者である金子晴勇氏は、それを従来の神学的視点よりも、キリスト教人間学の視点から再考した。

・【文学部総合人文学科公開講座】
「パラドクサ：福音を恥とせず」
日時：2017 年（平成 29 年）7 月 8 日（土）13:00～15:45
会場：土樋キャンパス　ホーイ記念館 3 階　H302 教室
「＜芸術＞の成立とキリスト論」
本学文学部総合人文学科教授　鈴木道剛
「キリスト教と弁証」
本学文学部総合人文学科講師　阿久戸義愛

「福音を恥とせず」とは東北学院の 3 校祖のひとりのシュネーダー院長の説教の題であり、パウロの「ローマの信徒への手紙」（1:16）の引用である。つまり、福音は一般的には「恥」なのである。パウロが「コリントの信徒への手紙二」（1:23）で記すように、福音は「ユダヤ人には躓き、ギリシャ人には愚か」なのであった。イエス・キリストが神でありなおかつ人であるということはパラドクス（逆説）以外のなにものでもない。8 世紀のイコンつまり神の肖像画の成立はそこを根拠としている。また、そうした逆説、弁証法がその後の哲学史の中でどのように展開され、近現代に至って実存思想や弁証法神学に継承されていったかについて、歴史的経緯を批判的に検討した。

・【研究ブランディング事業公開講演会】
「現代と福音 ― 改革教会の実践から考える ―」
日時：2017 年（平成 29 年）　9 月 15 日（金）　18:00　～　19:45
会場：土樋キャンパス　ホーイ記念館ホール
米国プリンストン神学研究所所長　ウィリアム・ストーラー

※詳しい開催内容は、本報告書「開催報告詳細」（__頁）を参照。

・【文学部総合人文学科主催ファカルティ・フォーラム】
「マルコによる福音書 ― 十字架のキリストに従う者への福音書 ―」
日時：2017 年（平成 29 年）10 月 6 日（金）14：40～16：10
会場：土樋キャンパス　ホーイ記念館 3 階　H302 教室
ハイデルベルク大学神学部教授　ペーター・ランペ

「自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」（マルコ 8 章 34 節）と読者に呼びかける

マルコ福音書は、どのようなメッセージを内に秘めているのだろうか。なぜ、マルコは十字架のキリストに集中する福音書を記したのだろか。そして、いかなる読者を想定していたのだろうか。ドイツを代表する新約聖書学者の一人であるペーター・ランペ氏が最古の福音書をめぐる謎を解き明した。「マルコ福音書は、読み手にとって不愉快な書物である」というランペ氏の言葉は、聴衆の関心を引いた。マルコ福音書の読者は、物語上の弟子たちに同一化するように促されており、この福音書の弟子たちは、イエスに従うと言いながらもイエスを裏切る。マルコが、このような弟子を批判的に描くのは、権威的な存在としての弟子、つまり弟子に代表される教会のあり方を批判しているからであると語った。マルコ福音書はイエスの言葉と行いを伝えるだけの書物ではなく、当時の教会のあり方、ひいては、現在の教会のあり方に対して批判的な視線を向けているのだと説明した。

・【研究ブランディング事業シンポジウム】
「我は福音を恥とせず-一新約聖書における<福音>理解一」
日時：平成 29 年 10 月 7 日（土）13:00~16:30
会場：土樋キャンパス　ホーイ記念館ホール
「パウロにおける<福音>理解一パウロ書簡における神学の中心一」
ハイデルベルク大学神学部教授　ペーター・ランペ
「福音の継承？一第二パウロ書簡における<福音>理解一」
広島大学大学院総合科学研究科教授　辻 学
「死者への福音？一第一ペトロ書における<福音>理解一」
本学文学部准教授　吉田 新

※詳しい開催内容は、本報告書「開催報告詳細」（__頁）を参照。

・【キリスト教文化研究所主催 研究フォーラム 2017】
「宗教改革 500 年 - 歴史に学ぶ」
日時：2017 年（平成 29 年）10 月 21 日（土）13:00～16:30
会場：土樋キャンパス 8 号館 5 階　押川記念ホール
評論家　佐藤優
本学文学部総合人文学科教授　佐藤司郎

宗教改革 500 年を迎えるにあたり、我々は歴史に学び、宗教改革とは何であったのか、改めて問い直し、宗教改革の精神、すなわち「神の言葉に立つ」という精神に、真摯に向き合わなくてはならない。ルターやカルヴァン、中世チェコのフスのような宗教改革者、あるいは現代のバルトやフロマートカなどの神学者たちは、その時代その場所で、言うべきことを言い、為すべきことを為してきた。彼らの振る舞いや知恵は、現代の国際社会においても学ぶところが多い。講演者の二人はそれぞれ、そのことを明らかにした。

平成 30 年（2018 年）度

・【キリスト教文化研究所　第 59 回学術講演会】
「ユニテリアンが与えた影響とその意義」
日時：2018 年（平成 30 年）6 月 30 日（土）13：30～15：30
会場：土樋キャンパス　8 号館 3 階　第 3 会議室
瀬谷独立イエス・キリスト教会牧師　土屋博政

三位一体説に異を唱えるユニテリアン信仰の神学的主張は、初期キリスト教の時代にも見られるが、宗派として認められるユニテリアンは、歴史的には 16 世紀後半に始まる。その中心の主張はキリスト教内における異なる教義を認める寛容論であった。しかし 19 世紀半ば頃からその主張の中心は、東洋との出会いの中で、キリスト教内の教義を超え、他宗教を独立した存在と尊重する寛容論として注目を浴びるようになった。ユニテリアンはキリスト教の神のユニティー論から世界の諸宗教のユニティー論になる。しかし彼らもまた三位一体説を断罪するのでなく、それを認める寛容が必要である。更に、本講演ではこの寛容が理解から愛へと進むべきことを論じた。

・【東北学院大学研究ブランディング事業公開講演会】
「今日のキリスト教信仰：アメリカ合衆国の 『宗教市場』」
日時：2018 年（平成 30 年）7 月 19 日（木）　13：00～14：30
会場：土樋キャンパス ホーイ記念館ホール
ランカスター神学校校長　リッチ・キャロル

※詳しい開催内容は、本報告書「開催報告詳細」（__頁）を参照。

・【文学部総合人文学科公開講座】
「キリスト教と日本の宗教思想」
日時：2018 年（平成 30 年）7 月 21 日（土）　13：00 ～ 15：00
会場：土樋キャンパス　ホーイ記念館　3 階 H302 教室
「日本におけるキリスト教土着火の課題」
本学文学部教授　木村純二
「出口王仁三郎『霊界物語』とキリスト教」
本学文学部教授　川島堅二

本公開講座において、二人の講演者はキリスト教と日本の宗教思想との関わりについて考えた。まず、日本におけるキリスト教の土着化の問題を取り上げた。日本思想における神の捉え方、神仏と人間の関係性について、仏教の土着化なども手掛かりにしつつ考察した。また、日本における神道の伝統にも目を向け、大本の教祖出口王仁三郎の『霊界物語』とキリスト教の

関わりについて、宗教学的に分析する。キリスト教の根源に存在する、「土着と超越」の問題を正面から切り込む意欲的な講座であった。

・【東北学院大学研究ブランディング事業シンポジウム】
「苦難と救済ーパウロにおける苦しみの意義ー」
日時：2018 年（平成 30 年）10 月 13 日（土）13:00～16:30
会場：土樋キャンパス　ホーイ記念館ホール
「パウロにおける苦しみの意義」
アウクスブルク大学哲学社会学部教授　ペトラ・フォン・ゲミュンデン
「パウロの『十字架の神学』から見た『苦難』の問題」
西南学院大学名誉教授　青野太潮
「模範としてのキリストの苦難」
本学文学部准教授　吉田新

※詳しい開催内容は、本報告書「開催報告詳細」（__頁）を参照。

・【文学部総合人文学科主催ファカルティ・フォーラム】
「フィリピの信徒への手紙の謎を解く」
日時：2018（平成 30）年 10 月 15 日（月）14:40～16:10
会場：土樋キャンパス　ホーイ記念館 3 階　H302 教室
アウクスブルク大学哲学社会学部教授　ペトラ・フォン・ゲミュンデン

パウロが獄中にいる間に記されたとされる「フィリピの信徒への手紙」は、パウロの真正書簡のひとつである。この書簡はもともと、別々に書かれた複数の手紙が後に編集されて成立したと考えられている。しかし、この書簡の内容や受け取り手をめぐって、現在でも様々な議論が交わされている。パウロはどのような意図でこれを記したのか。またフィリピの教会とはいかなる共同体だったのか。ドイツにおいて新約聖書学を牽引する一人であるフォン・ゲミュンデン氏が「フィリピの信徒への手紙」の真相を探った。

講演では、最初にフィリピ書を繰り返し特徴づけ、複数の友愛の概念、いわば友愛のトポスを追求しているものとしての「友愛の書簡」という文学類型について説明され、次に同書簡に関して「家族の書簡」とそれに付随する概念について、そして、最後には「政治書簡」として分類することができるその要素と概念について話された。フィリピ書が当時の文学類型を用いながら、それを変換させ、独自の文学スタイルを打ち立てたことを明解に説明された。

平成 31 年（2019 年）度

・〔文学部総合人文学科主催公開講座〕
「救いは苦しみの中に - 聖書における苦難の意義 - 」

開催日：2019 年 7 月 6 日（土）
会場：東北学院大学 土樋キャンパス　ホーイ記念館 3 階 H302 教室
講演者：本学文学部講師　　田島卓
　　：本学文学部准教授　　吉田新

苦難とは何か。聖書のみならず、キリスト教神学の中心的な問題である。旧・新約聖書において、人は苦難の中で逆説的に救済の根拠を見出すことを伝えている。また、苦難に意味を与えようとする試みは、しばしば神義論という形を取ってきた。本公開講座の第一講演では、「問い」という側面から、ヨブ記における苦難の問題を再考し、苦難に対する「答え」とは別の仕方の神義論について検討した。第二講演ではユダヤ・キリスト教の殉教文学を探り、苦難の教育的側面について理解を深めた。

〔キリスト教文化研究所主催学術講演会〕
「詩編と福音書 - 主の僕を手がかりに - 」
開催日：2019 年 7 月 20 日（土）
会場：東北学院大学土樋キャンパス ホーイ記念館ホール
講演者：同志社大学神学部教授　　石川立
　　：立教大学文学部教授　　廣石望

イエスは十字架上で詩編 22 編の言葉、「わが神、わが神、なぜ私をお見捨てになったのか」を口にしたと言われている（マルコ 15 章 34 節）。人々のために苦難を受ける「主の僕」または「苦難の僕」の表象が主にイザヤ書、詩編において登場し、新約聖書に引き継がれる。本講演会では、苦難の僕を手がかりに詩編と福音書の関係を探る。第一講では、イザヤ書の苦難の僕の姿を詩編はどのように受容し、詩編神学の表象として用いるようになったかを探った。第二講では福音書、とりわけ受難物語における イエスと主の僕の関係について探った。

〔文学部総合人文学科主催〕
「苦難と救済 - 闇の後に光あり(post tenebras lux) - 」
開催日：2019 年 5 月 18 日（土）
会場：東北学院大学土樋キャンパス ホーイ記念館ホール
講演者：本学文学部教授　野村信
　　：米国ランカスター神学校講師、ノートルダム大学名誉教授　ランダル・ザッカマン
　　：神戸改革派神学校校長　吉田隆

「苦難と救済」という主題は、誰でも生涯何度も体験する様々な苦しみや困難をテーマとしており、そこからいかに救いを得るかという問題に関わる。特に世界各地のキリスト教会で宗教改革 500 年を記念してプロテスタントの原点を問い、再考する活動が行われているが、聖書はどのように苦難と救済を論じているかに焦点を当てる。宗教改革者ジャン・カルヴァンは、ス

イスのジュネーヴで宗教改革を推進する上で多くの苦しみや困難を経て福音主義に立つ町を形成したが、彼の『詩編註解』はその心境をよく表している。「闇の後に光あり」とした副題の解説と共にカルヴァンの苦難と救済の理解を問い、さらに平和の問題へと広げ、深く現代の問題として扱う。

〔総合人文学科主催ファカルティ・フォーラム〕
「苦難の学舎で神の愛を習う　― キルケゴール、苦難を通して神と親しむ」
開催日：2019 年 5 月 20 日（月）
会場：土樋キャンパス　ホーイ記念館 3 階　H302 教室
講演者：米国ランカスター神学校講師、ノートルダム大学名誉教授　ランダル・ザッカマン

聖書は、人間の苦しみを肯定的に捉え、その取り組みの中に、救済と希望があることを教える。本講演では１９世紀のデンマークの思想家・著述家キルケゴールの生涯と思想を通してどのような苦難と、そこからの回復、救済がなされたかに光を当てる。

・『福音とは何か 聖書の福音から福音主義へ』（教文館）2018 年 9 月刊行

編者：佐藤司郎／吉田新
出版社：　教文館
税込価格：3,888 円
判型：四六判・460 頁・ハードカバー
ISBN：978-4-7642-6137-2

〔目次と執筆者〕

第Ⅰ部　〈福音〉とは何か――初代キリスト教会における〈福音〉理解
　第一章　福音とは何か　／　ペーター・ランペ
　第二章　パウロと福音告知　／　ペーター・ランペ
　第三章　福音の継承？　／　辻学
　第四章　死者への福音？　／　吉田新
　第五章　オリゲネスのパウロ解釈とルターへの影響　／　出村みや子

第Ⅱ部　福音主義とは何か――〈福音〉から〈福音主義〉へ
　第一章　ルターにおける福音理解の特質　／　金子晴勇
　第二章　カルヴァンの福音理解　／　野村信
　第三章　スコットランドにおける「福音主義」の展開　／　原田浩司
　第四章　近現代の「福音」　／　川島堅二

第五章　バルトにおける近代主義批判と新しい福音理解　／　阿久戸義愛
第六章　「福音主義」とエキュメニカル運動における教育的実践　／　藤原佐和子
第七章　相違における一致　／　佐藤司郎

第Ⅲ部　東北学院と福音主義――福音宣教と学校教育
第一章　福音の伝達者　アンブローズ・D. グリング　／　出村彰
第二章　福音と教育　／　佐々木勝彦
第三章　福音の帰結としての芸術　／　鐸木道剛

・『苦難と救済 闇の後に光あり』（教文館）2020 年 2 月刊行

編者：　野村信／吉田新
出版社：　教文館
税込価格：3520 円
判型：四六判・400 頁・ハードカバー
ISBN：978-4-7642-6146-4

〔目次と執筆者〕

第Ⅰ部　旧約聖書における苦難の意義――詩編、ヨブ記
第一章　詩編二二編における苦難と救済　石川　立
第二章　ヨブ記における苦難と問い　田島　卓

第Ⅱ部　新約聖書における苦難の意義――マルコ、パウロ、第一ペトロ書
第一章　福音書における苦難の義人　廣石　望
第二章　パウロにおける苦しみとその克服　ペトラ・フォン・ゲミュンデン
第三章　パウロの「十字架の神学」から見た苦難の問題　青野太潮
第四章　模範としてのキリストの苦しみ　吉田　新

第Ⅲ部　カルヴァンとキルケゴールにおける苦難の意義――闇の後に光あり
第一章　私を見捨てた神を呼ぶ　ランダル・C・ザッカマン
第二章　苦難の学舎で神の愛を習う　ランダル・C・ザッカマン
第三章　闇の後に光あり（post tenebras lux）　野村　信

第Ⅳ部　カルヴァンと苦難の歴史――戦争と平和を見据えて
第一章　カルヴァンにおける戦争と平和　吉田　隆
第二章　「殺戮時代」の後期カベナンター（契約派）に見る《苦難と救済》　原田浩司

⑶　神学研究推進部門の事業の成果と展望

①事業の成果

神学研究推進部門ではおおむね、実施目標と実施計画を予定通り遂行することはできたと考える。「福音主義とは何か」「福音とは何か」を本ブランディング事業主催の各シンポジウムや講演会で深めることができ、また総合人文学科やキリスト教文化研究所の公開講座、ファカルティフォーラム、研究フォーラム、公開講演会等では先の問いを複合的な視点から考え、考察を深めることができた。各講座も学内のみならず、学外からの参加者も多く、地域のなかで本学が果たすべき役割も再認識できたのは大きな成果といえよう。シンポジウムなどの成果を書籍として 2017 年（平成 29 年）度内に出版する予定であったが、諸般の事情からそれが見送られ、次年度の 2018 年（平成 30 年）に持ち越された。2018 年に開催された講演会、シンポジウムは研究紀要である 2018 年の『人文学と神学』及び、『キリスト教文化研究所紀要』に掲載された。さらに、2019 年度は総合人文学科、及びキリスト教文化研究所と協力し、「苦難と救済」というテーマのもとにシンポジウムや講演会を開催し、このテーマに関して聖書学、歴史神学等の複合的な視点から考え、考察を深めることができた。2019 年度、本事業を主催者として開催予定であった「苦難と救済」のシンポジウム、及び成果物の出版が、諸般の事情から東北学院共同研究助成金を受けての開催、出版となった。いずれにせよ、2020 年 2 月に無事に出版できたことは大きな成果である。

②まとめと展望

2017年度（平成29年）以降、本格的に始動した神学研究推進部門では、本事業の目的の第三点「大学教育の改革においては、神学が中世以来のあらゆる科学分野の出発点をなしているという日本の近代教育では看過されてきたことを踏まえて、神学にもとづいた科学的手法による世界理解を大学教育において一層深めることを目指す」を実現するため、研究計画を立案した。東北学院大学の建学の精神は、「宗教改革の『福音主義キリスト教』の信仰に基づく『個人の尊厳の重視と人格の完成』の教育」にある。それゆえ、「福音主義」とは何か、「福音」とは何かを探求することから始め、その後、その延長として「苦難と救済」をテーマに据え、研究活動を深めていった。本部門では文学部総合人文学科、及びキリスト教文化研究所と連携し、催事を定期的に開催し、かつ研究の成果物として二冊の書物を出版できたことは大きな成果である。とりわけ、この研究プロジェクトを通して、米国のランカスター神学校とドイツのアウクスブルク大学との間で国際交流協定が締結され、学術的交わりを深める基盤を形成することができたことは大きな収穫といえるだろう。

開催報告詳細

現代と福音 ― 改革教会の実践から考える ―
日時：2017 年 9 月 15 日（金）18:00～19:45 **場所**：土樋キャンパス　ホーイ記念館ホール
概要
神学研究推進部門では、本学の建学の精神である福音主義キリスト教の研究を推進している。奇しくも、1517 年はマルティン・ルターが「九十五カ条の提題」を提示して始まった宗教改革から 500 年を数える年である。これを機に宗教改革とは何であったのかが、新たに問われている。宗教改革の最前線となった教会は、当時の西欧社会でどのような位置づけにあったのか。教会が宗教改革において取り戻した「福音」を視野に、500 年前とは異なる現代の時代的・社会的文脈の中で、変わらない「教会の活力」を問いかける必要がある。本学も属する福音主義キリスト教は、日本の現代社会においてマイノリティ（少数派）であるが、現代の教会に受け継がれる公的意義を本学のキリスト教的ルーツである「改革教会」の実践的な観点から捉え直すことは肝要である。そのため、米国プリンストン神学研究所所長ウィリアム・ストーラー博士を講師に招聘し、講演会を開催した。講演の中心的な主題は「昇天のキリストの教会的意義」であった。本学土樋キャンパス礼拝堂のステンドグラスに描かれる「昇天のキリスト」像の実践神学的な意義を再認識する内容となった。昇天後もキリストが今日の地上を生きる私たちを執り成していてくださる恵みを知ることでキリスト教信仰に活力が芽吹くことや、現代の諸問題を近視的に捉えつつ、同時に昇天のキリストを遠視的に見据える「神学的二焦点レンズ」を備える必要性など、実践神学的な視座から、現代の教会を奮い立たせる格調高い講演が語られた。

我は福音を恥とせず ―新約聖書における〈福音〉理解
日時：2017 年 10 月 7 日（土）13:00～16:30 **場所**：土樋キャンパス　ホーイ記念館ホール
概要
東北学院大学の建学の精神は、「宗教改革の〈福音主義キリスト教〉の信仰に基づく〈個人の尊厳の重視と人格の完成〉の教育」にある。本事業を通して、建学の精神がより一層、学院の内外に浸透することを望んでいる。神学研究推進部門では、2017 年度（平成 29 年度）は「福音主義キリスト教」とは何かを考えるシンポジウムや講演会を企画し、本シンポジウムもその

一つである。

パウロはロマ書 1 章 16 節で「我は福音を恥とせず」と記している。東北学院第二代院長である D. B. シュネーダーも、1936 年（昭和 11 年）に迎えた創立 50 周年記念の際、「我は福音を恥とせず」と題する説教を行っている。福音とは何かという問いは、本学の建学の精神のみならず、キリスト教の根幹について考える問いでもある。本シンポジウムでは、新約聖書、とりわけパウロ書簡における福音理解を明らかにし、その後、第二パウロ書簡、そして公同書簡に福音がどのように継承されたのか、または、継承されなかったのを検討した。

まず、最初の講演者であるハイデルベルク大学神学部教授ペーター・ランペ氏より、パウロの福音概念に関する講演が行われた。福音とは元来、ギリシア語では「良い知らせ（good news）」を意味する言葉だが、パウロはそれをキリスト教宣教において用いた。ランペ氏はパウロの福音の内容について解説された。伝道を主眼とする福音告知の内容、そしてその倫理的な内容についてである。その後、福音を告知する主体、つまり神による主体と人間による主体について説明された。広島大学大学院総合科学研究科教授の辻氏は、パウロ以後、パウロの福音告知がどのように継承されたのかを説明された。第二パウロ書簡において、「福音」から「教え」へと重点が移動し、「福音」の「パウロ的集中」も見られるという意見を明らかにされた。第二パウロ書簡において、「福音」の内容については、統一的見解はなく、むしろ対立さえ見られるとも説明された。福音は継承されたのかという問いは、その後、本学文学部教員である吉田新氏による発表でも扱われた。第一ペトロ書において福音とは、終末論的切迫感の中で問われる生き方、読者の実存と関わっている。このような福音の理解は、全面的に展開されることはないが、パウロ書簡の福音理解と類似している。しかし、パウロ自身が自ら体験した福音を巡る実存的な深みは、この書簡からは感じられないと説明された。なぜパウロの福音理解は第二パウロ書簡、第一ペテロ書で真正面から継承されなかったのか、という問いは、その後の討議の際にも問題となり、活発な意見が交わされた。

今日のキリスト教信仰：アメリカ合衆国の「宗教市場」のなかで

日時：2018 年 7 月 19 日（木）　13：00～14：30
場所：土樋キャンパス　ホーイ記念館ホール

概要

ランカスター神学校は、東北学院創立の三校祖のうちのホーイ師とシュ ネーダー師の母校である。ランカスター神学校の卒業生のホーイ師とシュネーダー師が仙台において、東北学院（仙台神学校）と宮城学院（宮城女学校）のふたつのキリスト教の教育機関を創設するのに協力した後、ランカスター神学校はいかに展開したのか。今日、合衆国ではキリスト教信仰と牧師職はどのように教えられているのか。ランカスター神学校の校長であるリッチ・キャロル氏は、今日のアメリカ人の宗教行為の実践について本講演会で紹介した。

リッチ氏は冒頭、ランカスター神学校のステンドグラスには富士山や鳥居が描かれていて、同校が日本、そして本学と特別な繋がりがあることを話し、ホールに集まった聴衆の興味と関心を引きつけた。またアメリカにおけるキリスト教の関わり方などを歴史的に振り返りつつ、現代のアメリカにおける信者を獲得する競争の「宗教市場」とも言える場で「個人が何を信じるかは、個人の選択権にゆだねられている」のであり、「宗教の自由とはキリスト教信仰にルーツを持った考え方」であるとし、さらに「キリスト教はアメリカの福音ではない。その恵みは世界各地、時代を超えて与えられているものである。W. E. ホーイ、D. B. シュネーダー、E. R. プールボー、M. B. オールト。この人たちは福音のために世界の反対側に渡って押川先生と新しい学校を二つ設立した。日本においては、クリスチャンは 1%に過ぎないかもしれないが、この仙台の街で大切な証を与えられている」と結ばれた。「宗教市場」とも言うべき様々な宗教そしてキリスト教が乱立する現在、互いを認める寛容が必要であること、その寛容はキリスト教に根拠があること、そしてキリスト教の福音はアメリカだけのものでは決してないことが強調され、本学で福音主義研究を進める研究者にとって、大きな励ましとなった。

苦難と救済ーパウロにおける苦しみの意義ー

日時：2018 年 10 月 13 日（土）13:00～16:30
場所：土樋キャンパス　ホーイ記念館ホール

概要

2018 年（平成 29 年）10 月に開催された本事業のシンポジウム「我は福音を恥とせず ―新約聖書における<福音>理解 ―」に引き続き、2018 年も本学の建学の精神である「福音主義キリスト教」の理解を深めるため、ドイツと日本におけるパウロの研究者を招いた。

最初の講演者であるアウクスブルク大学哲学社会学部教授のペトラ・フォン・ゲミュンデン氏より「パウロにおける苦しみとその克服」と題する発表があった。人はさまざまな場面において、それぞれの強弱と深度で苦しみと向かい合うが、苦しみは人を成熟させ、また成長せることもあり、私たちとその世界を一変させる力がある。このような苦しみの積極的な側面をパウロの言説を通して学ぶことができると説明した。発表の前半では、神学の伝統に従って神論、キリスト論、教会論、終末論の観点から、パウロにおける苦しみとその克服の意義をめぐる問題について説明され、その内容を踏まえて後半では、パウロにおける実践に根差した苦しみの克服について説き明かされた。そして、ヨブとパウロの苦しみ理解の対比を通して、講演を結ばれた。次に西南学院大学名誉教授の青野太潮氏から「パウロの『十字架の神学』から見た『苦難』の問題」と題する講演があった。パウロは苦難のなかに、逆説的に神の肯定を見て取っている。パウロの「十字架の神学」を視座に据え、このような捉え方の現代的な射程についてお話された。青野氏はイエスの「死」と「十字架（上の死）」の区別を何度も強調され「『十字架』が『罪の贖い』として、すなわち『贖罪論』と結合して語られる個所は、新約聖書の中には皆

無である。広く人口に膾炙している『イエスさまは私たちの（罪の）ために贖いとなって、あるいは身代わりとなって、＜十字架にかかって＞死んでくださった』という言い方に見られるような贖罪論的な表現は、新約聖書のどこにも見出せない」と強調された。パウロの苦難の理解の中心は、この十字架の死の逆説性にある。それゆえ、「ガラテア書においては、特に 2 章 19 節の『キリストとともに十字架につけられてしまっている』、さらに 6 章 14 節の『十字架によって、世はわたしに対して、わたしは世に対して磔にされてしまっている』が明示しているように、苦難の生を生きている信徒の実存は、この『十字架』によって常に決定づけられてしまっていることが言われている」と述べられた。最後に本学文学部教員の吉田新氏は、パウロの苦しみ理解はその後のキリスト教にどのように受容、展開されたのかについて、第一ペトロ書を例にし、説明した。パウロの苦しみ理解はそのまま継承されることなく、第一ペトロ書ではこの書簡の成立事情が反映されているからか、勧告句と結び付いて理解されるようになったと述べた。3 人の講演の後には質疑応答を交えた討議がなされた。

３．人文学研究推進部門

⑴　人文学研究推進部門の事業概要

①　事業の背景と目的

本部門に期待された成果は、東北学院大学研究ブランディング事業計画書にもとづくと、「普遍的な帝国と地域が各時代の反発と融合の中でいかなる秩序を生み出してきたのかを明らかにし、東北の地域性を世界史的な視野の中で把握できるようにするための参照軸を提供する」ことであった（平成 28 年度私立大学研究ブランディング事業研究計画書、3 頁）。これについては、「ヨーロッパ・キリスト教的な文化と日本の東北地方固有の地域性が織りなしてきた歴史的関係」を、世界史の観点から一層深く理解することが意図されていた。そこで、本部門は、東北におけるキリスト教伝道の意義を歴史的に理解するための参照事例をヨーロッパ近現代の中で見出し提供することを通じて、本事業のブランディングの取り組みがめざすところの「東北仙台の文化資源を捉え直」す試みを支援することを自らの役割とした。そして、最終的に、「神学および人文学研究を基盤とする文化資源の研究開発の拠点」としての東北学院大学のプレゼンス向上に貢献することをその狙いとしている。

本部門に与えられたテーマ「地域主義と帝国理念」（同事業計画書、1 頁）を踏まえて、ヨーロッパ・キリスト教文化の世界的拡大・浸透の歴史的な経過およびその影響を多面的に解明することを研究課題に設定した。

②事業の実施方法、構成員等

本部門の事業は、例年の部門研究会で研究内容を相互に調整しつつ、現地調査活動を行い、研究成果を講演会等で口頭発表し、最終的に論文として取りまとめるという手順で実施されることとなった。しかし、後述のように、2019 年度末以降の新型コロナウイルスの流行によって、調査活動や公開講演会の予定は中止を余儀なくされた。

また、本部門の活動を進める上では、東北学院大学オープンリサーチセンター（2007-11 年度）の研究成果も活かすべく、当センターを継承したヨーロッパ文化総合研究所と連携し、同研究所の公開講演会や研究会等の活動において協力を進めた。

研究活動の内容及び部門の構成員は、例年の部門研究会での調整を経て、次のように編成された。サブ部門「グローバル領域」において、ヨーロッパ・キリスト教文化圏の帝国的普遍的秩序がアジア、アフリカ、アメリカに及ぼした影響を対象として活動を進めた。その構成者は渡辺昭一（東北学院大学教授）、佐藤滋（東北学院大学准教授）、原田桃子（米子工業高等専門学校助教）、池田亮（東北大学准教授）である。もう一つのサブ部門「ヨーロッパ領域」では、ヨーロッパ・キリスト教文化圏内における帝国的普遍的秩序の形成と影響を対象として活動を進めた。その構成者は杵淵文夫（東北学院大学准教授）、北村厚（神戸学院大学准教授）、石川真作（東北学院大学教授）である。

⑵　人文学研究推進部門の事業の実施状況

人文学研究推進部門の各構成員の詳しい研究活動については、構成員それぞれの「研究報告

書」に記載する（80～105 頁）。ここでは、本部門全体としての活動を中心に報告する。

①人文学研究推進部門研究会

この研究会は、毎年度の活動内容の報告及び次年度の活動計画の検討を主な目的として、各年度に 1 回の予定で実施された。本部門の事業目的を達成するために各構成員の研究報告と質疑応答を例年実施し、研究テーマや研究内容の確認及び調整の場としても機能した。

2016 年度

2016 年度人文学研究推進部門研究会は 2016 年 12 月 22 日（木）に土樋キャンパスのホーイ記念館で実施された。議題として、①本部門の事業への参加者、②本部門の研究テーマ、③シンポジウムなどの実施が審議された。研究テーマについては、事業計画書にもとづいて「キリスト教社会とその拡大」と「帝国（主義）」が検討された。シンポジウムは事業 4 年目に開催することが検討された。

2017 年度

2017 年度は本部門の構成員および研究テーマの調整を進めた。また、ブランディング事業の広報の一環として担当することとなった、「ラジオ番組制作放送事業」を実施した。

2017 年度人文学研究推進部門研究会は、2018 年 1 月 20 日（土）に東北学院サテライトで実施された。議題として、①本部門への研究参加者の確認、②本部門の研究テーマと各研究参加者の研究課題、③最終目標および 2018 年度以降の研究計画が審議された。2017 年度における調整の結果を踏まえて、本部門の構成員については、池田亮、石川真作、北村厚、杵淵文夫、佐藤滋、原田桃子、渡辺昭一が参加することが確認された。2017 年度の研究推進調整委員会も踏まえて、本部門がヨーロッパ・キリスト教文化の「普遍性」と「地域性」を軸に据えて、帝国、地域主義、民族・宗教、移民問題、経済開発、軍事を研究キーワードとすること、各研究者が軸とキーワードを踏まえて自身の専門分野に沿って研究課題を立てることとなった。研究計画については、2018 年度以降の現地調査実施予定、公開講演会とシンポジウムの開催予定、それらの実施予算、専門誌における最終的な研究成果の公表（特集など）を検討した。

2018 年度

2018 年度は公開講演会の実施準備のために講演者の山下博司教授（東北大学）との調整を進めた。また、前年に引き続き「ラジオ番組制作放送事業」を実施し完了した。

2018 年度人文学研究推進部門研究会は、2019 年 2 月 16 日に土樋キャンパス大学院棟ゲルハード記念室で実施された。報告事項として、ブランディング事業が 2019 年度で急遽終了することによって生じた事業変更の見通し、2018 年度の本部門の活動実施状況（現地調査、公開講演会、ラジオ番組制作放送など）を報告した。議題としては、①各構成員の研究進捗状況の相互確認・調整、②2019 年度と 2020 年度の実施計画・予算を審議した。

研究進捗状況の確認と研究内容の調整のため、各構成員は研究報告を行った。その報告者

とタイトルはそれぞれ次の通りである。「グローバル領域」は、渡辺昭一「戦後南アジアにおけるヘゲモニー転換」、池田亮「フランス第四共和制の崩壊と西側同盟」、佐藤滋「1950・60年代におけるベヴァリッジ・プラン再編をめぐる党間抗争」、原田桃子「イギリスの移民政策に対する新コモンウェルス諸国の反応と影響」である。「ヨーロッパ領域」は、杵淵文夫「20世紀初頭における中欧構想の形成」、北村厚「ヴァイマルからナチズムへの「中欧」の継承と変容」、石川真作「ヨーロッパのイスラーム教徒移民を通してみた宗教間相互作用の研究」である。

2019年度と2020年度の実施計画については、各年度の現地調査活動、公開講演会（佐藤滋、原田桃子）および研究会の実施日程が検討された。これに関して、最終的な研究成果を最終年度以降に専門誌で公表することが審議された。

2019年度

本部門は、主催の公開講演会を実施に向けた準備と調整を進めた。また、池田准教授の予定していた現地調査が、新型コロナウイルスの流行拡大によってアメリカ合衆国の出入国が困難となったため実施できなかった。

2019年度人文学研究推進部門研究会は、2019年10月26日に土樋キャンパス大学院棟ゲルハード記念室で実施された。報告事項として、2020年度におけるブランディング事業の継続が報告され、2019年度の人文部門の実施計画（現地調査、公開講演会）などが検討された。議題としては、①各構成員の研究進捗状況の確認、②成果報告書の執筆内容、③2020年度の実施計画と予算、④研究成果の最終的な公表方法が審議された。

研究進捗状況の確認と研究内容の調整のため、各構成員は研究報告を行った。その報告者とタイトルはそれぞれ次の通りである。「グローバル領域」は、渡辺昭一「冷戦下の国際秩序の再編と帝国の解体」、池田亮「フランス第四共和制の崩壊と西側同盟⑵」、佐藤滋「1950・60 年代におけるベヴァリッジ・プラン再編をめぐる党間抗争」、原田桃子「イギリスの移民政策に対する新コモンウェルス諸国の反応と影響」である。「ヨーロッパ領域」は、杵淵文夫「20 世紀初頭ドイツにおける中欧構想の形成」、北村厚「ヴァイマル期、アンシュルスと中欧構想」、石川真作「ヨーロッパのイスラーム教徒移民を通してみた宗教間相互作用の研究」である。

2020年度の実施計画については、現地調査の実施者と予定、公開講演会の実施予定（杵淵、渡辺、池田ら）、2020 年度の研究会の実施日程が審議された。研究成果の最終的な公表先については、東北学院大学の『ヨーロッパ文化史研究』などへの 2021 年度の投稿が検討された。

2020年度

2020年度は新型コロナウイルスの流行拡大のため、現地調査および公開講演会は中止された。これに代わり研究事業を進めるために、ヨーロッパ近現代史のデータベースを導入した。

② 公開講演会

人文学研究推進部門は、東北学院大学ヨーロッパ文化総合研究所と連携し、以下の公開講演会および研究会を開催及び協賛した。これら講演会は地域の一般市民に向けて公開され、講演後には質疑応答の時間が設けられた。

・公開講演会「古代ローマにおける呪詛・呪文―裏の精神史―」
開催日：2017 年 7 月 8 日（土）13：30～17：00
会　場：土樋キャンパス　8 号館 5 階押川記念ホール
参加者：85 名
講演者：
奥山広規（岡山理科大学非常勤講師）「呪詛の系譜―フェニキアの人々と呪い―」
志内一興（中央大学兼任講師）「ローマ人と呪い―呪詛板によって呪縛されることを恐れない人はいない―」
大谷哲（東北大学専門研究員）「祈りと呪詛の間で―キリスト教ローマ時代と信徒たちの呪い―」）

・公開講演会「福祉国家とキリスト教慈善―ドイツに見る聖俗のセーフティネット-」
開催日：2017 年 10 月 28 日（土）15：30～17：00
会　場：土樋キャンパス　8 号館 5 階押川記念ホール
参加者：54 名
講演者：中野智世（成城大学准教授）

・公開講演会「中近世の東地中海における諸民族の混交」
開催日：2017 年 12 月 9 日（土）13：00～17：00
会　場：土樋キャンパス　6 号館 2 階 621 教室
参加者：70 名
講演者：
西村道也（福岡大学講師）「ビザンツ貨をめぐる模倣と模造」
高田良太（駒澤大学准教授）「コンスタンティノープルのヴェネツィア人－ バイロの設置をめぐって－」
堀井優（同志社大学教授）「近世オスマン帝国下のヴェネツィア領事網」）
澤井一彰（関西大学教授）「オスマン帝国支配下のイスタンブル史の立場から」

・公開講演会「ヴェネツィア共和国の公共性」
開催日：2018 年 7 月 14 日（土）15：30～17：00
会　場：土樋キャンパス　8 号館 5 階押川記念ホール
参加者：55 人
講演者：徳橋曜（富山大学教授）

・公開講演会「ブリティッシュ・ワールド―帝国の膨張の諸相―」

開催日：2018 年 9 月 29 日（土）13：30～17：00

会　場：土樋キャンパス　6 号館 2 階 621 教室

参加者：55 人

講演者：

石橋悠人（中央大学准教授）「時間の帝国：ブリティシュ・ワールドにおける「時間改革の展開」」

竹内真人（日本大学准教授）「ミッションとイギリス帝国―福音主義、貿易奴隷、そして「文明化の使命」―」

・公開講演会「聖トマス～イエズス会～ヒンドゥー原理主義―南インドにおけるキリスト教ミッションの歩みと現在―」

開催日：2018 年 11 月 10 日（土）15：30～17：00

会　場：土樋キャンパス　ホーイ記念館ホール

参加者：60 人

講演者：山下博司（東北大学大学院国際文化研究科教授）

・公開講演会「20 世紀前半のヨーロッパ統合―中欧からヨーロッパへの道―」

開催日：2018 年 12 月 1 日（土）15：00～17：00

会　場：土樋キャンパス　6 号館 2 階 621 教室

参加者：65 人

講演者：

杵淵文夫（東北学院大学准教授）「世紀転換期ドイツ・オーストリアにおける「中欧」」

北村厚（神戸学院大学准教授）「ドイツ現代史における「中欧」と「ヨーロッパ」」

・公開講演会「大災害を伝える神話―「ノアの洪水」や「文明消失」は起こったのか―」

開催日：2019 年 6 月 22 日（土）15：30～17：00

会　場：土樋キャンパス 5 号館 1 階 512 教室

参加者：93 人

講演者：庄子大亮（関西大学・神戸女学院大学等非常勤講師）

・公開研究会「空襲の記憶文化―ドイツと日本、「想起」と「忘却」の比較を通じて―」

開催日：2019 年 10 月 5 日（土）15：30～17：00

会　場：土樋キャンパス 8 号館 5 階押川記念ホール

参加者：80 人

講演者：柳原伸洋（東京女子大学准教授）

・公開講演会「第二次大戦後のコモンウェルスの再編と変容」

開催日：2020 年 1 月 25 日（土）14：00～17：00
会　場：土樋キャンパス　ホーイ記念館ホール
参加者：50 人
講演者：
佐藤滋（東北学院大学教授）「グローバル・ヒストリーからみた戦後イギリス福祉国家の形成と変容―ベヴァリッジ・プランの再編論争を中心に―」
原田桃子（米子工業高等専門学校助教）「イギリスの入国管理政策の展開と移民送出国」

③ 研究会「ヨーロッパ近現代史若手研究会」
各年度の詳しい報告内容は、110～118 頁に記載した。

・「2017 年度　ヨーロッパ近現代史若手研究会」
開催日：2018 年 1 月 20 日（土）、21 日（日）
会　場：東北学院サテライトステーション
出席者：20 名
報告者：渡辺雄太（東北大学大学院博士課程）、赤川尚平（慶応義塾大学大学院 博士課程）、近藤百世（東北大学大学院 専門研究員）、大谷実（同志社大学大学院 博士課程）、佐々木淳希（京都大学大学院 博士課程）

・「2018 年度　ヨーロッパ近現代史若手研究会」
開催日：2019 年 3 月 28 日（木）、29 日（金）
会　場：東北学院サテライトステーション
出席者：15 人
報告者：稲垣春樹（首都大学東京 助教）、阿部竹浩（東北大学大学院 博士課程）、千葉春香（京都大学大学院 博士課程）、板倉孝信（新潟大学特任助教）

・「2019 年度　ヨーロッパ近現代史若手研究会」
開催日：2020 年 2 月 27 日（木）、28 日（金）
会　場：土樋キャンパス　大学院棟 2 階ゲルハード記念室
出席者：14 人
報告者：藤本健太朗（東北大学 日本学術振興会特別研究員(PD)）、星野桃子（千葉大学大学院 博士課程）、小山誠南（東北大学大学院 博士課程前期 2 年の課程）、佐藤夏樹（京都大学 助教）

④ 広報活動「ラジオ番組「学院ジンブン Radio」制作放送事業」
本事業の詳しい活動内容は、106～109 頁に記載した。
・ラジオ番組「はじまりの哲学」（2018 年 1 月～3 月、各 30 分 13 回）
・ラジオ番組「よくわかる戦国城入門」（2019 年 1 月～3 月、各 30 分 12 回）

⑶　人文学研究推進部門の事業の成果と展望

①　事業の成果

本部門の構成員の各研究はそれぞれ「帝国」と「地域」を共通の軸として、経済・貿易、民族、移民、宗教・文化、軍事等をキーワードに観点を設定し、ヨーロッパ内、アジアとヨーロッパ、アフリカとヨーロッパといったそれぞれの得意分野を活かして多角的に分析する方法で行われた。

近代以降に西洋諸国が世界各地に進出し始めたことが、ヨーロッパ文化が諸地域固有の文化と接触する場面を多数生み出した結果、ヨーロッパ文化を普遍的な価値であるかのように意識づける作用を及ぼした、という側面は否めない。原田氏の移民研究は、コモンウェルス諸国からヨーロッパへというケースであったが、ヨーロッパ優位の意識も暗示されている。石川氏の研究は、ヨーロッパ社会の「内なる他者」としてのイスラム移民たちの複雑な関係を論じている。杵淵氏と北村氏の取り上げた「中欧」はヨーロッパ内のケースであったが、普遍的帝国の中心部の優位意識は否みがたく思われる。他方で、ヨーロッパ文化の流入に対する受容と反発等の状況は一様ではなく、また、現代に至るまで各地域において新たな秩序や価値の体系が再編されることとなった。渡辺氏、池田氏、佐藤氏の研究はそれぞれ、ヨーロッパとインドやアフリカなどの関係がヨーロッパ本国を巻き込みながら体制を転換させていく過程にも触れるものであったと言える。ヨーロッパ文化との接触が当該地域をヨーロッパ化するわけではなく、独特な秩序を展開していく可能性にも言及できよう。

本研究事業は、東北におけるキリスト教伝道を視界に入れているわけであるが、こうしたヨーロッパ文化と諸地域の受容や反発が織りなしてきた歴史を踏まえると、長期的な歴史的視野のもとでは一方的ではなく相互的に社会的文化的な関係が強まる傾向を指摘できようが、他方で時には根深い対立を引き起こす可能性にも言及せねばならないかもしれない。しかし、この側面を頭の片隅に置いておくことは、東北に数多くみられるキリスト教的な文化資源を理解する上で重要であるように思われる。

本部門のその他の活動は次の通りである。まず、公開講演会については、2020 年度に予定されていた全ての企画が新型コロナウイルスの流行拡大で中止されたものの、2017 年度以降 10 回の公開講演会を開催・協賛することができた。これらの公開講演会への参加人数の合計は 667 人となった。公開講演会では、講演後の質疑応答に十分な時間を割くことによって、人文学に関する仙台市民と講師との学術的交流の機会をつくり出すことができた。

次に、ヨーロッパ近現代史若手研究会については、2017 年～2019 年度に人文学研究部門の構成員も毎年参加できた。報告者数は 3 年間で 13 名、出席者数は 49 名となった。発表テーマについても、ヨーロッパ・キリスト教文化とその他の文化圏の接触、さらに受容と反発を取り扱う人文学研究の報告が集められた。報告 1 本あたり相応の時間を割いて、出席者の間で研究内容を十分に吟味した。人文学をテーマとする講演会及び研究会を定期的かつ持続的に実施できたことで、東北における人文学の研究拠点として機能できたと思われる。

最後に、ラジオ番組制作放送事業については、東北学院大学の人文学分野のうち哲学と日本中世史の研究に関するラジオ番組を制作し、仙台市民向けに発信した。放送回数（放送時間各

30 分）は合計で 25 回、放送時間数の合計は 12 時間 30 分である。初学者にも配慮した構成を取り入れつつ、専任教員の専門的な知見が随所で展開された。本学における人文学領域の研究教育を地域に向けて発信することができたと思われる。

② 展望

本部門の事業活動の一部については、ヨーロッパ文化総合研究所が今後も継続して実施する予定である。すなわち、市民向けの公開講演会は今後もヨーロッパ文化総合研究所の主催で開催され、ヨーロッパ近現代史若手研究会も同研究所が実施していく予定である。東北学院大学は 2020 年度の「TG Grand Vision 150」の第Ⅱ期中期計画において、「建学の精神を体現する人間的洞察力に優れた人材養成及び専門性の高い学びを実現するために、全学的な教養教育基盤の整備による教養教育を行う」こと、「多様な年齢層への生涯学習の機会を提供する」こと等の方向性を打ち出している。本学は、東北地域を人的知的に支える大学を目指しているわけであるが、ヨーロッパ文化総合研究所の上述のような活動は、とりわけ人文学領域の研究教育の側面からこの大学の取り組みを支えるものになると思われる。

⑴　冷戦下の国際秩序の再編と帝国の解体

研究代表者：渡辺昭一

１　研究内容

概要、研究目的、実施計画：

今日、冷戦体制の問題は、近現代史研究において注目される分野のひとつとなっており、様々な研究が進められてきている。これまで米ソを中心とした冷戦体制の研究は、ヨーロッパの再編を中心に行われてきたが、最近の研究ではアジア、アフリカ、中東などグローバルな冷戦体制の在り方を問題にする研究が進められている（ウスタッド『グローバル冷戦史』)。

アジア、アフリカ、中東に目を向けた場合、冷戦体制の確立は、ヨーロッパの帝国主義体制からの脱却、いわゆる脱植民地化の過程でもあったったため、冷戦と脱植民地化の関係性、帝国理念の変化と地域主義の台頭が問題となる。これらの地域における諸国家は、独立を果たすか、あるいは果たそうとして、国内の民族対立、宗教的対立を内包しながら、政治的経済的自立化を目指しているのであるが、そのプロセスは、非常に複雑でいまだに十分に検討されていない。たとえばイギリス帝国の解体後、共和制を採用しながらコモンウェルスという体制(国王を統合の象徴として承認)に帰属していく状況が生まれている。フランスやオランダのアジア植民地支配の終焉も民衆の貧困状態から政治不安を生み出し、共産主義の拡大を生み出した。アジアにおいて、旧帝国体制への帰属と政治的経済的自立化、ナショナリズムと地域主義に基づきつつ軍事的依存と安全保障体制への編入が問題となっている。

また、帝国の解体に伴って、イギリス本国へのインパクトの問題が注目されてきている。具体的には、旧植民地から本国への移民受け入れの問題である。移民として流入した人々が新たなコミュニティを形成していく中で、宗教間の対立、また同じキリスト教徒でありながら出身地がひきおこす民族的対立と生活習慣の違いからコミュニティ間の摩擦を繰り返しており、共生の難しさを示している。旧植民地支配の負の遺産として本国での国籍を取得してイギリス国民として生活することで、イギリス人としてのアイデンティを生み出そうとしている。

以上のような国際情勢とその変容を究明する手がかりとして、研究協力者の研究領域を尊重しながら、戦後冷戦体制との関連においてイギリスの帝国の解体問題に焦点を合わせて、一つは、政治的経済的軍事的視点から、さらには民族的視点から南アジア、中東諸国の帝国 (コモンウェルス) への依存と自立化に関する諸問題、もう一つは、帝国の解体にともなって本国社会が内包に至った社会的諸問題をとりあげた。総じて、20 世紀国際秩序の再編との関連で帝国解体の意義および帝国理念の変容と地域主義の問題を解明する手掛かりをさぐった。

２　研究の実施状況

上述の問題関心から具体的課題として次の 3 つを設定し、実施した。

⑴ 冷戦体制下の南アジアに対する国際的経済援助

第二次世界大戦後、イギリス帝国支配から脱し、国民経済を確立しようとした南アジア世界の諸相を検討した。独立後も自立した国家として歩むことは不可能であり、旧宗主国イギリス

の経済的支援に依存するほかなかった。その経済的支援体制はコロンボ・プランと呼ばれる国際援助システムの構築によるものであった。これは、戦中に英印間で確立したスターリング・バランス(イギリス通貨ポンドによる金融取引資産関係)に基づき、イギリスの経済支援として利用された。この研究については、一部 2017 年 3 月に渡辺昭一編『冷戦変容期国際開発援助とアジア』(ミネルヴァ書房、2017 年)とまとめた。同編著は、4 年にわたって研究代表者として、国際経済史学会(ユトレヒト大学、京都国際会議場)をはじめ、国際ワープショップ(インド、台湾)や国内学会(社会経済史学会、日本国際政治学会)などで得た数多くの意見・批判をもとにとりまとめたものである。しかし、残された研究課題は多く、本ブランディング事業活動において、この成果に対する批判等を確認したうえで、更なる課題を追求することにした。

さっそく、2018 年 5 月 12 日、早稲田大学において開催された国際金融研究会(矢後和彦代表)において、「戦後南アジアに対する国際援助」と題して、出版後にさらに深めた内容について報告を行い、同年 6 月 9 日には、明治大学国際武器移転史研究所において、上述の同編著の合評会を開催した。脇村孝平氏(大阪市立大学)と後藤春美氏(東京大学)から、的確なコメントをいただき、それに対する議論を展開した。そこで、編著の成果と課題をより鮮明にすることができた。そして、2019 年 1 月 7 日には、東京大学大学院経済研究科の特別講義「経済史の方法」において、「戦後アジアにおける国際援助体制について」と題して、南アジアの国際援助体制について総括する機会を得た。

また、丸善出版社から公刊される『社会経済史事典』(2021 年刊行予定)の第 16 章「国際秩序と開発」の編集委員として、これまでの成果の一部を取り入れた。

⑵ 冷戦体制下の南アジアに対する国際軍事援助過程

もう一つの課題は、戦後アジアの共産主義拡大に対抗した英米による軍事的介入問題の検討であった。とりあえずインドを事例として検討した。なぜなら、イギリスとの関係を維持しながら、1955 年以降非同盟政策を展開して、米ソの冷戦から距離を置いていたからである。1950 年代までには、イギリスと軍事同盟を締結しなかったとはいえ、ほとんどの武器をイギリスから購入していた。

この研究課題に対しては、2017 年 6 月 27 日、明治大学武器移転史研究所第 5 回シンポジウム「冷戦期南アジアにおける軍事援助の展開」において、「イギリスのプレゼンスと軍事援助」と題して報告を行い、2019 年 6 月 4 日、明治大学国際武器移転史研究所の国際セミナー「独立前夜インド航空機産業の誕生と国際ネットワーク」において、「Indianization and Nationalization of Railways」を報告した。

そして、課題の小括として、竹内真人編『ブリティッシュ・ワールドー帝国紐帯の諸相』(日本経済評論社、2019 年) において、第 9 章「アトリー政権期のコモンウェルス防衛と南アジア」を掲載した。この論考は、1940 年代後半におけるスターリング・バランスの軍事的援用に着目しながら、印パ分離独立をめぐるイギリスのコモンウェルス構想と軍事支援の実態を解明した。なお、この研究成果については、2019 年 9 月 14 日、イギリス帝国史研究会と共催で開催された明治大学国際武器移転史研究所の研究会（共催）において、同編著に関して合評会を行った。

⑶ 南アジアの「遅れた冷戦」と新国際秩序形成

上述の(1)と(2)の課題を踏まえて、第 3 の課題として、南アジアの「遅れた冷戦」の実態を検討した。

独立後、第一次印パ戦争を起点として印パ対立がますます過激化する中で、1954 年アメリカが パキスタンとの軍事援助協定を締結し、パキスタンへの軍事援助を強めた時、インドは、中国、インドネシアとともに非同盟会議（バンドン会議）にて「平和五原則」を決議し、 冷戦下での第三勢力の道を提示した。しかし、インドが次第にソ連からの武器購入を検討し始めると、イギリスだけはそれを防ぐことはできず、アメリカの介入を誘引することになった。アメリカにとっても南アジアへの介入が、インドの非同盟政策により困難であったが、イギリスとの軍事協力の要請により 1960 年頃から本格化した。その間、キューバ危機、印パ対立の激化、東南アジアでの共産主義勢力の拡大といった危機的状況に直面して、1961 年 11 月、ケネ ディとネールとの間で歴史的会談が実現した。

この事実関係を確認して、以下の内容を検討した。まず 2019 年 12 月 26－27 日、東北学院大学サテライトステーションで開催した東北学院大学ヨーロッパ総合研究所プロジェクト研究会において、「南アジアにおける冷戦と英米軍事援助の展開―MiG-21 取引をめぐって―」を報告した。この報告は、1961 年ソ連の MiG-21 をめぐるインド側の導入計画が明らかになったことを踏まえて、アメリカとイギリスがそれを阻止すべき対抗措置を検討していく過程を検討した。その後、さらに内容を精査して、横井勝彦編『冷戦期アジアの軍事と援助』(日本経済評論社、2021 年)において第 6 章「南アジアにおける英米の軍事援助交渉―MiG-21 取引をめぐって」としてまとめた。

また、アメリカの対印外交については、2020 年 2 月 29 日にヨーロッパ文化総合研究所の公開講演会「冷戦変容期の南アジア世界」を実施する予定であったが、新型コロナウィルス感染予防のため急遽中止となった。しかし、講演会は実現しかったものの、1961 年 11 月に実現したケネディ・ネルー会談の歴史的意味について、『ヨーロッパ文化史研究』第 22 号(2021 年 3 月)にまとめた。

３　成果と展望

成果と展望：

以上、本事業計画に基づく研究を行ってきたが、今度追さらに求すべき新たな課題として以下の点が明らかとなった。(1)パキスタンへの経済援助について、1961 年に開始される第一次パキスタン五か年計画にむけてのパキスタン援助コンソーシアムをめぐって、インドとの比較において国際援助競争の実態を検討する必要がある。(2)中印紛争をめぐるインドの軍事化の支援体制について、インド側の敗北が露呈したことにより、インドの軍事体制の再編が急激に行われていくが、そこにソ連と英米の冷戦的対立構造が組み込まれていく過程を分析する必要がある。その援助には制限があり、必ずしも援助国側の意向が貫徹するにはいかない実情と、やがては再度印パ戦争に突入してく過程を検討することになる。(3)インド洋の安全保障体制の構築について、インド洋のデアゴガルシア島をめぐるアメリカの軍事関与によって、南アジアの冷戦体制が変容していく中で、シーレーン構築の諸相を検討する。1967 年以降イギリスがスエ

ズ以東からの撤退を表明することで、南アジアでも安全保障体制構想の再編が迫られていく過程を明らかにする必要がある。(4)1960 年代末～1970 年代初頭におけるインド援助コンソーシアムの国際援助体制の変容について、インドの債務超過に対する支援に一時的に見通しが立った後の国際援助の支援内容を検討する。第三次印パ戦争との関係を視野に入れた国際援助体系の再編過程を検討することで、アジアにおける冷戦体制の変容を追求する。

⑵　1950・60 年代におけるベヴァリッジ・プラン再編をめぐる党間抗争

研究代表者：佐藤滋

1　研究内容

概要：

第二次世界大戦後、イギリスはベヴァリッジ報告に基づき福祉国家を形作っていった。それは、均一拠出・均一給付により、老齢・疾病・失業・出産・障害・葬祭などのあらゆるリスクに対処するという徹底した普遍主義に基づいた、他国にはない非常にユニークな仕組みであった。日本をはじめ、ベヴァリッジ報告が他国の戦後福祉国家の構築に及ぼした影響は極めて大きい。

しかしながら、1950 年代に入ると、早くもイギリス福祉国家は行き詰まりを見せ始め、福祉国家改革論争が労働党・保守党の間で巻き起こって行くこととなった。議論を主導したのは 1951 年の総選挙で敗退した労働党であり、彼らは大陸ヨーロッパとの比較からイギリス福祉国家が取り残されつつあることを問題視し、強く保守党を批判していくことになる。

対して保守党は、労働党の福祉国家拡充路線に対抗する必要から、独自の福祉国家構想を打ち出していくことになる。特に 1960 年代初頭以降、サッチャーら若手の保守党員が小さな政府路線に基づく選別主義的福祉国家を強調し、ベヴァリッジ報告のアイディアを批判し始めたことはその後の歴史を決定づけたという意味で重要であった。保守党のアイディアは、1960 年代に頻発したポンド危機を背景に後押しされていくことにもなる。いわゆる新自由主義に基づく福祉国家改革論議は、こうした文脈で準備されたものであった。

本研究は、労働党文書(LPA、Manchester)、TUC 文書(MRC、Warwick University)、保守党文書(CPA、Oxford University)、政府文書（TNA、London)、ティトマスの個人文書(Titmuss papers、 London School of Economics)といった未公刊のアーカイブ史料を利用し、以上で論じた福祉国家変容の過程を明らかにしていく。

活動目的：

労働党文書、TUC 文書、保守党文書、政府文書、ティトマスの個人文書といった未公刊のアーカイブ史料を利用し、イギリスにおける戦後福祉国家の変容プロセスを明らかにする。

実施計画：

2017 年度は研究資料の収集、2018 年度は研究成果の発表、2019・20 年度は研究論文の執筆を中心として研究活動を進めることとする。

2　研究の実施状況

活動報告：

これまで、労働党文書(LPA、Manchester)、TUC 文書(MRC、Warwick University)、保

守党文書(CPA、Oxford University)、政府文書 (TNA、London)、ティトマスの個人文書(Titmuss papers、 London School of Economics)といった未公刊のアーカイブ史料を中心に、研究に必要な資料を収集した。

2018 年には、研究成果に一定の目処が立ったところで論文を執筆し、日本財政学会において報告を行なった。2019・20 年には、学会報告で得た報告を踏まえ、更なる資料収集、論文の執筆に取り組んでいる。

＜学会・研究会発表等＞

・佐藤滋「1950・60 年代におけるベヴァリッジ・プラン再編をめぐる党間抗争」日本財政学会　第 75 回全国大会、2018 年 10 月 20 日

・佐藤滋「グローバル・ヒストリーからみた戦後イギリス福祉国家の形成と変容：ベヴァリッジ･プランの再編論争を中心に」(東北学院大学研究ブランディング事業公開講演会 第二次大戦後のコモンウェルスの再編と変容)、2020 年 1 月 25 日

３　成果と展望

成果と展望：

学会報告がひと段落済んだところで、一定の課題が見えてきた。ベヴァリッジ・プランへの批判は、後年、いわゆる新自由主義思想を担った保守党若手政治家や保守党シンクタンク、経済学者によって 1950 年代後半から 1960 年代にかけて徐々に体系化されていった。彼らは労働党のみならず、保守党執行部への批判を展開したところに特徴がある。新たな思想を展開したこれらの人々の動向を、より詳細に解き明かすことが第一点目の課題である。

1960 年代後半になると、保守党だけでなく、労働党内部からもベヴァリッジ・プランへの批判が徐々に展開されていったことがこれまでの調査で分かっている。そうした批判は主として、1960 年代後半のポンド危機、財政危機の中で噴出し、ベヴァリッジ・プランの「普遍性」への挑戦という形で現れることになる。特に、労働党の執行部の一部は、保守党系シンクタンクとも協業する形でベヴァリッジ・プランへの批判を行なったところに特徴が認められる。労働党内部の思想的な変容を、より詳細に解き明かす必要があるというのが第二点目の課題である。

これらの課題は、当初の研究構想を修正することを意味する。当初は、ベヴァリッジ・プランを基礎づける「戦後コンセンサス」が脆弱な基盤によって立つことを、党間抗争を分析する中で解き明かすことが関心の中心にあった。しかしながら、ある程度の調査の結果、労働党及び保守党内部にも政治的な抗争があったこと、また、労働党・保守党の間で思想的なつながりがあったことがわかってきた。そのため、今後は、こうした政党間・政党内の抗争を視野に入れながら研究を進める必要がある。

また、これまでの研究は主として政治内部の動向に注目しながら、ベヴァリッジ・プランの批判を整理してきたが、戦後福祉国家に対する社会側の動向も押さえておく必要を感じている。例えば、保守党系シンクタンクは世論調査を積極的に活用する中で、彼らの政策を根拠づけていたためである。したがって、第三に、当時行われた世論調査のマイクロ・

データを用いながら、世論の変容を分析することが課題である。

以上のように、これまでの調査は一定の成果が見られながらも、明らかとなった課題を着実にこなしていく必要もある。今後、London School of Economics and Political Science における研究も加味しながら解き明かしていく。

⑶　フランス第四共和制の崩壊と西側同盟

研究代表者：池田亮（東北大学准教授）

1　研究内容

概要：

フランス第四共和制は 1958 年に崩壊し、シャルル・ドゴールが事態を収拾して第五共和制を樹立した。通常、この事件は、当時のアルジェリア戦争の結果発生したとされてきた。だが直接の発端となったのは 1958 年 2 月にフランス空軍がチュニジアのサキエト村を爆撃した事件である。この問題は国際的関心を集め、英米が国際使節団を派遣して問題を調査することを提唱したのに対し、フランス政府はこの案を受諾した。このことは北アフリカという影響力圏に対する米英による干渉だと世論から受け止められ、アルジェリア入植者たちが激高して反乱を起こし、第四共和制を倒壊したのである。

この事件の先駆けとして、1957 年にチュニジアがフランスに対して武器供給を要請したにもかかわらず、アルジェリア反乱軍に流出する恐れから後者が拒絶していた。この結果、チュニジアがソ連に同様の要請を行う危険があったことから米英が武器供給を行った。このことが、北アフリカを自国の勢力圏と考えるフランス世論の憤激を招いたのである。

このような経緯の結果、ドゴールは大統領就任後に反米英姿勢を鮮明にしたことはよく知られている。しかし、それにもかかわらずフランスは西側同盟に残留し、西側同盟は瓦解を免れた。1960 年代半ばにドゴールは NATO 軍事機構から脱退したが、政治的には西側陣営に留まり、なおかつ脱退後も NATO 軍事機構とフランスは軍事協力を継続した。このようなフランスのニュアンスに富んだ外交姿勢が、第四共和制の倒壊過程を巡る英米仏の三国関係とどのような関係にあるか、本研究は明らかにする。

研究目的：

第二次世界大戦後の脱植民地化の潮流は、植民地宗主国である英仏などと、植民地支配に批判的なアメリカの間で軋轢を生んだ。特にフランスはイギリスと異なって脱植民地化の原則自体に反対していたため、英米との間で深刻な対立が生じた。特に北アフリカのアルジェリアは多くのフランス人入植者が居住していたため、フランスは脱植民地化に抵抗した。1956 年に独立を果たしたチュニジア・モロッコの脱植民地化過程では、イギリスはフランスへの国際圧力を最小化してフランスによる同盟離脱を阻止するのに成功したが、1958 年の際には上述のように、イギリスは従来ほどはフランスへの国際圧力を軽減することには成功せず、国際使節団派遣を容認するなど自らも圧力を行使する側に回ったと言える。さらには、イギリス政府による派遣の容認こそが、アメリカ政府が使節団派遣を決定する必要条件であったことから、イギリスの決定はアメリカの決定を左右し、フランス第四共和制倒壊の直接の契機となったと言える。

それでは、このような方針を採用する際、イギリスは脱植民地化と同盟維持というジレンマの中でどのような利害計算を行っていたのか。また、イギリスの対仏政策はフランス世論の動向とフランス政策にどのような影響を与えたのか。その結果、フランスはなぜ従来よりも反英米色の強い姿勢を示しつつも、西側同盟に留まるという選択をしたのか。こうした点を解明す

ることを本研究の目的とする。

実施計画：

2018 年度　イギリス公文書館にて調査。フランス第四共和制崩壊の時期のイギリス政策に関する PREM（首相府ファイル）シリーズの文書を一部収集した。

2020 年度　イギリス政府の資料および出版されているアメリカ政府の資料（Foreign Relations of the United States）を分析中である。

2021 年度　パリの外務省資料館で、米英政府との交渉過程に関するフランス外務省資料を収集予定である。

２　研究の実施状況

2019 年 2 月にイギリス公文書館で資料調査を行った。また、2019 年 2 月と 10 月にそれぞれ、東北学院大学研究ブランディング事業の人文学研究推進部門の研究会において研究報告を行った。2019 年度にブランディング事業によるアメリカ現地調査が計画されていたが、新型コロナウイルスの流行拡大により中止された。

本研究に関するこれまでの成果の発表は以下の通りである。

⑴論文等

・池田亮「1956 年基本法とフランス植民地帝国の変容　―同化、自治、独立―」『国際政治』第 191 号、2018 年、111-126 頁

・池田亮「第 4 章「フランスとマグレブ」」（共著）渡邊啓貴・上原良子共編『フランスと世界』（法律文化社、2019 年、pp.108-118）

⑵口頭発表

・池田亮「フランス植民地帝国の変容と 1956 年基本法：「同化」主義から脱植民地へ」比較植民地史研究会、2018 年 7 月 14 日

・Ryo IKEDA, ‘The Aftermath of the Suez War: Negotiations towards the Reopening of the Suez Canal’, British International History Group, Thirtieth Annual Conference, (Exeter University, 30 August 2018)

・‘Soft-Landing Decolonization after the Suez War?: Negotiations on the Reopening of the Canal and Anglo-American Relations’, (SHAFR 2019 Annual meeting, Arlington, Virginia, Renaissance Capital View, 20 June 2019)

・Freedom of Navigation under Whose Control?: The Aftermath of the Suez Crisis and Anglo-American Policy’. The First International Workshop, The Informal Empire Research Project (Komaba Campus, 18 Building, Media Lab, 12 Jan 2020)

⑶その他

・池田亮「コラム　スエズ戦争を巡る欧米諸国の対応と運河通航」『運輸と経済』2018 年

10 月号、57-58 頁

・池田亮「書評　宮下雄一郎『フランス再興と国際秩序の構想』(勁草書房、2016 年)」『国際政治』第 194 号、2018 年、160-163 頁

３　成果と展望

成果と展望：

現在、イギリス政府の資料を分析中であるが、イギリスが 1957 年秋にチュニジアに武器供給を行った際、チュニジアがソ連圏に接近することを阻止し、西側の勢力圏に残留させようという意図があったことが明らかになった。このようにイギリスは、フランスとチュニジアの対立を調停しようと試みていたわけである。つまり、イギリス政策はフランスとチュニジアなどの旧仏領植民地を西側陣営に留めることを意図していたおり、それによってソ連の影響力拡大を阻止することが目的であった。

他方で、このイギリス政策は明らかにフランス世論に悪い印象を与え、後に第四共和制が倒壊する遠因となったと言える。これは、1956 年 3 月のチュニジア・モロッコ独立までのイギリス政府の親仏姿勢からイギリス政府が大きく方針を転換した結果だと言える。この方針転換の背景には 1956 年夏に勃発したスエズ危機とその後にフランスが米英に批判を強めていく事情も関連していると考えられる。いずれにしても、こうした方針転換がなぜ生まれたのか、分析を続けていきたい。

⑷　イギリスの移民政策に対する新コモンウェルス諸国の反応と影響

研究代表者：原田桃子（米子工業高等専門学校）

1　研究内容

概要：

本研究では，イギリスの移民政策に対する新コモンウェルス諸国の反応と影響について，1950 年代を中心に検討する。

1950 年代，イギリスでは，新コモンウェルス諸国，特に西インド諸島，インド，パキスタンからの移民が徐々に増加した。彼らはコモンウェルス市民として，1948 年イギリス国籍法によって，「母国」イギリスへの自由な入国・定住の権利を認められていた。しかし，彼らがイギリスに移住し新たなコミュニティを形成すると，宗教間の対立，また生活習慣の違いなどから，本国市民との対立が生じた。1958 年には暴動が起こり，移民として流入した人々の生活が脅かされる状況にまで至った。

コモンウェルス市民のイギリスへの自由入国の権利は，第二次世界大戦以前に，イギリスがイギリス帝国の「イギリス臣民」に与えていた権利と同等のものである。つまり，1948 年イギリス国籍法で認められた権利は帝国理念の反映といえる。しかし，1950 年代の新コモンウェルス諸国からの移民の急増を経て，1962 年コモンウェルス移民法によって制限された。

このような移民政策の変更は，新コモンウェルス諸国からの移民自身に降りかかる問題だけでなく，彼らを送り出した新コモンウェルス諸国にも関わる問題である。「イギリス臣民」としての権利の制限，つまり帝国理念の変化は，第二次世界大戦以降独立を果たした新コモンウェルス諸国にとって，旧宗主国であるイギリスとの関係を再構築する際に重要な意義をもたらしただろう。新コモンウェルス諸国は，自国民が移住先のイギリスでどのような状況におかれたのか，またイギリス移民政策の展開がどのように変化していくのかをいかに受け止め，イギリス側に対応を求めたのか。そして，イギリスは新コモンウェルス諸国側の意見をどのように受け止め，政策に反映させたのだろうか。本研究は，移民流出国である新コモンウェルス諸国と，移民流入国のイギリスとの関係に着目して，イギリスの移民政策の展開への新コモンウェルス諸国の影響を明らかにする。

活動目的：

本報告の目的は，イギリスの移民政策の展開を，移民流出国側の新コモンウェルス諸国からの視点を組み込み，検討することである。

受入国側の移民政策は，移民によってもたらされたと考えられる社会問題の解決のために行われるのであり，受入国側の都合を反映しているのは当然である。一方で，受入国側の移民政策は，移民送出国側の社会にも影響を与える。大量の人口流出は，送出国自身の労働力の減少につながるが，移民送出地域の経済が移民の送金によって成り立っている場合，主な受入国が制限的な移民政策を実施すれば，送出国の経済に影響が出る。そのため，受入国の移民政策の変化は送出国側にとって重要な問題となる。

第二次世界大戦後，イギリスの労働力不足は，植民地や新コモンウェルスからの移民が埋め

ていったが，これらの地域の人々は第二次世界大戦以前からイギリス帝国内外に流出し，第二次世界大戦中もイギリスの軍需産業を支えていた。その経験が第二次世界大戦後にも引き継がれ，これらの地域の人々は出稼ぎ先としてイギリスを選択した。また，これらの地域の経済も，移民からの送金によって支えられてきた。そのため，送出国側は，イギリスでの自国出身者の状況や，イギリスの移民政策を注視していただろう。

そこで，本研究では，新コモンウェルス諸国側の視点に着目し，新コモンウェルス諸国側の意識とイギリスの意識がどのように交差して，イギリスの移民政策に反映したのかを検討する。

帝国理念の反映ともいえる 1948 年イギリス国籍法のコモンウェルス市民の権利が 1962 年コモンウェルス移民法で制限されるというこの「目に見えた」転換を，「母国」イギリス側の視点だけでなく，新コモンウェルス諸国からの視点を踏まえることで，帝国解体，帝国理念の変容の問題をより広い視野で検討できる。

実施計画：

本研究の目標は，第一に，イギリスの移民政策に対する主要移民流出国である新コモンウェルス諸国の反応を明らかにし，イギリス政府にどのように受け止められたかを把握すること，第二に，新コモンウェルス諸国の反応や意見を，イギリスの移民政策にどのように反映したかを明らかにすることである。そのため，本研究は新コモンウェルス諸国，特にインド亜大陸からの流入数が増えた 1950 年代後半を重点的に検討する。ただし，使用史料はイギリス公文書館等のイギリス側の史料とする。

本研究の実施計画は以下の通り。

①イギリス公文書館，ロンドン大学で史料収集
②収集史料の分析
③公開講演会での成果報告
④論文による成果発表

２　研究の実施状況

⑴史料収集（2018 年度実施）

2018 年 9 月にロンドンのイギリス公文書館およびロンドン大学で資料調査を行った。この資料調査で入手した資料のうち、特に主なものは次の通りである。

a) イギリス公文書館：イギリスの移民コミュニティの状況や移民政策に対する新コモンウェルス諸国の反応についての史料

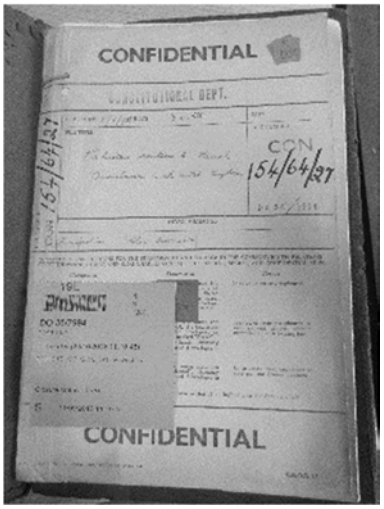
・DO35/7988, Notes on the visit of Mr BK Das, the Pakistani Minister of Labour, to the United Kingdom., 1958-1959.

・DO35/7994, Pakistan reactions to racial disturbances in UK, 1958.（史料①）等

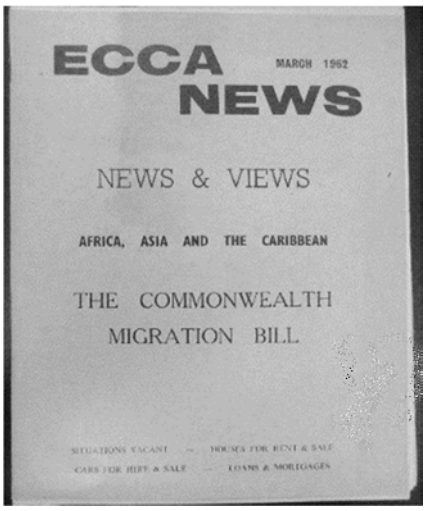
b) ロンドン大学：西インド諸島系移民のコミュニティの状況などに関する新聞記事等

・ICS158/28/1 Afro-caribbean people in the UK（1952－1961）（史料②）等

【入手資料の写真】



【史料①】



【史料②】

⑵論文、口頭発表等

本研究による成果発表は次の通りである。

a) 原田桃子「“移民問題”を考える～イギリスの移民政策を例にして～」（米子高専文化セミナー，2018 年 11 月 18 日）

b) 原田桃子「イギリスの入国管理政策の展開と移民送出国」（東北学院大学研究ブランディング事業公開講演会「第二次大戦後のコモンウェルスの再編と変容」，2020 年 1 月 25 日）

c) 原田桃子「第二次世界大戦後におけるイギリスの移民政策の変化と新コモンウェルス諸国」『米子工業高等専門学校研究報告』第 55 号，2020 年 3 月

このうち、b)はブランディング事業内の公開講演会として実施された。

ここでは、第二次世界大戦後のイギリスへの移民の流入に関する問題を取り扱った。当時、イギリスへの入国と定住の権利を保障されていた旧植民地出身の移民が急増しており、イギリスの戦後復興の労働力となったが、旧植民地からの移民は、イギリス社会で人種差別を受け、のちに、政府により入国と定住の権利を奪われていく状況を背景として、移民を送り出す旧植民地諸国の側が、自国から流出する移民の存在やイギリス政府の対応をどのようにみていたのかを検討した。これと併せて、移民を受け入れるイギリスは、旧植民地諸国の反応をどのように受け止めていたのかを論じ、イギリスの入国管理政策の展開を移民流出入国双方の視点から考察した。

３　成果と展望

成果：

上述の本研究の目標に対して，成果を以下の通りまとめる。

まず，イギリスの移民政策に対する新コモンウェルス諸国の反応であるが，特にインド，パ

キスタンからはイギリスの制限政策に対して協力姿勢が見られていたことが明らかになった。

1950 年代のイギリスでは，新コモンウェルス諸国からの移民を法的に規制しなかった，パスポート・コントロールという水面下での規制政策が行われていた。一方，パキスタンは，インドとの対立を考えれば成人男子の流出を認めるわけにもいかず，出移民抑制政策を行っていた。そのため，イギリス政府の要求を拒否する理由もなく，自国民の「コモンウェルス市民」としての権利が制限されることも黙認していたのである。この姿勢は，1958 年にイギリスがパスポート・コントロールの強化を依頼した際にもみられた。パキスタンにとって，自国民が，その存在故にイギリス社会で差別に晒されることに対して，そもそもイギリスに行かないという選択肢しか解決の道が無いことにも，一定の理解を示していたといえよう。同様の見解は，パキスタンと同様パスポート・コントロールに協力姿勢を見せたインドにもみられることだった。

一方，イギリス政府は，このような水面下での移民流入規制政策の実施に対して，インド・パキスタンの姿勢に頼っていたといえる。1950 年代，イギリス政府は，西インド諸島にはパスポート・コントロールへの協力を強く要請していない。西インド諸島側は，インド・パキスタンに比べイギリスへの移民流出数は多かったが，パスポート・コントロールの実施には協力できない姿勢を示しており，イギリス側も西インド諸島の経済状況を考え，パスポート・コントロールを要請できなかったのである。

さらに，新コモンウェルス諸国の反応・意見の，イギリスの移民政策への反映についてであるが，これについても関連性が明らかになった。1962 年コモンウェルス移民法の制定にあたり，インド，パキスタン両政府の方針転換が，影響を与えていたのである。

特に，パキスタン政府は，1960 年代に入り，自国からの移民が問題なく労働市場に吸収されていることをイギリス政府に訴え，パスポート・コントロールの厳格化に難色を示している。また，インドにおいてもパスポート・コントロールが違法判決を受け，これ以上は実施できないこともイギリス政府には伝わっていた。こうした両国の政策転換は大きく，イギリスにとっては痛手であった。移民送出国側である新コモンウェルス諸国，特にパキスタンでは，自国の出移民政策と同じ方向を向いている限りでは協力できていたが，1960 年代に入り方針を転換し，パスポート・コントロールを行わなくなった。新コモンウェルス諸国の協力を得られなくなったことで，イギリスのヒトの移動にかかわる帝国理念は維持できなくなり，法的な移民規制を導入せざるを得なくなったのである。

展望：

本研究において，以上のことを明らかにした。しかし，本研究では，独立を果たしたばかりで，新たに「国家」を作らなければならないなかで，「コモンウェルス市民」という存在，つまり「帝国理念」の遺産をどのように考えていたのか，といった思想と現状の関連性を追うまでに至らなかった。1950 年代という脱植民地化が加速し，新たな「コモンウェルス」の在り方が模索されていたなかで，「コモンウェルス」とは何だったのかを考えるためにも，これは今後の課題としたい。

⑸　20 世紀初頭の中欧構想と民族観の研究

研究代表者：杵淵文夫

1　研究内容

概要：

本研究は 20 世紀初頭のドイツおよびオーストリア=ハンガリーにおける中欧構想（Mitteleuropa）の形成とその背景にある民族観を取り扱った。中欧構想は一般に、それがドイツ支配下での中央ヨーロッパ地域の統合を含意するという点で、ドイツ民族主義の観点から理解される。いわば、「ドイツ圏」がドイツ帝国を中核として外部の他文化圏へと侵入・包含しながら拡大・支配していくようなイメージである。本研究が問うのも、その点である。

具体的な研究対象としては、20 世紀初頭に組織的活動を展開することとなる「中欧経済協会（Der Mitteleuropäische Wirtschaftsverein）」（以下「協会」）とその出発点となる構想を取り上げた。すなわち、この団体の活動の展開を明らかにすると同時に、その設立と活動に深く関与した経済学者ユリウス・ヴォルフ（Julius Wolf）の構想及び民族観に焦点を当てた。

中欧構想の研究状況は多岐にわたるため、ここでは直接の先行研究に言及するにとどめる。「協会」やヴォルフについては Kiesewetter 氏や藤瀬浩司氏の研究があり、本研究でも両氏を活用した。既存の研究では、ヴォルフは経済領域に特化した中欧の経済統合を提唱したとされている。これに対して、中欧構想は「ドイツ性」と密接に結びつくという上述の定説が想起される。そのため、ヴォルフの中欧構想と彼の民族観の関係はどうなっているかという問題がここに残されている、と言える。本研究は、ヴォルフの民族観を解明し、彼の中欧構想及び「協会」の活動に位置づけることを研究の主眼とした。

研究目的：

ブランディング事業との関連で見ると、本研究の課題は、ドイツ性を帯びる「中欧」が他の周辺地域へ拡大しようとする時いかなる民族意識にもとづいてどのような地域圏を形成しようとしたのかを明らかにすることである。ところで、人文学研究部門の課題は「普遍的な帝国と地域が各時代の反発と融合の中でいかなる秩序を生み出してきたのかを明らかにし、東北の地域性を世界史的な視野の中で把握できるようにするための参照軸を提供すること」(私立大学研究ブランディング事業計画書 3 頁）である。本研究は、20 世紀初頭ヨーロッパを舞台にドイツの他文化地域への目線を論じることで、ほぼ同時代の日本の東北地方におけるキリスト教伝道をより深く理解するための参照軸を与える意味をもつ。

近代ドイツ史研究の文脈において、本研究はヴォルフの中欧構想と民族観との位置関係を解明するものとなる。これまでは民族的な側面が希薄と理解されてきたものの、本研究によってヴォルフはドイツ民族主義の観点から中欧構想の思想地図の中に位置づけられることとなる。

実施計画：

⑴　実施目標：

実施目標として、２つの段階を設定した。第一に、全体的な展開を対象とする。すなわち、

20 世紀初頭ドイツ及びオーストリア=ハンガリーにおける中欧構想の提唱から「協会」設立やその後の活動の展開を把握する。第二に、主にヴォルフの著作物を検討し、彼の民族観を解明するとともに、彼の中欧構想との関係を明らかにする。この２つの段階を順に実施することで、研究目的に到達することを計画した。

⑵実施計画：

上の実施目標を次のように実行することを計画した。すなわち、主として、一つ目の実施目標は 2016～18 年度に、二つ目の実施目標は 2019 年度以降に従事することとした。

2016～18 年度　研究課題の調整、基礎的な研究文献の収集・精査

2018 年度　研究の中間的総括

2019 年度　現地資料館での史料調査収集

2019～2020 年度　研究全体の総括及び公表

２　研究の実施状況

⑴ 研究課題の調整、基礎的な研究文献の収集・精査（2016～18 年度）

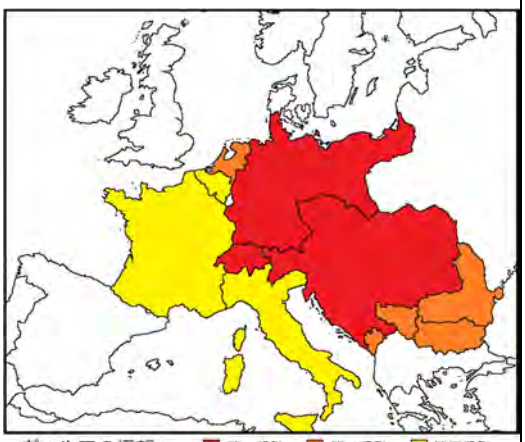
2016 度は研究ブランディング事業全体および人文学研究推進部門の体制づくりに主に取り組むこととなった。本部門の構成員との連携を考慮して、研究テーマおよび研究課題を調整した。以後、2017 年度及び 2018 年度の部門研究会における調整や確認を踏まえて、上述のような研究課題を設定するに至った。

研究の実際の作業は、この研究課題の調整と並行しつつ、2017 年度に開始された。最初に、第一の実施目標を達成するべく、ヴォルフの中欧構想の提唱から「協会」設立及び活動までの全体的な過程を明らかにするのに必要な史資料を集めた。

主な研究文献は、Kiesewetter の著書（*Julius Wolf 1862-1937：zwischen Judentum und Nationalsozialiemus*, Franz Steiner Verlag, 2008）、Ursula Ferdinand や藤瀬浩司氏の論文である。主な史料は、起点となったヴォルフの著書（Julius Wolf, *Das Deutsche Reich und der Weltmarkt*, Gustav Fischer 1901）、彼の刊行した専門誌（*Zeitschrift fur Socialwissenschaft*）、「協会」の刊行物（*Veröffentlichungen des mitteleuropäischen Wirtschaftsvereins in Deutschland*, Heft. 1-17, 1904-1917）、ドイツとオーストリア＝ハンガリーの経済団体等の機関誌、新聞雑誌記事等である。

以後 2018 年にかけて、先行研究を踏まえつつ史料の分析を進め、世紀転換期以降に中欧構想がドイツとオーストリア=ハンガリーで注目された歴史的な

Julius Wolf (1862–1937)



背景を指摘しつつ、ヴォルフが中欧経済統合計画を 1901 年に提唱してから 1904 年に「協会」設立に至るまでの過程、及び「協会」の初期の活動内容を整理した。

⑵ **研究の中間的総括（2018 年度）**

本部門の研究上で連携する北村厚准教授（神戸学院大学）とともに、研究内容の途中経過の総括を兼ねて中間報告を行った。その機会として、本部門が連携する東北学院大学ヨーロッパ文化総合研究所の公開講演会を活用した（**「世紀転換期ドイツ・オーストリアにおける「中欧」」公開講演会　20 世紀前半のヨーロッパ統合構想―中欧からヨーロッパへの道―、東北学院大学土樋キャンパス、2018 年 12 月 1 日**）。

20 世紀初頭にヴォルフが中欧構想を提唱した時代背景としては、1897 年以降のドイツの関税論争やアメリカ合衆国のディングレー関税法などの要因が浮上した。また、彼の中欧構想は関税同盟を避ける点に特徴があることや、三段階での統合拡大を提唱していたこと（前頁他図参照）、各国政財界の支持を集めて 1904 年以降にドイツ、オーストリア、ハンガリーで姉妹団体が設立されたことを指摘した。さらに、ヴォルフはアメリカをヨーロッパの経済的脅威として捉え、ヨーロッパ諸国が連携して対抗することを統合の推進力としていたことを明らかにした。この中欧構想において民族の問題はほとんど触れられず、経済領域の統合に特化していたことも確認できた。この報告にもとづく論説は専門誌の特集として掲載された（**「世紀転換期ドイツとオーストリアにおける中欧構想」『ヨーロッパ文化史研究』第 21 号、2020 年 3 月**）。

⑶ **現地資料館での史料調査収集（2019 年度）**

2019 年度からは、第二の実施目標である、ヴォルフの民族観及びそれと中欧構想との関係の解明に着手した。中間総括を踏まえて「協会」の展開をより明確に把握するという狙いもあったが、主としてヴォルフの著作物を入手するべく、2018 年 8 月にドイツのベルリン国立図書館（Staatsbibliotek zu Berlin、下の写真左）と連邦公文書館（Bundesarchiv in Berlin-Lichterfelde、下の写真右）で所蔵物の調査と収集を行った。

両資料館では、①ヴォルフの初期（19 世紀末～20 世紀初頭）の雑誌掲載論文数十点、②「ドイツ中欧経済協会」の意見書 2 本（Denkschrift detreffend die Neuregelung der handelspolitischen Beziehungen Deutschland zu den Vereinigen Staaten von Amerika, 1905 、 Denkschrift detreffend die Neuregelung der handelspolitischen Beziehungen zwischen Deutschland und Argentien, 1906 他）、③④ドイツ帝国政府の公文書 500 点以上（連邦公文書館：Bundesarchiv R901 2500、Bundesarchiv R901 7556、Bundesarchiv R8034 II 7993、Bundesarchiv R8034 II 7994）、その他関連経済団体の刊行物などを、文献内容を調べた上で撮影ないしスキャンによって入手した。（丸数字は下の「収集資料例」に対応）

①ヴォルフの初期の論文

Die neue preußische Domänenpolitik.

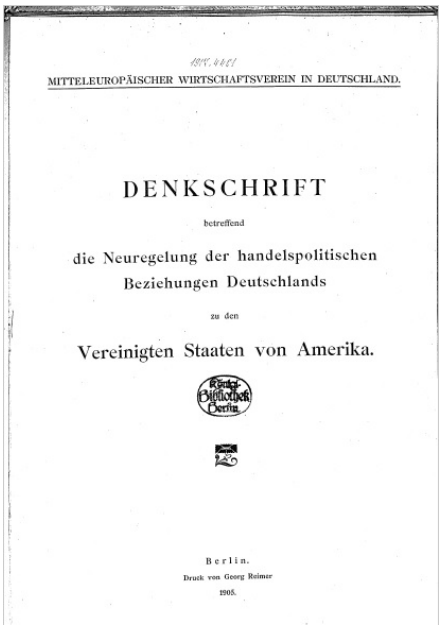
Vortrag auf der Glatzer Versammlung der Vaterländischen Gesellschaft.

Das Jahr 1902 ist geeignet, in der Geschichte der preußischen Domänenpolitik Epoche zu machen. Nachdem der preußische Domänenbesitz sich während des vorigen Jahrhunderts, kurze Perioden abgerechnet, fortlaufend vermindert hat, von 1820 bis 1866 für 210 Millionen Mark Domänengrundstücke veräußert worden waren und dann bis 1890 wieder für rund 50 Millionen, und noch seit 1890 im Jahresdurchschnitt die Einnahme aus Verkäufen rund 2½ Millionen Mark gewesen war, erlangt jetzt eine Vorlage Gesetzeskraft, derzufolge in nächster Zeit 100 Millionen Mark für Einrichtung von Domänen aufgewendet werden sollen. Das ist gegenüber den über 300 Mill., die im 19. Jahrhundert — bei Rücksichtnahme auch auf die Jahre vor 1820 — verloren gegangen sind, kein zu hoher Betrag, aber es ist doch der höchste, der in der preußischen Geschichte für Ankauf von Domänen je ausgesetzt worden ist. Friedrich Wilhelm I. kaufte für 15 Mill. Mk. Domänen, Friedrich der Große für 75 Millionen.

Die Anweisung jener 100 Millionen für den gedachten Zweck ist Gegenstand des zur Bekämpfung des überhandnehmenden Polentums zu erlassenden Gesetzes. Dasselbe zerfällt bekanntlich in zwei Teile, in einen ersten, wonach, nachdem früher schon 100 Millionen und dann wieder 100 Mill. für die Ansetzung deutscher Kolonisten in Posen und Westpreußen ausgeworfen worden waren, weitere 150 Millionen für diesen Zweck flüssig gemacht werden, und einen zweiten, wonach 100 Millionen der Regierung zur Verfügung gestellt werden sollen, um in jenen Provinzen Güter zur Verwendung als Domänen oder Forsten zu kaufen. Ich beabsichtige nach dem Vorgesagten an diesen zweiten Teil des Gesetzes einige Bemerkungen zu knüpfen, nicht mit Rücksicht auf ihren politischen, sondern auf ihren volkswirtschaftlichen Charakter, mit Bezug auf welchen sie bisher nur ganz gelegentlich beleuchtet worden sind.

In der Presse hat die Absicht, 100 Millionen dem Domänenankauf zuzuwenden, im allgemeinen aus dem volkswirtschaftlichen Gesichtspunkt keine günstige Beurteilung gefunden. Man erklärte, sich auch diesen Teil des Planes aus nationalen Rücksichten gefallen

②中欧経済協会の刊行物



MITTELEUROPÄISCHER WIRTSCHAFTSVEREIN IN DEUTSCHLAND.

DENKSCHRIFT

betreffend

die Neuregelung der handelspolitischen Beziehungen Deutschlands

zu den

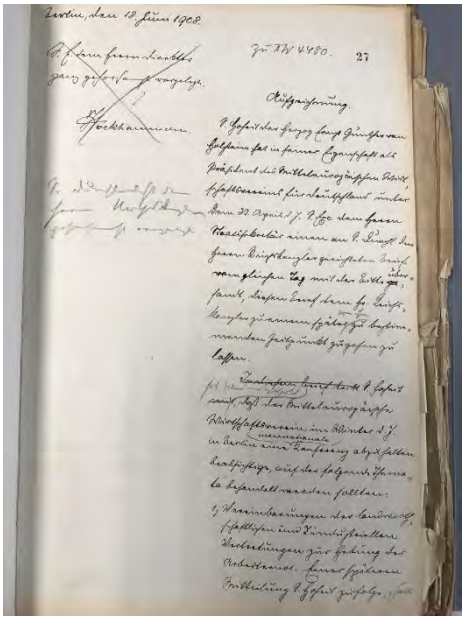
Vereinigten Staaten von Amerika.

Berlin.

Druck von Georg Reimer

1905.

③ドイツ政府の「協会」関連文書



④ドイツ政府作成のスクラップ

⑷ **研究全体の総括及び公表（2019～2020 年度）**

帰国後から 2020 年度にかけて、実施目標の第二点目に着手した。第一に、ヴォルフの論稿を精査し 20 世紀初頭の問題関心の傾向を分析した。彼が民族や人種の問題を論じた箇所を抽出し、ヴォルフの民族観を検討した。第二に、比較対象の軸として、同時代の「全ドイツ協会」など大規模な民族主義団体の中欧構想とその民族観を検討した。これに関して、東北学院大学が 2020 年度まで本事業を延長したため、西洋近現代史のデータベース「The Making of the Modern World, Part III」を導入し、収録の研究文献をこれに活用した。その結果として、ヴォルフの民族観を把握するとともに、彼の中欧構想との関係を検討した。

実施目標の第二点目に関する検討結果の要点を記すと以下の通りである。第一に、ヴォルフは帝国主義時代の人種観を反映して、ヨーロッパ民族の優越を意識していた。第二に、その優越を、周辺地域例えばドイツの東方への拡大の能力として位置付けていた。第三に、新興経済大国としてのアメリカ合衆国の台頭を移民したヨーロッパ系民族の混合の結果として理解していた。第四に、世界市場競争におけるヨーロッパにとっての脅威としてアメリカを捉え、これに対抗する手段としてイギリスとドイツを中心とするヨーロッパ諸民族の統合に言及していた。

最終的な研究結果発表の場として、当初は 2020 年度に北村厚氏らとの講演会も検討していたものの、新型コロナウイルスの流行によって見通しが立たなくなったため、これは中止された。ただし、「ドイツ現代史研究会」において発表の機会を得たため、ここで本研究の成果の一部を口頭で発表した（**「世紀転換期オーストリアの通商政策論：オーストリア工業と中欧」ドイツ現代史学会（第 42 回大会 個別報告Ⅱ、2020 年 9 月 26 日**）。また、本研究の成果は専門の学術誌上で公表する予定である。

３　成果と展望

成果：

本研究の成果は以下の通りである。第一にヴォルフの中欧構想や「協会」の活動を明らかにしたものの、そこには民族に関する論及を見出すことはできなかった。第二に、世紀転換期前後のヴォルフの問題関心を調べると、民族等を論じた論稿を幾つか発見できたが、それが彼の思想の中で中心的位置を占めていたとは言い難かった。彼の民族観は、ヨーロッパ系特にゲルマン系民族の優越を意識しつつも、民族の純化ではなく混合を重視する点で特徴的と思われた。第三に、この民族観は、彼の中欧構想の特徴である「アメリカ脅威論」などと結びついていた。彼が「中欧合衆国」を中間的目標として、「ヨーロッパ合衆国」を最終目的として提唱したことは知られているが、それが民族的な観点から意味するところが、本研究によって一層正確に理解できるようになったと思われる。

以上から、ヴォルフの中欧構想も彼独自の民族観を背景に持っており、経済領域に特化した統合構想ではなかったことが明らかとなった。これは自分を含めた従来の見解を修正する結論であった。

展望：

本研究目的すなわちブランディング事業の人文学研究推進部門の課題の面では、次のように結論できよう。本研究が事例として取り上げたヴォルフの中欧構想は、全ドイツ連盟の中欧構想などと比べると民族主義の側面は抑制されていると言われているが、それでも、中核のドイツから周辺の他文化圏へ統合範囲を拡大する際には、自らの「優越性」を自明とする傾向がみられた。

19 世紀から 20 世紀初めの時代において、ある文化や文明が拡大しようと他文化の地域へ入る時にいかなる意識を内包している可能性があるのかを理解しようとする際に、本研究はその参照軸の一つを提供するものとなると思われる。

⑹　ヴァイマルからナチズムへの「中欧」の継承と変容

研究代表者：北村厚（神戸学院大学准教授）

１　研究内容

概要：

本研究は、ヴァイマル共和国期からナチ期への外交政策における「中欧」構想の連続性と断絶性について考察を行う。平和主義的に展開されたシュトレーゼマンのポーランドでのドイツ人マイノリティ保護政策と通商条約政策が、基本的にはナチ初期の外交政策に引き継がれるも、マイノリティ保護を名目とした「全ドイツ」的宣伝と広域経済圏構想へと変容していく論理を明らかにする。

活動目的：

概要において示したドイツ外交のマイノリティ保護政策と広域経済圏構想の 2 つの観点のうち、本年度の活動では広域経済圏構想、つまり「中欧」の経済的支配に向けたナチの諸構想について研究を進めることを目的とした。これについて、ヴァイマル共和国期の外交政策から連続するのか転換しているのか、そのカギを握ると考えられるのが、中欧諸国における関税同盟や経済同盟の諸構想である。ナチ政権は中欧を経済的に従属させたいと考えていたが、中欧諸国はイタリアの主導権のもと経済同盟を結成することでドイツの影響力を排除しようと考えており、ドイツとイタリアとの「中欧」をめぐるせめぎあいがあった。ナチとファシズムとの対立は 1935 年ごろまで続き、ファシズムのエチオピア侵略から状況が変化する。本活動では、第二次世界大戦の構図とは異なるオルタナティヴとしての独伊対立に着目し、ファシスト・イタリアの「中欧」が成功する可能性と、その際のナチ・ドイツ外交のオルタナティヴについて考察することを目的としている。

実施計画：

本活動では、事業費を活用し、ドイツにおける資料収集を行い、活動目的を達成するために必要な一次史料の収集と分析を実施することを目標とする。

まず、国内で調査可能な刊行史料集および研究書によって研究し、ベルリンの連邦文書館(Bundesarchivu Berlin-Lichterfelde)および外務省政治文書館(Politischer Archiv des Auswärtigen Amts)での調査と史料収集を行う。帰国後に収集した文書を順次分析する。

２　研究の実施状況

活動報告：

2018 年 8 月 25 日から 9 月 2 日まで滞在し、そのうち文書館が開館している平日 8 月 27 日から 8 月 31 日まで史料調査を行った。当初、連邦文書館（Bundesarchiv）での調査をメインに考えていたが、そこでの成果が不十分だったので、外務省の外交文書館（Politisches Archiv des auswärtigen Amts）での調査も行ったところ、十分な成果を得ることができた。

2019 年 2 月 23 日から 28 日まで、オーストリア・ウィーンの国立公文書館（Österreichisches

Staatsarchiv）を訪問し、史料調査を行った。ここではベルリンの外交文書館で入手した史料をオーストリア側から把握するための史料を収集し、十分な成果を得た。

成果：

連邦文書館ではナチ・ドイツにおける「中欧」構想に関する史料をいくつか集めたが、外交史料としては不十分だったので、外務省連邦文書館での史料収集にあたった。その結果、1930年から36年までの伊墺関係の外交文書（資料番号R72814-72815）、その間の伊墺洪経済同盟交渉に関する外交文書（資料番号R240910-240912）、1934年のローマ議定書に関する外交文書（資料番号R72774-72777）、1934年7月25日のオーストリア・ナチ党によるドルフス首相暗殺事件とそれに対する国際的反応に関する外交文書（資料番号73397-73400）を得た。これらはすべて許可を得て持参したデジタルカメラで撮影し、保存・整理した。そのファイルは2000枚を超える。

（写真１）

外務省政治文書館の資料：R72774 イタリア=オーストリア=ハンガリーのローマ協議　第1巻1934年の表紙

1934年のローマ議定書（イタリア=オーストリア=ハンガリー経済同盟）に関するローマ交渉および議定書をめぐる外交的影響についてドイツ外務省が入手・分析した資料が詳細に記されている。4巻1936年まで。

（写真２）

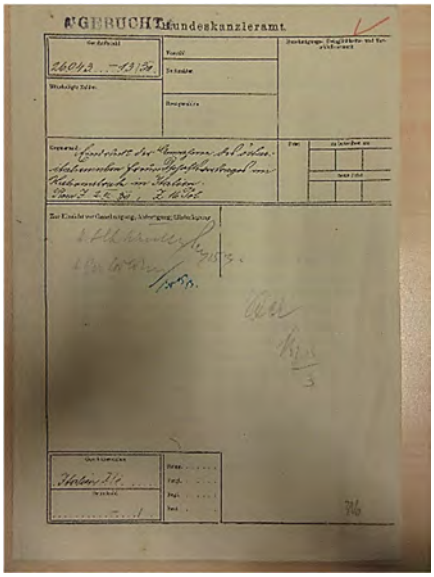
外務省政治文書館の資料：R240910 イタリア・オーストリア・ハンガリー間の通商関係調整 第1巻1931－34年の表紙

1934年のローマ議定書にいたる三国間の外交交渉についてドイツ外務省が収集した資料。上記R72774においては扱われていない議定書への交渉に対するドイツ外交当局のコミットを読み取ることができる。3巻1936年まで。

（写真３）

外務省政治文書館の資料：R73397　1934 年 7 月 25 日のドルフス暗殺事件に対するドイツ側の対応関連の文書

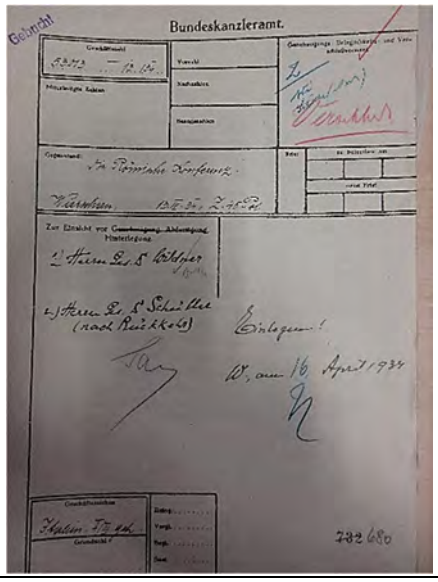
2019 年 2 月のオーストリア国立公文書館での調査では、1930 年代におけるオーストリア・イタリア関係に関する文書（資料番号 231）、1934 年 3 月 17 日のローマ議定書に関する文書（資料番号 359）、戦間期のハンガリー・イタリア関係の文書（資料番号 726）を得た。オーストリア国立公文書館でもデジタルカメラによる撮影が許可されており、1500 枚以上に上る膨大な史料を複写した。



（写真４）

オーストリア国立公文書館の資料：231

オーストリア・イタリア関係 1930－1932 年。1930 年のイタリア・オーストリア友好条約、1931 年の独墺関税同盟確変反応などが確認できる。



（写真５）

オーストリア国立公文書館の資料：359

オーストリア・イタリア関係 1933～34 年。1934 年のローマ会議に関するドルフス首相への報告書

３　成果と展望

現在、論文「ナチ政権初期におけるドイツ・イタリア対立――1934 年のローマ議定書を中心に――」（仮）を執筆し、学会誌に投稿するべく準備中である。また、本活動で収集した史料からは、さらにドルフス暗殺とその後の独伊関係についても興味深い事実が明らかになると思われるので、引き続き外交的分水嶺と言われる 1935 年 10 月のエチオピア侵略にいたる外交過程を追っていきたい。

なお、令和 2 年度以降に本ブランディング事業での活動を継続するかどうかは不透明であったが、科研費や大学の個別研究費を活用することで、研究活動を継続している。

海外調査で得た膨大な資料を分析するのに時間がかかり、また新型コロナウイルスの流行によって追加の海外調査が不可能になったため、論文等の研究成果を発表することができなかった。しかし、2021 年には「独墺関税同盟計画からナチ外交へ」（仮）として、この間の研究成果を学会で発表し、論文としてまとめる予定である。

⑺ヨーロッパのイスラーム教徒移民を通してみた宗教間相互作用の研究

研究代表者：石川真作

1　研究内容

概要：

現在ヨーロッパには、多くのイスラーム教徒移民が居住している。キリスト教世界としてのヨーロッパから「他者性」を付与されてきたイスラーム教徒は、いまやユダヤ教徒と並んで「内部の他者」となったのである。さらに、9.11 以降の国際政治の混迷の中、彼／彼女らを取り巻く状況は複雑さを増す一方である。本研究では、ドイツのトルコ系移民を主な対象とした現地調査によって、今やヨーロッパの不可分の一部となったその存在の両義性を照射しつつ、彼／彼女らと社会の相互作用を捉えたい。

目的：

本研究は、ヨーロッパ、アメリカ、オーストラリアなどいわゆる「西洋」へ移住したイスラーム教徒（マイノリティを含む）のトランスナショナルな社会形成を、グローバルな「帝国」（ネグリ+ハート）という分析枠組みに定位することを試みるものである。

実施計画：

当初次のような 3 年間の実施計画が組まれていた。

2018 年度

8 月　科研費共同研究「アレヴィー諸集団の境界と認識のコンフリクト及びエスニシティの変容－中東と欧米」による現地調査

10 月　科研費共同研究「EU における難民の社会統合モデル―ドイツ・ハレ市の先進的試みの可能性と課題―」による現地調査

2019 年度

11 月　科研費共同研究「EU における難民の社会統合モデル―ドイツ・ハレ市の先進的試みの可能性と課題―」による現地調査

2 月　科研費共同研究「アレヴィー諸集団の境界と認識のコンフリクト及びエスニシティの変容－中東と欧米」による現地調査

2020 年度

7 月　本事業による現地調査

11 月　科研費共同研究「EU における難民の社会統合モデル―ドイツ・ハレ市の先進的試みの可能性と課題―」による現地調査

2　研究の実施状況

活動報告：

2018年8月
・アルバニアのティラナおよびベラト近郊のベクタシ教団のテッケ（道場）および聖者廟を巡り現状を視察。
・フランス・パリの「アレヴィー文化センター」を訪問し、トルコの社会運動と連携した運動の展開を参与観察するとともに、センターの活動を聞き取り
・トルコ南部にて、ドイツに本拠を構えるデデ（アレヴィーの宗教的職能者）のトルコでの活動について聞き取りおよび参与観察

2018年10月
・ドイツ東部ザクセンアンハルト州のハレ市にて、モスクでの宗教的サービスについて、エジプト人およびシリア人スタッフに聞き取り
・難民支援の市民活動その他について、市内数カ所で参与観察

2019年11月
・ドイツ東部ライプツィヒ市のトルコ系団体にて、難民に対する宗教的サービスや支援について聞き取り
・ライプツィヒの日本人団体に難民支援についてインタビュー

2020年2月
・オーストラリア、メルボルン市およびシドニー市の「アレヴィー文化センター」を訪問し、設立の経緯および活動についてインタビュー

2020年度は事業の打ち切り及びコロナウィルス感染拡大により現地調査等なし

＜報告・出版等＞
2019年2月　国際シンポジウム「ドイツ・ハレ市における難民・移民の社会統合―ヒューマン・セキュリティのために「教育」ができること―」登壇
2020年3月　『アレヴィー諸集団の境界と認識のコンフリクト及びエスニシティの変容ー中東と欧米　報告書』大阪国際大学
（他　数点あり）

３　成果と展望

成果：
イスラーム世界から西洋世界への移民流入は、従来は近代世界システムにおける周縁から中心への国際労働力移動という枠組みで捉えられ、その後、移民のトランスナショナルなネットワーク形成という分析枠組みに移行した。今回、本事業に関わる議論において、「帝国」というキーワードを共有することにより、移民のグローバル・ネットワークを「マルチチュード」によるグローバルな主権獲得の試みとして捉えなおそうと試みた。

⑻　ラジオ番組「学院大ジンブンRadio」制作放送事業

事業代表者：杵淵文夫

出　演　者：杵淵文夫、阿久戸義愛、竹井英文、文学研究科大学院生及び文学部学生

事業協力者：今井奈緒子

１　事業内容

概要：

研究ブランディング事業「東北における神学・人文学の研究拠点の整備」の趣旨にもとづき、仙台市のコミュニティラジオと連携して東北学院大学で研究教育や諸事業を紹介する番組を制作し、主に仙台市の地域に向けて放送する。東北学院大学の研究教育活動を分かりやすい形で発信することにより、本学で実施されている研究の知名度やそのブランド力の向上に貢献する。

活動目的：

東北学院大学において神学および人文学分野の研究に関してどのような研究や教育がおこなわれているのか、専任教員および学生に直接語ってもらい地域社会及び全国に発信することが主な目的である。なお、実際の放送に際しては、「東北における神学・人文学の研究拠点の整備」で実施されるシンポジウムや公開講演会、礼拝など諸企画の告知も行い、このブランディング事業全体の周知にも協力することとなった。

実施計画：

2016 年度～2017 年度前半：ラジオ番組の制作及び放送に必要となる体制作りとして、ラジオ局の選定及び業務内容の調整、出演者との交渉や番組内容の検討を進めた。なお、後述のように、番組内容の検討の中で、放送音源の制作において音楽を流す関係から、本学教養学部の今井奈緒子教授の協力を仰ぐこととした。

2017 年度後半以降：各年度 30 分番組 12-13 回分（再放送含む）を収録・制作し、放送することを目標とした。また、収録に際しては、出演者との打ち合わせを入念に行うこととした。ラジオ放送の性質を考慮して、放送内容に関して過度に専門性を高くするのではなく、中高生やその他の初学者にも分かりやすく聞けるように留意することとした。

２　事業の実施状況

⑴ ラジオ番組の制作体制づくり

2016 年度～2017 年度前半には、ラジオ番組制作の体制作りを進めた。体制作りは主に次の 2 点を中心に行われた。

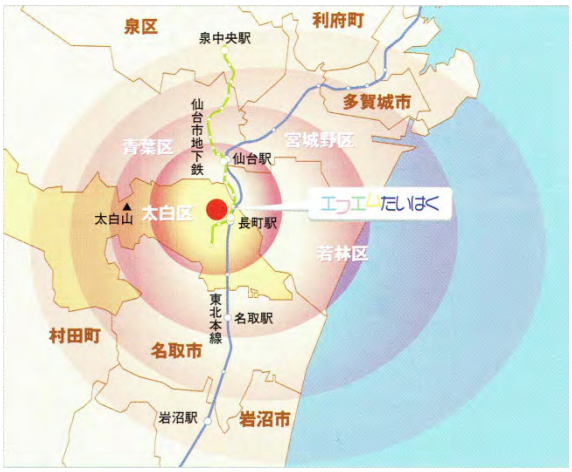
1 点目は番組を制作するラジオ局の選定である。本事業のタイプにもとづいて検討した結果、地域との連携を重視する観点から、仙台市内のコミュニティラジオ局で制作することとなった。その結果、地元住民が制作に関わる地域密着のラジオ局であること、次頁の図にある電波の範囲が地域の広範囲を含むこと（可聴域の住民数 50 万人）、同局の聴取率 0.1%から算出すると

500 人程度の聴取が想定されることを踏まえて、コミュニティラジオ局「エフエムたいはく株式会社」の協力によって番組の制作と放送を行うこととなった。

「エフエムたいはく」は周波数 78.9MHz のエフエムラジオ局である。2006 年 8 月に設立され、代表者は野田紀子氏である。このラジオ局放送番組の可聴領域は下図である（「エフエムたいはく」HP より）。当ラジオ局と業務内容を調整した上で、本学との間で業務契約を締結した。

2 点目は番組で研究を紹介する出演者の選出である。人文学研究推進部門の代表として杵淵文夫准教授が番組内の進行を担当することとなった。また、神学および人文学の領域を専門としている専任教員として、2017 年度は本学文学部総合人文学科の阿久戸義愛講師、2018 年度は同歴史学科の竹井英文准教授から出演の協力を得られることとなった。

番組内容については、阿久津講師には専門の哲学を、竹井准教授には日本の戦国時代の城研究をそれぞれテーマとして話してもらうこととなった。放送については、リスナーの聞き逃しの防止に関するラジオ局スタッフのアドバイスにもとづいて、本放送の他に再放送を行うこととした。



また、音源の制作に関して、ラジオ局スタッフから実際の放送音源にオープニング、BGM、エンディングの音楽を入れることを助言された。そこで、本学教養学部の今井奈緒子教授の協力を得て、番組内で流す音楽を選定することとなった。

⑵ 2017 年度の番組制作と放送

2017 年度後半からラジオ番組制作を開始した。2017 年度は予定通り、阿久戸講師が出演し、「はじまりの哲学」と題する全 6 回のシリーズとして制作を行った。音声の収録は「エフエムたいはく」のスタジオで 2017 年 11 月 29 日（水）、12 月 6 日（水）、2018 年 1 月 24 日（水）の 3 回に分けて実施し、その収録前には毎回およそ 1 時間の直前打ち合わせも行った。杵淵准教授及びラジオ局のスタッフが音源編集を担当し、出演者の音声のみの版と、それに音楽をつけた放送用の版の 2 種類の完成音源を制作した。

後者の完成音源は、2018 年 1 月から 3 月にかけて毎週火曜日 19：00 から 30 分番組として放送された。各回の放送日及び放送タイトルは、以下の通りである。

第 1 回「哲学とは、出会うこと、驚くこと」（2018 年 1 月 2 日、9 日）
第 2 回「社会で生きる：理想と現実」（1 月 16 日、23 日）
第 3 回「自分で選ぶ」（1 月 30 日、2 月 6 日）
第 4 回「自然と生きる」（2 月 13 日、20 日）
第 5 回「愛を考える」（2 月 27 日、3 月 6 日）
第 6 回「終わりから考える」（3 月 13 日、20 日、27 日）

⑶ 2018 年度の番組制作と放送

2018 年度は竹井英文准教授と、そのゼミに所属し戦国城郭研究に携わっている学部学生及び大学院生が出演した。「よくわかる戦国城入門」と題する全 6 回のシリーズとして番組を制作した。音声の収録は「エフエムたいはく」のスタジオで 2018 年 11 月 21 日（水）、2019 年 1 月 18 日（金）、2 月 12 日（火）の 3 回に分けて実施し、その収録前には毎回およそ 1 時間の直前打ち合わせも行った。杵淵准教授及びラジオ局のスタッフが音源編集を担当し、出演者の音声のみの版と、それに音楽をつけた放送用の版の 2 種類の完成音源を制作した。

後者の完成音源は、2019 年 1 月から 3 月にかけて毎週火曜日 19：00 から 30 分番組として放送された。これによって、ラジオ番組制作放送事業は完了した。また、各回の放送タイトル及び放送日は以下の通りである。

第 1 回「故郷のお城」（1 月 1 日、8 日）
第 2 回「“ほぼ誰も知らない”仙台の城」（1 月 15 日、22 日）
第 3 回「“ほぼ誰も知らない”宮城の城」（1 月 29 日、2 月 5 日）
第 4 回「お城の見方、楽しみ方」（2 月 12 日、19 日）
第 5 回「お城の学び方」（2 月 26 日、3 月 5 日）
第 6 回「お城の活かし方」（3 月 12 日、19 日）

３　成果と展望

成果：

東北学院大学で行われている人文学分野の研究のうち哲学と日本中世史の研究を、ラジオ番組を通じて仙台市民むけに発信することができた。実施計画通り中学生や高校生その他の初学者にも配慮した構成を取り入れつつ、専任教員の専門的な知見が随所で述べられる内容となった。とりわけ 2018 年度においては、竹井准教授とその指導を受けるゼミ生の出演によって、本学で行われている研究教育の内容と面白さが学生の目線から一層実際的かつ具体的にリスナーに伝えられるような番組内容となった。

番組の制作および放送の事業全体は、おおよそ当初の計画予定に沿ってスムーズに実施され完了した。放送回数は合計で 25 回（2017 年度 13 回、2018 年度 12 回）、放送時間数の合計は 12 時間 30 分となった。

また、放送終了後は東北学院大学の私立大学研究ブランディング事業のホームページ上で、出演者音声のみの版の音源をアップロードし、インターネット上で常に聞くことができるように整備した。これは事業の実施期間のみであるが、東北学院大学における研究教育のアピールのため、2018 年 6 月と 7 月のオープンキャンパスにおいてこの放送音源は活用された。

展望：

大学の研究教育をブランドとして社会にアピールする方法については多様なメディア形態が考えられる。ラジオを用いた本事業の取り組みは、そうした様々な方法の一つである。今回の事業を通じて、「音声のみ」というラジオの特徴（弱点）は再認識させられたが、他方で、数人のチームで実施できるという制作の相対的な手軽さも浮かび上がってきた。今回の事業はその実施モデルとして今後に向けて参照事例になるものと思われる。

⑼　ヨーロッパ近現代史若手研究会

事業代表者：杵淵文夫、渡辺昭一、佐藤滋、石川真作、池田亮、原田桃子

１　事業内容

概要：

研究ブランディング事業「東北における神学・人文学の研究拠点の整備」の趣旨にもとづくと、人文学の拠点を形成するためには研究環境を整備するだけでは不十分であり、人文学の将来を担う人材すなわち若手研究者の育成が必要である。さらに外部評価委員会による指摘を踏まえ、本事業では若手研究者を対象とする研究報告および討論に参加し活性化させることによって、人文学の研究拠点としての東北学院大学のプレゼンスの向上に貢献することとした。

目的：

若手研究者を報告者とする研究会に参加し、報告内容についての十分な議論を通じて学術的な知見を深めることが目的である。研究会の準備においては、ヨーロッパ文化総合研究所と連携する。さらに、報告者の編成においては、人文学研究推進部門の研究テーマ「地域主義と帝国」および仙台と全国の若手研究者の学術交流の側面も重視する。

実施計画：

2017～2020 年度。各年度 1 回実施する。報告者は毎回 4～6 人とする。

２　事業の実施状況

⑴ 2017 年度ヨーロッパ近現代史若手研究会

開催日：2018 年 1 月 20 日（土）、21 日（日）

会　場：東北学院サテライトステーション　　出席者：20 人

第一報告　渡辺雄太（東北大学大学院国際文化研究科 博士課程）「ジュール・フェリー改革期の公立初等学校教育における«patrie»の観念―1882 年から 87 年までの道徳・公民教育教科書の分析から―」

本報告が取り上げるのは、1881-1882 年のジュール・フェリーによる初等教育改革である。この改革では、従来の道徳・宗教教育からカトリック的側面を排除した道徳教育へと転換し、道徳・公民教育のカリキュラムで«patrie»の観念を教えることが明記された。先行研究において、第三共和政のイデオロギーとしてのパトリオティズムは議論されることはあっても、初等教育における«patrie»の観念はこれまで問題とされてこなかった。本報告は、初等教育の道徳・公民教育教科書を分析し、«patrie»の定義およびそれが内包する概念を分析することによって、ジュール・フェリー改革期の公立初等学校教育における«patrie»の観念を解明する。

第二報告　赤川尚平（慶応義塾大学大学院法学研究科 博士課程後期）「イギリスにおけるイスラーム認識とオスマン帝国―パン・イスラーム主義への対応としての「アラブ人カリフ

論」―」

イギリスは 18 世紀以降イスラーム地域を統治下に加え、19 世紀以降のオスマン帝国の崩壊過程で重要な役割を果たした。第一次世界大戦中の中東において相互に矛盾する協定を締結することとなるが、その政策決定過程は著しい錯綜状態にあった。この報告が取り上げるのはその背後にあるイギリスのイスラーム認識であり、研究対象として特に「アラブ人カリフ論」の論理に着目する。イギリス本国とカイロ当局とインド政庁の政策意図を視野に入れて、第一次大戦以前から継続するパン・イスラーム主義への対応の文脈から検討する。

第三報告　近藤百世（東北大学大学院国際文化研究科 専門研究員）「イランにおける中央集権化事業の進展―ガージャール朝期の利権譲渡と交通インフラ整備―」

19 世紀イランは、北からロシア、南からイギリスが進出を競う状態にあった。当時のガージャール朝は、1828 年のトルコマンチャーイ条約のように西洋列強諸国と不平等な通商条約を締結し、さらに国内の利権を西洋列強に譲渡することとなった。他方、世界的に人やモノの流れが高速化することとなる 19 世紀において、これはイランの近代化の端緒としても位置付けられている。この報告では、舗装道路の整備、鉄道建設、電信線敷設といった交通通信インフラに着目し、特にテヘラン＝ガズヴィーン街道の整備がイランの都市や政治体制にいかなる影響を及ぼしたのかを明らかにする。

第四報告　大谷実（同志社大学大学院経済学研究科博士後期課程）「総力戦体制とシンティ・ロマ―第一次世界大戦期ドイツ・バイエルンにおける政策展開を手掛かりに―」

第一次世界大戦が勃発すると、ドイツでも社会の不安定化を背景として、国内の秩序維持への懸念が高まった。例えば、銃後の犯罪、避難民の発生、闇市の横行、軍事施設のセキュリティであるが、これら戦時の治安問題と重なり合わされたのが、ドイツ国内のシンティ・ロマと呼ばれる人々である。本報告では、総力戦体制とマイノリティの社会的排除の在り様という大枠的なテーマの事例として、大戦中ドイツのシンティ・ロマを取り上げる。ドイツの警察史料を手がかりに、総力戦体制によってマイノリティの社会的排除にいかなる変化が生じたのかを明らかにしたい。

第五報告　佐々木淳希（京都大学大学院文学研究科 博士後期課程）「西ドイツ 1976 年共同決定法と民主主義―管理職員問題と労働者代表の選出規定―」

西ドイツで 1976 年に成立した共同決定法は、従業員 2000 人以上の株式会社において企業の意思決定に従業員の代表も参加する制度を規定した法律である。同法は「社会的市場経済」と呼ばれる労使協調的なドイツの社会・経済秩序の特徴の一つとして、経済・経営史の観点から注目されてきた。ただし、同法はそれ以降、新自由主義的傾向を強めた自由民主党や、

保守系のキリスト教民主・社会同盟の優位、さらにドイツ労働総同盟等の動員力の低下によって後退をすることとなる。この報告では、政治史的な観点から 1976 年共同決定法を検討する。すなわち、直接民主主義的な「参加」要素を導入することで、戦後民主主義を安定させようとした取り組みの一環として、同法を再評価する。

⑵ 2018 年度ヨーロッパ近現代史若手研究会

開催日：2019 年 3 月 28 日（木）、29 日（金）

会　場：東北学院サテライトステーション　　出席者：15 人

第一報告　阿部竹浩（東北大学大学院博士課程）「イギリス左派と脱植民地化―労働党帝国問題諮問委員会を中心として」

これまでの研究の蓄積により、イギリスの帝国支配は、自由主義者によって批判されると同時に、自由主義的理念に支えられていたことが明らかにされてきた。さらに近年の研究は、20 世紀の脱植民地化の過程にも視野を広めつつある。すなわち、「文明化の使命」、トラスティーシップ、マイノリティの保護、責任政府やドミニオンの地位の実現、自由貿易主義など、時に矛盾する多様な自由主義的帝国統治のレトリックが、帝国の解体局面においてどのような意味を持ち、いかなる役割を果たしたのかが問われているのである。以上のような研究動向の中で、従来帝国問題への関心が低いと言われてきた 20 世紀のイギリス左派、とりわけ労働党の帝国＝コモンウェルス観を検討する必要がある。確かに労働党は創設当初こそ帝国問題に関心を示さなかったものの、戦間期のマクドナルド政権、第二次大戦後のアトリー政権下で脱植民地化の傾向に対処する中で、具体的な帝国＝コモンウェルス政策を策定していった。

本報告では、1924 年から 1950 年まで活動した労働党帝国問題諮問委員会における議論を検討することで、イギリス左派の帝国＝コモンウェルス観を論じることにしたい。帝国問題諮問委員会は、書記を務めたレナード・ウルフをはじめとする帝国問題・国際問題の専門家を中心に構成され、党指導部に帝国政策を提言することを主な目的としていた。委員会の参加者たちは、自由主義的・社会主義的理念を掲げ、イギリスの帝国支配を時に批判し、時に支持しながら、実際の脱植民地化に対応していった。このような過程の検討によって、内在的に当時の諸状況に照らし合わせて、自由主義と帝国支配あるいは脱植民地化の関係の一側面を明らかにすることを試みる。

第二報告　千葉春香（京都大学大学院博士課程）「『書く』行為の歴史―近代イギリスにおける自伝を通じて―」

18、19 世紀のイギリスの文化を特徴づける 1 つは、多層な著者による盛んな著述活動である。名誉革命を通じて、人びとは当時発展し始めたコーヒーハウスなどで、政治についての活発な議論を交わしたが、そのような彼らの世情に関する関心をさらに煽ったのは、雑誌を

始めとする出版文化の発展であった。

近代イギリスの出版文化については、従来、貸本屋や廉価本の登場による読者層の拡大や出版プロセスなど、メディア論的な関心が寄せられてきた。しかし、肝心の「書き手」については等閑視されてきたと言って良いだろう。「著者」の概念や職業としての著述家が登場したのも当該期であり、「書く」という行為自体に大きな変化があったことは明白であるにも関わらず、である。そこで本報告では、当時盛んに出版された「自伝」に着目し、それらがどのような目的で書かれたのかを検討する。「自伝」的作品には、アウグスティヌスからルソーまで長い歴史があるが、イギリスでは autobiography は 18 世紀になってはじめて文学ジャンルとして意識され、労働者階級、女性、奴隷など、様ざまな身分・階級を巻き込んで隆盛したのである。当時発行の“The Edinburgh review”や“The quarterly review”などの雑誌に掲載された自伝やその書評を中心に、著述の背景や意図を、当時の社会背景や思想とも関連させつつ考察する。

さらに本報告は、近年注目されている「エゴ・ドキュメント論」とも深い関わりを持つ。エゴ・ドキュメントとは、従来文学研究においてライフ・ライティングと呼ばれる、自伝や日記などの私的な個人によって書かれた文書をさす。ランケ以降、エゴ・ドキュメントは史料としての信憑性が疑われてきたが、ローレンス・ストーンの「物語の復権」などの議論によって 1970 年代から再評価が始まり、ポストモダニズムやポスト構造主義歴史学とも密接に関わりながら、歴史における「主体」や「自己」の再検討のためにさらなる注目が集まっているのである。そのため、本報告は、歴史学における「史料」のあり方について問い直すものでもあるだろう。

第三報告　板倉孝信（新潟大学特任助教）「リヴァプール内閣期における英国の財政＝外交ジレンマ」

報告者は、19 世紀前半の英国に関する財政史研究と外交史研究が、対照的な英国像を描いてきた点に注目し、軍事費の視点からその架橋を試みてきた。当時の英国は列強中で突出した経済力を誇ったが、同時に税収の過半を利払に投入する深刻な財政硬直化にも直面していた。そのため、債務不履行の回避を優先する財務側と、国際的優位の維持を優先する外務側の間で、平時軍備の増減をめぐる綱引が展開された。報告者はこの対立構造を「財政＝外交ジレンマ」と呼称し、国内外の環境変化がジレンマの強弱に与えた影響を追跡してきた。これを通じて、最強国であった英国があえて欧州協調を尊重し、列強諸国との全面戦争を慎重に回避した背景を探っている。

上記の内容を踏まえて、報告者は本報告でリヴァプール内閣期（1812～27 年）における英国の財政＝外交ジレンマに注目する。特にナポレオン戦争末期からウィーン体制初期という、英国の財政政策と外交政策が共に大転換を遂げたこの時期に、リヴァプール内閣がどのように対応したのかという点に光を当てたい。報告者は過去の研究で、この時期に外相を務めていたカスルレーとカニングが、下院指導者（下院での首相代行）を兼任することで、政府が提出した財政法案の通過に寄与していたことを指摘した。これに対して本報告では、同時期

に財相を務めていたヴァンシタートに注目し、彼が軍事費の削減問題などを通じて、対仏終戦前後の英国外交に及ぼしていた影響を検討する。卓越した外交手腕を誇る一方で、財政問題に強い関心を持たなかったパーマストンが、外相として本格的に活躍した 1830 年代と比較すると、当時の財相と外相は相互の政策に一定の理解を示していたと見られる。本報告において、ヴァンシタート財相が外交政策に配慮した財政運営を行っていたことを指摘できれば、1810～20 年代の財政＝外交ジレンマが比較的緩やかであったと考えてきた報告者の仮説を補強することができる。

第四報告　稲垣春樹（首都大学東京助教）「19 世紀前半イギリス領インド植民地における法、主権、間接統治」

近年のイギリス帝国＝植民地史研究において、法に着目する研究動向が高まりを見せている。特に、国際法史研究における自然主義法学から実証主義法学への移行に伴う国際法規範の変化に関する研究動向は、非ヨーロッパ諸国を国際社会から排除する国際法体系の形成に西欧諸国の植民地主義の経験が大きく影響していたことを明らかにしている。しかしながら、国際法学は言説分析による法理論家の分析が中心であり、各植民地における統治の実践と法規範の変化の関係についての研究は不十分である。これを踏まえて本稿は、イギリス領インド植民地における東インド会社と独立君主の藩王国の関係について検討する。分析の焦点となるのは、前植民地期の多層的な主権によって特徴づけられる藩王国との関係がインド人の法的実践によって受けた影響についてである。事例として、ハイダラーバードのニザームおよびアルコットのナワーブの事例を取り上げる。ニザーム領内の駐屯地シカンダラーバードにおいては、東インド会社軍に従軍する民間人が、東インド会社の軍事裁判所の管轄権を逃れるために、東インド会社とは独立に設立されていたマドラス市の国王裁判所を利用することで、東インド会社が保護するニザームの司法的な体内主権が侵害されるという事態が生じていた。多額の負債を抱えるアルコットのナワーブに対しては、独立君主であるにも関わらず、イギリスの国内法であるコモン・ローを適用する国王裁判所において債務取り立ての訴訟が頻発していた。これらの出来事は、間接統治の要である独立君主の司法主権を侵害するものであるとして、東インド会社の行政官に忌避された。以上により本稿は、実証法的国際法が想定するような支配＝被支配関係についての想定が、管轄権問題に端を発して、植民地政府の意図に反して、現地人の訴訟当事者の活動によって拡大・滲透していったことを指摘する。

⑶ 2019 年度ヨーロッパ近現代史若手研究会

開催日：2020 年 2 月 27 日（木）、28 日（金）
会　場：土樋キャンパス　大学院棟 2 階ゲルハード記念室　　出席者：14 人

第一報告　藤本健太朗（東北大学 日本学術振興会特別研究員(PD)）「1920 年代後半におけるソ連の対日政策と満州事変」

1931 年の盧溝橋事件に始まる満州事変は極東をめぐる国際政治に大きな影響を与え、極東地方に領土と利権を有するソ連も、対応を迫られることとなった。

事件の勃発後、スターリンは厳正中立を指向し、日本に対するいかなる挑発も行ってはならないと指示した。これは、極東におけるソ連軍の編成が未熟であったことを考慮したためである。その後ソ連は、満洲国を承認しない一方で、1932 年に国民党政府と、1933 年にアメリカと国交を回復した。これら二国との国交回復は、ソ連中央が米中両国の外交態度に復交の兆候を見出したのが直接のきっかけであるが、彼らがこの復交で日本への牽制を意図していたことは明らかである。

上記のような対日警戒とそれに対する牽制は、満州事変によって新たに生じたものではない。ソ連は日ソ国交樹立後の 1920 年代後半にはすでに、日本勢力がソ連領に進出することを警戒し、その対抗策を模索していた。その中でも本報告では、満州事変前の 1929 年 4 月にソ連共産党中央委員会政治局が採択した対日政策案に着目したい。この政策案は、1920 年代後半にソ連が行ってきた対日牽制の集大成であり、アメリカ勢力を日本への牽制に利用することが初めて明示された。

先行研究では、満州事変の影響を過度に評価し、事変前後のソ連の対日政策が断絶しているかのように論じられている。本報告では、上記 1929 年の政策案をめぐる政策議論を通じて、1920 年代末のソ連の対日政策の意図を明らかにし、満州事変後の政策との連続性を検討する。これにより、戦間期ソ連の対日外交政策を、革命後から第二次大戦までの連続したものとして捉えることが可能になると考える。

第二報告　星野桃子（千葉大学大学院博士課程）「1980 年代初頭における西ドイツの対タンザニア援助政策―ココナツ開発プロジェクトをめぐる専門家の「問題」設定に着目して―」

開発および開発援助政策を対象とした歴史研究においては、主要な問題意識として、援助の与え手と受け手との間の権力作用および非対称性の問題に関心が集まり、開発の過程を何よりも不平等ないし不平等化の歴史として問う必要が認識されてきた。本報告は、これら開発援助における権力作用の多様な形態の一つとして指摘されてきた、開発政策の前提となる科学知・専門知識、あるいはその担い手である開発専門家の活動および見解に焦点を当てるものと位置付けられる。

具体的な分析対象として、本報告は西ドイツの連邦経済協力省（BMZ）の下部機関である技術協力公社（GTZ）の支援により、1970 年代末から 1980 年代を通じてタンザニアにおいて実施されたココナツ開発プロジェクトを取り上げる。そして、GTZ の専門家の問題認識やプロジェクト評価の過程を検証し、その「問題」設定の主体としての役割を問う。

史料は主に旧連邦経済協力省の二国間技術協力関連史料（コブレンツ連邦文書館所蔵）を用い、補足的に世界銀行のプロジェクト評価報告書を用いる。本報告では、とくにプロジェクトの初期段階における西ドイツ側（GTZ）の報告書を中心に分析を行い、主に専門家による対象地域の気候やココナツ生産・流通・消費を中心とした社会・経済状況の把握、それら

の地域的条件における開発のための障害要因の特定、具体的な目標設定、そしてプロジェクトの進展に関する評価を整理し、考察を加える。

分析を通じて、現在の開発政策における自明性、とりわけ市場および市場化を前提とした開発目標そのもの、またそれに基づく個々の課題設定、あるいはそのための「障害」要因の除去といった、主要な開発機関が提供する一連の「開発パッケージ」の基礎をなす知識体系の自明性を問い直すことを目的とする。

第三報告　小山誠南（東北大学大学院 博士課程前期 2 年の課程）「19 世紀中葉のアルザスにおける教育をめぐる動向—ファルー法（1850）制定に関して—」

本発表では、1850 年に成立したファルー法を中心に、フランス・アルザス地方の教育をめぐる動向について明らかにする。

アルザスとはフランス北東部に位置し、隣国ドイツと接する地方を指す。同地方は三十年戦争（1618-1648）終結後にフランスに編入し、また普仏戦争から数えて 4 度の帰属変更を経験するなどフランスでも特殊な存在となっている。宗教の状況からみても、本国ではカトリックが大多数を占めていたのに対し、彼の地ではカトリックが優勢であった一方で、プロテスタントとユダヤ教の信徒も一定数存在していた。こうした状況を民主主義の先取とする見方もある。よって従来のアルザス研究では、近世以前の文化的背景、あるいは後の帰属変更がもたらすナショナリスティックな側面に着目するものが主流であった。

これに対し、近代アルザスの教育史において重要なのはファルー法が制定された 1850 年前後、すなわち 19 世紀中葉である。というのも、« laïcité concordataire » と呼ばれる同地の政教関係下で、この法は宗教と教育の関係性を積極的に肯定し、影響力を発揮してきたからである。

とはいえ、近現代を通じてアルザスにおける教育を規定してきた同法は、現在でこそ彼の地で好意的に受け止められているが、その制定当初から好意的に捉えられていたわけではない。これは、1850 年頃にアルザスから選出された議員たちの活動を確認することで明らかになる。さらに入念に調べていくと、宗教に寛容な同地の状況やそれを基盤とする教育を保護すべく、社会主義的な主張が優勢であったことも判明した。これはある種の自己矛盾に陥っている状態であり、これを民主主義の実現と捉えることは難しく、アルザスを新たに捉え直す必要が生じる。

よって本発表では、ファルー法の成立過程とその内容について言及しながら、同時代のアルザス地方で選出された議員たちの活動について触れることにする。その際、同地における政教関係についても言及し、その特殊性についても、改めて定義することにしたい。

第四報告　佐藤夏樹（京都大学 助教）「ヒスパニック／ラティーノ社会と中米紛争」

本報告では、1980 年代の中米紛争、特にエルサルバドル内戦とその結果としてアメリカ合衆国に大量に流入したエルサルバドル「難民」の問題を、合衆国内のヒスパニック／ラティ

一ノ組織がどのように位置づけ、どのような活動を展開したのかを検討したい。そもそも、エスニック集団として「ヒスパニック」が公的に構築されたのは 1970 年代のことであり、それ以前はメキシコ系やプエルトリコ系といった出身国／地域ごとの集団としての意識が支配的であった。つまり、本報告が検討の対象とする 1980 年代は「ヒスパニック」という集団のアイデンティティを構築している途上にあったわけで、エルサルバドル「難民」が「われわれ」の一員として当然のごとく受け入れられるといった単純な構図は成り立たない。従って、上記問題設定は、ヒスパニック／ラティーノ・アイデンティティの構築過程を研究する上で非常に重要なものであるといえる。

具体的には、最大の「ヒスパニック組織」であり、ヒスパニックを代表すると自認していた League of United Latin American Citizens(LULAC)の活動を中心に検討したい。新たにヒスパニック組織となった LULAC はレーガン政権の中米紛争への軍事介入を痛烈に批判したのであるが、その背景には、ラテンアメリカの人々を「同胞」と捉える視点が存在した。ただ、そういった姿勢はヒスパニック／ラティーノの総意というわけではなく、LULAC 内部でも異論が存在した。そういった状況の下で、LULAC 執行部がどのような関与の論理を打ち出したのであろうか。また、エルサルバドル政府とゲリラ組織という内戦の当事者をどのように評価し、解決策としてどのようなものを想定していたのであろうか。

これらの問いを検討したうえで、最後に LULAC と他の「ラティーノ」組織との連携について、他組織との中米問題の位置づけの共通点と相違点が彼らの連携にどのような影響を与えたのか検討したい。

⑷ 2020 年度ヨーロッパ近現代史若手研究会

新型コロナウイルスの流行拡大のため、2020 年度の研究会は中止となった。

３　成果と展望

成果：

2017 年～2019 年度に毎年 2 日間ずつ、「ヨーロッパ近現代史若手研究会」は開催された。報告者数は 3 年間で 13 名、出席者は延べ 49 名であった。報告者 13 名のうち在仙の若手研究者は 5 名、仙台外は 8 名となり、仙台内外の研究交流の場としても編成された。報告 1 本あたり、80～100 分の時間を設けることで、報告内容の検討は十分に深められた。

本部門は研究会の実施においてヨーロッパ文化総合研究所と連携した。さらに本部門の構成員が例年のように出席し、報告に関する討論に積極的に参加した。

報告テーマに関しても、ヨーロッパ・キリスト教文化とその他の文化圏の接触、さらに受容と反発を取り扱う報告が設定された。とりわけ、2017 年度では、19 世紀以来のイギリスにおけるイスラーム認識を論じた赤川報告、近代イランにおける西洋化政策を論じた近藤報告、第一次大戦中ドイツのシンティ・ロマを論じた大谷報告、2018 年度では、イギリス左派の植民地論を論じた阿部報告、19 世紀イギリス領インドの植民地統治を論じた稲垣報告、2019 年度では、1920 年代ソ連の対日・満州政策を論じた藤本報告、戦後西ドイツのタンザニア開発支援を論じた星野報告、ドイツとフランスの国境地帯アルザス・ロレーヌを取り上げた小山報告、ア

メリカの難民とヒスパニック問題を論じた佐藤報告などである。それぞれ近代の東北地方における西洋文化の浸透と反発の経過と影響を考察する上での参照軸になりうる研究であった。

展望：

ヨーロッパ近現代史の若手研究者を中心とする研究会は、今後もヨーロッパ文化総合研究所において継続されていく見込みである。ヨーロッパ文化総合研究所が開催する研究会を通じて学術交流を活性化させることで、東北仙台の人文学研究の拠点として貢献を続けていく予定である。

４．地域研究推進部門

⑴　地域研究推進部門の事業概要

①事業の背景

地域研究部門においては、130 年以上の歴史を誇る東北学院の歴史的意義を、広く地域に公開することで、大学のブランド力を高め、あわせて地域自体の価値を高める活動を行ってきた。以下、具体的にその活動を紹介していきたい。なお予算の傾斜配分の関係上、当部門の主たる活動は平成 29 年度から開始した。

②事業の目標

地域研究推進部門では、創立以来 130 年以上にわたって地域社会と共に歩んできた東北学院の歴史に鑑み、東北学院の歴史を資産として打ち出すことで、地域社会に対しては大学のブランド力を強化し、さらに広く「地域社会にとっての公共財としての教育機関」という認知を広めることで、宮城県・東北地域そのものの活性化を図ることを目標として諸活動を行った。その活動の柱としては、以下のようなものを想定した。

・史料保存・調査活動

地域研究推進部門では、東北学院史資料センターと協同しながら後述する礼拝堂図面、あるいは後述する映像史料といった学内史料の調査・整理を進めた。

・公開講座による地域啓もう活動

地域研究推進部門では、これも東北学院史資料センターと共催・あるいは共同主催という形で、「平和憲法と鈴木義男」（2017 年 9 月 30 日）から「重要文化財『デフォレスト館』の価値について」（2019 年 9 月 28 日（土）14 時～17 時）を開催した。後者のシンポジウムには東北大学大学院工学研究科の野村俊一准教授に加え、足立裕司（神戸大学名誉教授）、是澤紀子（日本女子大学家政学部准教授）、後藤治（工学院大学理事長）、関口重樹（宮城県教育庁文化財化技術主幹）といった方々を講師に招き、デフォレスト館の価値について、地域住民の方々へも啓蒙できたと考えている。

・映像史料の補修・公開準備

地域研究推進部門では、後述していくように、東北学院 40 周年記念事業の一環として、1920 年代後半に撮影された映像（動画）の補修と４K 化を行った。この映像史料は、仙台を写した最古のものであり、まさに東北学院のみならず仙台・宮城・東北地方の姿を伝える貴重な資料である。

令和 2 年度には、ブランディング事業の一環として、同フィルムに適切な字幕を附した短編映画「東北学院の 40 年（仮）」を作成した。同映画は今後、対外的に公表し、さらに大学のブランド力の強化に資せしめる予定である。

⑵　地域研究推進部門の事業の実施状況

【平成 29 年度】

平成 29 年度においては、その活動を『東北学院の歴史』の編纂・出版活動に注力した。編纂会議を毎週行い（水曜日二時限目）、執筆・編集・校正を完了し、平成 29 年 10 月に『東北学院の歴史』を河北新報出版センターから出版した。同書籍は、丸善書店や蔦屋書店をはじめとして、仙台・宮城県内の書店で販売され、東北学院大学のブランド力の強化に大きく寄与したと自負している。

また、東北学院大学卒業生でもあり、クリスチャンでもあった鈴木義男の研究を進め、2017 年 9 月 30 日には、「平和憲法と鈴木義男」と題して、古関彰一（和光学園理事長）、油井大三郎（一橋大学名誉教授）らを招聘し、仁昌寺正一（本学経済学部教授）によるシンポジウムを開催し、150 名の来訪者を得た。

【平成 30 年度】

当年度においては、米国国立公文書館に保存されている GHQ 文書を中心とした東北学院関係資料の調査成果をシンポジウム「戦後平和主義と鈴木義男」において地域に還元することが出来た。

同シンポジウムでは、塩田純（NHK 文化･福祉番組部エグゼクティブ・プロデューサー）、岡田一郎（日本大学非常勤講師）を招きそれぞれ平和憲法と鈴木の関係、日本社会党における鈴木の評価について、そして松谷基和（東北学院大学教養学部准教授）からも GHQ 文書における東北学院と鈴木義男関係文書の報告を含めることが出来た。来場者は 130 名にのぼり、盛況であった。

またブランディング事業として、史資料センター所蔵の 1926 年（創立 40 年）ごろに撮影された映像フィルム 9 巻のうち 4 巻を、一部修復した上で 4K 化することができた。同フィルムは、宮城県・あるいは東北最古の現存フィルムの可能性もあり、当時の仙台の様子を伝える動画として非常に貴重である。

【平成 31 年・令和元年】

当年度、ブランディング事業の一環として地域推進部門が進めたのは、前年度に引き続き、東北学院所蔵の映像フィルムの４K 化と、ラーハウザー記念東北学院礼拝堂の調査である。
映像フィルム 9 巻のうち残り 5 巻を、一部修復した上で 4K 化し、9 巻全ての 4K 化が完了した。4K化したフィルムについては、今後、字幕やナレーション等を付け、映像化を実施する予定である。

ラーハウザー記念東北学院礼拝堂の調査では、建築史学・建築材料学・建築構造学の立場から、礼拝堂を中心とするキャンパス空間の調査研究を進めてきた。礼拝堂の外壁に使われている秋保石の劣化状況の調査のために、秋田県立大学より石山智准教授と大塚亜希子助教、及び 4 名の学生が来校し、9 月 23 日から 25 日の 3 日間、精力的な調査が行われた。また、長らくオリジナルのものかどうか分からなかった正門について、学内に残された図面を精査する中で、正門のデザイン案とみられる図面が複数発見したのを受けて、本学工学部環境建設工学科の学

生 14 名が実測調査を行い図面と現状の比較調査を実施した。これらの調査に加え、東北学院史資料センター所蔵の図面や当時の院長である D･B･シュネーダーと設計者である J･H･モーガンとのやり取りの手紙を含む書簡及び写真のデジタル化を行った。特に本学に残る図面には、複数の指示やスケッチ等が上書きされており、その内容は、礼拝堂の建設過程を知る上で極めて貴重なものであるが、経年劣化が進み、デジタル化を行うことが急務となっていた。これらの研究成果については、礼拝堂調査報告書として取りまとめる予定である。

また当事業に関連して、2019 年度公開シンポジウム「重要文化財『デフォレスト館』の価値について」（2019 年 9 月 28 日（土）14 時～17 時）を開催した。同シンポジウムには東北大学大学院工学研究科の野村俊一准教授に加え、足立裕司（神戸大学名誉教授）、是澤紀子（日本女子大学家政学部准教授）、後藤治（工学院大学理事長）、関口重樹（宮城県教育庁文化財化技術主幹）といった方々を講師に招き、デフォレスト館の価値について、広域的な研究を進め、大学のブランディングに寄与できたと自負している。

【令和 2 年度】

地域研究推進部門では、令和元年度までに東北学院所蔵の映像フィルムの補修・４K 化を完了させた。同フィルムは、1920 年代の仙台を写した最古の映像であり、この作業により、東北学院のみならず仙台の市民生活を伝える貴重な資料が、ブランディング事業によって整備されたことを意味している。

しかしながら、同時代の制約として同映像は「無音」であり、登場人物の紹介や行事の説明などが無くては、十分には活用しえないことも事実であった。そこで令和 2 年度では、ブランディング事業の一環として､同フィルムに適切な字幕を附した短編映画｢東北学院の 40 年（仮）｣を作成した。同映画は２０２１年度の実施予定である「東北学院 135 周年記念行事」の一環として、対外的に公表し、さらに大学のブランド力の強化に資せしめる予定である。

また令和 2 年度には、この他、ランカスター神学校で発見された 16mm フィルムのデジタル化を行った。同フィルムは東北学院創立 50 周年記念式典等を含む映像史料であり、『東北学院の 40 年』と合わせて、昭和初期の東北学院・仙台の様子を映し出した貴重なフィルムである。

⑶　地域研究推進部門の事業の成果と展望

地域研究推進部門の各事業は、ブランディング事業の当初計画では、おもに 3 年目以降に重点的に活動を行う予定であった。その結果、ブランディング事業そのものの計画の変更の影響を強く受けざるを得なかった。

しかしながら、1920 年代の東北学院・仙台の様子を映し出した貴重な映像史料の修復・４K 化を行いえたことは特筆すべき事業であろう。同時期の映像フィルムは、東北大学にも存在せず、最古の動画映像であると判断できる。このような資料を残せることは、地域研究推進部門の担当したブランディング事業として誇るべきものとなった。

さらにそれを短編映画とすることが出来、2022 年度には広く一般市民への公開を予定している。

ラーハウザー記念東北学院礼拝堂の調査としては、建築史学・建築材料学・建築構造学の立

場から、礼拝堂を中心とするキャンパス空間の調査研究を進めてきた。
　今後は礼拝堂の重要文化財の登録に向けて活動を継続していく予定である。

⑴　創立 40 周年記念フィルムのデジタル化事業

研究代表者：河西晃祐

研究分担者：日野哲

１　事業内容

概要：

本院には 1926（大正 15）年に行われた創立 40 周年を撮影した 35 ミリフィルム９巻が残されている。当時は資金不足から未編集のまま長く撮影者（本学の同窓生で「スズキ映画製作所」の鈴木三郎氏）の手元に残されていたが、1955（昭和 30）年の創立 70 周年を期に本院が買い取っていた。1986（昭和 61）年の創立 100 周年の記念事業の一環として記念映画が製作された際にフィルムの一部が利用されて、ようやく陽の目をみることになったが、その後も未編集のまま保存されている。

撮影から間もなく 100 年を経過しようとするこれらのフィルムをデジタル化し、創立 40 周年記念映画として編集する。

活動目的：

創立 40 周年記念式典は、本学の専門部校舎落成式（現在の大学本館、国の登録有形文化財）と同時に行われ、創立者の押川方義、W．E．ホーイ、D．B．シュネーダーの三校祖がそろって参列した本院の歴史上極めて貴重な機会であった。またフィルムには当時の仙台市街をパノラマで撮影した映像なども残されていることから、それをデジタル化し、さらに編集を加えて短編映画化して、学内のみならず広く地域社会に紹介したい。

実施計画：

９巻のフィルムを 2018 年度と 2019 年度の２年間に分けて４Ｋデジタル化を行い、より鮮明になった画像を活用して 2020 年度に創立 40 周年記念映画を製作する。

２　事業の実施状況

活動報告：

９巻のフィルムから適切な場面を選び出して一つのストーリーに構成し、これに創立から40年までの前史（校舎の変遷と拡大の様子）も加え、ナレーション、テロップ、ＢＧＭなども加えて編集する作業を行っており、３月末に納品の予定である。

３　成果と展望

成果：

これまで映像が不鮮明であったため確認ができなかった人物や文字を４Ｋ化により特定することができ、本院の歴史上重要な人物が生き生きと動く様子を再現することができた。特に東北学院の三校祖（三人の創立者）は、これまで絵や写真でしか見ることができなかったが、映像で「動く三校祖」を観ることは東北学院の関係者にとってその建学の精神を深く心に刻む機会となる。

さらに、現在は国の登録有形文化財となっている専門部校舎（現在の大学本館）の創建当時の威容やキャンパスの様子、また落成式に訪れた市民の服装や、校舎屋上からの仙台市街パノラマなどから、約100年前の町並みや市民の生活の様子を観ることができ、仙台市にとっても貴重な資料になり得る。

⑵　ランカスター神学校所蔵フィルムのデジタル化事業

研究代表者：河西晃祐

研究分担者：日野哲

１　事業内容

概要：

2019 年度の調査で、ランカスター神学校内にある福音改革派歴史協会（ERHS）には、日本に派遣された宣教師がその活動と成果を記録した 16 ミリフィルムが残されていることが確認された。この調査は 2020 年度も引き続き行われる予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大の影響から中止となった。

とりあえず判明しているフィルムをデジタル化することを計画し、ERHS に紹介されたアメリカ国内の業者に依頼したが、フィルムの劣化が進んでいることから難しいとの通知があった。

幸いこれらのフィルムを借用することができたので、日本の業者に依頼してデジタル化を行う。

活動目的：

福音改革派歴史協会（ERHS）が所蔵している日本伝道関係のフィルムで、現在判明しているのは以下の７本である。

1. An Educational Jubilee in Japan: North Japan College 50th 1936
2. Field Day at North Japan College
3. Christian Efforts in Rural Japan
4. Evangelistic Field Trip in Japan
5. Hope and Vision Translated: Life Story of the Schroers
6. A Visit to Yamagata Kindergarten
7. Going to Church in Japan

一本目のフィルムは、タイトルからして明らかに 1936 年に行われた東北学院の創立 50 周年記念のものと思われる。創立 50 周年は当時の院長シュネーダーの退任の時であり、「過去五十年を顧みて」と題して行った最後の説教（ＮＨＫを通じて全国へ中継放送された）が収録されている可能性もあり、並行して進めている創立 40 周年記念フィルムのデジタル化・映画化と共に、東北学院関係者にとって垂涎の資料となる。

他の６本のフィルムも東北伝道や宣教師の働きを知るうえで重要な資料と思われ、当時の東北各地の状況を知ることができる。

実施計画：

これら７本のフィルムの状態を日本の業者に調査してもらったところ、確かに劣化が進み、変形箇所を平面化し、強度が不足している箇所を補強して、さらに劣化の激しいフィルムは平面化と補強を加えた後に１コマ１コマを撮影して画像データ化するなど、相当な手間をかける必要はあるが、いずれも再現は可能との判断が示されたことから、予定通りデジタル化を実施する。

２　事業の実施状況

活動報告：

７本のフィルムすべてについて補修と補強を施す作業が続けられており、本年 3 月末に納品される予定である。

３　成果と展望

成果報告：

７本のフィルムは、およそ 80～100 年以前、少なくとも戦前に撮影されたものであり、本学関係の貴重な映像（創立 50 周年記念式典と当時の運動会の様子など）のほか、当時の東北農村の状況や東北伝道に貢献した宣教師の働きが記録されているため、仙台市のみならず、東北各地の「今の姿」を観ることができる貴重な資料である。

⑶　ラーハウザー記念東北学院礼拝堂建築調査事業

代表者：﨑山俊雄

分担者：三辻和弥（山形大学）、菅野秀人・石山智・大塚亜希子（以上、秋田県立大学）

１　研究内容

概要：

東北学院大学土樋キャンパスには、複数の歴史的建造物が在る。これらは東北地方に伝来したキリスト教物質文化の実態を今に伝える、歴史の重要な証人である。しかしながら、従来必ずしも本格的な調査が行われておらず、その歴史的価値にも曖昧な点が多く残されていた。そこで本事業では、これらの歴史的遺産の価値を正当に評価して後世に継承することを目指して、礼拝堂を中心に、①土樋キャンパスと各施設の沿革に関する調査（本院に残る建設時の図面や書簡等の整理を含む）、および②建造物の現況調査（建築史学的調査、建築材料学的調査、建築構造学的調査）を実施した。活動の経過はホームページや『水曜通信』で随時公開した。より詳しい成果報告は、『ラーハウザー記念東北学院礼拝堂 建造物調査報告書』として取りまとめる予定である。

目的：

本事業が見据える最終的な目的は、土樋キャンパスの諸建築について、その建築文化財としての価値を解明し、必要に応じて保存のための措置を講ずることにある。そのため本事業では、①これらの歴史的価値を評価するための材料を収集し、②その歴史的価値を保存し又は回復する上で重要な建造時の図面のデジタル化を行い、あわせて③建築物の材料学的・構造学的現況（物的性状）を把握することを目的とした。

実施計画：

①建造物の沿革調査

- 建設時の図面資料と文献資料の調査
- 建設後の改修/修復等の履歴調査（文献調査、聞き取り、現況調査）
- 資料目録の作成
- 資料のデジタル化（図面・文書・写真）

②建造物の現況調査

- キャンパス内の遺構調査、礼拝堂と正門の実測調査および図面の作成
- 礼拝堂の構造設計概要の調査（構造計算書の解析による）
- 礼拝堂の振動特性調査（常時微動測定による）
- 外壁（秋保石）の材料学的調査（超音波と電子顕微鏡による劣化状況推定）

③礼拝堂の建築学的評価に関する調査

- 設計者 Jay H.モーガンの遺構調査
- 設計者 Jay H.モーガンの手になる他の建築の図面収集

・同時代における国内礼拝堂建築に関する情報収集

・同時代における米国大学キャンパスの計画に関する情報（文献）収集

２　事業の実施状況

活動報告：

⑴建築資料の整理・目録作成・デジタル化

図 1 整理前の資料の様子(1)

図 2 整理前の資料の様子(2)

図 3 資料整理・目録作成

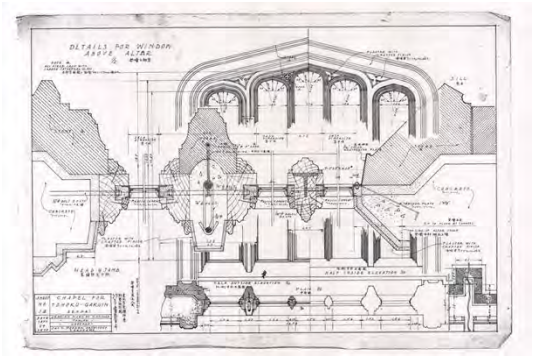


図 4 デジタル化した 90 年前の建築図面

図 5 ランカスター神学校に所蔵される礼拝堂の工事写真(東北学院史資料センター提供)

図 6 礼拝堂地階を食堂として使用した頃(東北学院史資料センター提供)

⑵建造物の現況調査

図 7 キャンパス内の遺構調査

図 8 大正時代の建造と見られる地下煉瓦壁

図 9 礼拝堂の振動特性調査の様子

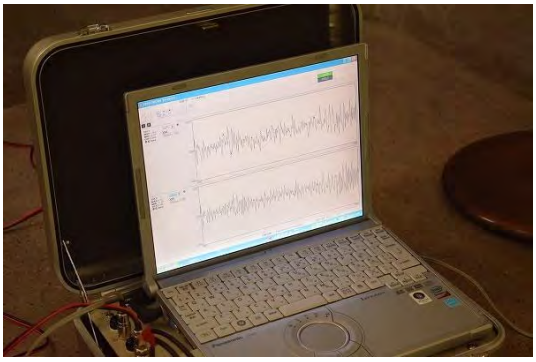


図 10 析出された礼拝堂の振動(常時微動)データ

図 11 礼拝堂外壁の超音波測定

図 12 超音波測定器

図 13 礼拝堂階段室天井裏のコンクリート

図 14 秋保石の石切場の調査

図 15 礼拝堂建具金物の全数調査

図 16 礼拝堂の細部のデザインの調査

⑶設計者 Jay H.モーガンの設計遺構に関する国内調査

図 17 旧根岸競馬場一等馬見場

図 18 旧チャータード銀行神戸支店

⑷研究成果の発表

・﨑山俊雄：東北学院所蔵の建築資料について、近代仙台研究会 第 3 回発表会、2018.2

・﨑山俊雄：東北学院大学の正門について ～その１ 設計から現在までの履歴～、日本建築学会東北支部研究報告集 計画系、p.137-140、2020.6

・﨑山俊雄：東北学院大学の正門について ～その２ 建築家 Jay H.モーガンの作品経歴の観点から～、日本建築学会大会学術講演梗概集、p.245-246、2020.9

３ 成果と展望

成果報告：

土樋キャンパスを構成する諸建築について、建築文化財の観点から、礼拝堂を中心に資料調査と実物調査を実施した。建設時の資料（図面・書簡）の目録を作成し、デジタル化を行った。礼拝堂と正門の実測調査を行い、図面を作成した。礼拝堂の構造特性データ収集し、外壁石材の劣化推定を行った。正門については歴史的価値を特定するに至った。礼拝堂については、詳細な調査記録を報告書として刊行する予定である。

Ⅲ

シンポジウム、講演会等の開催記録

キックオフシンポジウム

「東北学院のステンドグラス―19世紀の中世復興と物質文化―」

日　時：　2017年3月18日(土)　13：00～17：30
会　場：　土樋キャンパス　８号館５階押川記念ホール
参加者：　84人

プログラム：
＜講　師＞
高橋裕子（学習院大学教授）「前置き：ヴィクトリア朝美術とは」
ジム・チェシャー（Jim Cheshire　英国リンカーン大学准教授）「中世復興と19世紀イギリスのステンドグラス（Medievalism and Stained Glass in Nineteenth-Century Britain）」
鐸木道剛（東北学院大学教授）「オリジナリティとコピー：中世の価値」

＜コメンテーター＞
高野禎子（清泉女子大学教授）「ゴシックのステンドグラス：実例より」
谷隆一郎（九州大学名誉教授）「東方教父とビザンティンの思想伝統をめぐって：その歴史的意味」

シンポジウム概要：

1932年献堂のラーハウザー記念東北学院礼拝堂はネオ・ゴシック様式である。ステンドグラスはヴィクトリア朝ロンドンの代表的なヒートン・バトラー＆バイン工房の制作である。プロテスタントの東北学院になぜ中世的あるいはカトリック由来の建築と美術がつくられることになったのか？　2011年の東日本大震災によって東北は未曽有の破壊を経験した。いまいちど19世紀イギリスの中世復興をめぐって物質文化について考える。

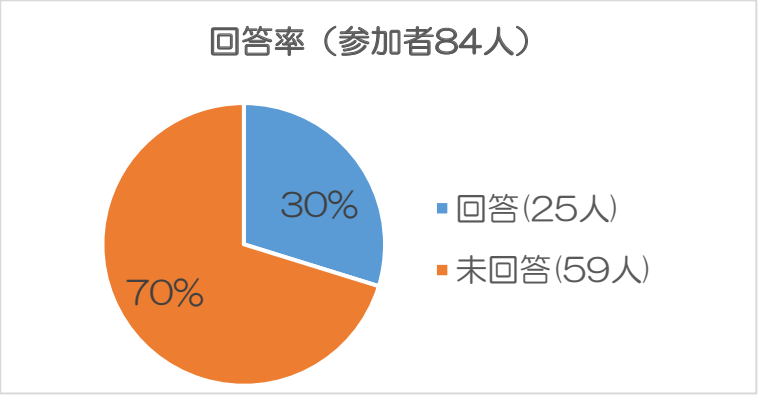
シンポジウムの様子：

ステンドグラス
19世紀の中世復興と物質文化
Stained Glass in Tohoku-Gakuin
-19th century Medievalism and Material Culture-

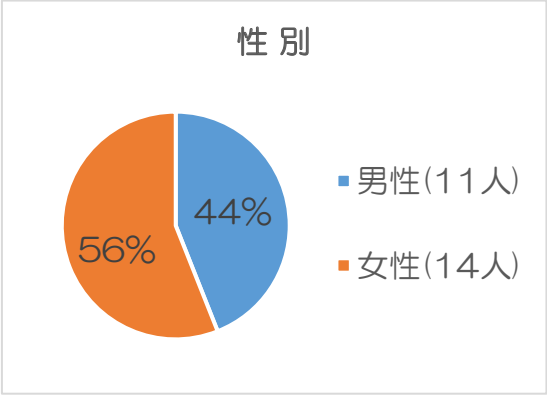
東北学院のステンドグラス－19 世紀の中世復興と物質文化－

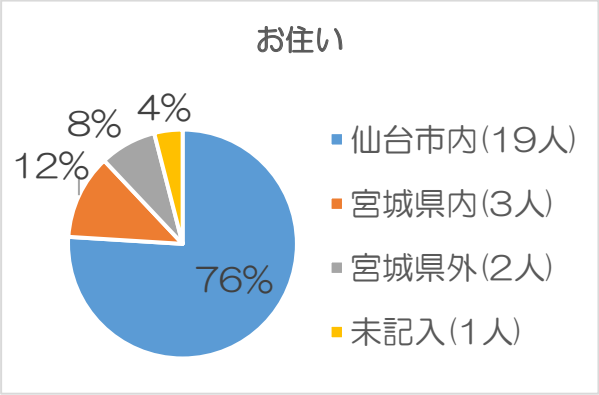
東北学院のステンドグラス－19 世紀の中世復興と物質文化－

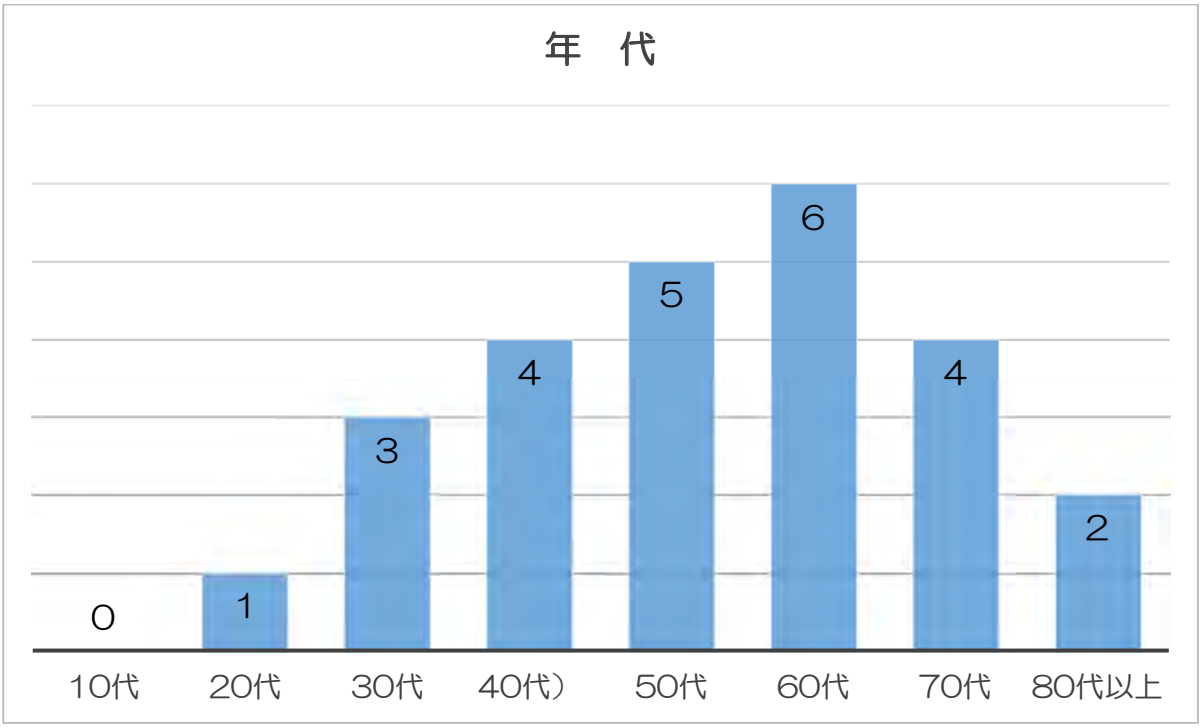
「東北学院のステンドグラス―19世紀の中世復興と物質文化―」アンケート結果



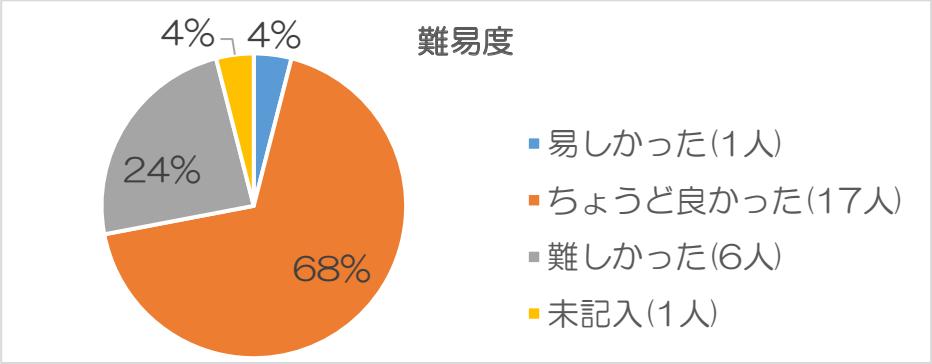
1．あなたの性別・年代・お住いに ○ をつけてください



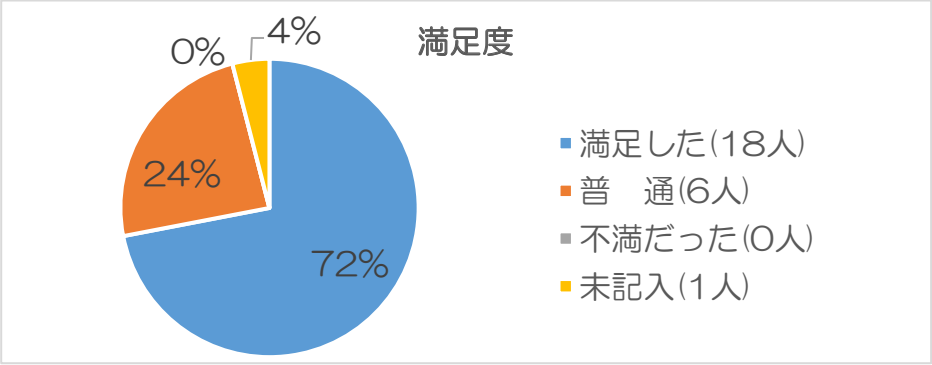




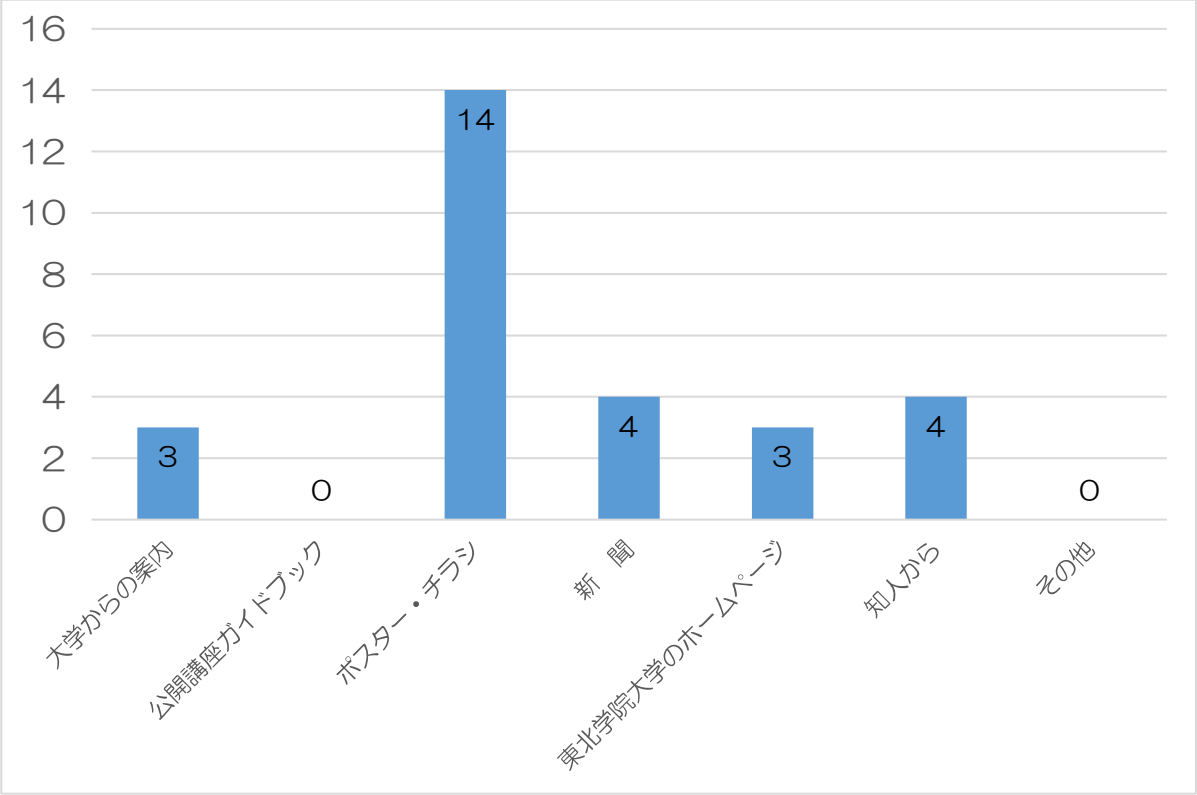
2．本日の講座の難易度はいかがでしたか？



3．本日の講座の満足度はいかがでしたか？



4．今回の公開講座開催をどのようにして知りましたか？（複数回答可）



５．本日の講座の感想やご意見・ご希望等があれば、ご自由にご記入ください。

① ステンドグラスの歴史が学べてよかったです。希望としては、もう少し東方教会をテーマにした講座を設けてほしい。超越者は宗教からみると「神」宇宙からみると「自然そのもの」か？神＝自然と考えております!!

② ステンドグラスが自然光を通して、実態上に見れることが、すごいと思いました。アートであると同時に聖書が見れるとは大変なこと、バーチャルでなく、ライブが重要!!したがって今の時代に可能性は大きいと思う。

③ 次回も楽しみにしております。（盛りだくさんの内容ですね。）

④ とても濃い内容で興味深く拝聴しました。各々の先生の講義をもっと長い時間聴きたいと思いました。特に高野先生のお話が心引かれるものでした。またステンドグラスについてのシンポジウムや講座を開催して下さいますようお願いいたします。ありがとうございました。

⑤ 資料が充実していて良かったです。英文科卒業なので、昔学んだ事が役に立ちました。

⑥ スタッフが多すぎて、講義中気になった。パワーポイントを使っていましたが、出力のサイズが合っていなく、下や横が切れていました。PCの画面とプロジェクターのディスプレイの確認をお願いします。

⑦ 第2回を楽しみにしています。

⑧ リンカーン大学准教授ジム・チェシャー氏の講演の訳があって助かりました。

⑨ 谷先生の話は特に難解であった。

⑩ 勉強になりました。

⑪ マイクの音が小さかったです。マイクやステレオの性能の問題というよりは先生方の使用方法が適切ではなかったように思います。この大きさのホールならばピンマイクを使うか、マイクは手に持って講演をした方が良いと思います。内容がすばらしいだけに非常にもったいないです。

⑫ 歴史の深いステンドグラスと絵についてたくさん教えていただけました。英語による講義嬉しく拝聴いたしました。

⑬ 高橋裕子先生のお話はとても興味深いものでした。家に戻って、ゆっくりと復習したいと思います。

⑭ 勉強になりました。

解説会「ステンドグラス修復作業公開」

日　時：　2017年8月3日(木)　14：00～16：00
会　場：　土樋キャンパス　ラーハウザー記念東北学院礼拝堂
参加者：　160人

講　師：
平山健雄（光ステンド工房代表）

（講師紹介）
平山健雄氏は日本を代表するステンドグラス作家であり、修復家です。代表作は桜美林大学女子寮の「奇跡の漁り」、近年のステンドグラス修復としては横浜市開港記念館（1927年宇野澤工房作）や日本基督教団の鎌倉教会（1926年小川三知作）があります。

解説会概要：
ラーハウザー東北学院記念礼拝堂は1932年献堂であり、正面奥には「昇天」を描くイギリス製のステンドグラスが取り付けられています。制作は、ヴィクトリア朝のゴシック・リバイバルの代表的な工房であるヒートン・バトラー＆バイン工房です。

しかし、設置されて８０年以上が経過し、ガラス片を繋ぐ鉛の桟の腐食が進み、縦４枚で5連、すなわち計20枚のパネルはたわみ、崩落する危険性があります。今回、鉛の桟を取り換えて、ガラス片を新たに組み直す修復を行います。

この作業は礼拝堂献堂以来初めてのことで、19世紀ヴィクトリア朝に連なるステンドグラスを身近に観察できる80年に一度の貴重な機会でもあります。修復を請け負う横浜の光ステンド工房（代表：平山健雄）の協力を得て、取り外す作業を公開します。

解説会の様子：

解説会報告（アンケート未実施）：

ラーハウザー記念東北学院礼拝堂のステンドグラスの修復作業が、2017年8月3日に一般公開された。大変珍しい修復作業をひと目見ようと、160名以上の方々が解説会に来場した。このステンドグラスは、キリストが11人の使徒に最後の祝福を与えて昇天する構図であり、イギリスのヒートン・バトラー&バイン工房で制作された。1932年の献堂当時の同社製で日本国内に現存しているステンドグラスは、本学礼拝堂のもののみである。

今回の修復作業の公開において、修復を担う「光ステンド工房」の代表平山健雄氏は「人間の腰や膝が痛むように、ステンドグラスも80から100年ほど経過すると、支えていた鉛などの腐食や歪みが生じてしまいます。その負荷によってステンドグラスが破損してしまうことがあり、そうなる前に修復を行う必要があるのです」と修復に至る背景を説明した。ステンドグラスを外す実作業が披露され、外したステンドグラスを来場者に間近でご覧いただきながら、平山氏がステンドグラスの魅力を解説した。最後に「次に修復が行われるであろう100年後の職人たちが、前回はきちんと修復していたと思ってもらえるよう作業を進めたい」と語った。

公開講演会「現代と福音―改革教会の実践から考える―」

日　時：　2017年9月15日(水)　18：00～19：45
会　場：　土樋キャンパス　ホーイ記念館ホール
参加者：　80人

講　師：
ウィリアム・ストーラー（William F. Storrar　米国プリンストン神学研究所 所長）

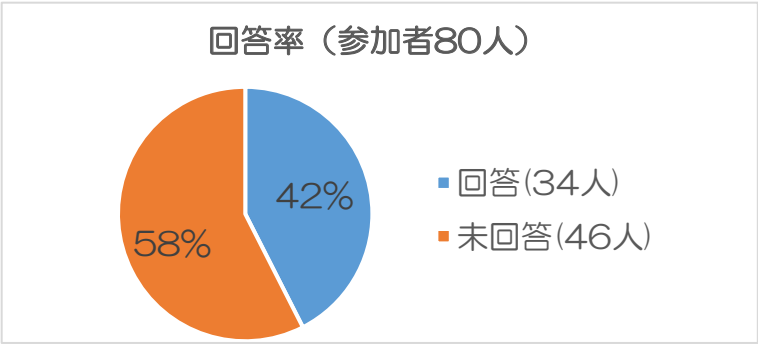
通　訳：
飯田仰（東京神学大学大学院博士課程後期、日本同盟基督教団教職（牧師））

公開講演会概要：

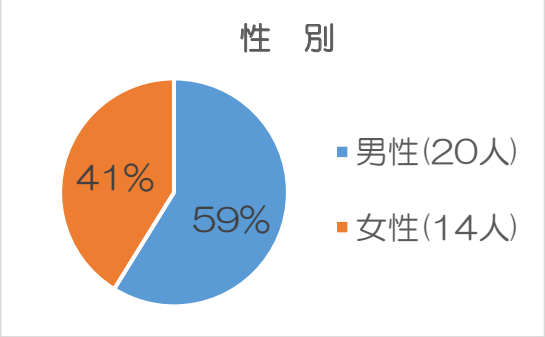
1517年にM. ルターが「九十五カ条の提題」を提示して始まった宗教改革から、今年で500年を数えます。これを機に宗教改革とは何であったのかが新たに問われています。宗教改革の最前線となった教会は、当時の西欧社会でどのような位置づけにあったのでしょう。教会が宗教改革において取り戻した「福音」を視野に、500年前とは異なる現代の時代的・社会的文脈の中で、変わらない「教会の活力」を問います。福音主義キリスト教(プロテスタント)は日本の現代社会では「マイノリティ（少数派）」かもしれませんが、現代の教会に受け継がれる公的意義を本学のキリスト教的ルーツである「改革教会」の実践的な観点から捉え直していきます。

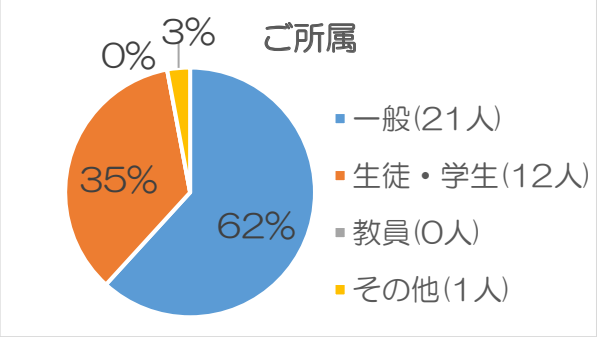
公開講演会の様子：

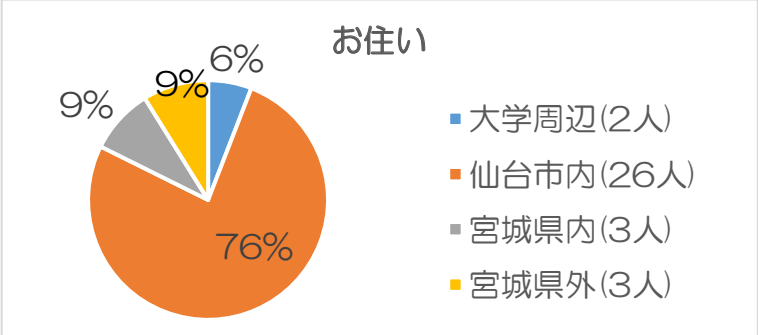
「現代と福音―改革教会の実践から考える―」アンケート結果

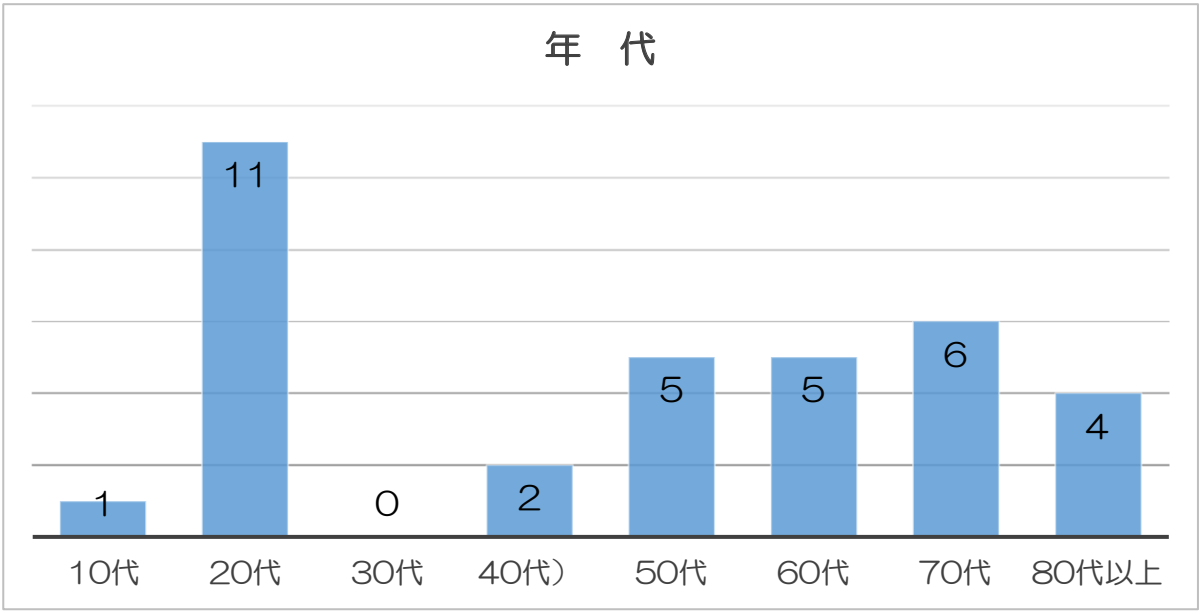


1．あなたの性別・年代・ご所属・お住いに ○ をつけてください

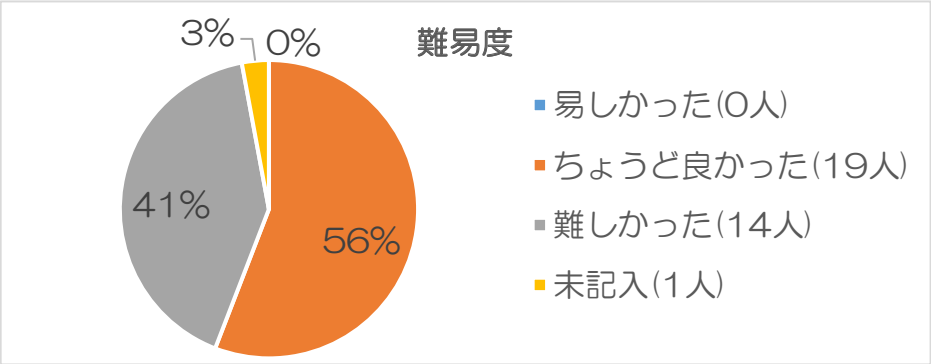




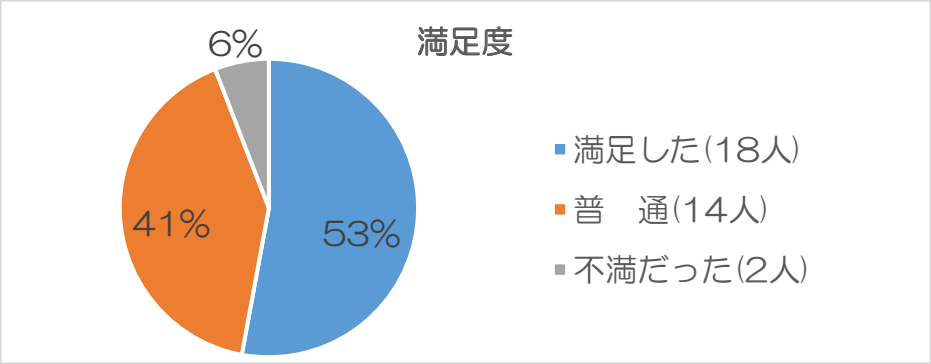




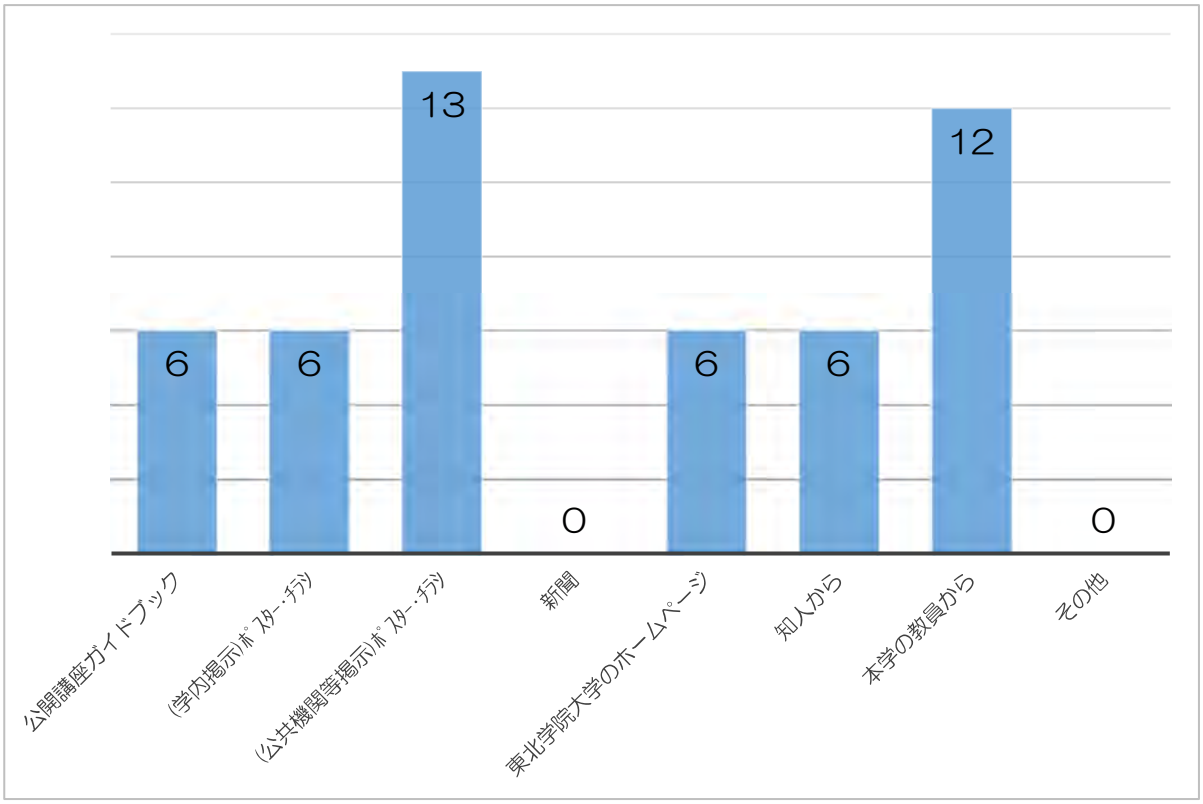
2．本日の講座の難易度はいかがでしたか？



3．本日の講座の満足度はいかがでしたか？



4．今回の公開講座開催をどのようにして知りましたか？（複数回答可）



５．本日の講座の感想やご意見・ご希望等があれば、ご自由にご記入ください。

① 自分はクリスチャンではなく、どのような話がなされるのか興味があって講座を聴いたのですが、天にいるキリストへの考え方というのは面白い視点だと思ったものの、教会がどうあるべきか？という問題には興味がひかれませんでした。他、聖霊派？ペンテコスラ派の正しい聖霊の祝福を受ける者が経済的にも恵まれるという考えは初めて聞いたので面白いと思いました。自分でさらに調べてみたいと思います。

② 講演内容を全て、英語・日本語あるのが、とても良かった。英語の勉強にもなると思うし、何度も読み返すことができる。

③ 講師の方が、熱意をもって語って下さっているのに英語が苦手なせいで、訳されている文章だけをおってしまった。見開きで対応しているのもいいが、交互に英語・日本語で書かれている方が講義を受けやすいのかなと個人的に思った。

④ 全体的に難しい内容でしたが、普段は聞けない話が聞けたので良かったです。家に帰ってから日本語訳をじっくり見たいと思います。

⑤ 図解を用いた講演であればもっと分かりやすくなったと思いました。

⑥ スコットランドでのエピソードを聞き、私も若い学生時代に訪れたかの地（エジンバラ）にそびえる教会の大きさを思い出す事ができました。スコティッシュEnglishでないピュアな英語での講義を聞け、ネイティブEnglishの勉強にもなり有意義でした。Textの対訳も有用な資料として再度ゆっくりと読んでみたいと思っています。ありがとうございました。

⑦ 完全原稿の翻訳が付されていたのがすばらしかった。二重焦点のたとえがユニーク、昇天のキリストへの信頼を再度得た。ありがとうございます！

⑧ 講演は日本文と対訳が読み易く感謝でした。

⑨ 講義でこの講座を受けるように言われて出席したが、キリスト教に対する予備知識があまりにも少なく、私には講座の内容がとても難しく感じた。これからその講義を受けることで少しでも今回の内容を理解できたらと思う。

⑩ 今回の企画は、とてもよかったと思います。内容もよかったのですが、英訳で話されたので（ドイツ語などでなく）わくりやすかったからだと思います。

⑪ すばらしい講座であったのに、参加人数が多いとは言えなかった事が残念だ。大学として、もっと多くの学生、近隣住民などに講座の存在を知ってもらう工夫が必要だと感じた。本日、この講座でウィリアム・ストーラー博士とお会いし、お話を聴く事ができたのは偶然ではなく、神のお導きであろう。

⑫　P11以降の話の意味がよくわかりませんでした。“いやし”には抵抗を感じてしまいます。昇天についての話は分かりましたが、具体的な適用は、国によっても教会によってもだいぶ違ってくるだろうと思います。現在を積極的に生きていくために力強い教えとして“昇天のキリスト”を聴くことができ、ありがとうございました。

⑬　東北学院大学のキリスト教について、どのようなコーナーストーン、立場、福音の理解、神学というものが、ブランディング事業を通して、広く世間に示しているのだと知ることができて、うれしく思った。現代社会において、キリスト教の福音がどのように伝えられなければいけないか、再認識したような気がする。神理解、キリストの理解、福音の理解がともすると間違って伝えられてしまう危険性のある昨今で、守らなければならない、あるいは当然のことかもしれないが、正しく伝えていかなければならない使命があるのではないだろうか。今回ストーラー博士のお話は、聖書学者としての立場ではなく、福音を語る牧師のようでした。福音を語っていただいたことは大変よかったと思いました。「昇天」に光を当てて語っていただいたことも大変よかったです。教会の成長は数の成長ではないことも教えていただきました。

⑭　哲学的な分野において色メガネという言葉を用いることがあるが、神学的見解でメガネを例に用いることを初めて知った。人は何かを見る時、目の前には一枚のガラスやレンズがあるのだと思うことがある。日常生活だけでなく、このような場面においても、どのようなレンズ、視点を通して見るのかによって見える世界も異なるのだなと思った。

⑮　昇天のキリストから私たちを見つめるという視点がすばらしい発見でした。ありがとうございます。

⑯　講座後の質疑応答がおもしろい。楽しく聞くことができました。

シンポジウム「我は福音を恥とせず—新約聖書における〈福音〉理解—」

日　時：　2017年10月7日(土)　13：00～16：30
会　場：　土樋キャンパス　ホーイ記念館ホール
参加者：　49人

講　師：
ペーター・ランペ（Peter Lampe　ドイツ ハイデルベルク大学教授）「パウロにおける〈福音〉理解—パウロ書簡における神学の中心—」

辻　　学（広島大学教授）「福音の継承？—第二パウロ書簡における〈福音〉理解—」

吉田　新（東北学院大学准教授）「死者への福音？—第一ペトロ書における〈福音〉理解—」

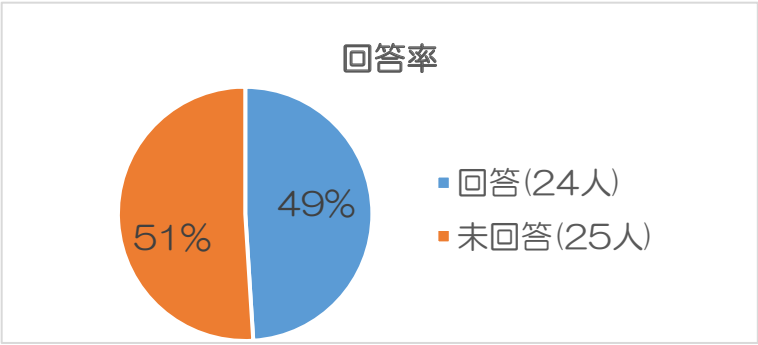
通　訳：
ウルリッヒ・フリック（Ulrich Flick　東北学院大学講師）

シンポジウム概要：

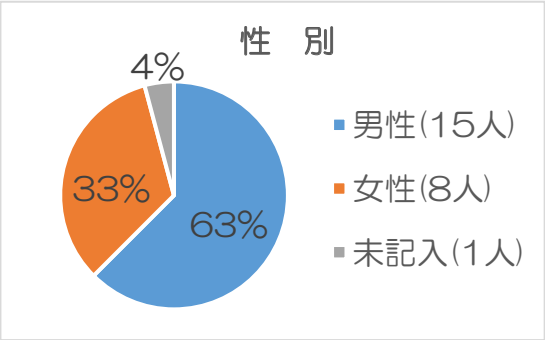
パウロはロマ書1章16節で「我は福音を恥とせず」と記している。キリスト教信仰の根幹である〈福音〉とは一体何か。本シンポジウムでは、新約聖書における〈福音〉理解を明らかにする。パウロ書簡から第二パウロ書簡、そして公同書簡に〈福音〉理解がどのように継承されたのか、または、継承されなかったのかを解明する。ドイツを代表する新約聖書学者の一人であるペーター・ランペ氏、ヤコブ書及び第二パウロ書簡研究の第一人者である辻学氏、本学の若手研究者の吉田新氏らの発題を通し、〈福音〉理解を切り口に原始キリスト教の実像を浮かび上がらせる。

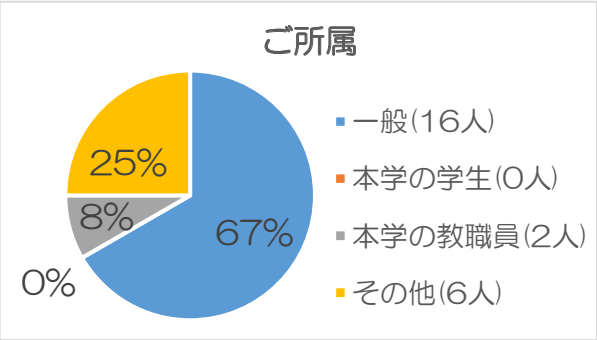
シンポジウムの様子：

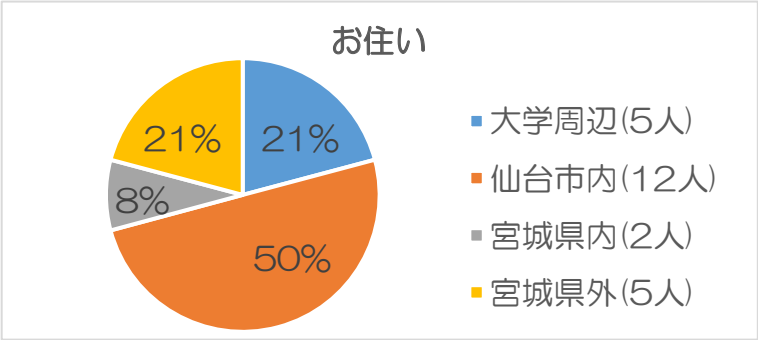
「我は福音を恥とせず―新約聖書における〈福音〉理解―」アンケート集計

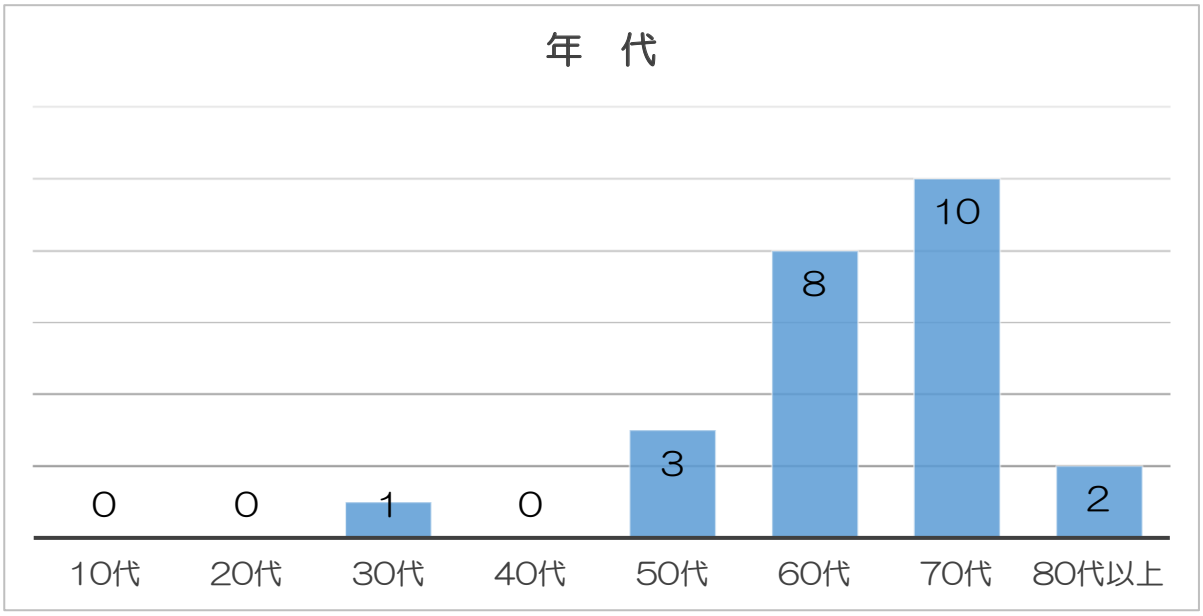


1．あなたの性別・年代・ご所属・お住いに ○ をつけてください

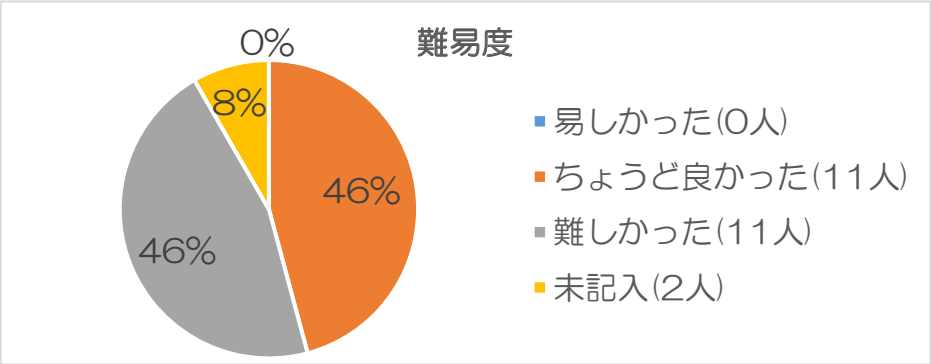




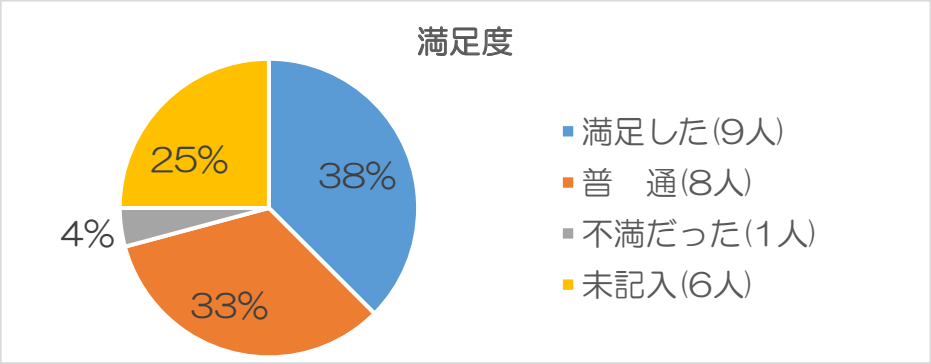




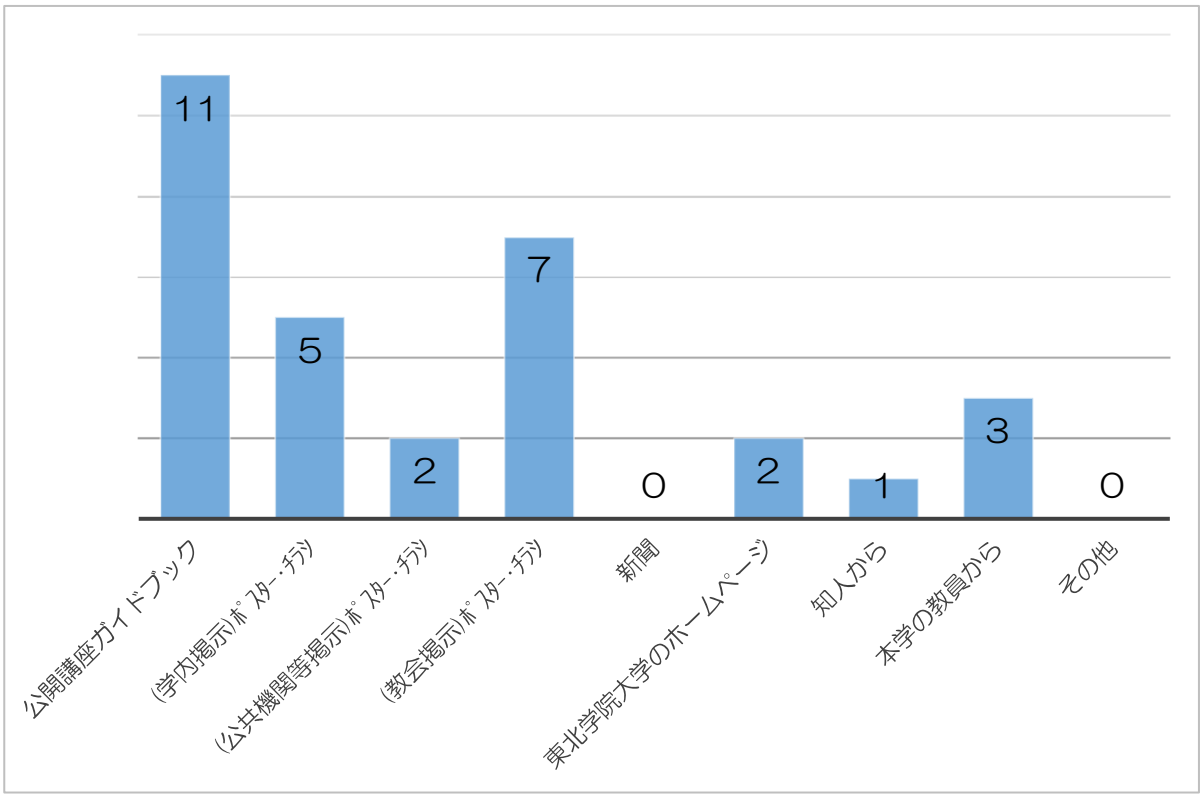
2．本日のシンポジウムの難易度はいかがでしたか？



3．本日のシンポジウムの満足度はいかがでしたか？



4．今回のシンポジウム開催をどのようにして知りましたか？（複数回答可）



5．本日のシンポジウムの感想やご意見・ご希望等があれば、ご自由にご記入ください。

① 全くの素人である私には難しい内容でしたが、部分的に分かる所もありました。立派なレジュメを頂きましたので、読んで学びたいと思います。ありがとうございました。

② 大変興味深いお話でした。勉強になりました。

③ 予習及び復習が共に必要なるを自認しました。

④ 企画に感謝致します。辻学氏、吉田新氏はちょうど良かったが、ペーター・ランペ氏は難しかった。難易の差こそあれ、それぞれのお考えを通して、新たな目の見方が与えられました。

⑤ 一教会員(平信徒・主婦)なので、もっと易しく、福音の真理や宣教の必要性、又その喜びを提示し、各々の教会の発展を視野に入れて大切なこの講座を豊かにしていただきたいと思います。我々クリスチャンがこの世に生かされている意味や大きな災害を受けた東北地方に存在する発展されている貴学院の使命を更に遂行していただきたいと願います。貴学院の発展を願い祈りつつ。

⑥ 万人に開かれたメッセージ、感謝。

⑦ お疲れ様でした。

⑧ ドイツ語はできませんので、どの点について講演されていたかが分からず、最初とまどいましたが、言葉がお話されていることと、手許の文章が一致しないことがありましても、この辺だなと思って、訳文を読んでみて、お話の内に入ることができました。スライドの上に赤線か矢印などで示して下されば、もっと話読一致できたと思いますが、それでも参加できて幸いでした。ありがとうございました。

⑨ パウロ書簡と第二パウロ書簡のそれぞれの立ち位置が理解できました。死者に福音を告げたについても、吉田先生の説明にそうだよねと。でもでも、ランペ先生のロマ2：15、16参照をきくと……。私の教会では、この箇所は詳しくは取り上げません。むしろ福音理解には、無関係という立場が強いと思っています。（ちなみに改革派の教会です）

⑩ とても神学的で難しい題材でした。しかし神学でこういう内容のことが論じられているのかと思いたいへん興味深かった。また、パウロの書簡をいろいろな方面から見て、その切り口によってあざやかに違いを鮮明にしてもらい、たいへん深みを感じた。日頃、聖書を読んでもなかなかわからないことでしたが、一般の信徒においては、パウロの人となりの理解を深めていましたが、書簡を研究するということにおいては興味深かった。牧会者の観点から見ると、もっとパウロがいかに初代の教会を愛し、教会の人たちを間違った方向から取り戻そうとしたのかも加えられたらよかったと思いました。

⑪ 昨日の講演に関する質問（アダム・エバ）わからなかった。シンポジウムおもしろかっ

た。

⑫　最近、祈祷聖書を読みはじめた者です。キリスト教には興味を持っており、今回2回の講座に参加しました。内容的には学術的、哲学的でやや難しいと感じました。なかなかこういう機会がないので良かったと思います。

⑬　一般人なので、パウロの福音について、全体的に知ることができてよかった。難しいところもありましたが、興味深い内容であり、今後の聖書の読み方も違ってくるかも……。ありがとうございました。

⑭　2013.2.20～3.6(船旅で訪問)ローマ→キプロス→イスラエル(ガリラヤ、エルサレム他)→アンタルヤ→クレタ→ローマ。パウロゆかりの地が多く印象深い旅でした。上記のクルーズ旅行に参加するため多少関連の本を読みました。(佐藤研著「旅のパウロ」岩波書店など)。今回の講師の先生方のお話も興味深かった。

⑮　日本語訳(ランペ先生のテキスト)が大変わかり易く、こなれていて感心しました。訳者に敬意を表します。3人の方々の提起、大変有益でした。

⑯　宗教改革500年というタイムリーな企画に感謝します。私は市内の教会で牧師をしており、来春に退任の予定ですが、東北学院大学で今回のような学びの機会を提供してくださるのは大変ありがたいことです。あるいは科目聴講できるものがあれば教えていただければ感謝です。

シンポジウム「ジョン・ラファージと日光
―アメリカのステンドグラス復興とジャポニズムのパイオニア―」

日　時：　2018年2月24日(土)　13：00～18：00
会　場：　土樋キャンパス　ホーイ記念館ホール
参加数：　63人

プログラム：
＜趣旨説明＞
　鐸木道剛（東北学院大学教授）「趣旨説明」

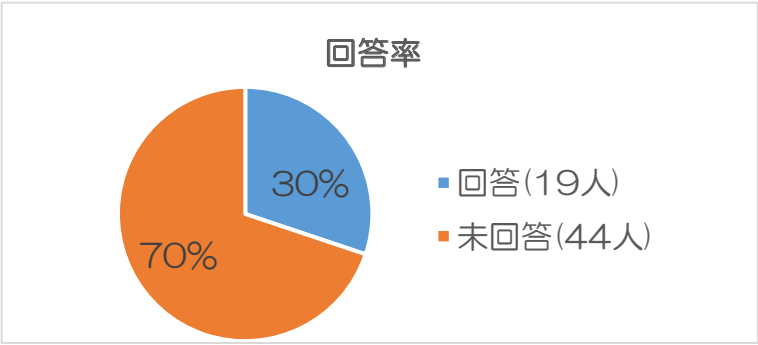
＜パネリスト＞
　有木宏二（美術史家）
　　「近代化の中の＜外＞、その抗うまなざし」
　フィリス・フロイト（Phylis Floyd　ミシガン州立大学准教授）
　　「John La Farge: Bridging American and Japanese Spirituality」
　ケイティ・クレッサー（Katie Kresser　シアトル大学准教授）
　　「The World Re-Enchanted: John La Farge and the Lesson of Nikko」
　五味良子（埼玉県立近代美術館学芸員）
　　「ジャパン・ミーツ・ラファージ　日本の近代化≒西洋化　世界漫遊家」

シンポジウム概要：

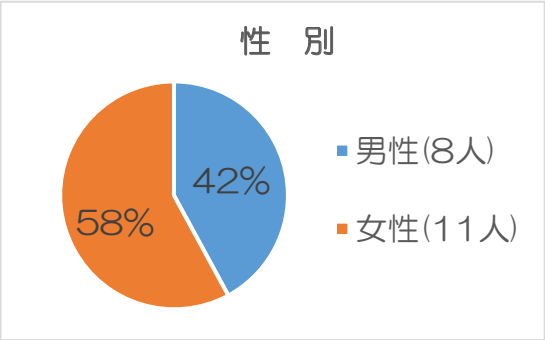
　アメリカの超越主義の画家ラファージ（1835-1910年）は聖なるものを求めて、1886年に3ヵ月間日本に滞在した。彼は日光の森に感動して、「ここには偉大なパーンがまだ生きている」と記す。そこに立ち会っていたのが、後にボストン美術館の日本美術コレクションに寄与するフェノロサ（1853-1908年）とビゲロー（1850-1926年）、そして岡倉天心（1863-1913年）であった。ラファージの全く新しいステンドグラスは、その中世趣味とジャポニズムによって成立した。シンポジウムは、まず彼の日光体験から始める。

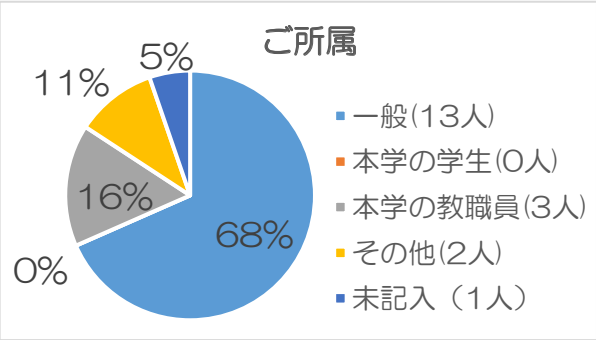
シンポジウムの様子：

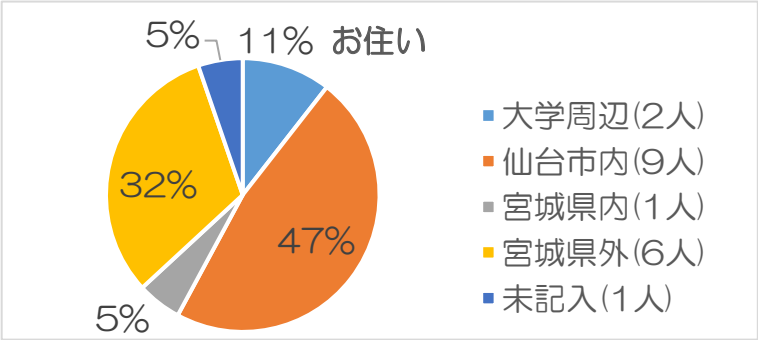
「ジョン・ラファージと日光」アンケート結果

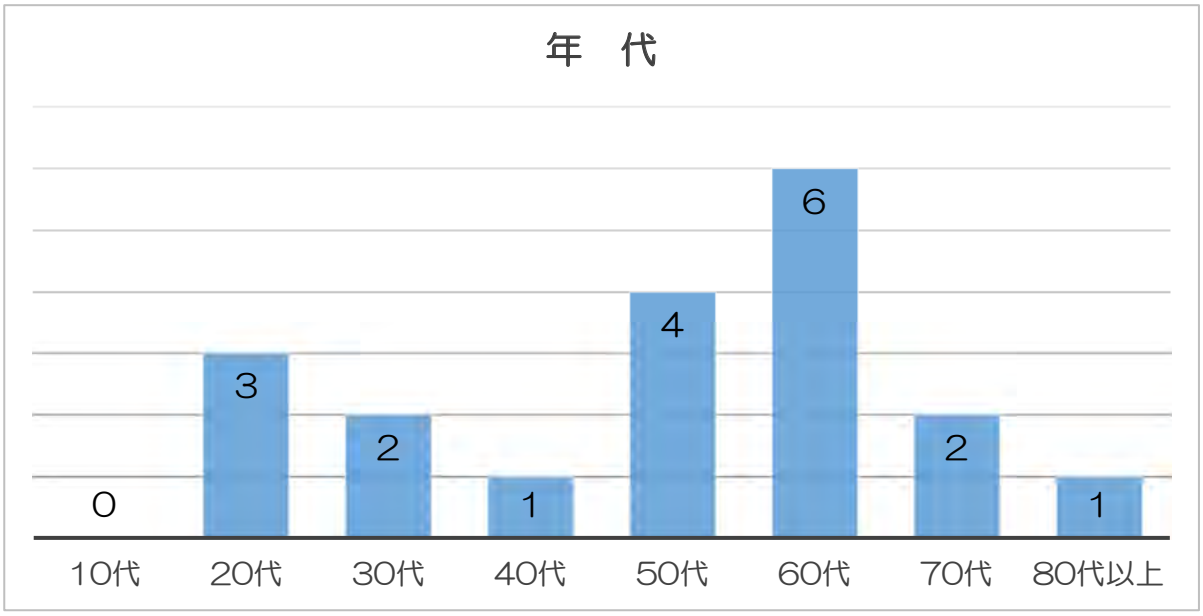


1．あなたの性別・年代・ご所属・お住いに ○ をつけてください

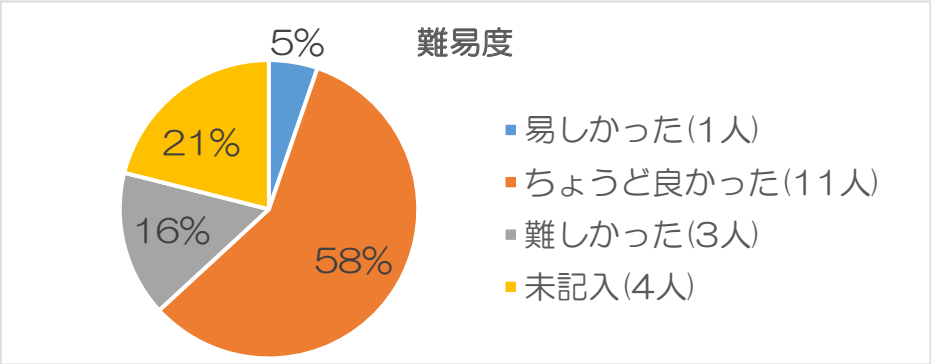




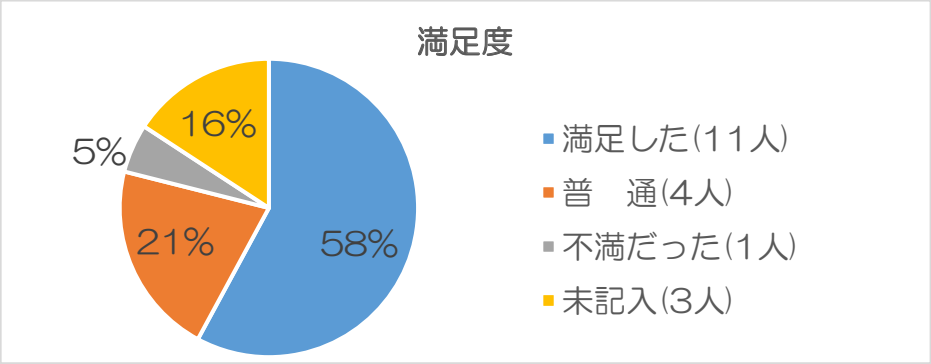




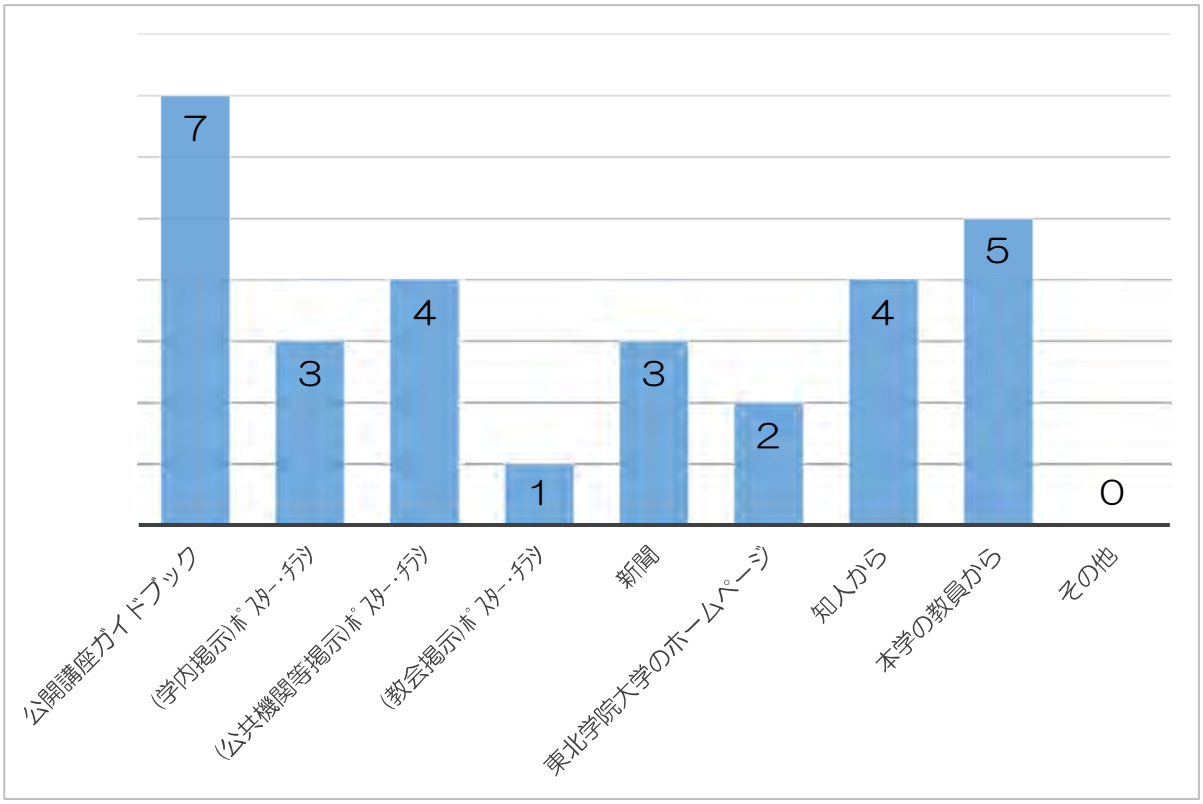
2．本日のシンポジウムの難易度はいかがでしたか？



3．本日のシンポジウムの満足度はいかがでしたか？



4．今回のシンポジウム開催をどのようにして知りましたか？（複数回答可）



5．本日のシンポジウムの感想やご意見・ご希望等があれば、ご自由にご記入ください。

① とてもよかったです。内容が充実で、幅もあって、いい勉強になりました。研究成果が市民と共有する姿勢がすばらしいと思います。これからも注目していきたいです。ありがとうございました。

② 刺激的なレクチャー・シンポジウムありがとうございました。日本でラ・ファージの油彩画などの展覧会ができるとよいですね。日本に来る前から彼の作品にはジャポニズムが感じられました。もっと見たいです。

③ 大変勉強になりました。ありがとうございました。

④ 発表は良かったが、英語を翻訳してほしい。また、もっと作品を見たいと感じた。今後も研究が進むことを期待する。

⑤ アメリカから二人の研究者を迎え、たいへん充実した内容だったと思います。

⑥ こういうセミナーを待ち望んでいた。学院大の個性や持ち味がよく出ていると思う。フィリス先生・ケイティ先生の参考資料が英語だけでなく和訳も添付してあるのが嬉しく、有難い。とても勉強になる。村形明子先生のお話を楽しみにしていたが急に亡くなられた旨、本当に残念、心からお悔やみ申し上げたい。五味先生のお話は、基本的なことがわかりやすく紹介されて良かった。マイクの調子か？オープニングでレクチャーの方の声が聞こえづらいところがあった。場内は年配の方も多かったようなので、講師の喋りはもう少しゆっくり、大きくが望ましいもよう。内容が素晴らしいだけにご一考願いたい。有木先生の―死は新しい何かを開始させる―この言葉が染みた。又発表的には興味深いのだが、時間配分を理解なさっていただろうか。長く話してよいのなら、初めからそのプログラムの方が混乱しない。

⑦ 以前、東京の博物館などでボストン美術館の日本美術の展示を何度か見た時に、なぜ、ボストンに日本の美術品があるのか疑問だったのですが、本日のシンポジウムに参加し、コレクションに寄与していたフェノロサなどがジョン・ラファージに影響を受けていることを知り、少しわかったような気がしました。貴重なお話を伺えて、とてもよかったと思います。ありがとうございました。

⑧ 大変興味深い企画でした。ありがとうございました。

⑨ 優れた研究者の発表を仙台で拝聴できることを大変幸運に思います。東北での（美術系の）シンポジウムがまだまだ少ないので、今後とも様々なシンポジウムが催されることを期待いたします。一般参加者にも駐車場を開放していただけると助かります…。

⑩ よい会でした。地元参加者ほしいですね。

解説会「ステンドグラス再設置作業公開」

日　時：　2018年2月27日(火)　14：00～16：00
会　場：　土樋キャンパス　ラーハウザー記念東北学院礼拝堂
参加者：　130人

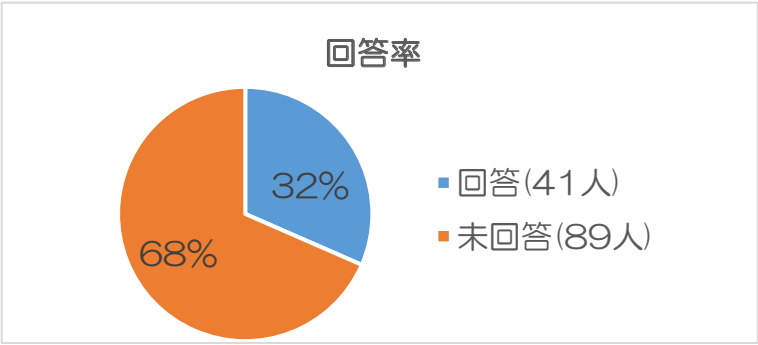
講　師：
平山健雄（光ステンド工房代表）

解説会概要：

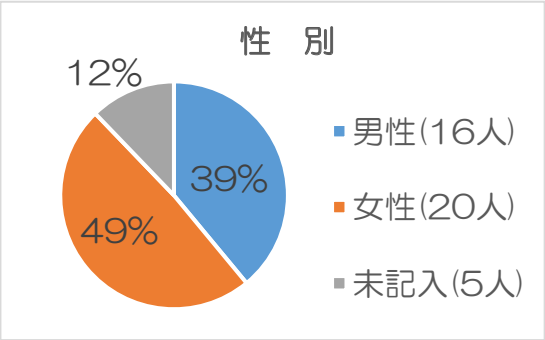
ラーハウザー記念東北学院礼拝堂の「昇天」ステンドグラスは、ロンドンのコヴェント・ガーデンにあったヒートン・バトラー＆バイン工房が80年前に制作した優品です。本ステンドグランスは７ヵ月間の修復作業を終えて、このたび再設置されます。その最終段階の作業を公開します。しばらくはカーテンで隠され見えなかった神が再び見えるようになります。闇から光へ。旧約から新約へ。「光は闇の中で輝いている。闇は光に打ち勝たなかった」（ヨハネによる福音書１：５）。100年に一度の機会です。

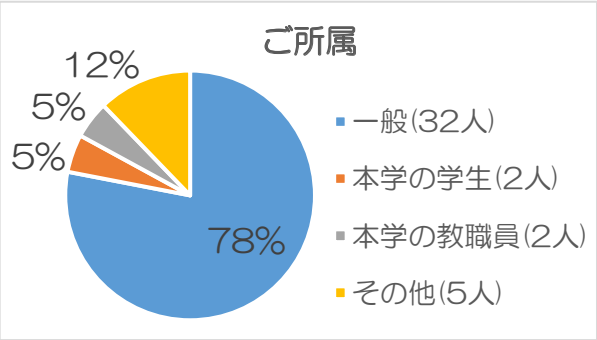
解説会の様子：

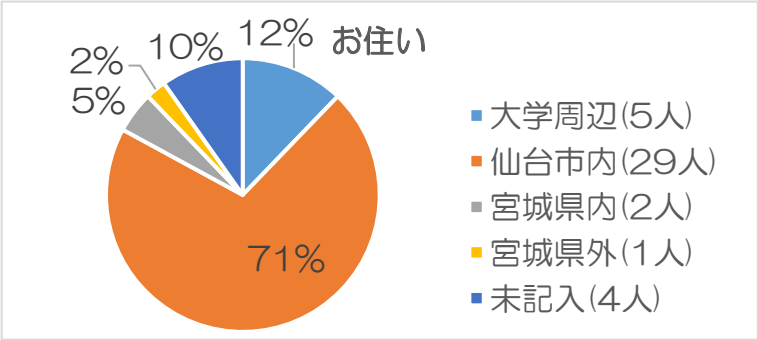
「ステンドグラス再設置作業公開」アンケート結果

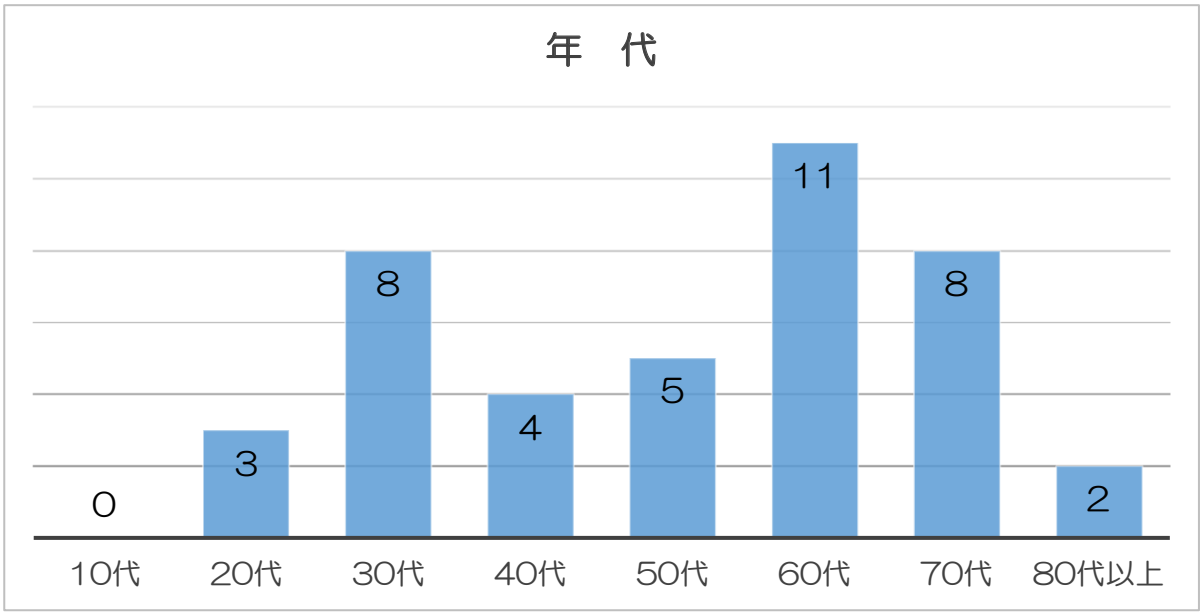


1．あなたの性別・年代・ご所属・お住いに ○ をつけてください

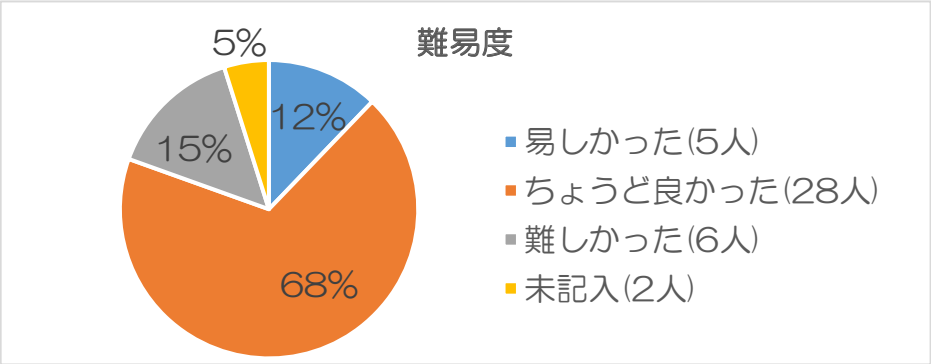




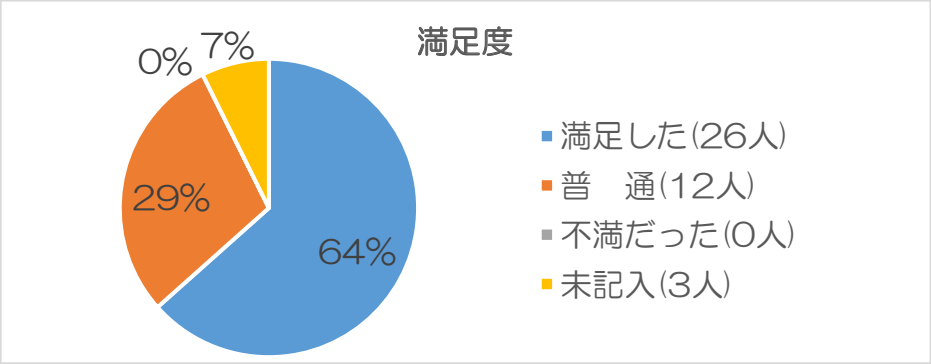




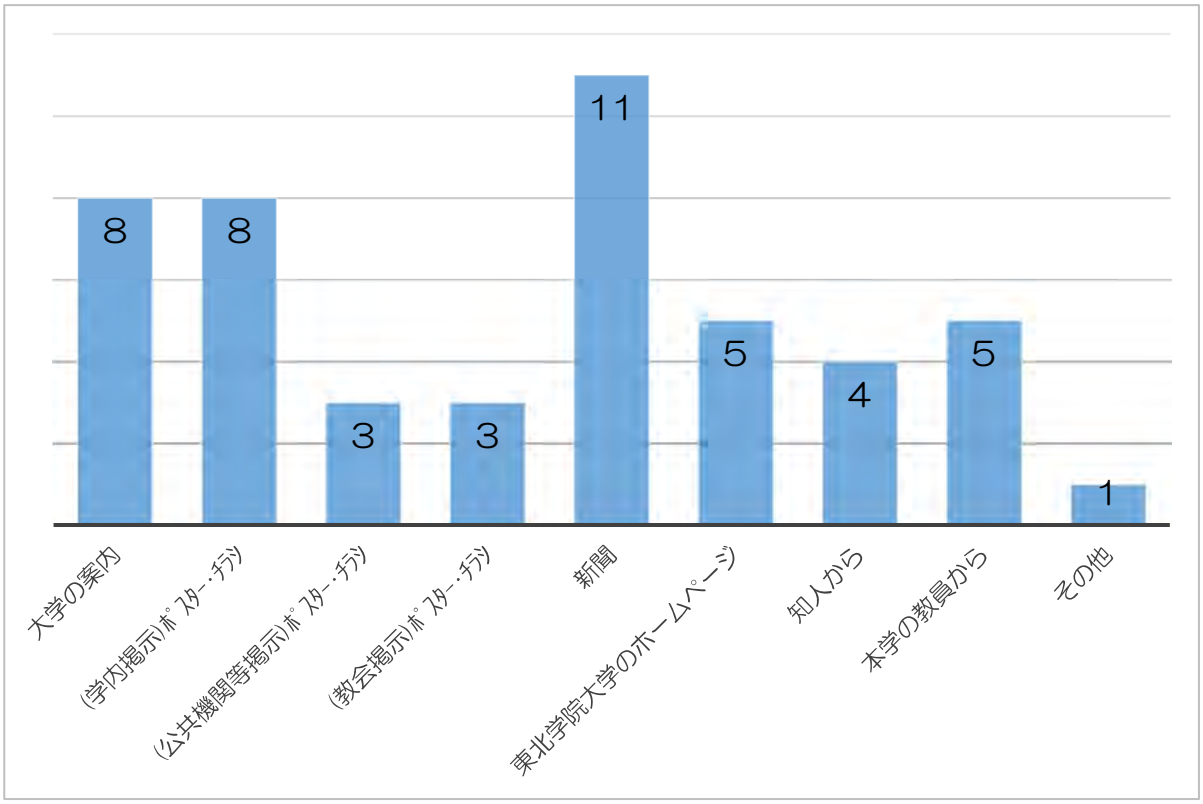
2．本日の再設置作業公開の難易度はいかがでしたか？



3．本日の再設置作業公開の満足度はいかがでしたか？



4．今回の再設置作業公開開催をどのようにして知りましたか？（複数回答可）



５．本日の再設置作業公開の感想やご意見・ご希望等があれば、ご自由にご記入ください。

① 解説の人の声が聞き取りづらかった

② 礼拝堂の中が寒かった

③ 最後にヨハネが間近に見れたのは良かった

④ ステンドグラスの深遠な意味を理解することができた。

⑤ もっと近くで見たかった

⑥ ステンドグラスの詳細が知れた良かった。

⑦ 緻密な絵画の様子が良かった。

⑧ 説明のスピーカー音が反響して聞き取りにくいです。

⑨ 修復終了後の完成したステンドグラスを見たかった。

⑩ 作業風景のスライドを説明してもらえればもっと良いかと思います。

⑪ 最後に目前でグラスを見せてもらえて大変良かった。

⑫ 座らないように設定されている椅子に座っていた人がいて気になった。(スクリーンに掛かっているから）関係者の人なら仕方がないと思ったけど、もしそうでなかったらスタッフの人が誘導して欲しかった。作業公開とお話は凄くよかったのでそれだけ残念でした。

⑬ ゆっくり拝見させて頂きありがとうございました。

⑭ 大変美しい絵付けを近くで見ることが出来、とても感動しました。貴重な機会を公開していただきありがとうございました。

⑮ 修復についてのお話を詳しく伺うことができ、大変勉強になりました。

⑯ 初めて中に入りました。私のルーツを辿るきっかけに。私の祖父母がこちらで式を挙げたと小さい頃から聞いていました。二人とも天に行き再び会っていると思います。

⑰ 全体を見ることが出来ず少し残念ですが、後日公開されることがあれば是非来たいと思います。

⑱ 説明がとても丁寧で分かりやすかったです。

⑲ 修復だけでなく、絵画についても説明され、大変良く理解出来ました。本日は勤務のない日でしたので、本当に貴重なお話を頂けました。是非4日以降、水曜礼拝へ足を運びます。

⑳　お忙しい中、機会をいただきありがとうございました。丁度イエス様のパネル取付で、配慮に感謝いたします。

㉑　修復の記録の本を出版していただけたらと望みます。

㉒　詳しい説明をありがとうございます。

㉓　取付の技術的な事ではなく、ステンドグラスそのものを見てみたいと思って来ました。

㉔　パイプオルガンの音色も聞いてみたいと思っております。設置作業そのものは工事作業でしょうけれど、100年後で無ければ見ることが出来ないと思えば貴重な体験だと思います。

㉕　こういう作業を修復に携わった人自身による説明解説と共に見せていただけることは、大変珍しいこと、そして有難いことに思いました。有難うございました。

㉖　説明が聞き取りにくく、何を説明しているのか分からなかった。

㉗　教会でいつも見ているステンドグラスが今度は見る目が変わってくると思います。今度は静かにこの礼拝堂でお祈りしたいと思っています。

㉘　取付にあたり耐震対策はどのようにしているのか知りたいです。

㉙　泉キャンパスが五橋に引越ししたあと泉の礼拝堂はどうなるのでしょうか。

㉚　素晴らしい作品ですので、もう少し宣伝すべきです。

「ステンドグラス修復完了記念礼拝」

日　時：　2018年３月2日(金)　13：00〜16：00
会　場：　土樋キャンパス　ラーハウザー記念東北学院礼拝堂
参加者：　140人

プログラム：
＜第１部　礼拝＞
　説教：野村信（東北学院大学宗教部長、教授）
　奏楽：今井奈緒子（東北学院大学教授）

＜第２部　記念講演＞
　講師　平山健雄（光ステンド工房代表）　「ステンドグラス修復を終えて「甦るひかり」」

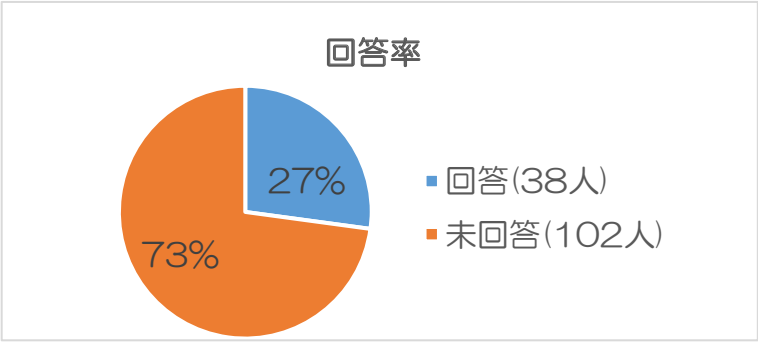
＜第３部　音楽による讃美＞
　奏楽：今井奈緒子（東北学院大学教授）
　独唱：中川郁太郎（東北学院大学特任准教授）
　合唱：グリークラブOB合唱団

解説会概要：

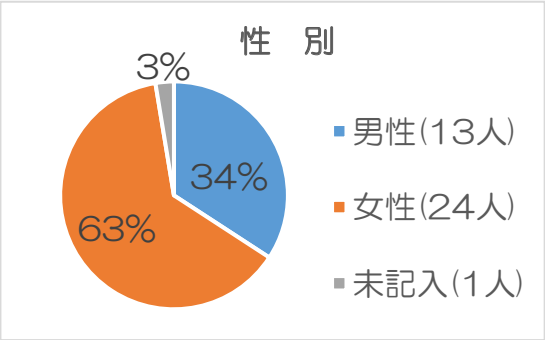
ラーハウザー記念東北学院礼拝堂の正面に設置されているステンドグラスは、1932年の礼拝堂建設時に設置されたもので、英国ロンドンのヒートン・バトラー&バイン工房の制作になります。昨年8月以来、取り外されて横浜の「光ステンド工房」で修復されていましたが、その修復が終わり、このたび再設置されました。地上において天国を再現するステンドグラス芸術の100年に一度の修復の完成です。「天地は滅びるが、私の言葉は決して滅びない」（マルコによる福音書13：31）。

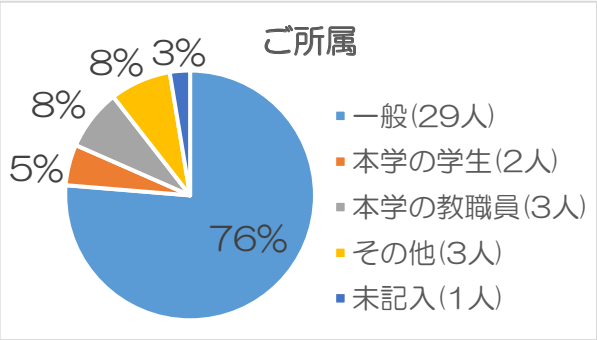
「ステンドグラス修復完了記念礼拝」記念講演の様子：

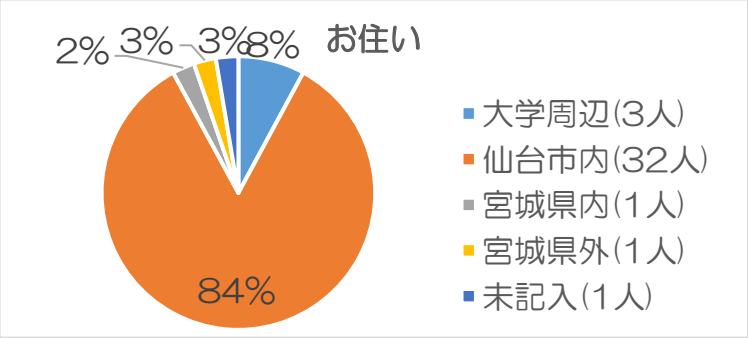
「ステンドグラス修復完了記念礼拝」アンケート結果

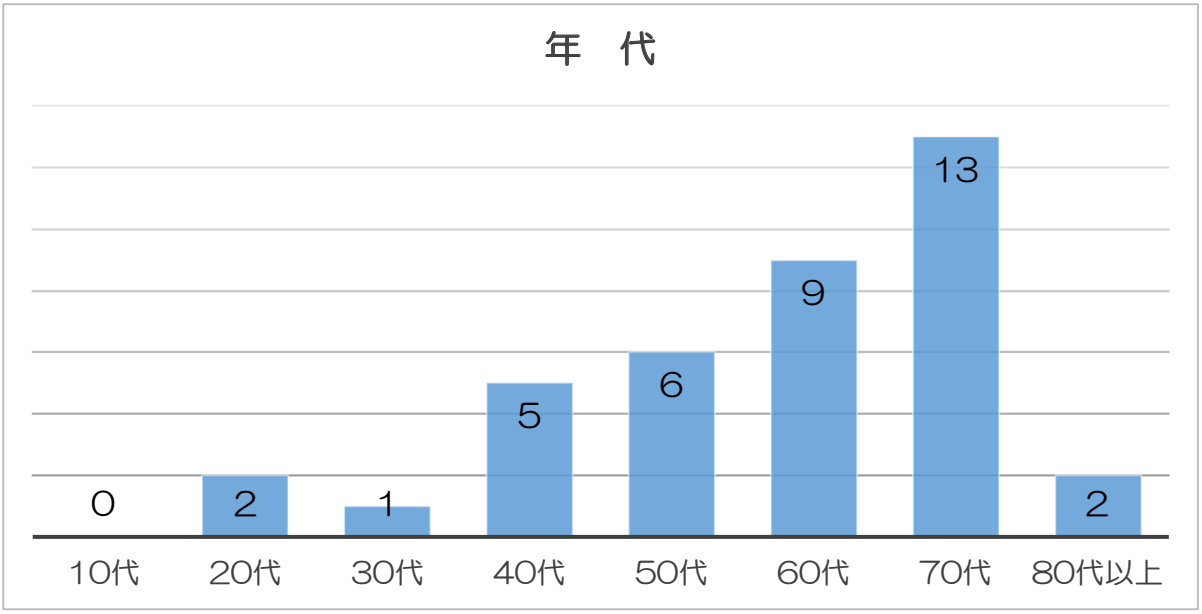


1．あなたの性別・年代・ご所属・お住いに ○ をつけてください

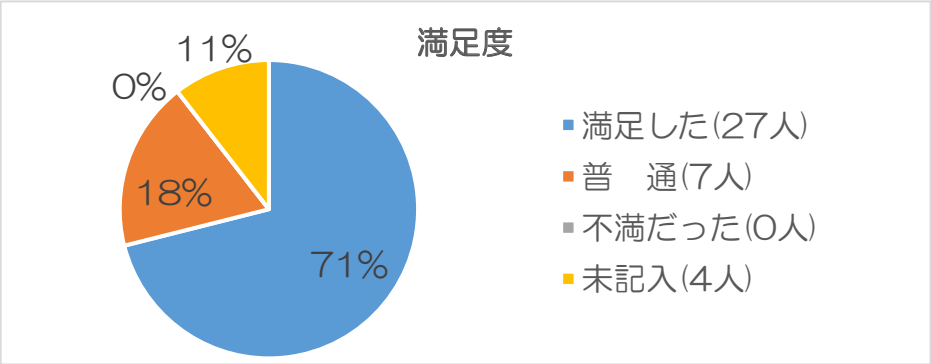




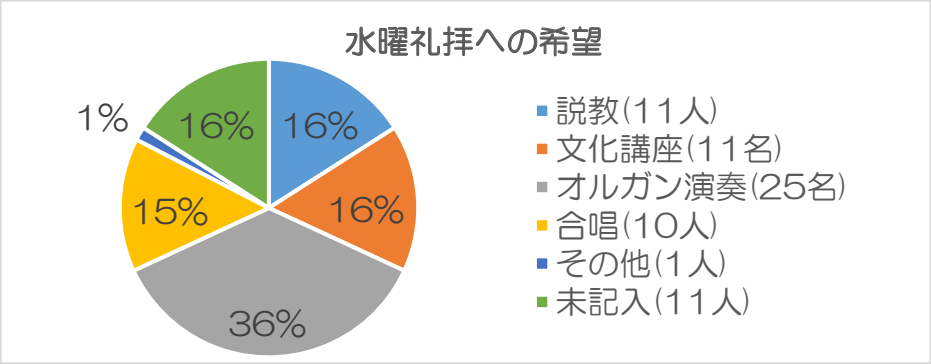




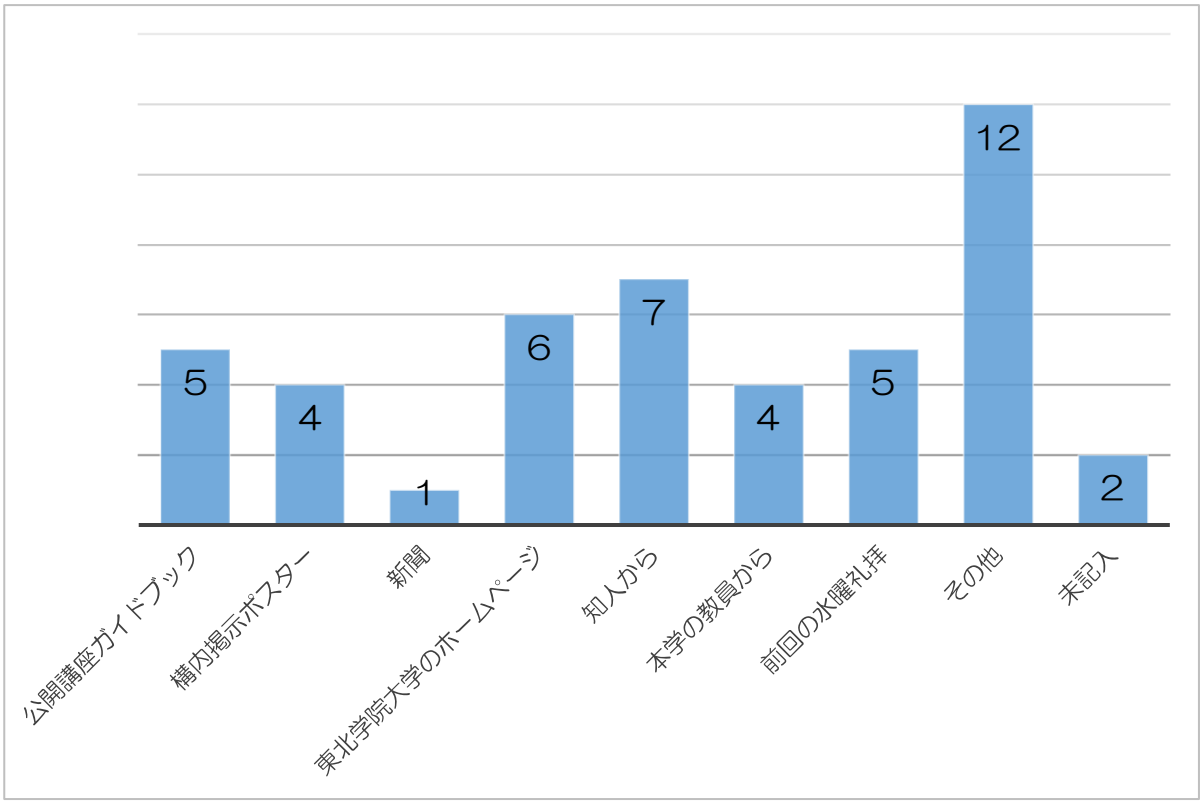
２．本日の記念礼拝の満足度はいかがでしたか？



３．今後の水曜礼拝に希望することは何ですか？（複数回答可）



４．今回の記念礼拝をどのようにして知りましたか？（複数回答可）



５．本日の礼拝の感想やご意見・ご希望等があれば、ご自由にご記入ください。

① 大変勉強になりました。合唱も素晴らしかったです。

② ステンドグラス修復、真におめでとうございます。１つ年上の兄のステンドグラスも御心であるなら「復活」されるように祈ります。年末、毎日新聞、神奈川新聞に記事となりました。それを切っ掛けに先生の横浜の工事に伺い目の当たりに８５年前の作品を目にすることが出来ました。今日の講演でその時代のＨＢＢの技術力の高さが他を凌いでいることを伺い感無量です。しっかりと目に焼き付けて大斉節中の主日礼拝の中で重ね合わせて祈りを捧げたいと思います。

③ 教会、礼拝堂のシンボルともいえるステンドグラスの修復記念礼拝に参加でき、ひかりの甦り・・・・そのストーリー性や芸術の豊かさと深さを感じました。

④ ステンドグラス修復の苦労を知った。パイプオルガンにマッチ。

⑤ 開催時間を検討する必要があろうかと思います。

⑥ 素晴らしい礼拝でした。有難うございます。説教のお話も感銘深く拝聴しました。

⑦ 貴学のますますのご発展を心よりお祈り申し上げます。

⑧ 美しくなったステンドグラスを見せて頂きました。ステンドグラスの造りが良く分かって、この場所で見ることができる有難さを思いました。

⑨ 修復したステンドグラスを見ながらのパイプオルガンの演奏を聴けたのはとても嬉しく思いました。今後も特別礼拝等あれば参加したいです。ありがとうございました。

⑩ 素晴らしい時間ありがとうございました。とても心に残りました。

⑪ 勤務のため遅れての出席でした。説教が拝聴できず残念でした。１８時もしくは土日の時間帯だったら・・・・

⑫ パイプオルガン、独唱すばらしかったです。グリークラブＯＢの皆様の合唱はとても心地よく、また聞きたいと思いました。

⑬ 本来の姿を取り戻したステンドグラスを拝見出来て大変感激いたしました。美しくて荘厳で静かです。改めて心洗われました。ありがとうございました。

⑭ 外の風で樹が揺れるとステンドグラスの色が変化して見え綺麗でした。とても至福の時間を過ごせました。

⑮ 第３部を楽しみにして来ました。

⑯ 思いかけずにステンドグラスの修復作業とステンドグラスの話を聞くことができ感激

しました。

⑰　素晴らしい一日でした。ありがとうございます。ステンドグラスの光に浄化されました。

⑱　よく聞き取れず残念。マイクへの声ののりをよくして頂きたい。

⑲　ステンドグラスの修復作業工程の説明は、ちょっと高度で要領を得ない所もあったが、仕事は大変なものであったろうことが感じられた。

⑳　ステンドグラスの光の中でお祈り、講演、音楽すばらしかったです。

㉑　知人のすすめで俳句の吟行会としての参加でした。立派なステンドグラスの光の輝きに思わず手を合わせてしまいました。こちら学院には、私の50才の祝会にとオープンカレッジに通った思い出があります。気に入り７年間通い学びました。

㉒　ステンドグラス修復完了おめでとうございます。これからも楽しみに参加させて頂きます。

㉓　今日のこの日の校歌は格別でした。ありがとうございます。

公開講演会「ポーランドのユネスコ世界遺産：ルター派教会堂 ヤヴォルとシフィドニツァの平和教会堂」

日　時：　2018年5月26日(土)　13：00～15：00
会　場：　土樋キャンパス　８号館５階押川記念ホール
参加者：　61人

講　師：
ヴァルデマール・アッフェルト（Waldemar Affelt　東北学院大学学客員教授、グダンスク工科大学上級講師）

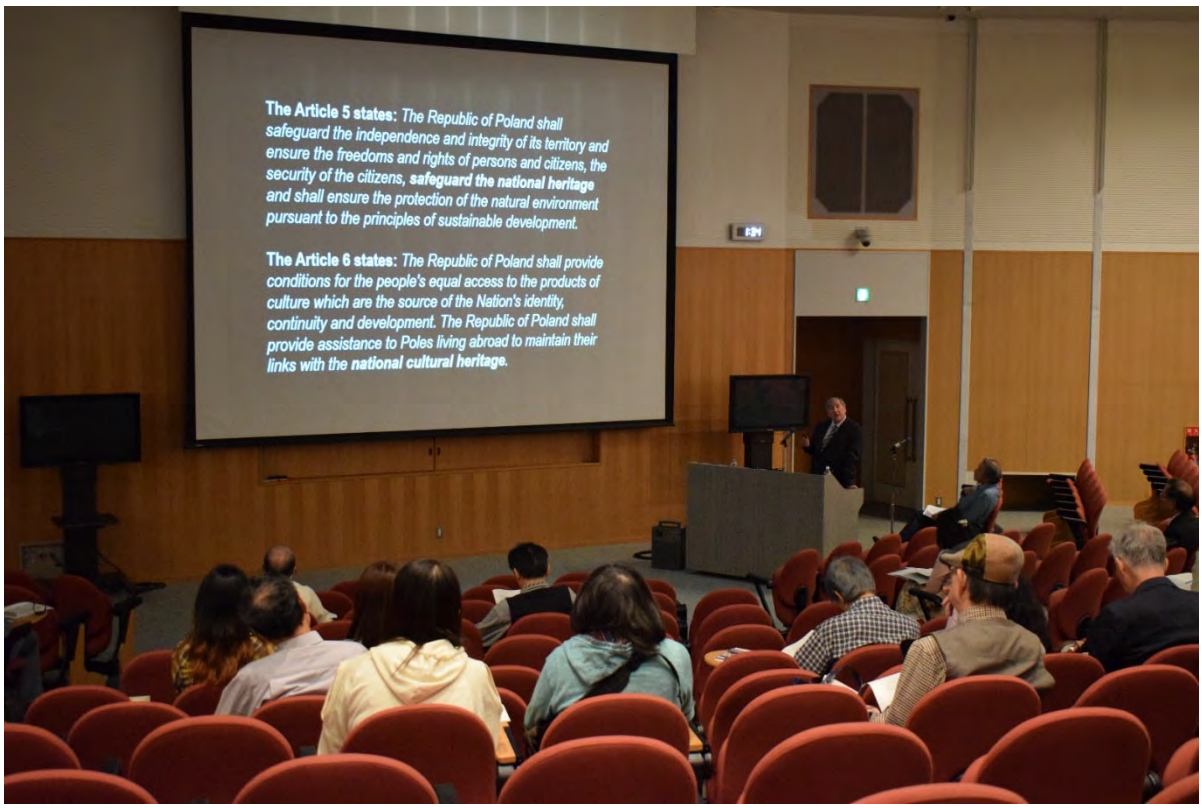
通　訳：
鐸木　道剛（東北学院大学教授）

講演会概要：

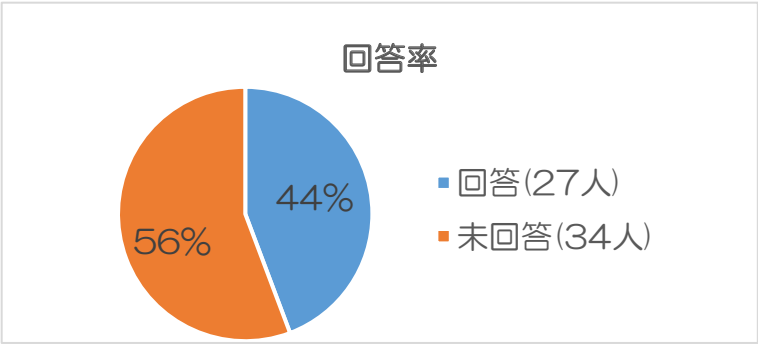
ヤヴォルとシフィドニツァの平和教会堂は、2001年にユネスコの世界遺産として認定されたヨーロッパ最大の木造教会堂である。この教会堂は、三十年戦争を終結させた1648年のウェストファリア条約の後にカトリックのハプスブルク帝国の皇帝によって建設が許可された３つのルター派の教会堂のうちで現存するものの２つであり、近代ヨーロッパ最後の宗教戦争の終結を象徴する建造物である。城壁の外に建設すること、恒常的な石や煉瓦の素材で建設しないこと、尖塔をつけないことという制約のもと、バロック様式（カトリックの様式）を基本として建設された。本講演では教会堂の歴史的意義とともにポーランドにおける文化財保護の現状そしてその思想について考察する。

また、駐日ポーランド共和国大使館によって提供されたポーランド文化財の写真パネルの展示も実施する。

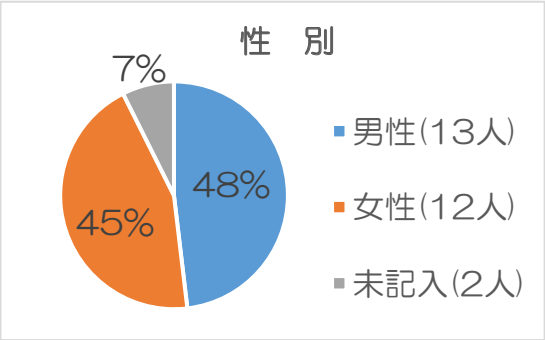
公開講演会の様子：

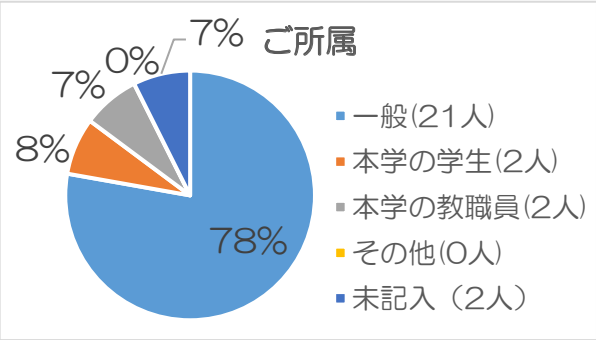

The Article 5 states: The Republic of Poland shall safeguard the independence and integrity of its territory and ensure the freedoms and rights of persons and citizens, the security of the citizens, safeguard the national heritage and shall ensure the protection of the natural environment pursuant to the principles of sustainable development.
The Article 6 states: The Republic of Poland shall provide conditions for the people's equal access to the products of culture which are the source of the Nation's identity, continuity and development. The Republic of Poland shall provide assistance to Poles living abroad to maintain their links with the national cultural heritage.

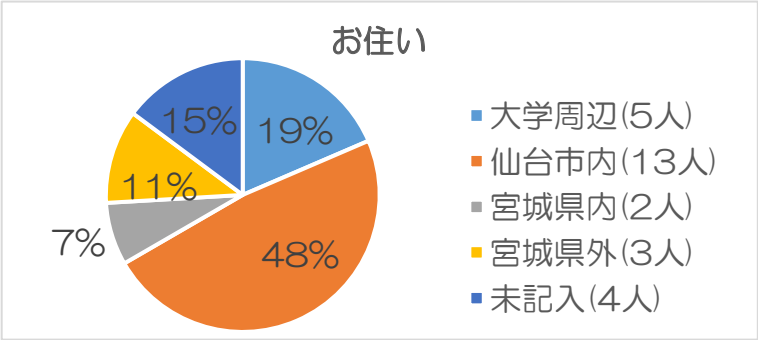
「ポーランドのユネスコ世界遺産」アンケート結果

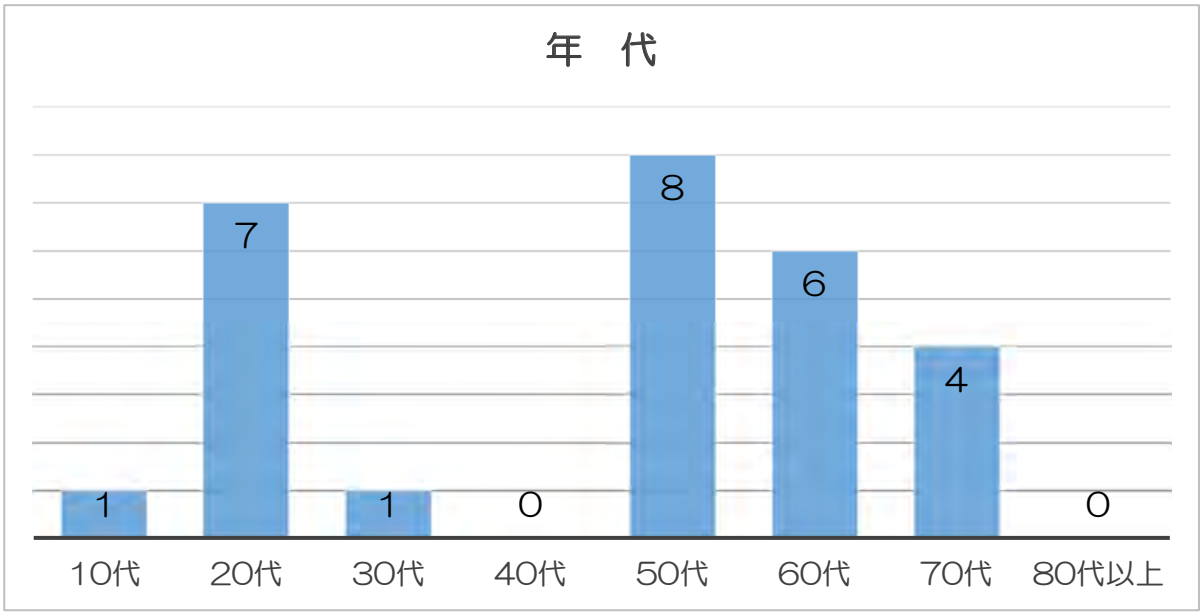


1．あなたの性別・年代・ご所属・お住いに ○ をつけてください

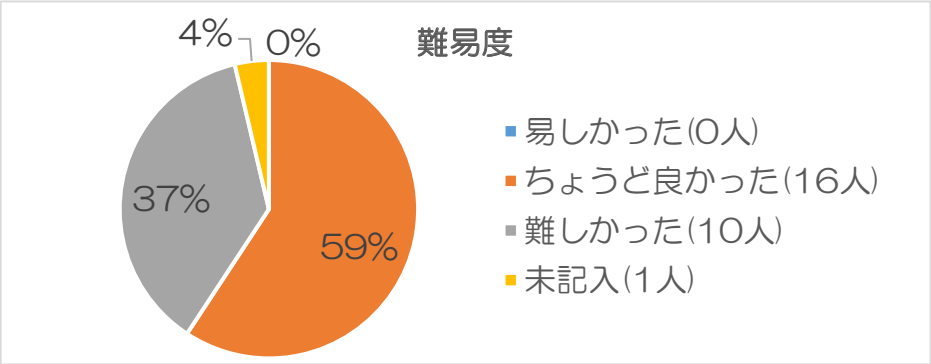




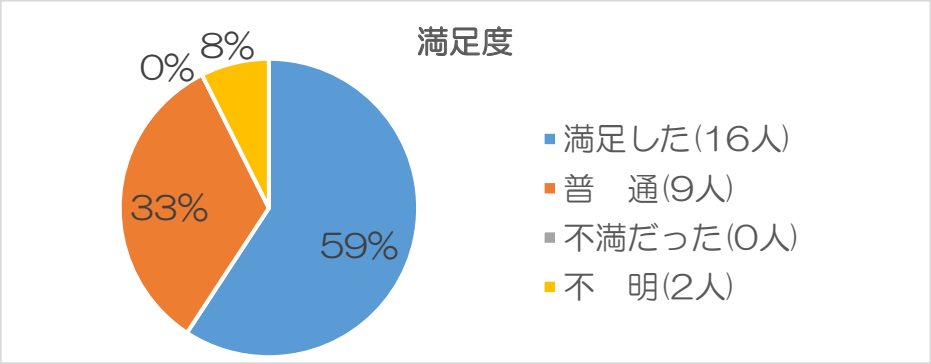




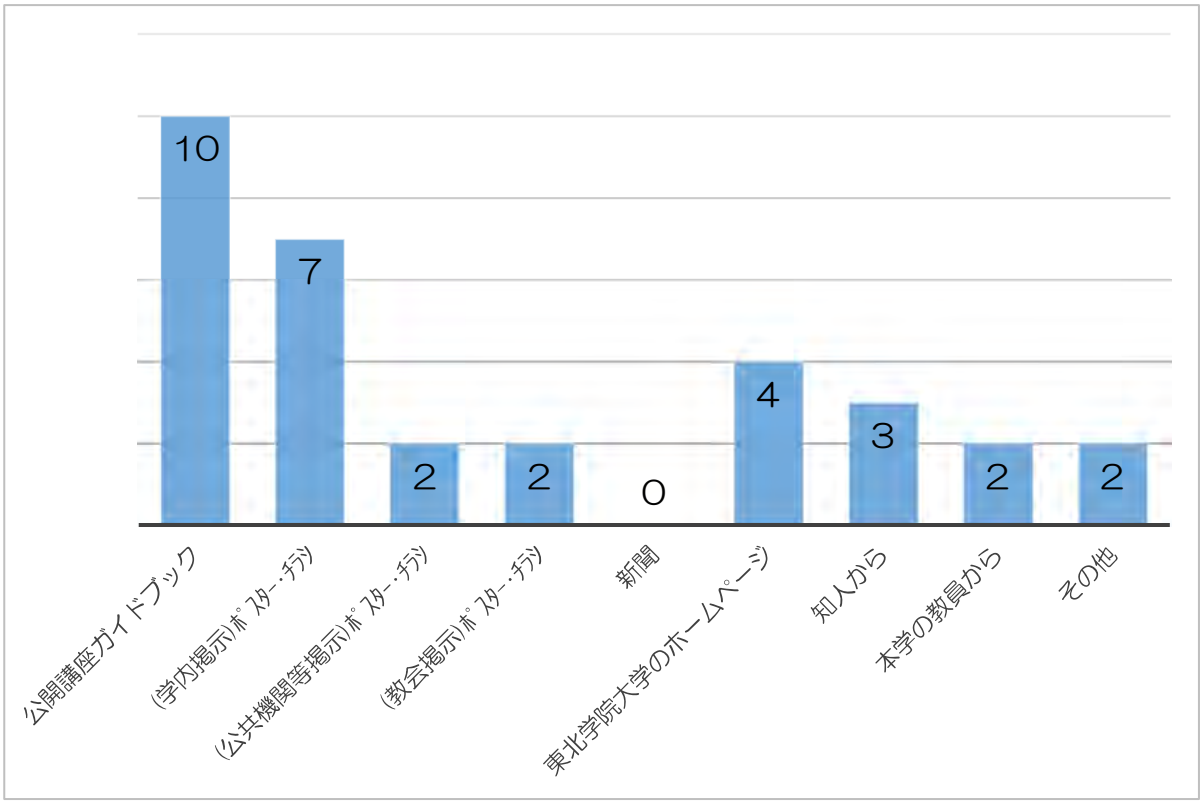
2．本日の講演会の難易度はいかがでしたか？



3．本日の講演会の満足度はいかがでしたか？



4．今回の講演会開催をどのようにして知りましたか？（複数回答可）



５．本日の講演会の感想やご意見・ご希望等があれば、ご自由にご記入ください。

① 私が（自分が）英語が分らず、理解が難しかった。教授が書いて下さったスクリーンの文章を日本語訳で下なり横に同時に写しだされていたらよかったと思いました。世界の宗教の奥深さを感じた。

② 私には難しかった。本当はもっと知りたかったが、時間が不足です。予習してからまた聞きたいです。

③ 遺産建築の保全等の充実に驚きを感じる。

④ 写真がとてもキレイなので、現場の教会の様子がよく分かりました。英語がよく分からないのですが、講師の熱意が伝わったので、好ましかったです。

⑤ いつも英語とかかわりがなければ、今日の講演は難しいと思います。来月からも講演がありますが、興味があっても英語が得意でなければ行けないと思ってしまうのではないでしょうか。通訳をつけてもらうことは不可能でしょうか。

⑥ 大変興味深い内容だった。

⑦ 興味深い内容でしたが、英語がわからず、後に資料を読むしかないので残念。

⑧ 来月から始まるアッフェルト先生の研修が楽しみです。災害のないヨーロッパは古くからの建物・彫刻・エンブレム他が残る環境が日本と比べて条件が良い。但し戦闘（争）が今後も起きなければ、永遠に残して欲しい。

⑨ 木造教会といっても、五島列島の木造教会とは違いますね。五島の教会も世界遺産登録になるようですが、とっても貧しい木造教会です。それも歴史上価値がありますが、（フランス風の造りで、お金もなく信者が食事も減って建てたようです）ポーランドはショパンとワイダ監督の映画しか知りませんでした。でも木造教会を見に行ってみたいと思いました。

⑩ 今回、ポーランドの受難の歴史を知ることができましたし、紹介いただいた教会建築のすばらしさも知ることができ、よかったです。都合がつけば、この後の講座も聞いてみたいです。

⑪ 英語の講演ですべて理解できなくてもスライドを見て勉強になりました。ありがとうございました。

⑫ ヨーロッパでは珍しい木造建築の教会。木造なのにその大きさに驚いた。また、シンプルな外観なのに内部の豪華さにもびっくり。ルター派でもこんなにも装飾的なのは意外。じっくりと本物に接したい。

⑬ 最初にヨーロッパの歴史やポーランドの記念物保護システムについて知ることができ

て良かったです。また、ヤヴォルとシフィドニツァの平和教会堂の写真があって分かりやすく、実際に行ってみたいと思いました。今回はポーランドのユネスコ世界遺産でしたが、他国の世界遺産についても知りたいと思いました。ありがとうございました。

⑭ 多くのスライドに従っての説明、良く又楽しくお話を聴く事ができました。ポーランドという国が近くなりました。Good Job. Thank you Very much!

⑮ ポーランドについて、普段あまり知ることができないので、歴史等も含めて遺産について知ることができてよかったです。これからの講座もぜひ受講したいと思います。

⑯ 英語は少し分からないところもあったのですが、要約して日本語で話して下さったので良かったです。写真など視覚的な資料が多く、分かりやすく、また想像しやすい講演でした。

公開講演会「今日のキリスト教信仰
—アメリカ合衆国の「宗教市場」のなかで—」

日　時：　2018年7月19日(木)　13：00～14：30
会　場：　土樋キャンパス　ホーイ記念館ホール
参加者：　180人

講　師：
キャロル・リッチ（Carol E. Lytch　ランカスター神学校校長）

通　訳・コメンテーター：
ジェフリー・メンセンディーク（Jeffrey Mensentdiek　桜美林大学准教授）

講演会概要：

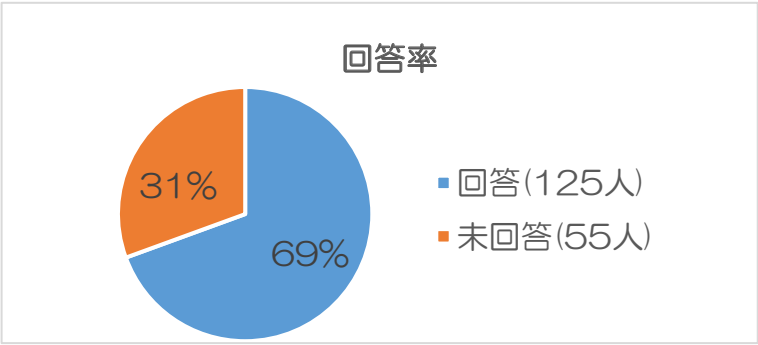
ランカスター神学校は、ドイツ改革派教会の牧師養成機関であり、卒業生の多くが宣教師として東北伝道に貢献している。東北学院を創立した三校祖のうちのW. E. ホーイ初代副院長（在任：1892-1900年）とD. B. シュネーダー二代院長（在任：1901-1936年）の母校でもある。

ドイツ改革派教会の大きな援助のもと両師が仙台において、東北学院（仙台神学校）と宮城学院（宮城女学校）のふたつのキリスト教の教育機関を創設するのに協力したのち、ランカスター神学校はいかに発展していったのか。今日、合衆国ではキリスト教信仰と牧師職はどのように教えられているのか。現代のアメリカ人の宗教行為の実践について紹介する。

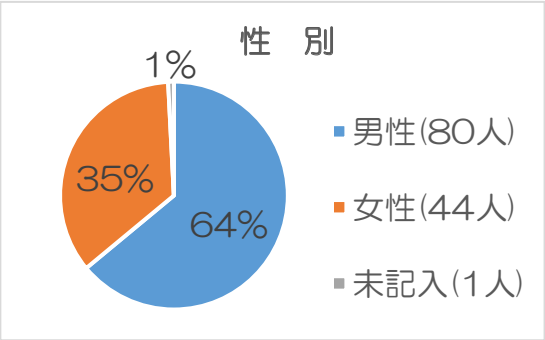
また、本講演に先立ち、ランカスター神学校と本学との国際交流協定締結式を実施する。

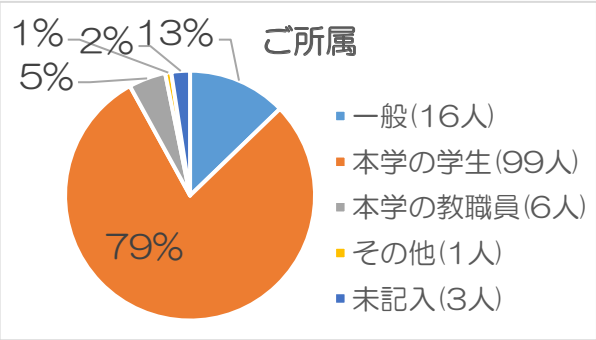
国際交流協定締結式および公開講演会等の様子：

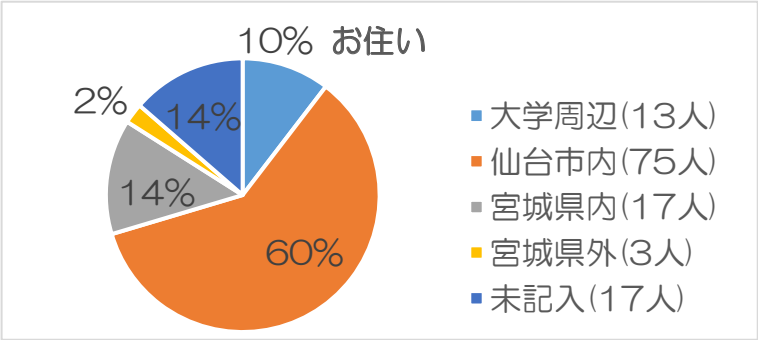
「今日のキリスト教信仰―アメリカ合衆国の「宗教市場」のなかで―」アンケート結果

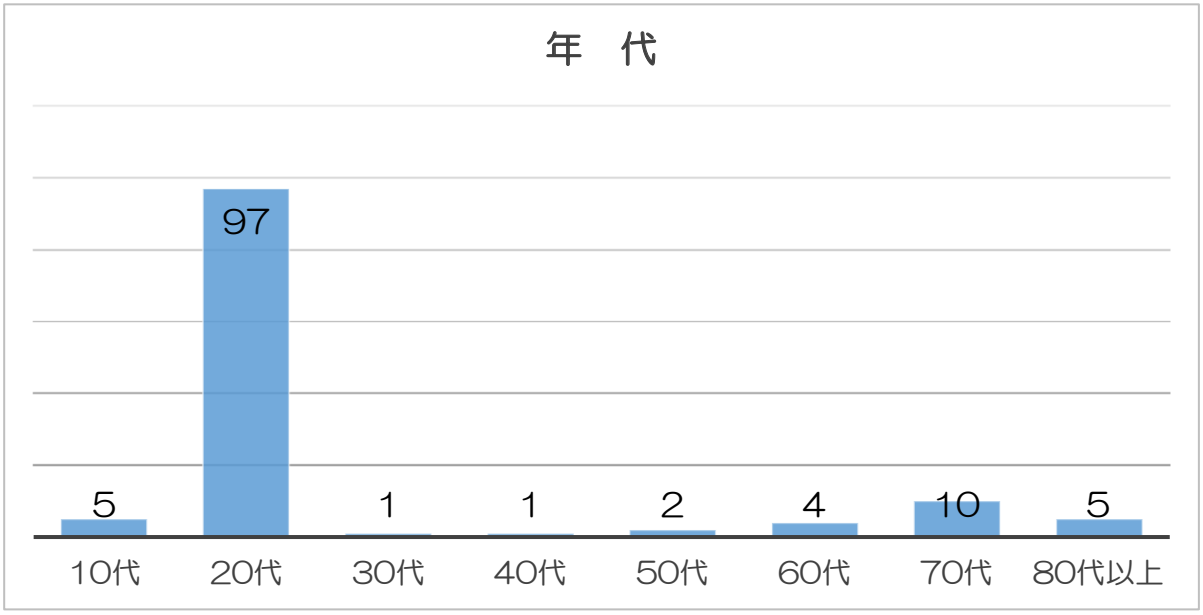


1．あなたの性別・年代・ご所属・お住いに ○ をつけてください

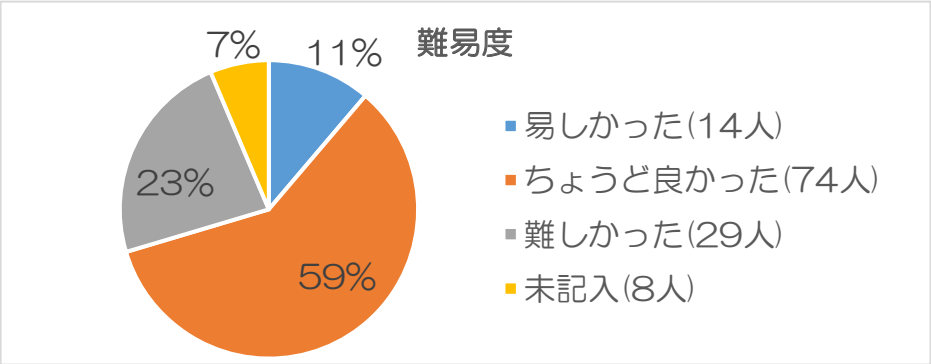




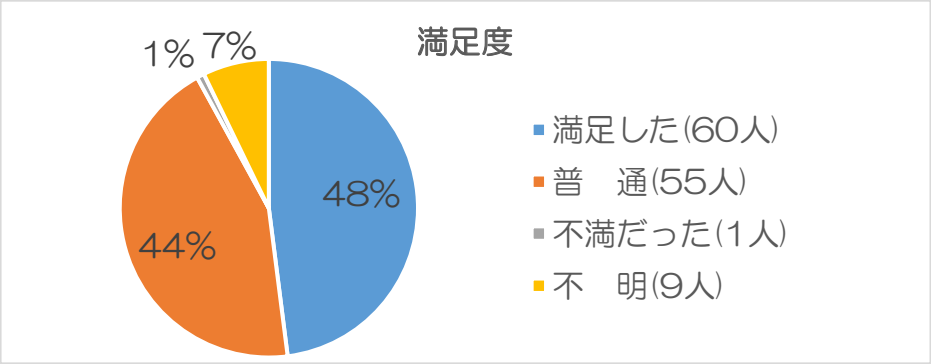




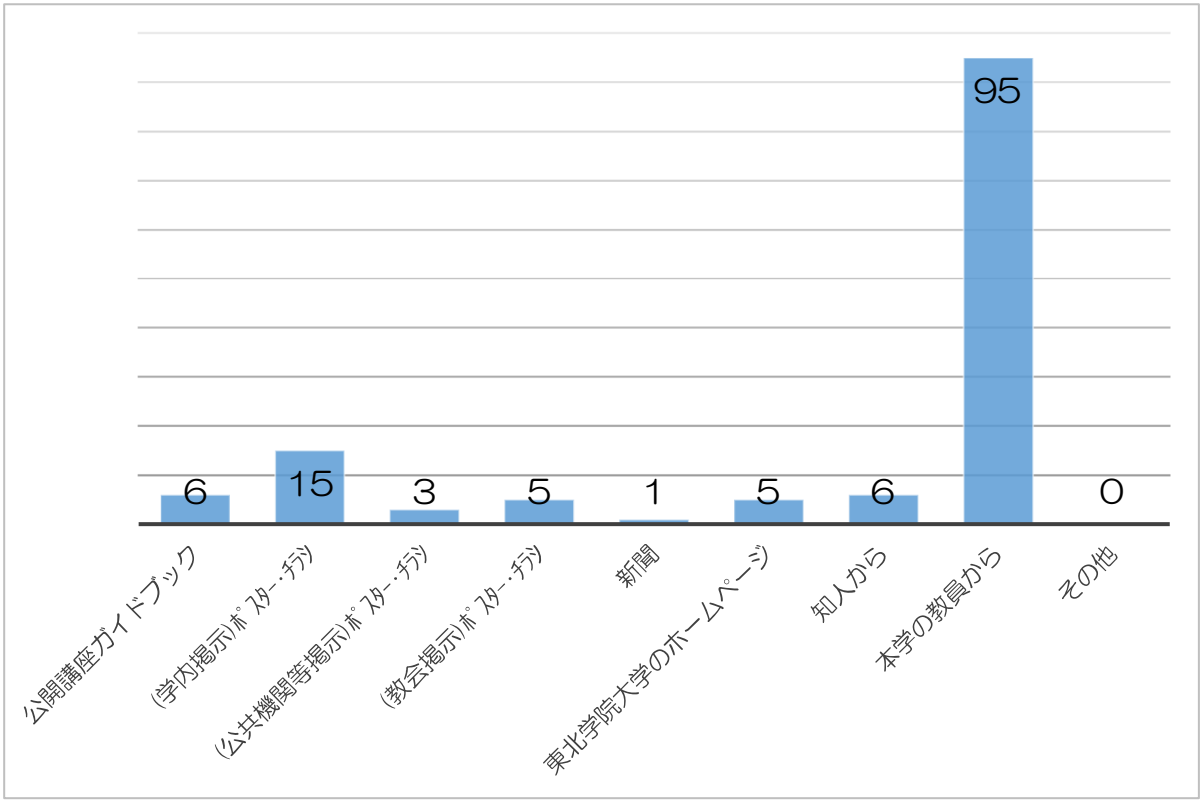
2．本日の講演会の難易度はいかがでしたか？



3．本日の講演会の満足度はいかがでしたか？



4．今回の講演会開催をどのようにして知りましたか？（複数回答可）



５．本日の講演会の感想やご意見・ご希望等があれば、ご自由にご記入ください。

① アメリカでも自分を無宗教と認識する人が2割もいると知って驚きました。しかしその認識は日本人が自分を無宗教と言うのとは少し意味が違うのではないかと感じました。その辺をもう少し知りたいと思いました。ただ前後のコメントで、社会が変化しても、人間の基本的な部分は変わらないというお話を聞き同感しました。

② アメリカのキリスト教の流れ、そして今日の多宗教への関心が深まってることが理解出来ました。教派より、各個教会に所属してその中でのクリスチャン意識、認識により関心が集まっているとのことでしたが、その中心的関心は、「教会の交わり」について、あるいは聖書理解への関心ですか？

③ 最後の質問で、福音がいかに大事なものかということがリッチ先生の返答で分かったので、良かったです。

④ 英語の講演会をきくのは、はじめてでしたが、ステンドグラスに日本のモチーフがかかれていて、日本とつながりが深いことを感じた。

⑤ またこのような講演期待します。良いお話し、有難うございました。

⑥ アメリカの文化や政治と関連付けながら、キリスト教の発展過程について学ぶことができ、とても良い機会となりました。仙台にお越し頂きありがとうございました。

⑦ 実際に協定を締結した他の大学の方の講演をもっと聞いてみたいと思った。有意義な時間だった。

⑧ 確かに無宗教である人は多い気がした。しかし、私は無宗教も一つの宗教であっても良い気がする。その上で多宗教を「理解」することが最も重要なことであると感じた。実際に私もこの講話を聞いて考え方を享受することができた。Thank you very much !

⑨ アメリカの宗教の自由について理解が深まった。今日の話を聞くと、米国人は、日本よりも政治についての意識が高いと思った。

⑩ 特にございません。講義の方ありがとうございました。

⑪ ステンドグラスに意味があるのは知っていたが、その中に日本的なモチーフの富士山や赤い鳥居が描かれていたのは意外だった。また今の宗教がどのように広まったかも知れて良かった。通訳しながらだとしょうがないが少しテンポが悪く感じた。

⑫ 講演を通し、私たちの知らないアメリカでの宗教の歴史や問題を知ることができた。また、日本人はほとんどが無宗教であり、私も含め、自分がどこの宗派に所属しているという考え方がない分、身近な教えを素直に聴くことができているようにも感じた。

⑬ 今回は講義の一環で参加しましたが、普段では聞くことのできないアメリカのキリスト

教の存在など貴重な話を聞くことができました。本当に貴重な体験ができ感謝します。

⑭ キリスト教の授業の一環で参加しましたが、貴重な話を聞くことができてよかったです。

⑮ 貴重なお話を聞いて良かった。

⑯ 授業の一環として来たが、このような場所にいれてうれしく思う。（20代・男性・学生）

⑰ 自由の中心を感じることができたように思います。自由とは、人類の歩みと進化の推進力のメインと感じました。アメリカの良心であり、クリスチャンの“力”信頼のたまものです。

⑱ 貴重な機会だったと思うので、立ち会えて良かったです。

⑲ アメリカでキリスト者が減少していることや他の宗教者が増えているという事実があることに驚きました。キリスト教についての歴史や現状を知ることができ、とても有意義な時間でした。

⑳ ステンドグラスに日本のシンボルである「富士山」や「神社の鳥居」が描かれていることはすごく誇らしいことだと感じました。

㉑ アメリカにおける宗教の自由について学ぶことができました。大学の講義内でもランカスター神学校のステンドグラスに富士山と鳥居について学んだことがあり、改めてランカスター神学校と日本の繋がりを実感した。日本にも宗教の自由があるように、アメリカでも宗教は自由に選択をできるチャンスが保障されるべきと感じた。

㉒ キリスト教というのはアメリカだけの宗教ではなく、世界を照らす光であり、そういった宗教である。内容的に少し難しく感じられました。

㉓ アメリカは宗教の自由こそが本当の信仰と感じているのだと思った。

㉔ 英語をゆっくり話してくれているのが伝わって、日本人を思いやる気持ちがある良い人だと思いました。ときどきわからない単語がありましたが英語を聞くのが楽しかったです。

㉕ すごくよかった。Exciting! Interesting! fun!

㉖ 何の話かよくわかりませんでした笑

㉗ ランカスター神学校校長さんから、貴重なお話を聞けてよかった。またこのような機会があれば、是非講演会に参加したい。

㉘ TGUと国外の大学との交流の光景を近くで見られる機会があるとは良いことだと思いました。普段礼拝に行けていない人でも今回のような講演会は勉強になう。何か得られるかもしれない。これからも続けて欲しい。

㉙　このような機会を与えられたのは初めてだったので、非常に良い経験になった。

㉚　普段、このように海外の先生のお話を聞く機会がないので、とてもいい経験になった。

㉛　約1時間30分、英語のスピーチを聞けてとても良い機会になりました。また深いお話を聞けて勉強になりました。

㉜　協定締結式というものに人生で初めて参加しました。貴重な式に参加できて、有意義な時間でした。このような機会は滅多にないと思うので、自分にとっていい経験になりました。貴重なお話も聞くことができたので参加できて本当に良かったです。

㉝　Could you please also prepare English paper when the talk was given in English?

㉞　とてもいい講演会でした。

㉟　ステンドグラスの絵の意味を理解できて良かった。

㊱　Very nice!

㊲　内容はとても素晴らしく、あのような場面を拝見させていただき、とても感謝しています。

㊳　アメリカのキリスト教の歴史とアメリカ社会の歴史を聞き、大いに勉強になり、とても感動しました。御国が来ますようにと祈ります。（会衆主義教会の会員です。）共感共苦の能力が大切と考えます。

報告会「ランカスター神学校調査報告」

日　時：　2018年9月26日(水)　15：00～17：00
会　場：　土樋キャンパス　ホーイ記念館１階コラトリエ・リエゾン
参加者：　22人

報告者：
　鐸木道剛（東北学院大学教授）
　日野哲（東北学院史資料センター調査研究員）

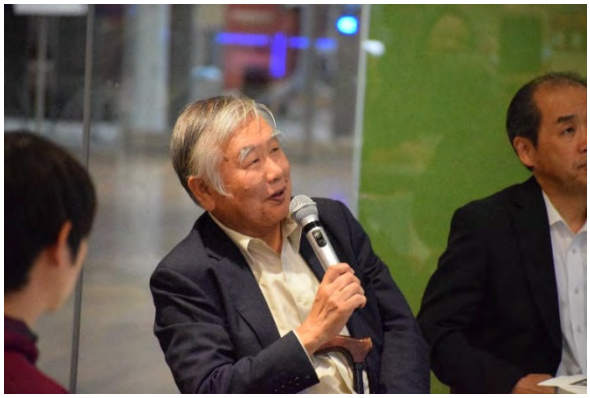
報告会概要：

　ランカスター神学校図書館の2階にある福音改革派歴史協会には、本院の創設者ホーイやシュネーダーをはじめ、ドイツ改革派教会から派遣されて東北伝道に貢献した多くの宣教師の報告書や手紙類が整理・保存されています。

　これら資料の多くは、シュネーダー伝とホーイ伝を執筆したウィリアム・メンセンディーク教授と、百年史の編集主任・執筆者であった出村彰教授がコピーを持ち帰り、現在東北学院史資料センターに保存されています。昨年12月に福音改革派歴史協会の事前調査を行った鐸木道剛教授の報告に基づき、今回は保存されている写真等の資料をスキャンすることを主な目的として、8月に鐸木教授と日野哲史資料センター調査研究員が調査を行いました。

　創立当初に在学した学生の個別写真や、ホーイが仙台着任時に住んだと思われる日本家屋、創立50周年を機に行われたシュネーダーと出村悌三郎との院長職の引継ぎの様子、東北各地の教会や宣教師の活動の様子などの貴重な写真が多数残されていました。今回はこれら写真をスライドでご覧いただきながら、ランカスター神学校での調査の様子とその成果をご報告いたします。

報告会の様子（アンケート未実施）：



シンポジウム「苦難と救済―パウロにおける苦しみの意義―」

日　時：　2018年10月13日(土)　13：00～16：30
会　場：　土樋キャンパス　ホーイ記念館ホール
参加数：　90人

講　師：
ペトラ・フォン・ゲミュンデン（Petra von Gemünden　アウクスブルク大学教授）
「パウロにおける苦しみの意義」
青野太潮（西南学院大学名誉教授）
「パウロの『十字架の神学』から見た『苦難』の問題」
吉田　新（東北学院大学准教授）
「模範としてのキリストの苦難」

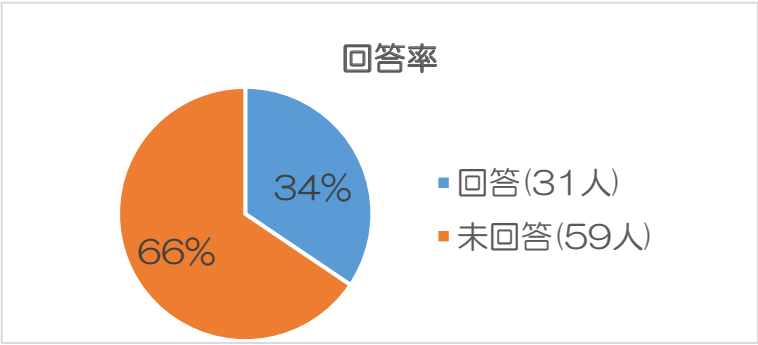
通　訳：
ウルリッヒ・フリック（Ulrich Flick　東北学院大学講師）

シンポジウム概要：

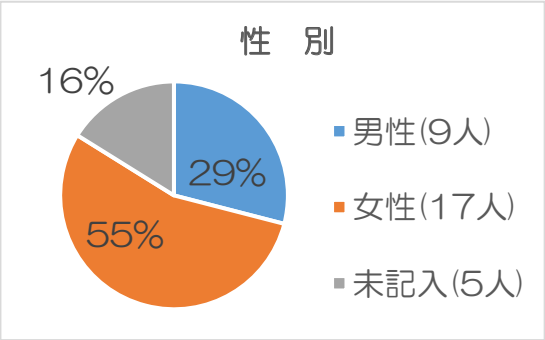
「現在の苦しみは、将来わたしたちに現されるはずの栄光に比べると、取るに足らない」（ロマ8･18）とパウロは述べている。パウロを含む初期キリスト教徒は苦難と常に向き合ってきた。苦しみをどのように理解し、いかにそれを乗り越えたのだろうか。本シンポジウムでは、信仰によって苦難を生きる力へと変えたパウロの葛藤の足跡を辿る。パウロは苦難のなかに、逆説的に神の肯定を見て取っている。パウロの「十字架の神学」を視座に据え、このような捉え方の現代的な射程について考えたい。そして、パウロ以後、キリストの苦しみを模範とする生き方が初期キリスト教に広がり、殉教者の思想的支えとなった。初期キリスト教における苦しみの理解とその展開について探りたい。

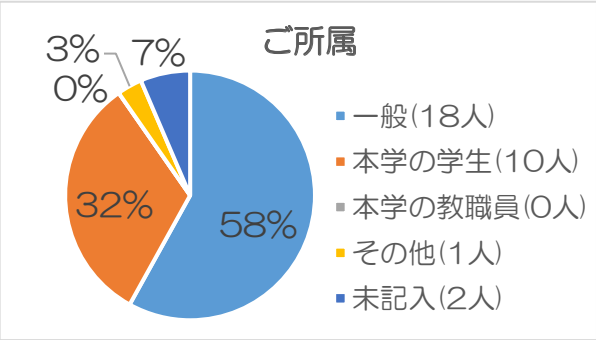
シンポジウムの様子：

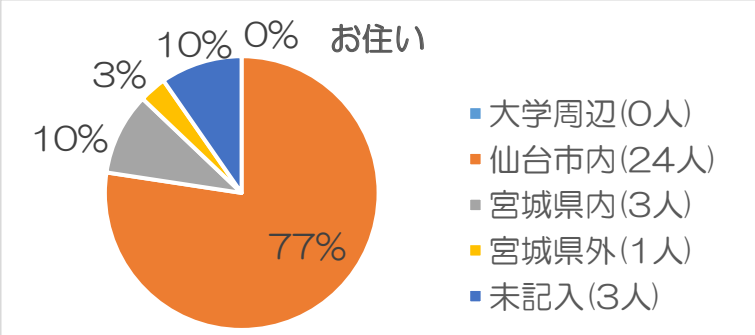
「苦難と救済―パウロにおける苦しみの意義―」アンケート結果

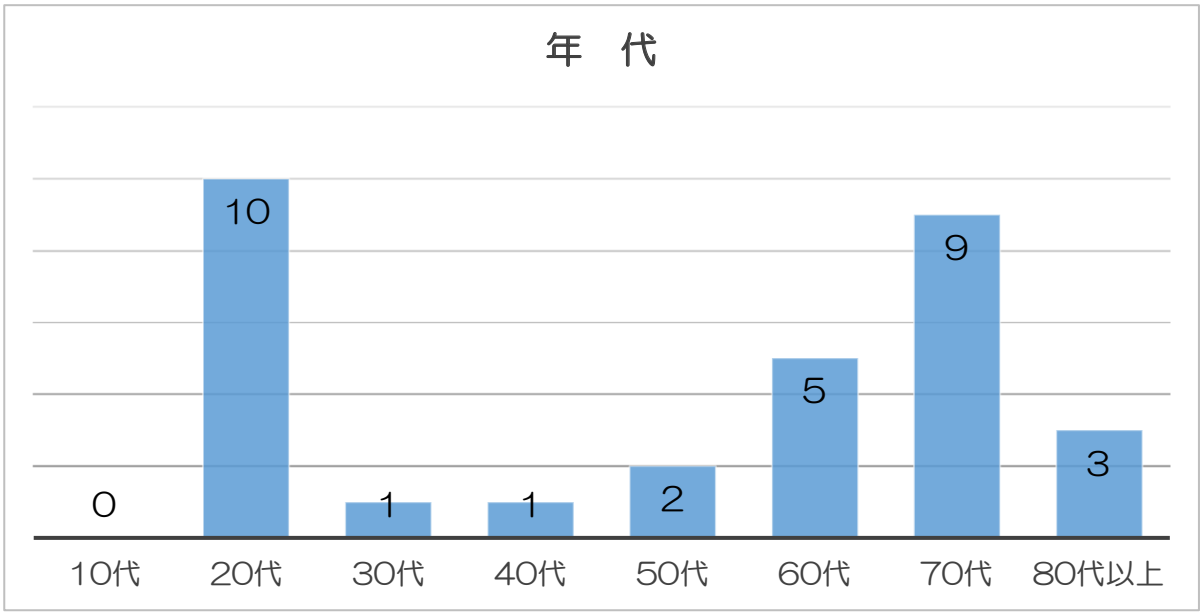


1．あなたの性別・年代・ご所属・お住いに ○ をつけてください

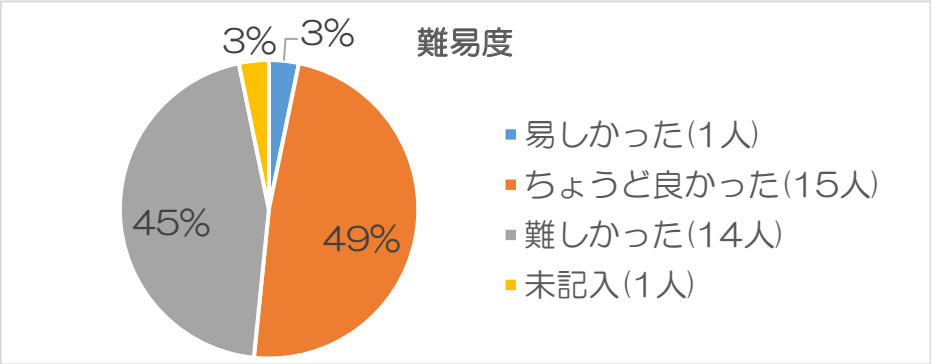




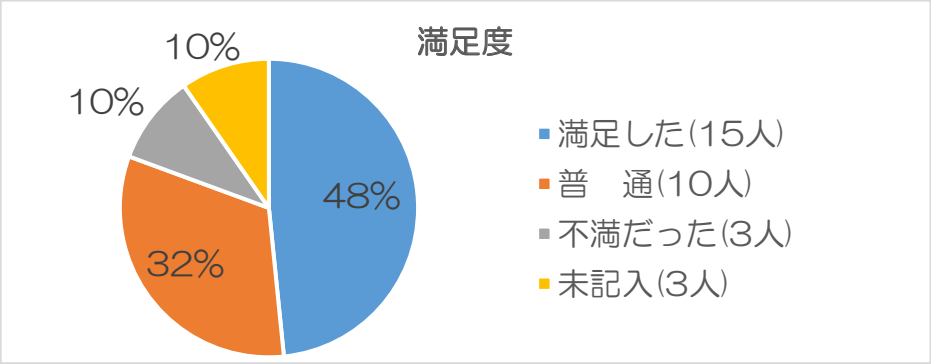




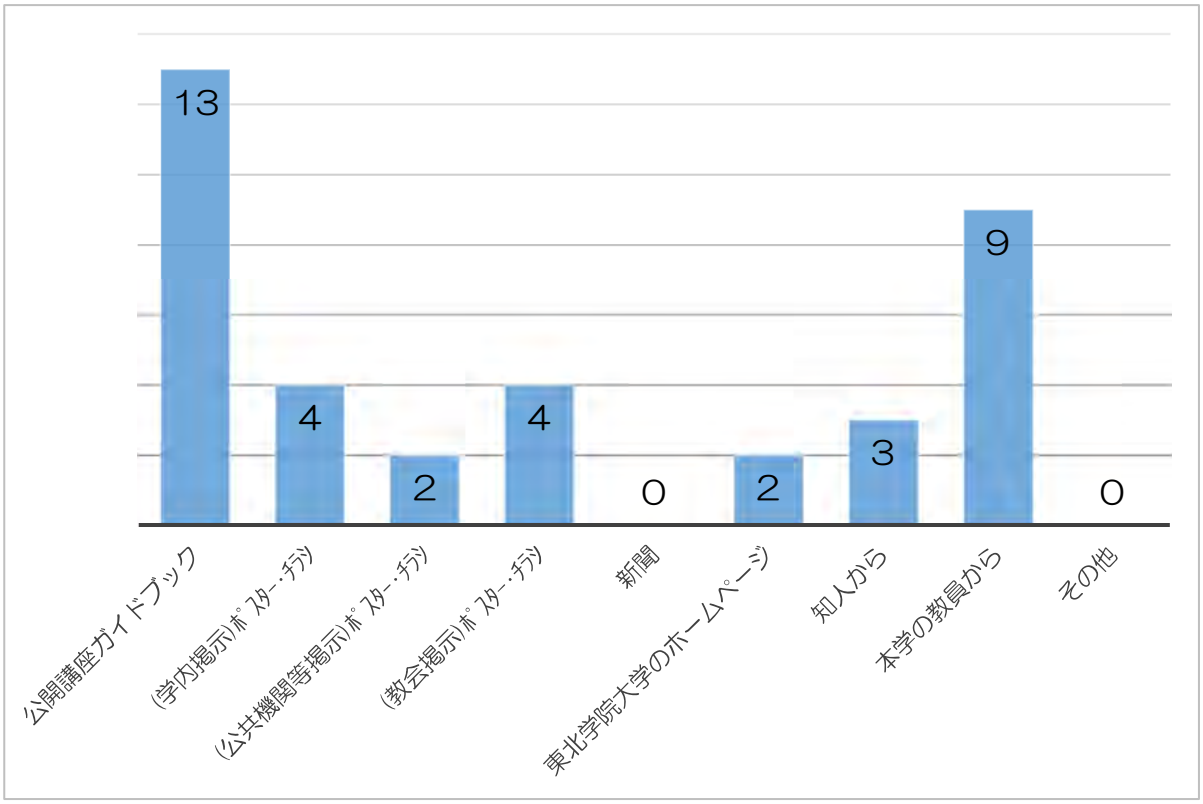
2．本日のシンポジウムの難易度はいかがでしたか？



3．本日のシンポジウムの満足度はいかがでしたか？



4．今回のシンポジウム開催をどのようにして知りましたか？（複数回答可）



５．本日のシンポジウムの感想やご意見・ご希望等があれば、ご自由にご記入ください。

① 苦難とらえ方が時代の背景によって変わっていくのだということを感じて、それに対する教えも変わり、それは本当に神の教えとして理解できるものなのだろうかと思った。

② 私は6年間ミッションスクールに学びましたが、今回の講演はとても難しく1回では理解できませんでしたので又、何回も読んでみようと思います。吉田新先生の文は少しわかりましたが…。

③ 聖書の解釈法に関心を、そしてその多様性にも関心を持ちました。ゲミュンデン先生と東北学院大学との関係性をもう少しくわしく知りたかったです。

④ 贖罪理論と十字架の関係がよく分かりました。ありがとうございました。

⑤ 最初の外国語ではなされた講演は翻訳文が手元に配られていたが中身を読んで理解するのに分量が多く間に合わず、むしろ、静かに文章を読むことに集中出来た方が良かったように思う。次の先生のお話は、文章に添ってお話してくださったので、判り易かった。

⑥ ドイツ語を大学で1年学びましたが、今日初めて女性によるドイツ語の発音を聴けて幸いでした。もっともほとんど意味は、プリントがなければ解りませんでしたが…。とても有意義でした。

⑦ パウロの“苦しみ”を中心としたお話、ためになりました。贖罪と十字架の意味、今まで理解いていたパウロの考え方と少々異なり、もう一度、レジュメを読みたいと思います。聖書を深く学んでいる者ではありません。ただ、パウロに魅かれております。

⑧ パウロの書簡からのテーマはよかったです。もう少し、わかりやすく、ほりさげてほしかった。あと時代の違いで三位一体論はずっとあとなので、もう少し論点をその時代からみる現代へのアプローチにしてほしかった。福音主義教派のこと、まだよく理解できなくてごめんさない。

⑨ ペトラさんの講演は、よくまとまっていて説得力があった。通訳の問題かシンポジウムでお互いかみあっていないのが残念。

⑩ キリスト教の授業とMyTGで今回のシンポジウムの存在を知りました。私はキリスト教徒ではありませんが、世界の半数以上が旧約を理解しており、三大宗教として人々に信じられていることから、どのような考えなのだろうと私なりの興味があります。学生の身で不勉強なのですが、概要だけでも事前にお知らせ下さるとわかりやすかったです。

⑪ 東日本大震災をめぐって苦難と救済がシンポで展開すべきだと思ったが“三一論”の質問は…？

⑫　キリスト教について考え直す機会を得た。

⑬　ドイツ人講師を起用しながら同時通訳を使用しないのは、講演する意味はない。せめてゲミュンデン教授には英語で講演をお願いした方が、聴衆に共感を受けるし講演を行う効果があるのではないでしょうか。

公開講演会「聖トマス～イエズス会～ヒンドゥー原理主義
―南インドにおけるキリスト教ミッションの歩みと現在―」

日　時：　2018年11月10日(土)　15：30～17：00
会　場：　土樋キャンパス　ホーイ記念館ホール
参加数：　60人

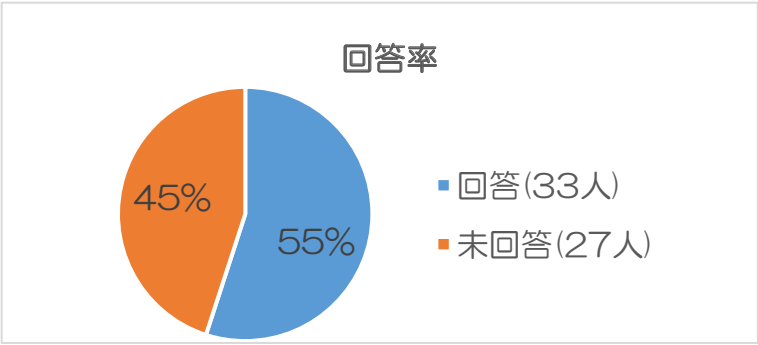
講　師：
山下博司（東北大学教授）

講演会概要：

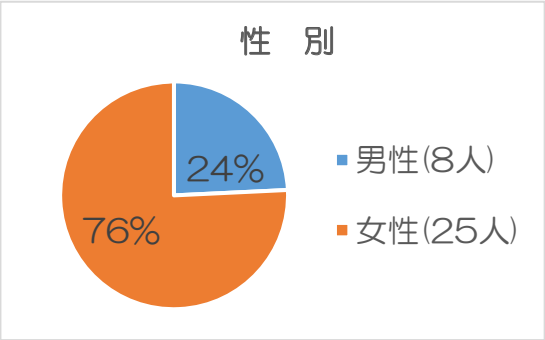
南インドのキリスト教宣教は、信憑性はともかく、イエスの使徒聖トマスを嚆矢とし、今も残るゆかりの場所や教会は多くの信者を集める。しかし実質的な南インドの宣教は、カトリック教会とプロテスタント諸派が信者獲得にしのぎを削った時期に本格化する。本講演では、マドゥライ・ミッションを中心とするカトリック・イエズス会の動きと、トランキバール・ミッションを代表とするプロテスタント系の布教活動を詳しく取り上げ、在地社会やカースト制との絡みについて考える。加えて、近現代インドにおけるキリスト教の意義をとくに教育が学問の方面から検証するとともに、ヒンドゥー至上主義が昂じるなか、キリスト教徒がこうむる宗教的暴力の実態と背景事情に触れる。

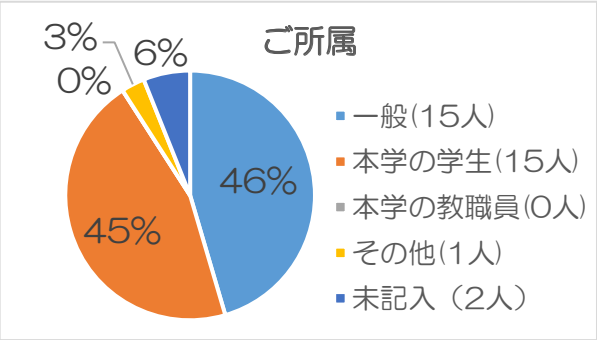
公開講演会の様子：

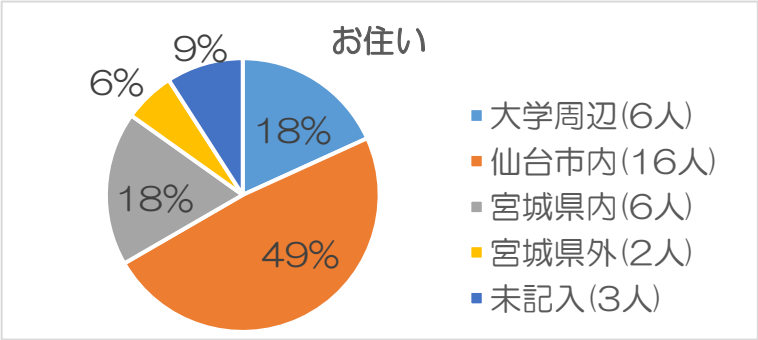
「聖トマス～イエズス会～ヒンドゥー原理主義」アンケート結果

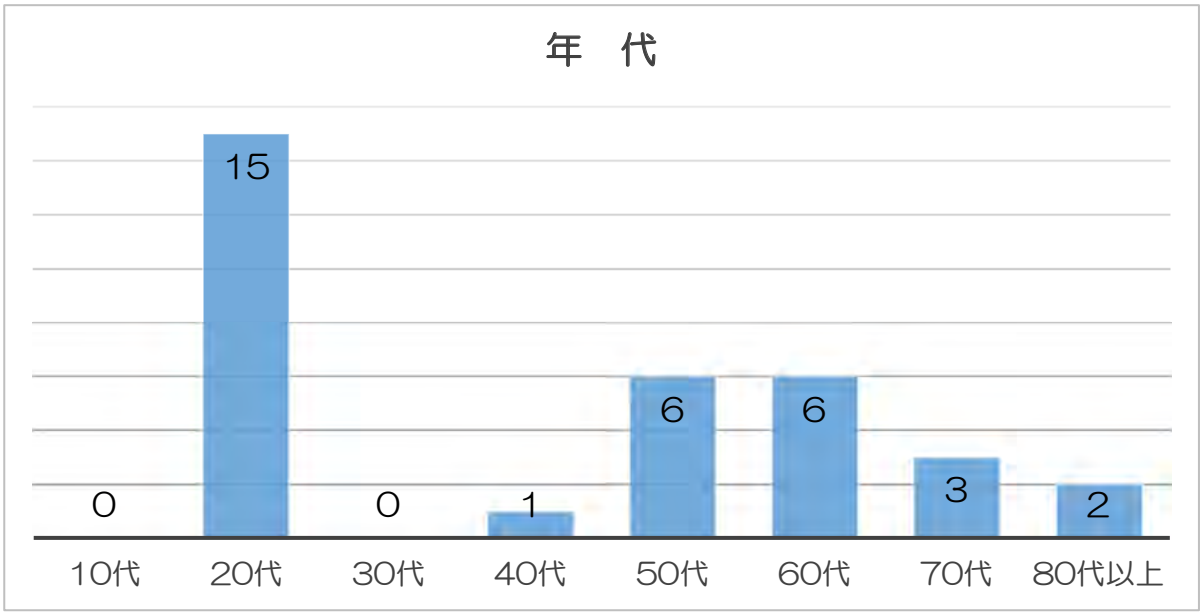


1．あなたの性別・年代・ご所属・お住いに ○ をつけてください

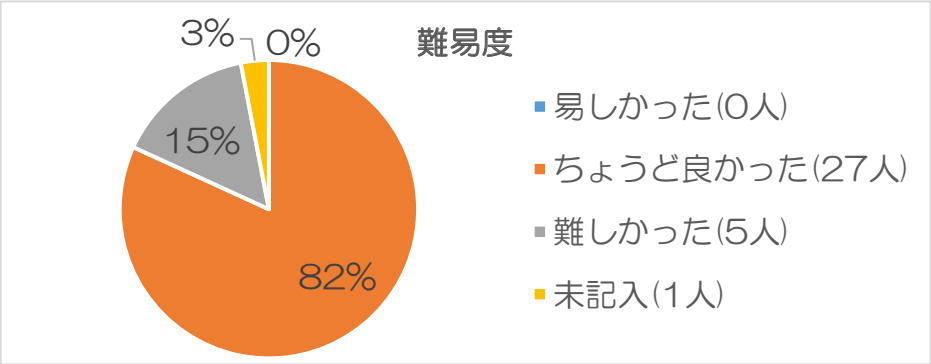




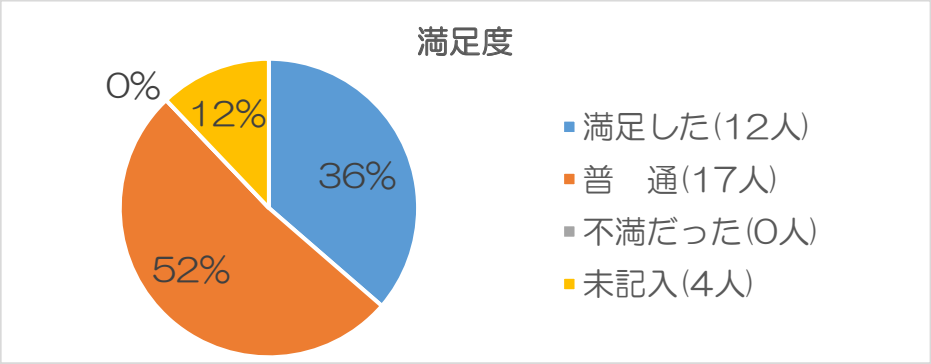




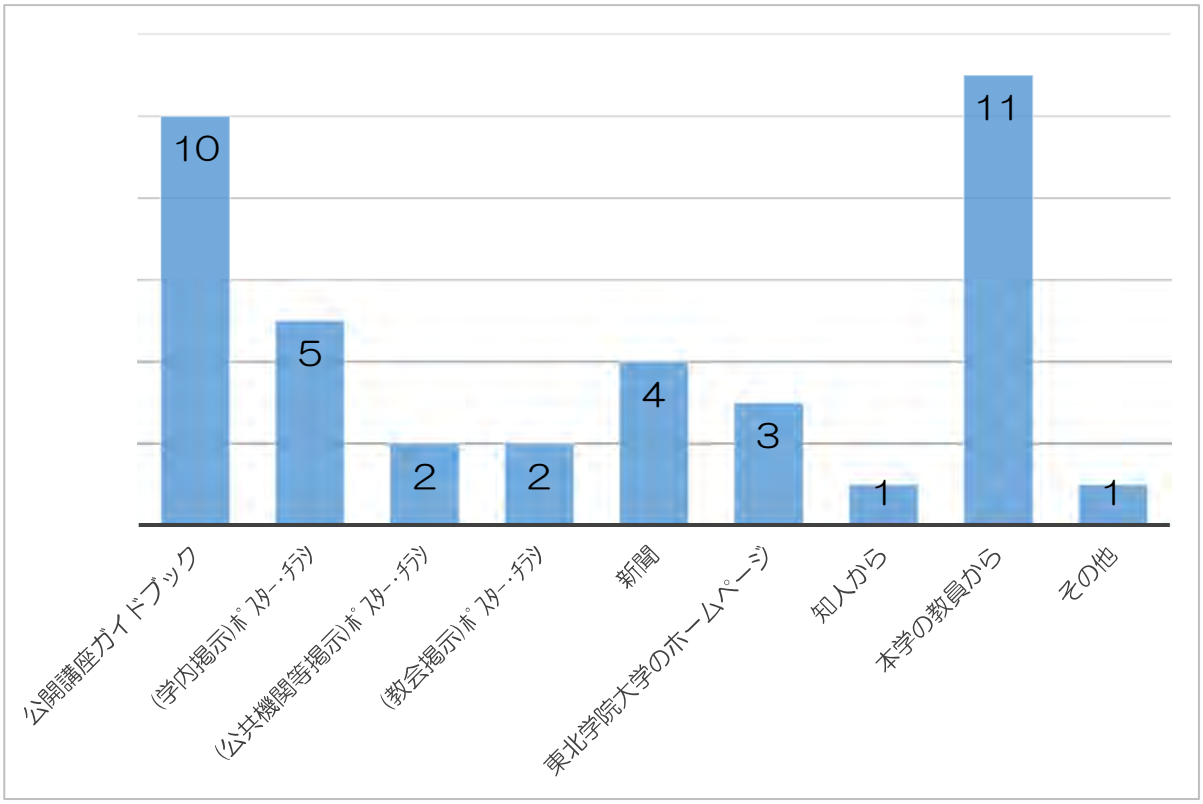
2．本日の公開講演会の難易度はいかがでしたか？



3．本日の公開講演会の満足度はいかがでしたか？



4．今回の公開講演会開催をどのようにして知りましたか？（複数回答可）



５．本日の公開講演会の感想やご意見・ご希望等があれば、ご自由にご記入ください。

① 流れのみでなく、先生の実体験などももう少しふまえたお話が聞きたかったです。

② もっと広報的に活発に宣伝して、多くの方に行らしていただいたほうがいいと思います。

③ スライドの文字が多い。

④ スクリーンの文章や写真をプリント化して配布してほしかったです。情報が多いため、スクリーンと口頭のみでは頭に入りにくいように感じます。

⑤ 南インドにおけるキリスト教の布教の歩みについて、わかりやすく学ぶことができた。ありがとうございます。

⑥ スライドの資料があるともっと分かりやすかったと思いました。様々な視点からのお話で大変興味深かったです。

⑦ 写真を沢山使って話してたのが、とても良かった。

⑧ 興味深い内容のお話、ありがとうございました。本日、マザーグースについての講座もあり、遅れての参加失礼いたしました。貴重な公開講座、できましたら、開催時刻をずらしていただけるますと、なお、多くの参加が可能になるかと思います。ご一考いただければ、幸いです。また、案内のチラシ等（白黒でけっこうですので）ホール入口等においていただけるとありがたいです。

⑨ 宗教改革及びキリスト教の歴史に関心があるので、そのような色々な講座を希望します。

⑩ 宣教師たちが言語学に影響を及ぼしたという点にとても興味をもちました。布教をする上での現地の言語の理解が後の言語学の下地となっていくという点がなるほどと興味深く感じました。

⑪ 本日はインドでのキリスト教ということの講演であり、私もはじめて学ぶことも多くあった。今回の講演会の重要な点と考えたのが、インドでの布教は常にカースト制がつきまとっていることである。デ・ノビリが行った様々な施策はインド布教において、、効果的な事であったと考える。特にノビリが行った（勢力と不況の分離）は興味深いと考えた。

⑫ ありがとうございました。大変参考になりました。（あまり聞くことができない内容だったので）

⑬ 南インドキリスト教歴を知る事ができ大変面白かったです。今日の政治的問題を見るうえで非常に参考になりました。ありがとうございました。関係者の方々に感謝いたします。

⑭　勉強になった。

シンポジウム「ジョン・ラファージの中世主義
ージャポニスムとステンドグラス復興ー」

日　時：　2019年2月23日(土)　13：30〜17：00
会　場：　土樋キャンパス　ホーイ記念館ホール
参加者：　47人

講　師：

鐸木道剛（東北学院大学教授）
「ステンドグラス〈地上の天国〉」

ベアトリス・ラファージ（Beatrice La Farge　フランクフルト大学研究員）
「The Family of Jhon La Farge, its Connections with Boston Brahmin Society and Place in American History」

ヘンリー・アダムズ（Henry Adams　Case Western Reserve大学教授）
「Windows to the East: The Japanese Influence on La Farge's Stained Glass」

岡部昌幸（帝京大学教授）
「ラファージ、ティファニーと日本のステンドグラス」

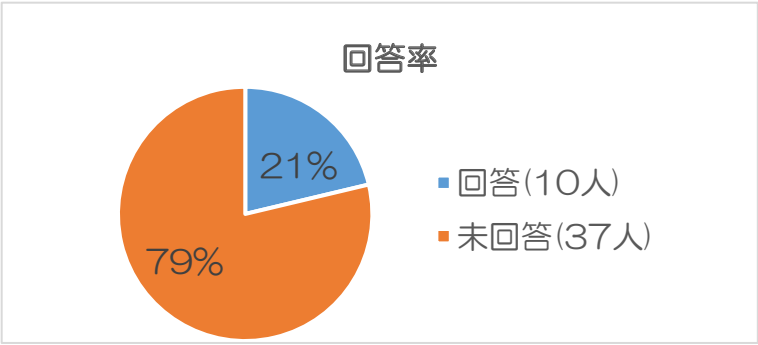
井上瞳（愛知学院大学准教授）
「ジョン・ラファージと日本美術」

シンポジウム概要：

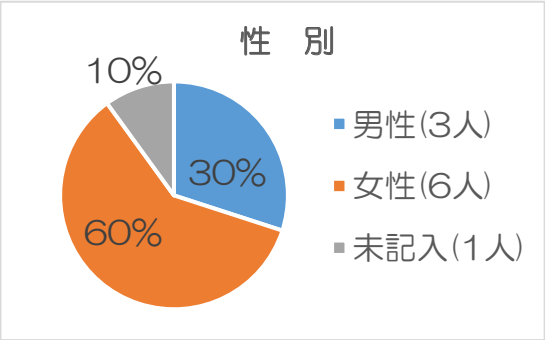
ジョン・ラファージ（1835-1910年）は、アメリカのジャポニスムのパイオニアであるとともに、アメリカにおけるステンドグラス復興のパイオニアでもあった。ジャポニスムと、ゴシックのステンドグラスとの結びつきはいかにも奇異である。しかし、ともに19世紀の中世復興である点で軌を一にする。ジョン・ラファージは乳白色のガラスを考案し、有名なティファニーがそれを商品化して身近なものとした。そのステンドグラスの美を西洋中世美術とジャポニスムとの観点から考察する。

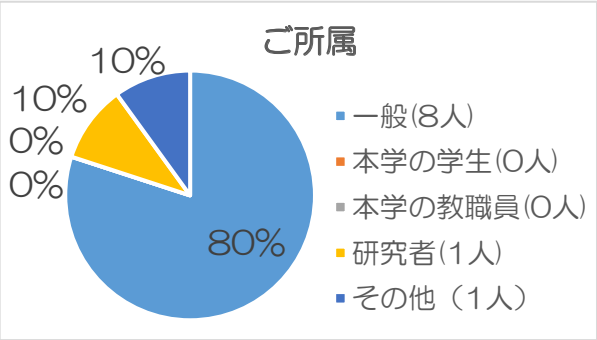
シンポジウムの様子：

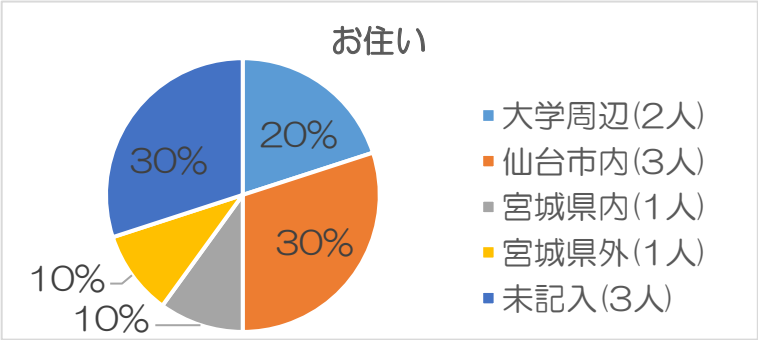
「ジョン・ラファージの中世主義－ジャポニスムとステンドグラス復興－」アンケート結果

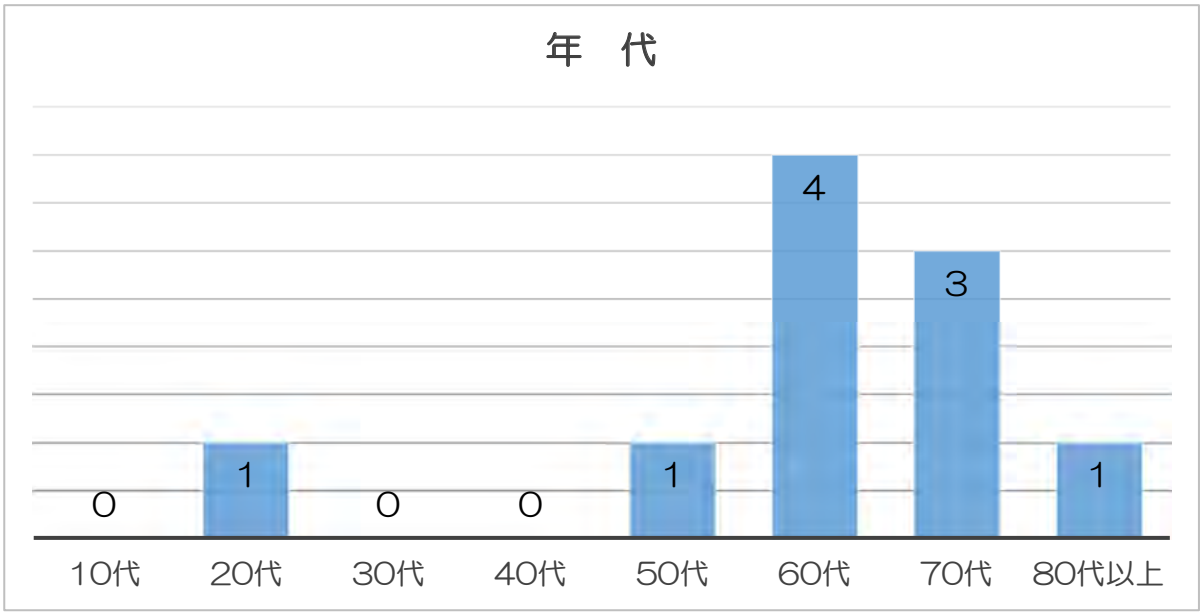


1．あなたの性別・年代・ご所属・お住いに ○ をつけてください

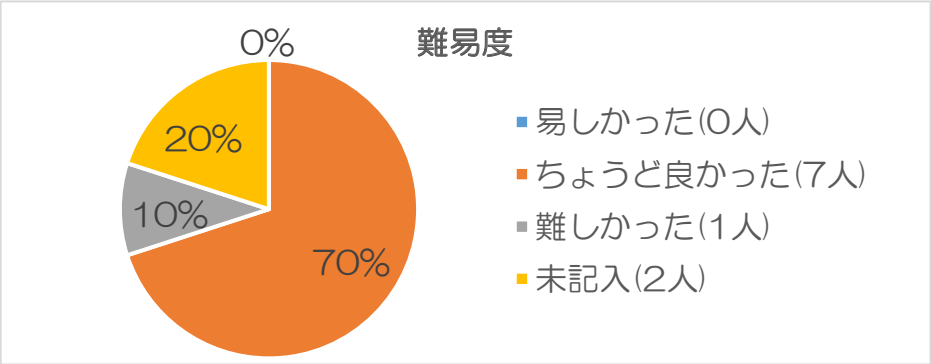




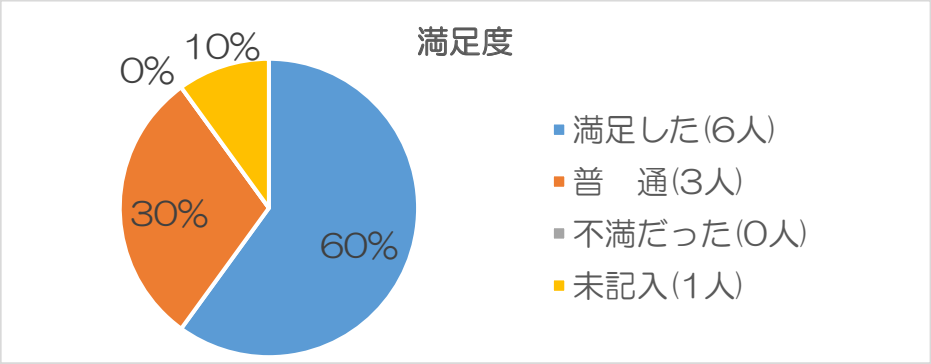




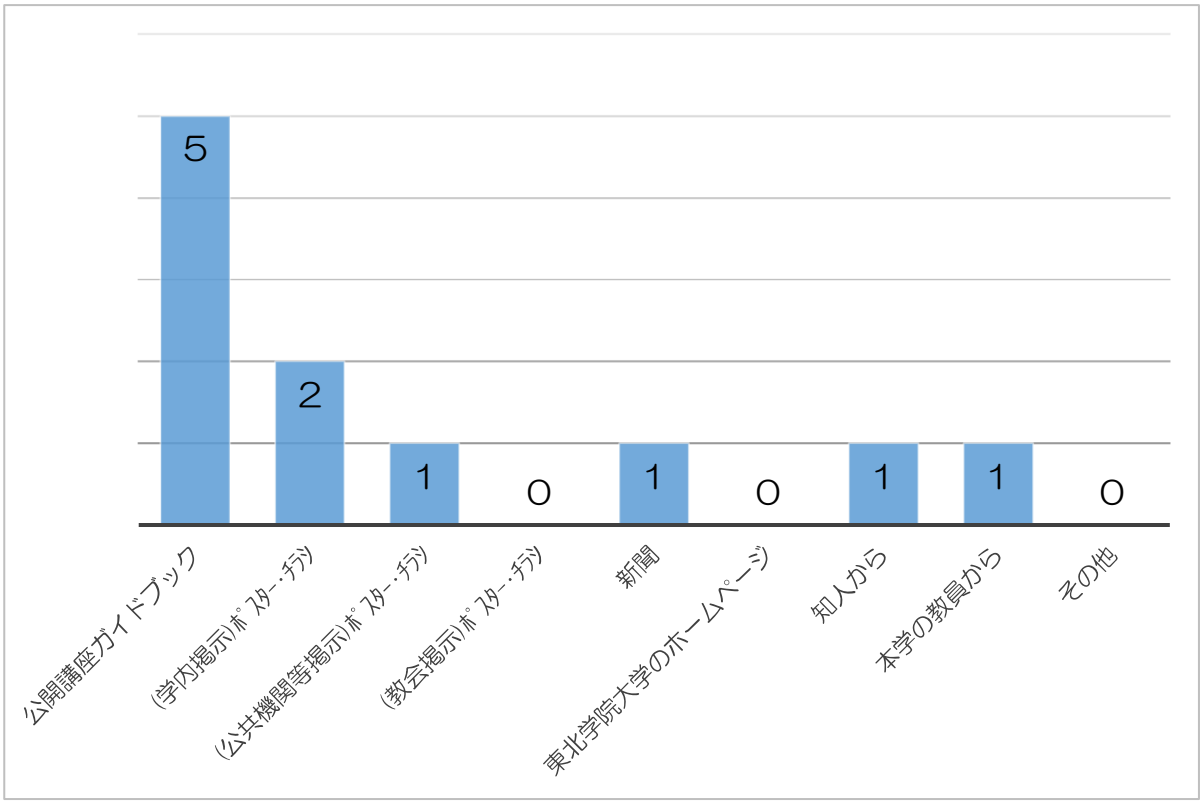
2．本日のシンポジウムの難易度はいかがでしたか？



3．本日のシンポジウムの満足度はいかがでしたか？



4．今回のシンポジウム開催をどのようにして知りましたか？（複数回答可）



５．本日のシンポジウムの感想やご意見・ご希望等があれば、ご自由にご記入ください。

① 多方面の活躍があり、ラファージの人物像が少し理解できました。

② Ｇｏｏｄ・Ｊｏｂ！

③ ジョン・ラファージとは何者か？知りませんでした。ジョン・ラファージと日本美術の関係が少し分かりました。ステンドグラスだけでなく、美術も幅広い作品があるのですね。

④ ジャポニズムや装飾芸術という今日重要なテーマが中世主義という観点から見事に繋がることが分かりました。今後、さらにテーマが広がってゆくと思います。次回のシンポジウムを楽しみにしています。配布資料も充実していて大変勉強になりました。

⑤ 国際シンポジウムで講師陣も素晴らしいのに、在校生の姿が見られなかったのは残念です。

⑥ 国際と名付けての開催に参加者が少なく講師陣に失礼かなと思いました。

シンポジウム「重要文化財『デフォレスト館』の価値について」

日　時：　2019年9月28日(土)　14：00～17：00
会　場：　土樋キャンパス　８号館５階押川記念ホール
参加者：　80人

プログラム：

第１部　基調講演「デフォレスト館の価値について」講師
野村俊一（東北大学准教授）「デフォレスト館の創建と明治期の履歴」
足立裕司（神戸大学名誉教授）「住宅史からみたデフォレスト館について」
是澤紀子（日本女子大学准教授）「デフォレスト館の木部塗装にみるオリジナルとオーセンティシティ」

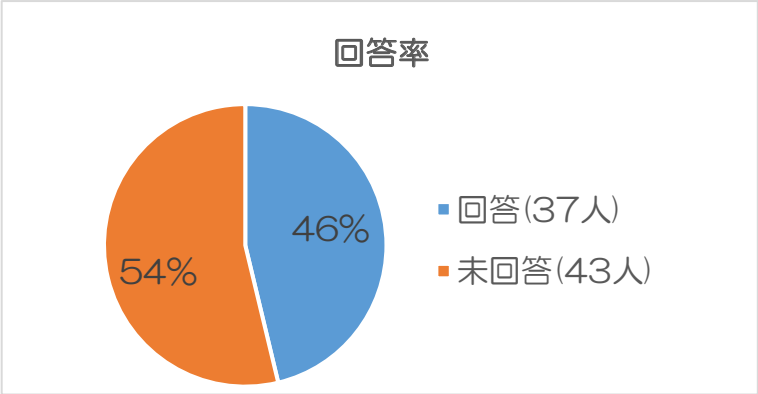
第２部　パネルディスカッション　パネリスト、モデレータ（上記講師３名含む）
後藤治（工学院大学理事長）
関口重樹（宮城県教育庁文化財課技術主幹）
崎山俊雄（本学工学部准教授）

シンポジウム概要：

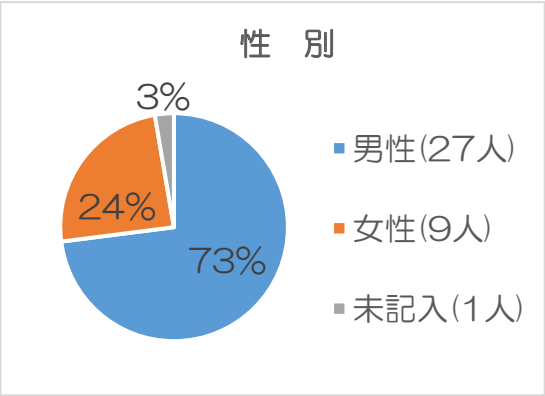
東北学院大学土樋キャンパスに現存する国内最古級の宣教師館「東北学院旧宣教師館（デフォレスト館）」は、その高い価値が認められ、2016年に重要文化財建造物に指定されました。今回のシンポジウムはそれを記念して、調査報告書の執筆に直接かかわった研究者を招いてデフォレスト館の価値を紹介するとともに、保存に関する課題や展望について議論し、貴重な歴史が刻まれたデフォレスト館の魅力を多くの皆さまに伝えることを目的として開催いたします。

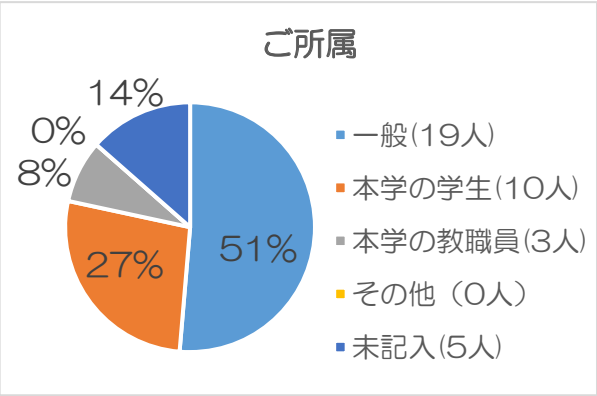
シンポジウムの様子：

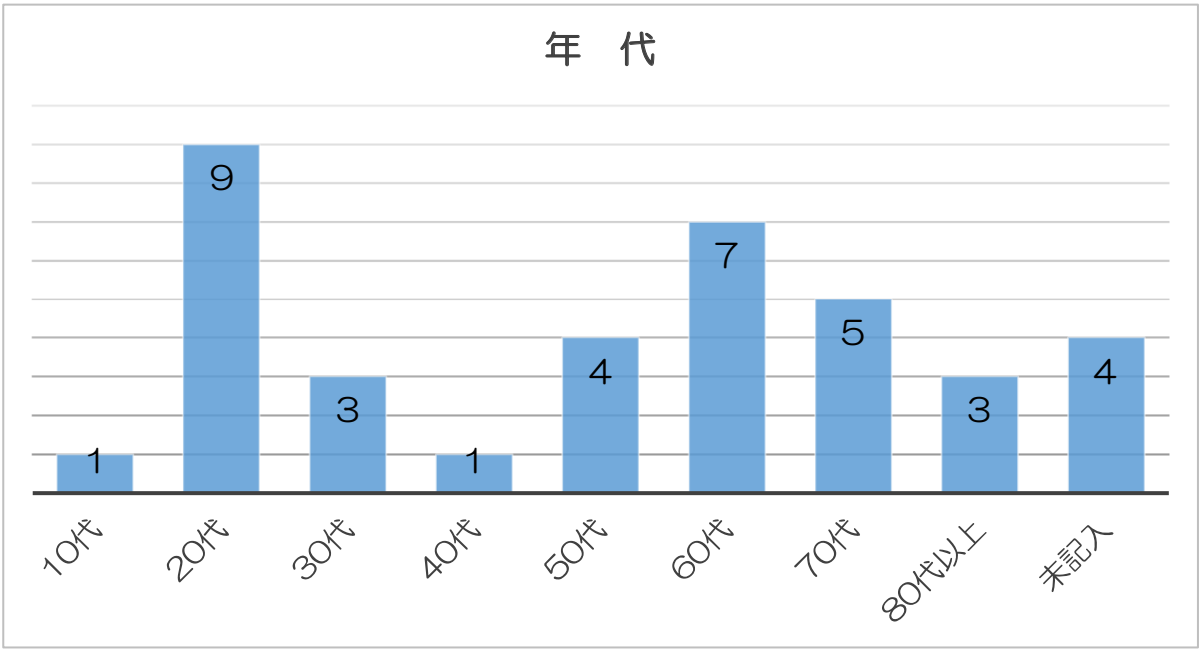
「重要文化財『デフォレスト館』の価値について」アンケート結果



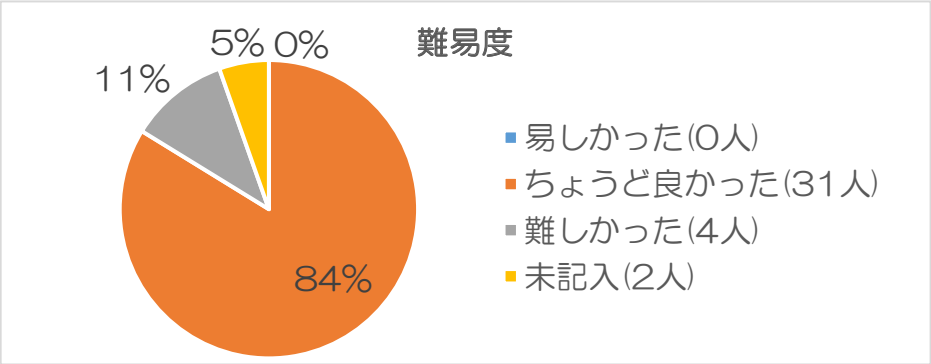
1．あなたの性別・年代・ご所属・お住いに ○ をつけてください



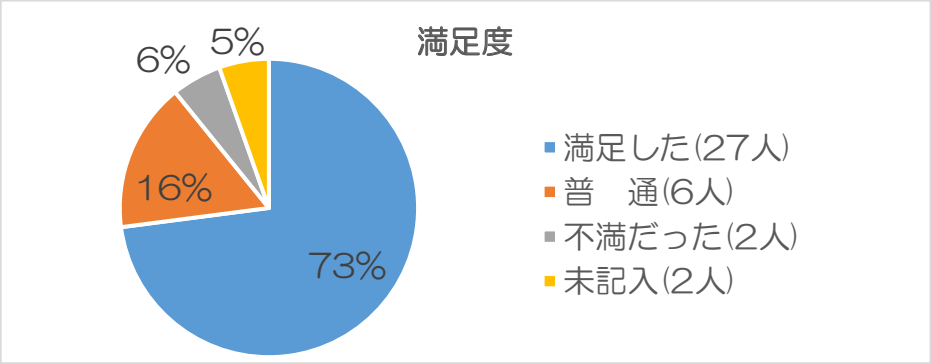




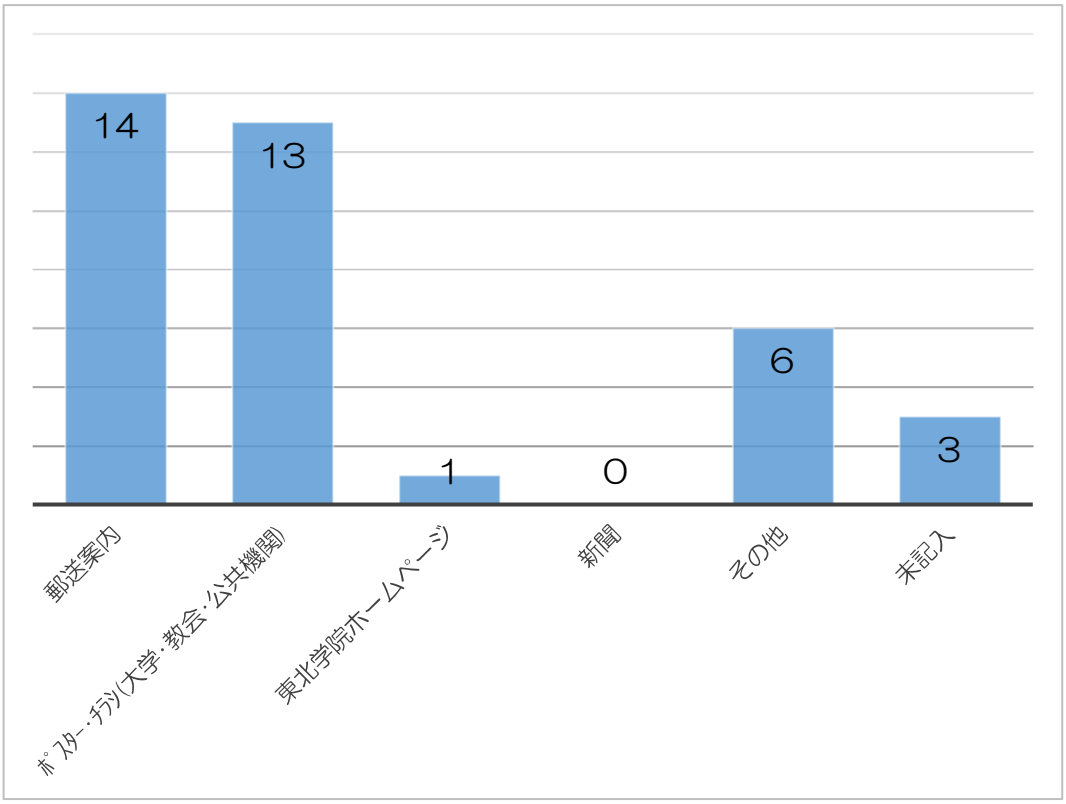
2．本日のシンポジウムの難易度はいかがでしたか？



3．本日のシンポジウムの満足度はいかがでしたか？



4．今回のシンポジウム開催をどのようにして知りましたか？（複数回答可）



５．本日のシンポジウムの感想やご意見・ご希望等があれば、ご自由にご記入ください。

① 大変貴重な情報を得られました。ぜひ他の登録文化財建造物などにも焦点をあてた企画をして頂けると良いと思います。

② 内容の濃い講演会でしたので、興味深く聞かせていただきました。

③ 東北学院大学は、「デフォレスト館」を「宝物」として、さらにもっと位置付ける必要がある。本日は、「宝物」の保護、保存の技術面からのアプローチだったが、これだけの「宝物」をもっと教員、学生、さらに仙台市民に価値を示したであろうか。単に「宝物」を歴史的背景にとどまらず、「宝物」の再評価と位置づけをきちんとしてほしい。「木造建築」の「生命」は、人間の「生命」と似ていて、限りあるものだ。その「時」にどうするかも踏まえて、大学として検討、対応すべきと思う。

④ 歴史を刻んだ建物は何ともすばらしい！　残っていてくれてありがとう。デフォレスト夫妻がここでどのような暮らしをされたのか思いをはせながら、とても楽しませていただきました。ありがとうございました。

⑤ 大変分かりやすいP.P.T.および説明が大変良かった。

⑥ 久しぶりに母校の歴史に触れ良かったです。

⑦ 仙台在住で土樋になじみがあるのですが、デフォレスト館を存じ上げませんでした。今回その存在を知り、その歴史・建物の様々な事を教えていただき、とても興味深く伺うことが出来ました。修復後是非建物の内部を拝見できるよう楽しみにしております。ありがとうございました。

⑧ 昭和44年に工学部を卒業し、62歳ごろにリタイアし、現在は家庭菜園等で自適生活です。今回久しぶりに、本部キャンパスを訪れ、懐かしさを感じました。今回の進歩や史資料センター等を見学し、「頭」に新鮮な風が吹き通るここちよいひと時でした。

⑨ 不調法ながら参加させて頂きました。素人にもわかり易い解説で、ありがとうございました。又、個人的には足立先生が母校神戸女学院の五代目院長先生についても余談としながら触れてくださった事も嬉しく拝聴いたしました。

⑩ 建築関係の講演会について、ご案内をお願いいたします。

⑪ モデレーターの先生の話のふり方が上手く、パネラーの先生方から面白い話をたくさん引き出して下さったので、興味深い指摘が様々に展開され良かった。

⑫ ハーバードの学寮にまで手を伸ばされたことに、一層の興味をおぼえました。

⑬ 今日は福祉大の政宗講座を受講予定でしたが、最近この催しの情報を知り、こちらの方をえらびました。建物見学には参加できませんで残念。元気で、長生きして、内部見学

（保存・活用）できるようになる日を待ちたいです。学長先生が列席されていて「本気度」が高いことが感じられました。市民ファンドとかも実施？　櫻井先生、﨑山先生にはもう少しゆっくりお話しいただきたかったです。

⑭　大変におもしろく、ぜひ時々いろいろのことについてしてくださってはいかがでしょう。もっと人を集めないともったいない。

⑮　学院の保有している建物なので、学院の学生がもっと関われるようになってほしいと思いました。

⑯　文化財活用についての考え方は、とても勉強になった。

⑰　デフォレスト館の修復の実現を強く願っています。

⑱　重要文化財に指定されたと聞いて驚き、嬉しくおもいました。知識が乏しかったので、有益でした。

⑲　講師の方々の話はわかりやすかった。

⑳　重要文化財と言えども機能し、活用しないといけないことを初めて知った。今迄は古いものを長期に渡り保存することのみの観点しかなかったので、目がひらかれた思いである。今日的意味のある歴史遺産であらねばならないのであろう。過去～現在～将来につながる文化財にせねばならぬものと思う。

㉑　復元されたデフォレスト館が早く見たいものです。学生時代から気になっていた建物でした。活用できる文化財になるためには、現代的な付属設備も必要なのですね。

㉒　まだ時間をかけて調査を要するとの今後に期待をしています。

報告会「第2回ランカスター神学校調査報告」

日　時：　2019年10月3日(木)　17：10～18：40
会　場：　土樋キャンパス　ラーハウザー記念東北学院礼拝堂
参加者：　28人

報告者：
日野哲（東北学院史資料センター調査研究員）
栗原健（宮城学院女子大学准教授）
松谷基和（東北学院大学准教授）
野村信（東北学院大学宗教部長、教授）

報告会概要：

昨年に続き、この夏もランカスター神学校での資料調査が行われました。今回は、創立者を同じくする東北学院と宮城学院から合わせて４名がそれぞれの課題のもとに調査研究を行うことができました。

ランカスター神学校図書館２階にあるアーカイヴには、両校の創立以来、物心両面で支え続けたドイツ改革派教会の膨大な資料が整理・保存されています。中にはページをめくるだけで破損してしまう貴重な資料も多い中、今回もすべての閲覧と複写を許可していただきました。

このような神学校の特別のご配慮にも感謝しながら、それぞれが持ち帰った成果の一端をご報告したいと思います。

報告会の様子（アンケート未実施）：

シンポジウム「ボストン・ブラーミンのキリスト教と仏教　教義と寛容」

日　時：　2019年12月21日(土)　13：30～17：00
会　場：　土樋キャンパス　ホーイ記念館ホール
参加者：　54人

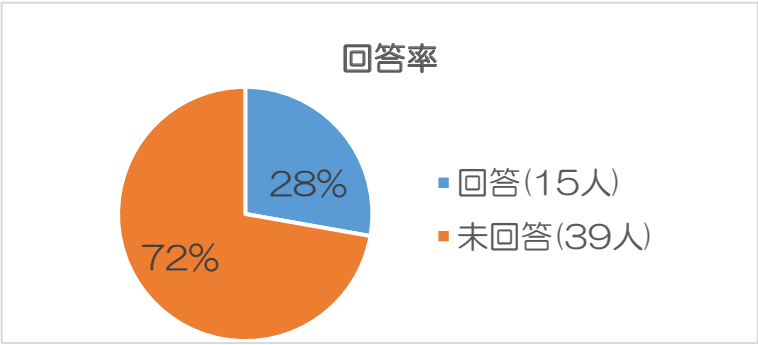
プログラム：
＜趣旨説明＞
　鐸木道剛（東北学院大学教授）「宗派を超える芸術：ジョン・ラファージのステンドグラス」
＜パネリスト＞
　ダヴィド・エッケル（David Eckel　ボストン大学教授）
　　The Boston Buddhists; Ernest Fenollosa and William Sturgis Bigelow
　ロジャー・ウォーナー（Roger Warner　歴史家・編集者）
　　The Great Escape of William Sturgis Bigelow
　キャロル・バンディ（Carol Bundy　ハーバード大学講師）
　　From Japan to Mars: The Long Strange Journey of Percival Lowell

シンポジウム概要：

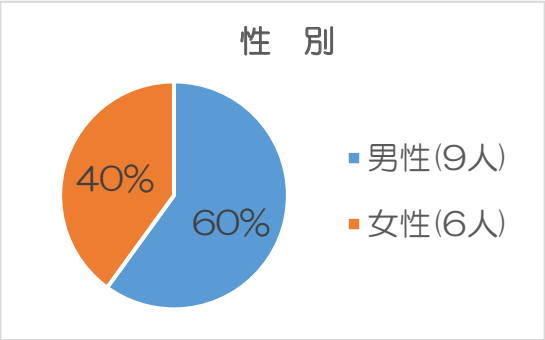
日本近代の美術に大きな役割を果たしたフェノロサ、またボストン美術館にある在外日本美術の最大のコレクションを形成したビゲローは、1885年に三井寺法明院で櫻井敬徳師によって得度した。ふたりはともにボストンのハーバード大学出身のユニテリアンであった。キリスト教の教義にこだわらず、寛容であるがゆえに脆弱のそしりを受けることもあるユニテリアンのキリスト教は、近代日本の初期の若者に大きな影響を与えた。日本におけるキリスト教受容を、逆にアメリカから見てみよう。フェノロサ、ビゲローと同じく、やはりハーバード大学の出身でアメリカの著名な仏教研究者であるボストン・カレッジ教授のダビッド・エッケル氏、そしてビゲロー研究のロジャー・ウォーナー氏とパーシヴァル・ローウェルの縁故者であるハーバード大学講師のキャロル・バンディ氏をお招きして、アメリカ側からボルトンにおけるキリスト教と仏教、つまり宗教の寛容について考える。

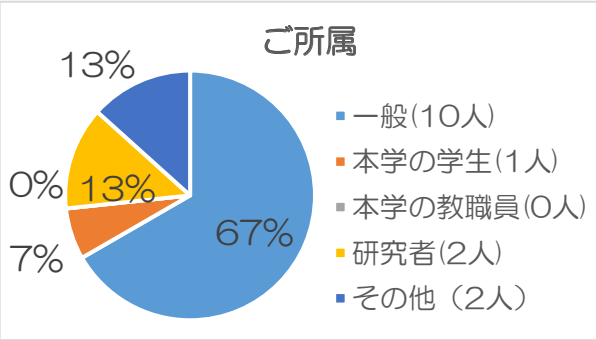
シンポジウムの様子：

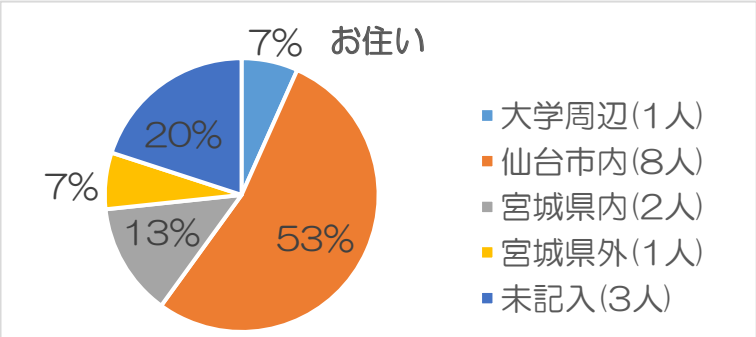
「ボストン・ブラーミンのキリスト教と仏教　教義と寛容」アンケート結果

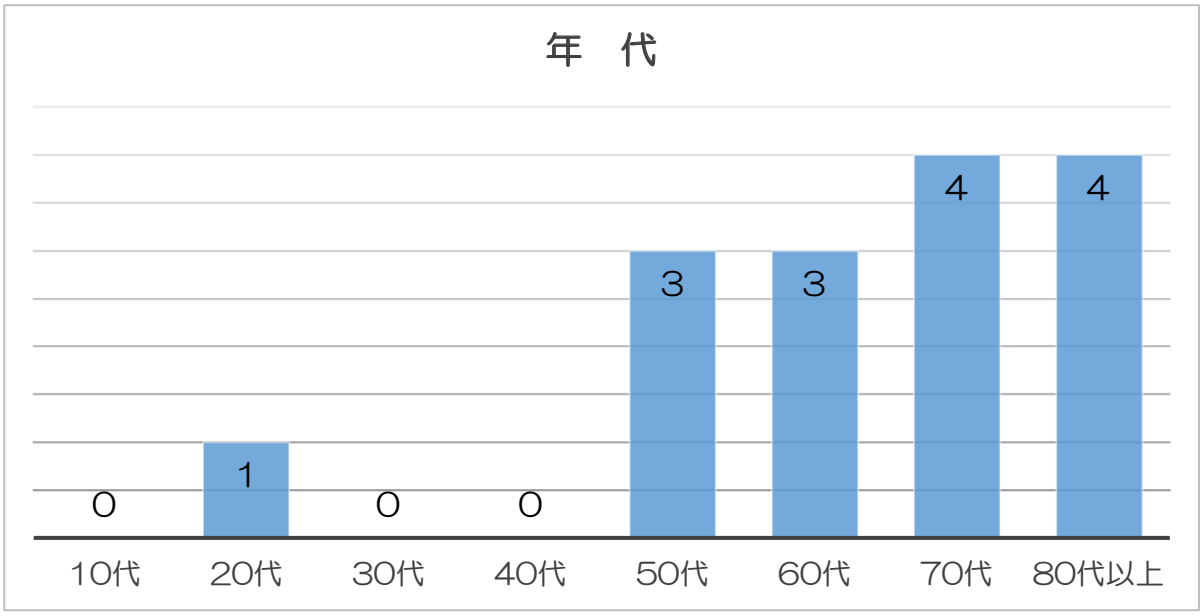


1．あなたの性別・年代・ご所属・お住いに ○ をつけてください

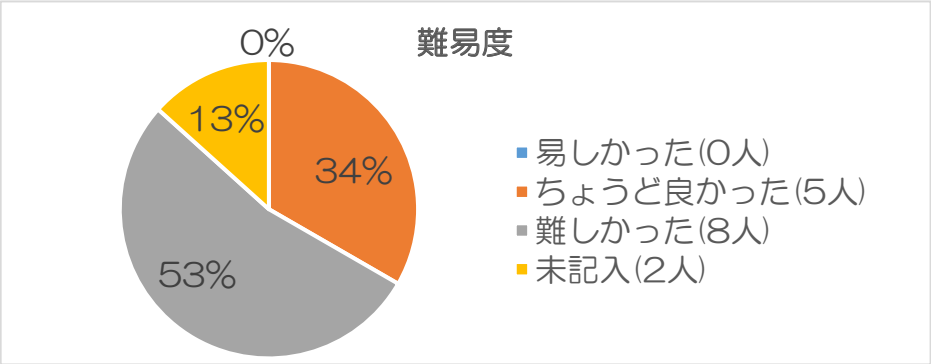




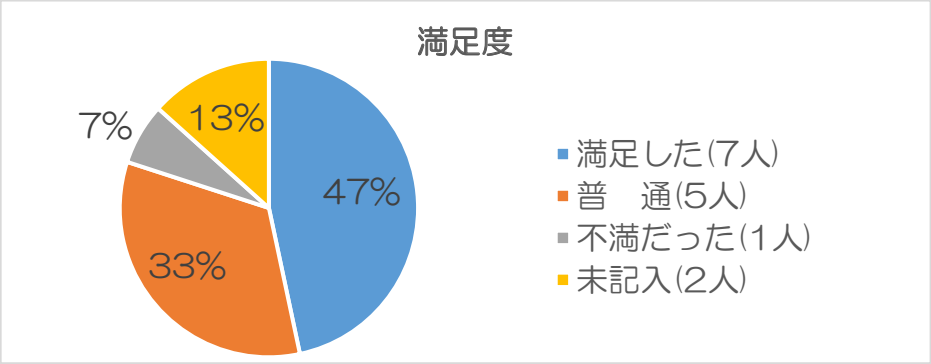




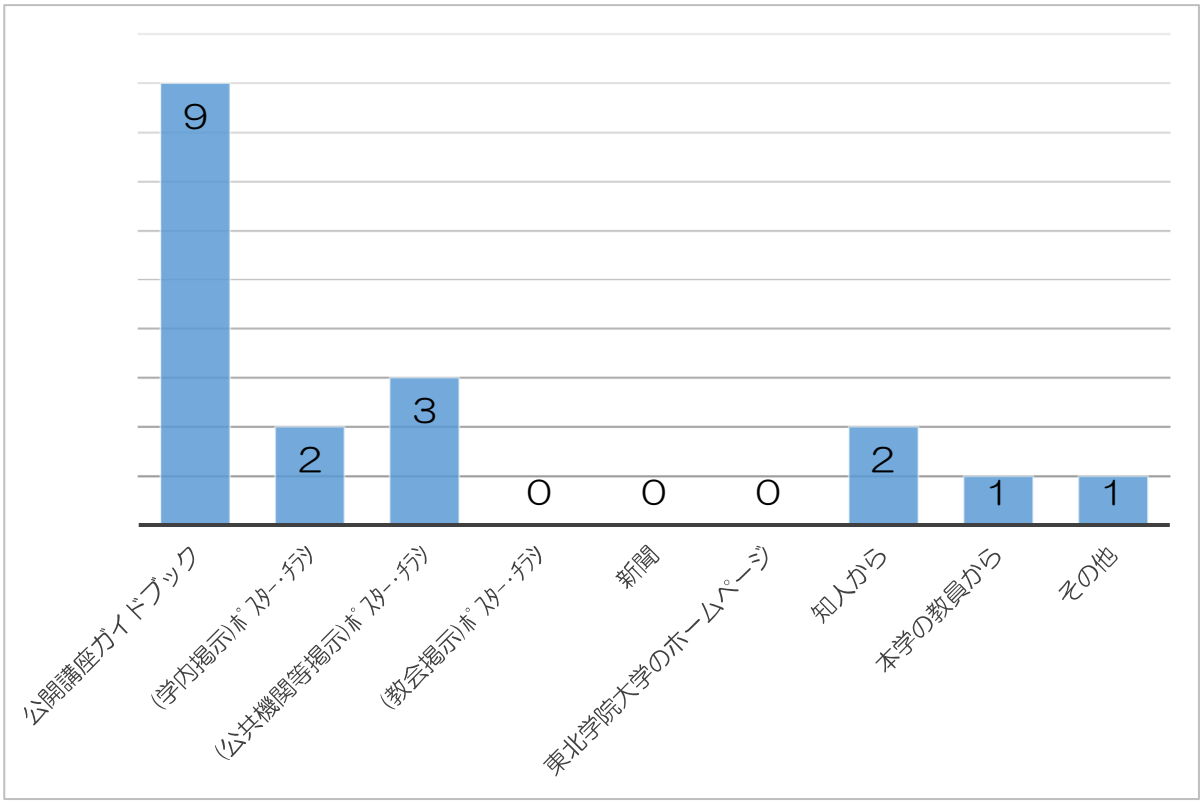
2．本日のシンポジウムの難易度はいかがでしたか？



3．本日のシンポジウムの満足度はいかがでしたか？



4．今回のシンポジウム開催をどのようにして知りましたか？（複数回答可）



５．本日のシンポジウムの感想やご意見・ご希望等があれば、ご自由にご記入ください。

① 大変勉強になりました。日本ではなかなか聞くことができない話を、ご子孫の方々から伺える機会はとても貴重です。また来年も楽しみにしています。

② すばらしい企画で新しい情報が多く興奮した。ローエルの伝記を書いたDavid Strauss氏と長くつきあい、彼の本を訳したこともあり、こうした機会で呼ぶ可能性があれば喜んで助けたい。

③ 質疑応答は通訳がなくて理解できなかった。

④ 講演者の個性が良く出ていて見識の深さを学びました。

⑤ 興味深い内容でした。頭がフル回転した気がします。

⑥ エッケル、ウォーナー両氏の講演のみ聴講。日本語訳の十分な準備がありましたが、英語と哲学・美術史、宗教、特にキリスト教のユニテリアンの説明がもう少しあれば、もっと楽しい時間になったと思います。日本美術の書を読んでみたいと思います。

⑦ ビケロと仏教、美術コレクションが少しわかりました。

⑧ 日本語の解説が欲しかった。開始時刻が実際と違っていたのがまずかった。

⑨ 難しかったですが、自分のつたない知識と結び付く事柄が沢山あり、とても面白く拝聴いたしました。ありがとうございました。

⑩ フェノロサとビゲローの事を知って良かったです。

⑪ このシリーズで、初めて聴いたので、理解ができなかった部分もありましたが、満足しています。私は美術よりも、ユニテリアンについて興味があって聞きにきました。仙台でこうした催しをしても、なかなかお客が来ないのかもとは思いましたが、感謝しています。

公開講演会「第二次大戦後のコモンウェルスの再編と変容」

日　時：　2020年1月25日(土)　14：00～17：00
会　場：　土樋キャンパス　ホーイ記念館ホール
参加者：　50人

講　師：
原田桃子（米子工業高等専門学校 助教）
「イギリスの入国管理政策の展開と移民送出国」

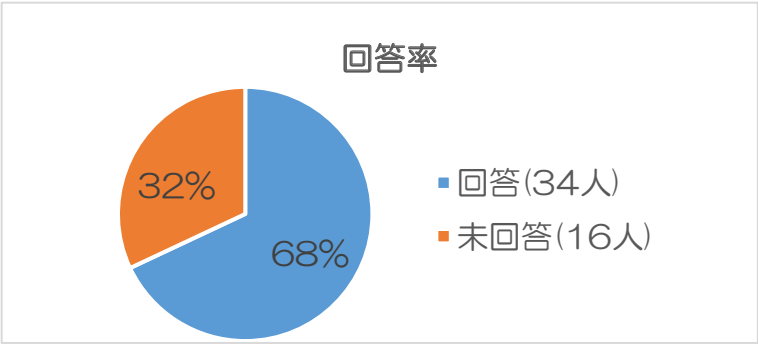
佐藤滋（東北学院大学 准教授）
「グローバル・ヒストリーからみた戦後イギリス福祉国家の形成と変容―ベヴァリッジ・プランの再編論争を中心に―」

講演会概要：

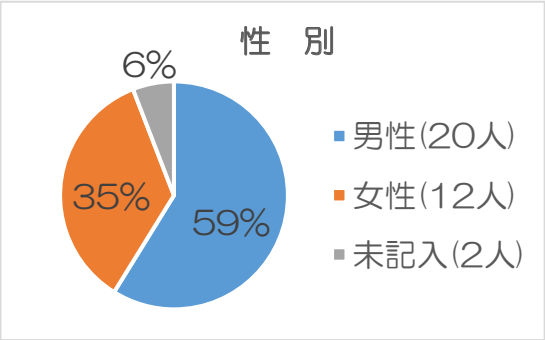
イギリスでは他国に先駆けて工業化が進展し資本主義経済が成熟したこと、またイギリスが世界各地に進出し自治植民地や属領からなる世界的な帝国が成立したことは、よく知られるところである。しかし、第二次世界大戦の後、イギリスとコモンウェルス諸国は米ソ対立というグローバルな秩序の変動にさらされる中で、戦後復興のみならず新たな社会問題への対応にも迫られることとなった。こうした内外の危機的状況における難解な問題を、イギリスそしてコモンウェルス諸国はいかにして乗り切ろうとしたのか。本講演では、「移民」および「福祉国家」に焦点を当てて論じていく。

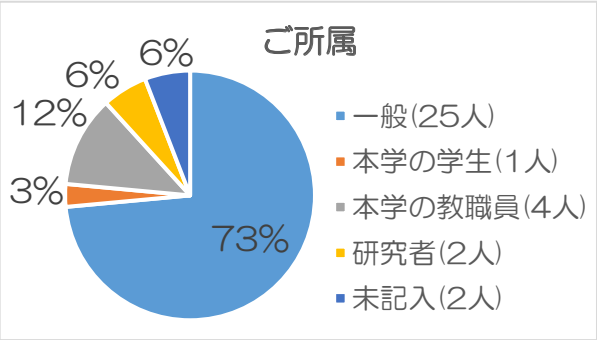
公開講演会の様子：

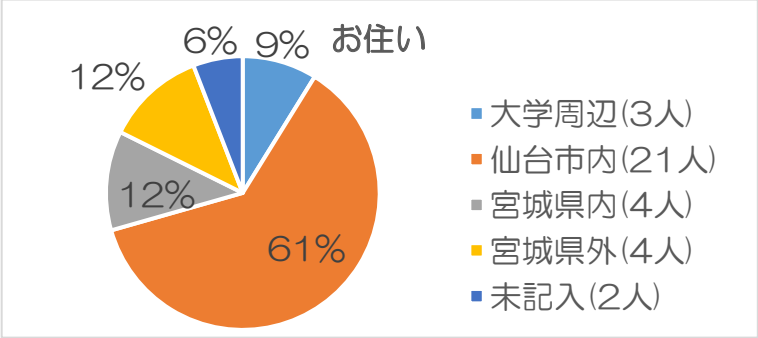
「第二次大戦後のコモンウェルスの再編と変容」アンケート結果

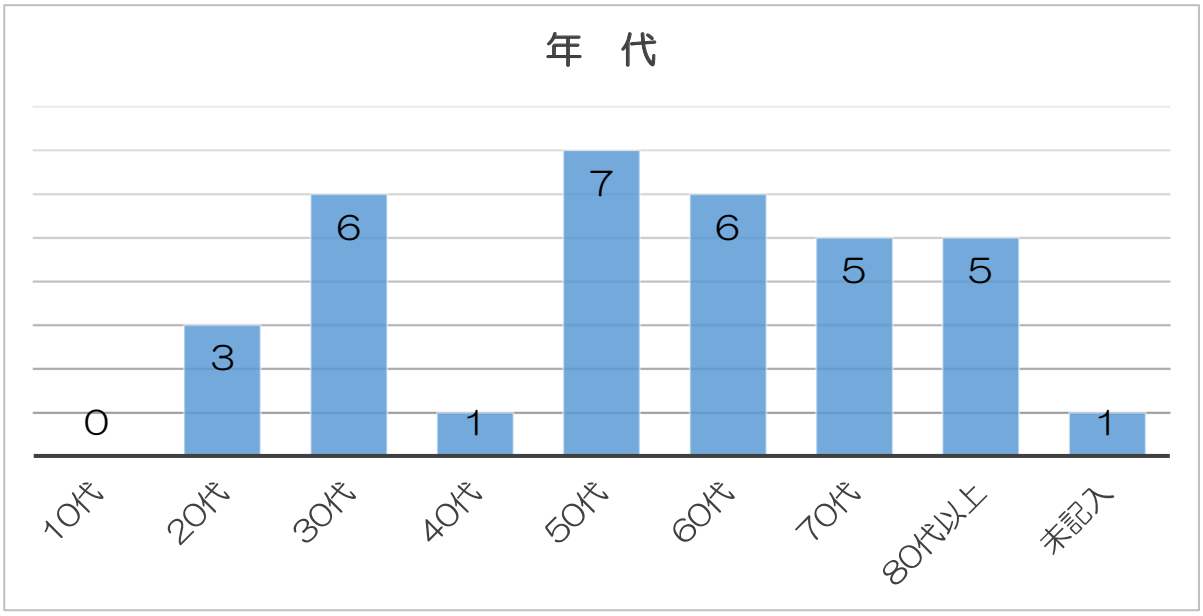


1．あなたの性別・年代・ご所属・お住いに ○ をつけてください

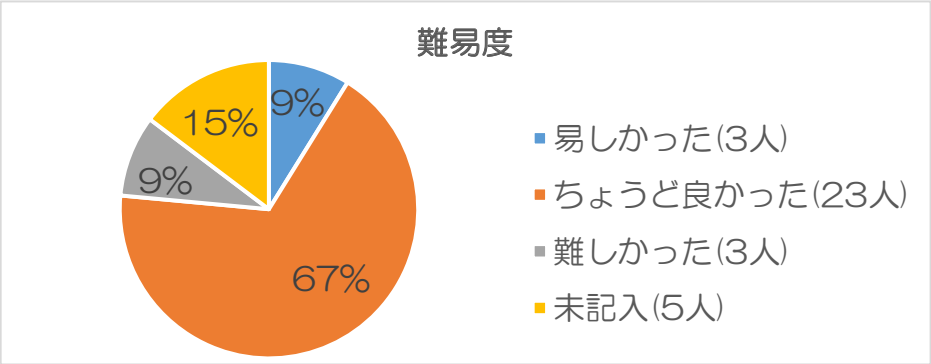




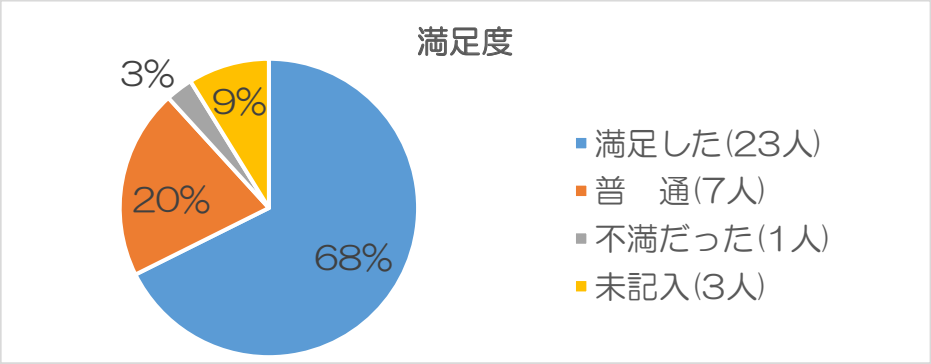




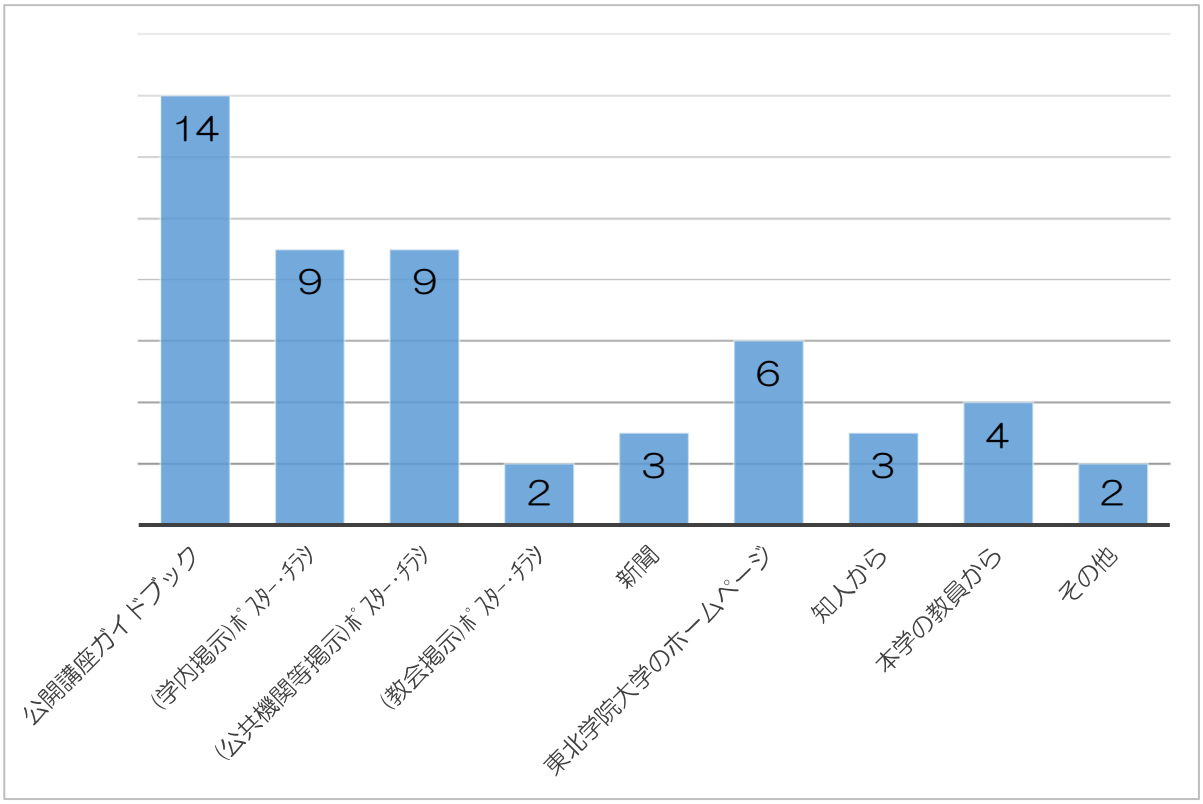
2．本日の公開講演会の難易度はいかがでしたか？



3．本日の公開講演会の満足度はいかがでしたか？



4．今回の公開講演会開催をどのようにして知りましたか？（複数回答可）



５．本日の公開講演会の感想やご意見・ご希望等があれば、ご自由にご記入ください。

① （英国の入国管理）我国の外国人受け入れ課題の先例として面白かった。（英国の福祉国家政策）変遷の過程を知り、革新的な切り口に感銘。

② 原田先生の丁寧な説明、感じいりました。なんと移民人口が14%とは、驚きました。目から鱗です。ブレトンウッズ、わかりました。ありがとうございました。

③ 少し難しかったですが、理解は出来ました。さて日本はどうか？と考える材料になりました。

④ 有意義な講演でした。ありがとうございました。

⑤ 英国が華やかで栄えた時代、コモンウェルスという制度もあてはまったかもしれませんで、ポンド価値がなくなってきては、この制度もあてはまらなくなってしまい、英国は表舞台からだんだんと下りてくるという流れがわかったような気がします。

⑥ 大いに参考になりましたね!!

⑦ 人口減少対策としての移民に対する日本の政策のあり方に参考にすべき課題であり、勉強になった。日本の年金のあり方にも参考になった。

⑧ イギリスの王国の考え方と国間の移動について勉強になりました。コモンウェルスについてわかりました。パキスタンの人々はどうしたらよいか。どちらも関心興味深くうかがいました。ありがとうございました。

⑨ どちらのお話もとても面白かったです。移民についてはイギリスの思惑と情勢の変化が深く関わっており、法を制定するまでの苦悩が面白いと感じました。また、福祉についてでは経済と福祉の関係性を認識すると同時に、戦後イギリスの福祉体制について深く知る事ができました。興味深い講演ありがとうございました。

⑩ 第二次大戦以降、植民地の独立後のイギリスサッチャー政権以降のイギリスの社会保障、EU離脱等に興味がありました。良くわかりました。

⑪ 第１部：使用するデータetcが古すぎませんか。今日的テーマにも言及して欲しかった。
第２部：英国における現在の福祉は世界の中でどういう位置づけなのかのコメントも欲しかった。

⑫ イギリスの歴史が空間や時間を越えて様々に絡み合い、私たちの現在にもつながっていることを学ばせてもらいました。ありがとうございました。

⑬ 難しかったのですが、新しく沢山の事を教えていただき、今後の理解の糸口になると考えています。

⑭　同時代のロシア（ソ連）について勉強しております。国内に沢山のルーツの異なる人々を抱える国、あるいは都市と農村で異なる社会保障制度を採用している国がロシア（ソ連）ですので、何か親近感のようなものを感じながら拝聴しておりました。特に佐藤先生のグローバルな視野で戦後福祉国家をとらえるという見方は大変勉強になりました。（私はロシア（ソ連）の福祉を勉強しているのですが、どうしても内政にばかり注目してしまうので）本日はありがとうございました。（政党が変わる国は大変だとも思いました）

⑮　大学の講義をきいているようで、とても興味深く、楽しかったです。しかし「コモンウェルス」などの専門用語に慣れ親しんでいない人たちにとっては、内容はもちろん、お話を理解するには難しいところも多かったように思います。まだお若い研究者のお二人なので、今後に期待しています。今日はありがとうございました。

⑯　なかなか聞く機会のない分野の講演が聞けてよかった。

⑰　難しいテーマだと思ったが、とてもわかりやすい講演でした。

Ⅳ

外部評価委員会の評価

外部評価委員会の評価

１．東北学院大学研究ブランディング事業外部評価委員会

東北学院大学研究ブランディング事業外部評価委員会は、「東北学院大学研究ブランディング事業外部評価委員会設置要綱」に基づき、本事業の実施状況、達成度の評価、改善点等に関する提言を行うことを目的とし、東北学院大学に設置された学外の第三者による外部評価を実施する委員会であり、構成員は以下のとおりである。

また、外部評価委員会の開催は、評価対象年度ごとに２回開催し、メールによる開催も併用して合計８回開催している。それぞれ１回目は東北学院大学において事業の進捗状況等の説明を受け、２回目の委員会で外部評価報告書を取りまとめている。

（１）委員会構成員

東京純心大学看護学部　教授	宮本　久雄氏（委員長）
東北大学大学院文学研究科　教授	有光　秀行氏（副委員長 ～2019.3.31）
東北大学大学院国際文化研究科　教授	小原　豊志氏（副委員長 2019.4.1～）
東北大学大学院文学研究科　教授	尾崎　彰宏氏
東京大学大学院人文社会系研究科　准教授	芳賀　京子氏

※任期は 2017 年 5 月 1 日から 2020 年 5 月 31 日まで

（２）外部評価委員会開催日

第１回　平成 29 年 3 月 18 日（土）
第２回　平成 29 年 5 月 18 日（木）
第３回　平成 30 年 3 月 15 日（木）
第４回　平成 30 年 5 月 31 日（木）
第５回　2019 年５月 13 日（月）
第６回　2019 年５月 31 日（金）
第７回　2020 年３月 27 日（金）
第８回　2020 年５月 26 日（火）

※第１回の開催については、外部評価委員会設置要綱の制定前であったが、委員就任予定者による会合を行ったことから、第１回委員会として位置づけている。

２．事業実施４年間の評価（2019 年度外部評価報告書より）

本事業は期間が短縮されたため、各部門とも事業実施に大きな変更を迫られたものと考えられるが、それにかかわらず、各部門とも積極的な研究活動や啓蒙活動を行ってきたと高く評価できる。

ステンドグラスの修復および研究を当初の核のひとつとして発足したこの事業であるが、そこで問題となるキリスト教の諸相について、物質文化や地域性など独自のキーワードとともに、また東北学院大学の歴史的個性を基礎にして、着実に研究を進化させてきた。またそうしたキリスト教の布教と密接に展開した「帝国」についての考察という、これも東北学院大学ですでに研究の蓄積のあるテーマについても、研究が堅実にすすめられ、成果があげられた。くわえて、ランカスター神学校などとの交流、新しい資料の発見・発掘など、今後の研究の発展につながるさまざまな展開が大きく見られることも、おおいに評価できる。さらには、著書を 2 冊出版するなど、研究成果を形にしているところが高く評価できる。

また、学内外の機関・研究者との研究交流が、着実に継続・発展しているばかりでなく、メディアへの事業内容発信も着実におこなわれ、各種シンポジウム・講演会、そして水曜礼拝そのほかのかたちで、地域への貢献も当初から活発になされて、成果を上げており、高く評価できる。なお、総評でも述べた通り、当初、5 か年計画で発足した本事業であるが、諸般の事情により 2019 年度限りで支援が打ち切られることになったものの、2020 年度も学内予算にて継続されるとのことは大いに評価できることであり、宗教と歴史、そして地域との有機的な関連を問う集大成的な試みがなされることを期待したい。

以上のように、4 年間の各部門の活動は、特異・固有性をもちつつ、各年度で外部評価も組み入れ、相互に共振する共働性を発揮してきたといえ、大いに評価されることを記してまとめとする。

３．各年度の評価（各年度の外部評価報告書「総評」より）

各年度の外部評価項目は、①事業の運営及び目標設定に関する評価、②事業評価（視点１．メディアへの発信、視点２．研究活動、視点３．シンポジウム等の開催、視点４．地域への寄与)、③外部評価委員会提案（指摘）事項への対応、④その他であるが、本事業報告書には各年度の外部評価報告書の「総評」を掲載する。

（１）平成 28 年度

本事業の初年度にあたる平成 28 年度は、現地調査をふまえつつ、ステンドグラス造形の歴史的変遷がつぶさに追跡された。その成果が学術シンポジウムとして学内外に広く公開されたことは、本事業の順調な滑りだしを物語るものと評価できる。さらに、神学、人文学、地域研究の三部門を有機的に結びつける際、東北学院大学の中核・神学を基礎に据えるのは、本邦の大学体制

の中でも特異な性格をもち、明治以降の西洋文化を本格的に吸収し、これを他大学へのメッセージとする点でも卓越している。それだけに、人文学・芸術文化視点と地域との関係が問われてくる。

東北学院大学は、キリスト教精神にのっとった教育・研究活動を、ひときわ早くから東北の地で進めていた。ホーイとシュネーダーの建学の精神である福音主義（パウロ主義）を、その内容だけでなく、東北の地方性と土着の心性との関係という観点から具体的に考察することは、福音主義と土着の双方を正確に位置づけることになるはずであり、東北全体がさまざまな側面において危機に瀕している今だからこそ、神学を基礎とした人文学の研究拠点の場として東北学院大学をブランディングしようという事業は、大きな成果が期待できる。

中世主義（Medievalism）の研究は、近代の終焉とともに、近代の出発点を再確認する意味で欧米でも盛んであり、本事業は時宜にかなったものと理解する。今後はアメリカ合衆国にも視野を広げ、欧米における福音主義信仰の異同を明らかにすることにより福音主義の土着化の過程を解明し、日本における福音主義信仰の普及とその人文学的貢献を解明することがのぞまれる。

（２）平成 29 年度

本年度の実施目標として掲げられた 4 項目のうち、その重要課題であった東北学院大学礼拝堂ステンドグラスの修復、調査が無事達成されたこと、および、同ステンドグラスが設置されている礼拝堂を核とした活動を積極的に発信し、東北学院大学の建学精神ならびにその特色を社会に周知していることは大いに評価できる。また、国内外の著名な研究者を招請して種々のシンポジウムや公開講演会を多く開催していることは本事業の学術的価値を大いに高めている。他方で、事業の 3 部門それぞれが多様な取り組みを積極的に行っていることは評価できるものの、部門間の相互乗り入れをした企画があってもよいように感じられた。たとえば、日本を含め、世界各地におけるキリスト教の土着化を追跡し、その史的意義を考究するような企画があれば、一層本事業の学術的価値は高まるように思われる。

（３）平成 30 年度

本事業の核であるラーハウザー記念東北学院礼拝堂ステンドグラスの修復については、昨年度の共通実施目標に掲げられていた『ラーハウザー記念東北学院礼拝堂　ステンドグラス修復の記録』が 2018 年 5 月に刊行され、HP でも PDF が公開されており、ひととおりの完成をみたといえる。このステンドグラス「キリストの昇天」は日本における屈指のステングラスであり、この作品を擁する東北学院大学が、このステンドグラスの意義を人文学的、神学的、地域的拡がりの中で、広範に研究を重ね、広報活動をおこない、「水曜礼拝」を実践していることは高く評価される。このように学術ばかりでなく、広く倫理性の問題を深めていることが、本プロジェクトの特徴となっている。研究活動を通して、理性と感性の両面から、現代における神学の意義を問い直す行為はきわめて貴重である。

次に、本事業は、伝統あるミッションスクールとしての特性を活かしつつ、神学・人文学・地

域研究の 3 つの側面から研究を深化させることにより、東北地方における研究・教育拠点の構築を図るものである。

平成 30 年度は具体的かつ明確な共通目標と各部門の実施目標のもとに各部門が精力的に研究活動を展開し、かつその成果は講演会・メディア等をつうじて十分に社会に発信されたと評価できる。例えば、神学研究推進部門の「神学に拠る科学的手法を用いた世界理解に関する大学教育」、人文学研究推進部門における「イギリス帝国、ドイツ、東南アジア、インドなど」の世界理解の研究推進、そして、地域研究推進部門の「戦後平和主義の探求」などは、各部門の特徴を生かしながら世界理解に基づく本邦、アジア、欧米などの共存相生に向けて協働し調和のとれた事業となっている。

他方で、部門間の連携についてやや取り組みの少なさを感じたが、これについては最終年度に実現されるものと期待するが、平成 31 年度でブランディング事業が終了することを考えると、今年度の計画は研究成果の公表、資料公開、今後の組織整備などにもっと重点を置くべきかもしれない。

全体として活発かつ着実に、事業全体が展開していると評価できる。

（4）平成 31 年度

2018 年度に引き続き、2019 年度の事業計画には、年次を追うごとに階段を一段一段上がるように、着実な成果が上がっていく様子がうかがわれ、各部門ともに積極的な研究、教育、および啓蒙活動を展開した点は高く評価できる。

特にランカスター神学校におけるキリスト教関連の文献調査と東北学院大学が世界に誇るステンドグラスに関する研究とは、斯界においても注目されており、今後の展開から目を離せない。

さらには、ランカスター神学校とのことも含め、学内外の機関・研究者との研究交流が、着実に継続・発展していること、また工学のような、神学・人文学以外の学問領域とも交流がおこなわれ、成果を生み出しつつあることも、おおいに評価に値することである。

またアカデミックな研究だけではなく、「水曜礼拝」を通じて広く一般に働きかけていく姿勢は、理論と実践にもたとえられるもので、各種シンポジウム・研究会・講演会なども含めてこの事業で当初から活発におこなわれてきた活動であり、今年度も継続して精力的におこなわれていることは、高く評価できる。そして、水曜礼拝の参加者の増加は、この事業の地域への貢献が人々に高く評価されていることのあらわれと解釈することができる。

他方で、これはかつても指摘したところであるが、各部門の連携という点からみると、やや物足りなさを感じる。本事業は次年度も学内予算にて継続されるとのことなので、宗教と歴史、そして地域との有機的な関連を問う集大成的な試みがなされることを期待したい。

全体として、これまでの成果をまとめた『苦難と救済 闇の後に光あり』が出版されるなど、各部門は固有な研究成果をあげつつ、東北学院のキリスト教的視点を共有して、よきブランディング事業を実現したと評価できる。

東北学院大学研究ブランディング事業報告書

発 行 日　2021（令和 3）年 3 月 19 日
発　　行　東北学院大学研究ブランディング事業
「東北における神学・人文学の研究拠点の整備事業」
〒980-8511 仙台市青葉区土樋 1-3-1
Email: branding@mail.tohoku-gakuin.ac.jp

印 刷 所　株式会社　東北プリント